
Closed World ～閉ざされた世界～

樹島 新

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Closed World 〈閉ざされた世界〉

【Nコード】

N4605D

【作者名】

樹島 新

【あらすじ】

丸い巨大な球状の近未来的な世界で生きる、世界を知らない純粋な少女と復讐に燃え手を血に染めていく獣人が出会い、行動を共にしていく。普通に暮らしていくことのできる日を夢見て。

第一話 カゴの中の小鳥（前書き）

言うまでもありませんが、完全にフィクションです。自分の頭の中の世界です。登場する人物・団体は存在しません。下手な文章力でしょうが、暇でしたら読んでやってください。

第一話 カゴの中の小鳥

目を覚ます。

目に映るのは見慣れた真っ白な天井。

ベットから起き、周りを見渡す。

やっぱり見慣れた真っ白な部屋だ。

立方体で窓がなく、扉さえもない。あるのは青白いソファと膝下ほどの高さの円いテーブル。

『オハヨウゴザイマス、セフィリア様』

聞き慣れた女性の声。丁寧なことばだけど、感情がない。…しかたないか。ただの機械だし…。

「おはよう、ノア。今日は何を教えてくれるの？」

そう。私はここで世界について学んでいる。この外との繋がりがないこの部屋で…。

変だよね。言語、歴史、経済…知ってることはいっぱいあるのに世界を見たことがないなんて…。写真や映像でならあるけど、全部間接的なものばかり…。

私は生まれたときからこの部屋にいる。いつからいるかなんて忘れてしまった。名前すら誰がつけてくれたかさえ知らない。ノアがそ

う呼ぶから、てなだけ……。でも、その日から私は世界について学んでいる。

『アナタヲ必要トスル方ガイマス。ソノ方ヲ助ケルコトガ出来ルヨウ、コノ世界ノコトヲ学デクダサイ。』

いつだったかノアが言った言葉。誰かなんてどうでも良かった。出口を求めて暴れまわって、キズ一つつかない冷めた色の壁を前にしたら、私にはその言葉に従うしかなかった。ここから出るための――世界に出るための――唯一の道だから……。

そして、今日も壁の外に広がる世界を夢見ていくしかないんだ……。

第二話 復讐者

雨が激しくなってきた。

仕事をするにはベストな環境だ。

雨は返り血を洗い流してくれるし、音は悲鳴をかきけしてくれる。

俺は今日の仕事場を前にそんなことを考えながら、真っ黒な空を見ていた。

360。…いや、この世界には空の向こう側にも…下を見ない限りビルがならんでいる。ちょうどボールの内側のような大地に貼り付いているような状態だ。

ビルの中にはあらゆる施設が入っている。

企業はもちろん、学校、病院、娯楽施設、家まであの中にある。

ただ、ビルの根本はドス黒い煙が充満し大地を見ることは出来ない。地下には工場区があり、そこから漏れる排気ガスが充満してしまっているのだ。

人はそのガスから離れるために工場区を完全に機械化し、ビル同士に連絡通路を作り上げ、『反重力システム』というものを備えた空を飛ぶことのできる車を生み出し、逃れている。

この状態は俺には都合がいい。俺は今ある組織に身を置いている。
“殺し屋”——いわゆる裏の世界に——。

目的はただ一つ。俺をこんな姿にした奴らを探しだして殺すためだ。そのためには、少しでも探す範囲が少ないほうがいいからだ。例えば、何百万ものビルが並んでいようとも…。

それに他人に見つかってはならない。地表に近いガスの中は隠れるのに最適だ。ガスで居場所をカモフラージュできるからだ。

―そろそろ仕事の時間だ。今日もまた、復讐を詠い、心のない人形を演じ、命の花を摘むのだ…。

仮面をつけ、黒いフード付きのコートを着る。いつものスタイルだ。闇に溶け込むには最適だ。作戦通りにさっさとかたずける。

第三話 ボディーガード

あいもかわらず降り続く雨に溜め息を漏らした。

ボディーガードとしてもう五年目になるか…。金貯まんねえなあ…。いや、業界NO.1の俺だから、貯まらないっていうより、消えちまうってのがホントのところで…。

会社はビルの数に匹敵するって言われてる。って、ことは、職の数も山のようにあるってことだ。つつーことは、探せばこんな仕事しなくなつて、やっていける。っても、高校から荒れちまつた俺には暴力団に入るしかなく、今の方が丸くなっていいんだろうがな…。

道を変えることになった、きっかけは兄貴が死んだことだった。

俺の実家は道場で親父が空手、お袋が柔道つつー武道家夫婦で俺と兄貴は小さいころからしごかれてた。兄貴は高校卒業して、実家に戻って道場を継ぐことにした。長男だし、俺グレてたからなあ。

それから六年たったー俺が暴力団にはいつて三年目のーときだ。縁を切ってたお袋から突然、兄貴が死んだことをしらされた。電話の向こうのお袋は何を言ってるかわからないほど泣いていた。

兄貴は子どもをかばって死んだらしい。ありがちな話だ。自動車にひかれそうになった子どもをかばって死んだ。話を聞いて、兄貴の亡骸を見たが、涙は出なかった。

「兄貴の助けてやったガキはかすり傷ですんだらしいぜ。」

冷たくなった兄貴にそう伝えると、一緒、兄貴が笑ったように見えた。やっと分かった。そりゃ、泣けねえわ。

「守る”ってのはそんなスゲーことなのか？」

『死人に口無し』つつーけど、ありゃ嘘だね。兄貴の顔は、

『最高さ』

つつってた。だから、俺は暴力団を抜けて、ボディガードの道を歩くことにした。あんな晴れた死顔になりてえから…。

第四話 侵入者

突然、爆音が響き、ビル全体が揺れた。

窓の外見ながら気い抜いてた俺はぶっ倒れそうになった。

「な、なんだあ!？」

困惑している俺をムシして、今度は電気が切れた。

地下の発電システムをやられたか…。

無線を使い、仲間に連絡すると、どーやら全員無事みてーだ。だが…。

『こちら、F。侵入者はっ…プツッ』

「おい!どうしたあ!」

F…十階かあ!直ぐに近くの奴らを救援に向かわせ、他のものは待機させた。

だが、どうしてまた十階なんかに?社長室から三十階も離れてるんだぞ…。

次の瞬間にはもう社長室の方を向いていた。下はおとりだ。下に注目を集め、ターゲットを狙う。上等じゃねえか。俺は社長室のNo.2のチームと、そいつを迎え打つために社長室の扉を開けた。…俺は凍りついた。

血の海だ。そこらじゅうに真っ赤な血が飛び散り、もうどれが誰かさえ分からなくなってしまうた肉塊。そして、…。

「おお：かみ：？」返り血をこれでもかとはかりに浴びた、2m位ありそうな巨体で、闇のように黒いコートを身につけ、下も黒。他に武器があるかわからねえが、背中にショットガンが見える。一番インパクトがでかかったのは奴が付けた獣の仮面。鉄：？でできてるのか？スゲーゴツイ仮面だ。

その獣もこっちをにらんでいた。俺が次に何をするか、様子を伺ってやがる。下手に動いたら一瞬で殺す、仮面の間から見える冷たい眼がそういつていた。奴が入ってきただろう、後ろの割れた窓から雨が入りこんでいた。

第五話 戦闘

沈黙をやぶったのは、どちらでもなかった。無線が入った。

『こちら、B。Fを発見。だが、手をくれだ。』

そうか……。コイツには他にも仲間がいるみたいだな。そいつが発電システムをぶっ壊したって考えてよさそうだな。追わせねえと。こっちにも何人かいるなあ。

無線に手をかけた瞬間、奴が飛びかかってきた。その速さつつたら、本物の獣ぐれえ速いから、避けきれなかった。奴はコートの下から刀を出し、斬りかかってきた。死体を見て、刀くらい持つてんだろう、とは思ってたから、斬られたのは深くはなくてすんだ。

ただ、やられるだけじゃねえよ。こっちも一発いれてやった。ろくな当りじゃなかったが、俺のグローブは特注品で電流が流れるおまけ付きだ。普通の人間なら意識が飛ぶぐらいの威力！さあ、ぶっ倒れろ！

全身に電流が走った。スタンガンのようなものか……。完璧にとらえたと思ったのだが、仕留めそこねた……。カウンターに右肩を殴られ、威力はなかったが、電流が身体の内を奪う。

膝をつき、倒れそうになった。倒れる訳には……。捕まる訳にはいかなかった。唯一かろうじて動く左手で、小型ナイフを取り出し、右手を刺した。

痛みと気力で身体の内を取り戻した。

さっき俺を殴った茶髪のボーディーガードは、腹を押さえながら俺を見ていた。さすがだな……。目には多少驚きの色を見せていたが、恐怖は感じられない。仲間に命令を出し、俺が逃げられないようにするのだろう。捕まりはしないがな。

俺が起き上がらうとするのを見て、奴が銃を構えようとする。俺はまだ震えが残る足を抑え、全速力で後ろの扉へ逃げた。

第六話 想定外

作戦はこうだった。相棒が『F』になりすまし、地下にある発電システムまで忍び込み、破壊することで、奴らを混乱させる。次に予め殺した本物の『F』の無線を使い侵入者が、下にいると思わせる。その間に屋上から社長室までワイヤーで降り、潜入してターゲットを始末する。社長意外にボディガードがいるのも想定内。窓を割り侵入し一瞬でかたずける。そこまでは順調であつたし、外にいる奴らが入って来ることも想定していた。だが、俺のスピードについてこれる人間がいるとは想定外だった。

改造されたこの肉体は人間の能力を凌駕しているものだ。だからといって、自分を過大評価したりはしていない。戦いの中に身を置く者として、いつも神経を集中させ、手を抜くことなどしない。あの男に対してもそうだった。無線に手をかけようとしたところを狙ったのだ。こうなるとは…。

作戦が終了したら、ワイヤーを使い、屋上に上がり逃げるつもりだったが、殴られたときにあの男が窓側に、俺が扉側に移ってしまったために部屋から出るしかなかった。脱出方法はもう一つあった。だが、それには四十階まで降りないとならない。

万が一を考え、相棒がパラシュートを用意してくれている。そこまで行けば…。

エレベーターは止まっているので、道は階段のみだが、さっきの男が仲間を上に集めたはずだ…。四十階まで辿りつく前に出会わないことを祈るだけだ。

だが、悪い事というものは続くものだ。

四十階までなんとか辿りつき、パラシュートの隠してある、職員用のロッカーから取り出した。ノートパソコンほどの大きさのバックを背負い、ショットガンを手にした。あとは窓を割って逃げるだけ。..
.. 気を緩めたその時だった。一筋の光が俺の足を貫いた。

「.....!!」

右足をレーザーで撃たれた。叫びそうになったが、声を押し殺し、撃たれた脚をかばいながら、右の通路に身を隠した。撃ってきた方向を見ると、五、六人ほどの小隊が銃を構えていた。やっとわかった。ここまで来る最中に一人も敵を見なかったのは、俺がどう出るか見るために気配を消して隠れていたのだ。そして、パラシュートを見つけるまでに配置を完成させ、俺を包囲したのだ。そして、奴の姿もそこにあった。

第七話 追撃

「追い詰めたぞ！さっさと投降しろ！」

さあ、どうでる？

その奥は資料室だ。データ管理用のコンピュータがあるぐらいで、窓のねえ部屋だ。通気口ぐれえはあるが、ばかでけてめーじゃあ入れねえよ。逃げるために役立つようなもんはねえぞ！

やつは姿を隠しながら撃ってきた。ショットガンなんてシブイもん持ってんなあ、と思ってたら、ちがう。霧みてえに弾が飛び散るくせに、威力はショットガンそのものなんだからよ。反則じゃねえか。

通路を隙間なく覆うその銃弾は俺たちの前で吹きとんだ。残念だったな。さっき撃った後、すぐに強化防弾ガラスをひかせてもらった。ここのセキュリティはスゲーなこんなもんまであるだなんてよ。しかも、別電源だから、停電なんて関係ねえ。

何発か撃って諦めたのか、撃つのをやめて、通路の奥に行ったみたいだ。ガラスを解除し、通路まで追いかけた。

右の通路の方を覗いた瞬間、アイツが撃ってきた。

あぶねえ。撃ってくることは想定内だからかわせたが、ギリギリだった。どうやら、ドアを盾に撃ってやがるみてーだ。

こっちも応戦した。資料室のドアは硬いから、銃弾は貫通しない。それじゃあ、意味ないじゃないかって、思ったか？けどな、当て

ることが狙いじゃないんだよ。

手榴弾を投げると、アイツはドアを閉めた。そう！こいつが狙いだ！資料室のドアは電子ロックなんだが、中に人が入った状態でドアを閉めると、

ロックがかかる仕掛けになってる。しかも、さっきも言ったが窓なんてないし、外部との連絡もできないよう、電波を通さない壁で囲まれてる。あとは通気口から催眠ガスを流せばおしまいだ。

第八話 儚い希望

爆音が響いた後、扉を開けようとしたが、開かない。鍵がかかっている。チツ、はめられたか……。この扉しか外に繋がっていないというのに……。これでは本当に逃げ道がない。何かあるはずだ。

辺りを見渡したがこの部屋には中央にコンピュータがあるだけだ。他に何か……。そのとき、通気口から煙がもれていた。眠らせるつもりか……。本当に追い詰められた。

……ガスが効いてきた。

……目が霞む。

捕まる訳にはいかない……。だが、このままでは……。

壁にもたれかかった、その時だ。……壁が動いた……感覚があった。気のせいかもしれない。だが、もう他にすぎるものがない。今にも切れてしまいそうな意識をどうにか保ち、起き上がって、何もないただの壁を押した……。

長い間使われていなかったのか、初めは固かったが、開き始めればそうでもなかった。

「……通路……」

暗い一本道だった。奥によわよわしいが光が見えた。俺にとってはまばゆいばかりに輝く希望の光だった。もし隠し部屋であれば、奴

らも知らないかもしれない…。扉を閉め、俺はその光へ歩きだした。
なんだか今日は地震が多いなあ。

ノアのデータにある、『金魚』っていう魚が水のなかをスイスイ游いでるのを眺めながら、そんなことを考えてた。

今日は『生き物』について勉強した。あれ？…『生物』って短くするんだっけ？どっちでもいいよね。『イヌ』とか『ネコ』とかいろいろなホログラムを見ながら、遺伝とかいうものを学んだ。触れないからよくわからないけど、抱いたらふかふかで気持ちいいんだろ
うなあ。今はこの『金魚』っていう子がお気に入りなんだあ。

『ソロソロオヤスミクダサイ』

…そう言われたら、眠くなってきた。今日も変わらない一日だったよ。これから寝よつと、とベットに飛び込んだ、その時だった。

“ガシヤッ”

何の音？って思って、聞こえた方を振り返ったら、見たことのない光景があった。

ちょうどベットが置かれてるのと、反対の角の壁が…開いた？その奥は真っ暗でなんにも見えなかった。

…出られるの？嬉しくなったけど、すぐに嬉しさも消えてしまった。中から人が出てきたんだ。

恐かった。巨人みたいに大きいし、戦争の映像で見た血だらけの兵隊みたい…。だけど、その人はすぐに大きな音をたてて倒れた。…

ドアが閉まった。

第九話 狼男

あまりにも突然すぎて、全く動けなかった。胸がドキドキしてる。
…全く動かない。死んじゃった…かな？

恐る恐る近づいてみると、まだ息をしていた。寝ちゃったんだ…。

さっきのドアは消えちゃって、元の壁に戻ってた。この人は何しに
きたんだろう…。訳がわからなくなってた。

ただ、初めて他の人間を見た嬉しさがその時になってやっと感じて
きた。でも、この人仮面してて、素顔が見えない…。…見たい。他
人第一号なんだもん。でも、起きないかな…。

結局、その誘惑に勝てなかった。仮面の横側には前後を止めるフツ
クがあった。思い切って開けて、仮面をとってみた。かなりドキド
キ…してたんじゃないかな。

ただ、開けてみた瞬間、びっくりした…。え？…。マスクを持って
た手を離しちゃって、マスクが床に落ちちゃった。

そこにあった顔は今まで写真で見てきた人の顔と全然ちがってた。

犬…というより、狼のようだった。真っ黒な毛。

今日見たばかりだったからわかる。見たのはもっと白かったけど
ね…。間違いないく狼だよ。

恐る恐る触ってみたら、ふかふかだった。

とっても触り心地がいい。こんな人もいるんだ。外の世界に初めて触れられて、すごく嬉しかった。

でも、こんなことしてたらいけないよ。ケガしてるんだから。応急手当の方法はならってたから。包帯はシーツを裂いて代用する。キズ口を洗って、脚と腕に包帯を巻いた。血は止まってたから、もう大丈夫。

それから、ずっと顔を見てた。なんだか…可愛いんだもん。最初は怖かったけど、寝顔は子犬みたいに見えるからかな。…なにしに来たんだろ？

第十話 天然

…どれくらい眠っていたのだろうか…。…何かに顔を触られている。
…捕まってしまったのか？だが、身体を縛られている感覚はない。
…状況が読めなかった。

目を開けてみると、目の前に女がいた。俺の顔を見ている。

『あ、起きた！』

反射的に起き上がって後ろに下がった。な、なんだここは！？隠し部屋なのか？光の方を目指して…。はっきり思い出せない。目がくらみそうな程真っ白な部屋。窓も何もない。

『ケガ大丈夫？』

さっきの女…いや、少女…か。灰色の髪をした小柄でひ弱そうな印象だ。

「あ、ああ」

そう答えるのがやっとだった。

負傷した部分に包帯が巻かれていた。こいつが手当をしたのか…。どうやら敵ではないようだ。そういえば顔を触られて…。顔に触るとあるべきものがなかった。

「お前、俺の顔を見たな」

見られまいと、鉄製の仮面をつけていたのに見られてしまった。改造とはこれだ。

俺は狼のD・N・Aを組込まれた、いうなれば“獣人”なのだ。もちろん、この実験は違法のもので、成功例が俺だけだから、そんな存在は他にはいない。だから、顔を隠してきたのに、知られてしまった。…消すしかない。

刀に手をかけたときだ。

『すごいよ。外にはアナタみたいな人までいるなんて知らなかった。』

は？何を言ってるんだ…こいつは？刀にかけた手が固まった？

『あ、私、セフィリアっていいいます。今までこの部屋から出たことなくて…。だから、アナタが他人第一号さん！』

なに普通に自己紹介してんだよ。しかも、この部屋から出たことがない？…ん？待てよ…。

「おい！まさか出口は…？」

『ないですよ。あったら使ってます。』

…悪夢だ。ここまで来たのに…。だが、まだ諦める訳にはいかない。それはコイツだからないのだ。俺流で探す。

第十一話 風

この人はなんなのだろう。入って来てすぐ寝て、起きたら出口どこだ！って聞いてきて…。あつたら私はここにいないわよ。

狼さんは腕に巻いた金属を触りだしてた。何してるんだろ？

『四十階の見取図…の資料室…隠し扉がここだから…』

ぶつぶつ一人で言ってる。外の人はみんなこうなのかな？

今度は部屋を歩き始めた。ホントに何してるんだろ？探しても出口なんてないよ。

『ここか…』

ベットの横で止まって何か取り出してた。赤く光ってる三角の、それを壁につけてこっちに來た。

『危ないから下がった方がいいぞ』

何が？危ない？何で？よくわからないけど、言う通りにしておいた。

「何するの？」

『外を見たことないんだろ？今見せてやるよ。』

外？…どうやって？…って、言うまえに、狼さんが何かのボタンを押した。そのすぐ後、

“ドッカーン!”

と、狼さんが何かつけた壁が爆発した。そんなこと、起きるなんて思っ
てなかったから、体がビクッ、って反応してしまった。

煙りで何にも見えない。でも、“何か”が煙りを吹き飛ばしていく。
私にも“何か”がぶつかってきた。痛くないんだけど、押されてる
感じ…。

『おいおい、大丈夫か?』

こけそうになってたのを、狼さんが支えてくれた。

「これ、何?」

『これ?... “風”のことか?』

これが“風”なんだ。外の空気が部屋の中に流れているんだ。煙り
が晴れると、壁がなくなってた。外だ。すごく綺麗だった。どこを
見てもいろんな色にピカピカ光ってて、まぶしかった。

これが本物の“外”なんだ。見たくて見たくてしかたなかったもの。
やっと...見れた。

第十二話 羽ばたく翼

「もうここにはいられない。」

爆発音を聞いて気付かれているはずだ。こいつは俺の素顔を見て、怖がらなかった。それどころか新しいことを知れて嬉しいと言っていた。風もしらない。…本当に出たことがないのか？俺が来るまでここに閉じ込められているのか…。他人に人生をいじられ、自分の道を持てない…。自分自身と被った。こんな姿にされ、人の前に出ることができなくなった俺と…。

仮面をつけ、俺はこいつに手をのばして言った。

「お前は俺の顔を見た。このままここに残す訳にはいかない。…一緒に来い。」

言葉を強くしたのは、自分を納得させるためだった。自分と被ったからではなく、顔を見られたから。そう言うことで、甘さを残した自分を隠したかったのだ。

すぐに返事をしたかった。でも、ノアの言っていた“私を必要とする方”って言ったのを思い出した。ここでついて言ったら何のためここいたのかわからなくなっちゃう。…だけど、これを逃したら次にいつ外を見られるのかわからない。そんなのもう耐えられない。

すこし迷ったけど、やっぱり私がいたい場所は…。

外の世界！

「うん！」

私はやっとカゴから外に飛び出せるんだ。小鳥のようにカゴに閉じ込められ、自由に空を飛べずに、外を夢見る日々から変わるんだ。この人は私を導いてくれる翼になってくれるんだ。

私が手をつかむと、狼さんは私を抱えて、

『しっかりつかまってる。』

で、言って、外へと飛び出した。

第十三話 始まり

奴を追って資料室に入ったのが、一時間ほど前。その時には奴の姿はなかった。逃げ道のない部屋で…消えた。部屋を搜索するチームと、奴の仲間を捜すチームに分けて行動させたが、まだどっちも成果なしだ。

「どこ行きやがったんだよ！」

護衛に失敗して、その上取り逃がしたりなんかできるか！頭にきて壁を思いっきり蹴と飛ばした。すると、その壁が動くじゃねえか！

「通路？見取図にはねえぞ…。」

雇い主からのデータにはそんなものなかった。なら、この奥か！隠れられんのはここぐれえだからな！何人が連れて入ったときだ。

“ドッカーン”

奥から爆発音だ！逃げる気だ！させねえぞ！俺たちは走って奥へと進んだ。真っ白な部屋に入ったときにはもう奴は飛び降りていた。この距離じゃあたらねえ。

「くそおおお！」

拳から血が出るほど思いっきり壁を殴った。

目を開けたら、私たちは空を飛んでいた。上も下も、左も右も、みーんな光ってた。すごく綺麗。

『怖くないか？』

「うん！」

：普通、怖がるだろう。ビルの四十階から飛び降りたんだからな…。暴れるよりはいいが…。しかも、本当に嬉しいんだろうな。俺にしがみついている手を緩めていやがる。俺が支えないと落ちてしまいうだ。

「ちゃんと掴んでろ。落ちるぞ。」

『あつ、ごめんなさい。』

嬉しくって力いれるの忘れてた。

「狼さん。名前は？」

『…シンだ。あと、二度と“狼さん”って呼ぶな。』

カゴからとうとう飛び出した小鳥の物語がこうして始まった。

第十四話 相棒

『…それでえ、連れて来ちゃったと。』

逃走後、俺は彼女をつれて隠れ家に戻ってきた。一旦、別室に入れ、相棒に手当を受けながら全てを話した。手当と言ってもこんな身体だ。医者に診てもらうなんてこと不可能だから大したことないものだ。…しないよりはマシだが。

『俺はもちろん歓迎するよお。男二人で華のないむさくるしい生活とおさらば出来るからねえ。でも、狼ちゃんも丸くなったもんだねえ。』

皮肉か…。相棒以外にメンバーを加えない、と言い続けていた俺自身が連れて来たんだ。当然か。

『でもさあ、そんな世間知らず置いてどーすんの？お勉強してたお嬢ちゃんなんて、俺達にや必要ないじゃん。』

…その通りだ。相棒は腕のたつハッカーだ。本気をだせば国の情報機関に侵入し、見つからずに情報を全て吸い取ることができくらいだ。知りたい情報ならどこからでも盗み出せる。彼女の知っている程度の知識など比べようがない。

「だが、あんな場所に幽閉されていたんだ。何かあるのかもしれない…。」

苦し紛れだ。相棒は強気の変えたりしなかった。

『じゃあ、あの嬢ちゃんに訊いてきなよ。こっちはこっちでやってあげるからさあ。…はいっ！治療終わり。』

相棒は俺達が戻って来たとき、彼女の髪を取っていた。D・N・Aで、誰なのか探すのだろう。コンピュータの方を向いて何かし始めた。俺はそういうのは弱いから何してるかなんてはつきりしない。…仕方ない。彼女と話してくるか…。

第十五話 スーパーウーマン？

狼さんに案内された部屋はなんだかボロボロだった。壁にはひびが入ってたし、テーブルとイスが二脚あったけど、なんだか触ったら壊れそう。でも、私は目に写る物すべてが輝いて見えた。

特に感動したのは窓から見えたお月さま。

球状の世界の中心に浮いている、このお月さまは、この世界が生まれたときに神様が創り出したっていう伝説があるの。文明が進んでお月さまのところへ行けるようになって、今よりもっと技術が発達した文明が造り上げたんですって。なんでも、天候、気温なんかを司り、昼間は明るく、夜は暗くするようにプログラムされているんだって。

ね？知識だけはあるの。

さっき飛んだときはビルの光ばかり見てたから、気付かなかったけど、緑色に光るお月さまはとってもきれい。

お月さまを見てたら狼さんが戻ってきた。

『いろいろな訊きたいことがある。』

私は狼さんの質問にはちゃんと答えようとしたんだけど、よくわからないものばかりだった。お前は誰だ？とか、なんであそこにいるのか？とか…。私は私だし、部屋にいたのは生まれてからずっとだし…。そう答えたら、ちょっと怒ってた。間違っていないのに…。

今度はこう聞いてきた。

『何を身につけてきた？この世界にいるからには何か働かないと身を置く場所はないぞ。』

これなら答えられるよ。いっぱい身につけたんだから。

「えーとねえ。まず言葉かな？世界の四大言語、全部と…経済学、法律、文学、歴史に地理学…生物学、化学、物理学、医学、工学もちょぴつと。美術、音楽、料理もそうだし、あとあと…」

『それは本気で言っているのか？』

驚いてるの？ってことはあそこにいたことは全然意味がなかったことないんだ。これからいっぱい役に立ってくれるのかな？

第十六話 調査

こいつは本気で言っているのか？それ程の知識をこんな小娘が身につけられるはずない。適当なこと言いやがって。ただ、目を見るか限り、嘘をついているようには見えない。

ちょうどその時、相棒が部屋に入ってきた。

『D・N・A・検査で調べた結果が出たよお。いろんな有名人と照らし合わせたけど、パパさん、ママさん見つからないよお。そっちは？』

有名人の子孫という可能性は消えたようだ。それより、相棒に彼女の発言を聞かせた。

『わからないなら試そう！』

相棒は十分程したら彼女をコンピュータールームに連れて来るようにと言った。何をするかよくわからないが、任せることにした。

『おおかぁ…シンさん？』

言ったことは守ろうとしている。相棒と違ってききわけがよくて助かる。

「なんだ？」

『なんで狼なの？』

：なめてんのか？コイツ。無視してるとさすがに気付いたのか、質問を変えてきた。

『あ…えっと、じゃあ、ここはどこなんですか？』

「俺たちのアジトだ。見ればわかるだろ。」

『そうゆうことじゃなくて…』

ああ、具体的な位置が知りたいのか。…それぐらいはいいか。

「ここはゴーストタウンのビルの中だ。」

正確にはその303号室。三階は俺達が占領している。ゴーストタウンだから誰もいないし、占領したところで誰にも気付かれない。

ここは元々治安の悪い地区だったらしい。それを十数年前に政府が閉鎖した。なんでもここにいた連中が大規模なテロを企てていたそう。それ以来、ここは空っぽなんだ。だから、頂いている。

「…そろそろ時間だ。いくぞ。」

俺達は相棒の待つ部屋へ向かった。

第十七話 試験

301号室、俺達はコンピュータルームと呼んでいるその部屋に入った。

コンピュータの前には相棒がお気に入りの回転イスに乗って待っていた。

このコンピュータは相棒が自分専用に作ったもので、この部屋全体だけでなく、隣の302号室にまで侵食している。そのお陰なのかはよく判らないが、いつも作戦の時には手に入らないような情報を与えてくれる。建物の見取り図、見張りをするボディーガードの個人情報などだ。前回のFとの摩り替え、逃げ道の確保に繋がっているわけだ。

『これから、君の言ってたことが本当かどうか、テストするから…。そこに座って。』

と、私と同じ位の背の子が偉そうに言った。クシャクシャの黒い髪、顔はニキビがいっぱいでメガネかけてる。ちよつとイラつとしたけど言う通りにしてあげた。

テスト？信じてないんだ！なら、びっくりさせてやるから！

コンピュータのスクリーンの前に座った。狼さんはドアの前から離れてない。狼さんの方が気になるんだけどなあ…。

『そしたら始めるよお。そのペンで画面に書いてね。』

いいよ！さっさと終わらせるから！

…長引きそうだ。ここは相棒に任せて休むことにするか。部屋を出て、ちょうど階段の向こうが俺の使っている、305室だ。…疲れた。入ってすぐベットに倒れ込んだ。

手に何か当たった。なんだ？取ってみると、ファイル…そうだ、作戦の前に渡されたボディガードの連中の個人情報だ。閉じていた目を開き、灯りをつけ、奴のデータを探した。それはすぐ見つかった。やはり隊長なのか。名前は…

“ジェイク・アーベン”

第十八話 本部へ

雇い主を守れなかった。仲間までも失った……。情けねえ。あの野郎二度許さねえ。死体は他の連中に任せて、俺は本部に戻ることにした。

『今回は仕方ないッスよ、先輩。なんたって、相手は“ケルベロス地獄の狼”なんすから。』

部下のバン・ヘルゼンが後ろから言ってきた。No. 2が死んだ今、ウチのNo. 3のコイツがNo. 2だからな。本部に同行することになった。

「ケルベロス：なんだそれ？」

『…先輩、殺し屋には全く興味ないッスからねえ。ここ二、三年で名をあげてる奴で、鉄の獣の仮面と獣のような身体能力して、生き残った奴らがみんなして、狼のようだったって言うもんだから、ケルベロスッス。』

漫画みていな名前だな。だが、確かに狼みてーだったのは俺も感じたことだ。あの目：殺気は獣のような感じがした。狼って感じたのは直感だな。理由なんてない。

『先輩、着きましたよ。』

あの野郎のこと考えてたら、気付かなかった。ビルの前まで来た。

ボスに呼ばれてる。さつさと五十五階までいかねえとな。

エレベータの中でバンが思い出したように言ってきた。

『そういえば、先輩んがこのファムちゃん今月誕生日ッスよね？プレゼント考えてますからね！期待してくれて言っておいてください。』

空気読んでねえのか、てめーは…。それとも、気を紛らわそうとしてんのか？ウチの娘の話なんかしやがって。

でも、そうだよな…。家族の為に仕事なくす訳にもいかねえんだよな。気を引き締めてボスの部屋に入って行った。

第十九話 新たな任務

ボスの部屋に入ると、ボスが誰かと話していた。

ボスは元々ボディーガードで、“鉄壁”との異名を持つほどの実力者だった。今は現役を退いて、俺たちの面倒を見てくれている。とは言え、二メートルに迫るぐれえの巨体、鍛えられた体に、スキンヘッド+サングラスなんざみたら、とても辞めた人間にゃあ見えねえな。

もう一人は…そうだ、今回の雇い主と一瞬にいた奴だ。秘書だったか。失敗したから報酬とかパーかねえ、やっぱし。

『ジェイク。お前がミスるとはなあ。耳を疑ったもんだぜ。で、呼んだのは、彼が仕事の件で話あるそうだ。』

あー、報酬払うかあ！つてか…。

『今回の件は残念な結果でした。契約上、報酬を払うことは出来ません。』

やっぱしか…。

『ですが、追加でお願いしたいことがあります。』

ん？

『“ケルベロス”を追って頂きたいのです。見つけて始末しろ、と言うものではありません。実は、奴は“ある物”を持ちさっているの

です。それを取り戻して頂きたいのです。報酬は今回の二倍。さらに前金として、その半分をここでお支払いいたします。』

二倍!?! いや、これはボディガードの仕事じゃねえし…。

『ジェイク。これも立派なボディガードだぞ。』

俺の言いたいことが判ったんだろうな。ボスが付け加えてきた。

『盗まれたもんってのが、“少女”だからな。』

「少女？」

『社長のお嬢様にあたる方で、どうしても社長の傍にいたいとおっしゃるので、隠し部屋に居て頂いたのですが、ご存じの通り隠し部屋は空になっておりました。連れされた可能性が大きいのです。生前の社長が大事にされていたお嬢様を救い出して頂けますか?』

なるほど、それなら答えは決まりだな。

「わかりました。お任せください。今度こそ、役目を果たしてみせます。」

第二十話 帰宅（前書き）

今回ジェイクの乗る車とは、“反重力システム”という、重力を打ち消して、浮くことのできる、“空飛ぶ自動車”といったものです。

第二十話 帰宅

『またきれいに斬られたわね。これは縫わないとダメね。』

新しい任務の話は俺が担当することに決まって、詳しい情報はまた今度送ってもらうことでまとまった。で、斬られた傷ちゃんと治療してもらおう為に“医療科”へ来たわけなんだが…。

「麻醉使うと今日に帰れねえから、このままでちやっちやとすましてくれ。」

『そのつもりよ。痛むからって動かないですよ。』

今、傷を診てもらってるこいつはサロナ・フローラ。俺と同期だ。怪我するたびに診てもらってるからかな。こいつになら安心して治療を任せられる。

治療を受けている間にあの野郎のことを話してた。仕事の内容をもらすのはご法度なんだが、まあ、敵の話だし別に問題ないよな。全部話し終わると、

『そこまで一致するなら、本当に狼なのかもね。』

けっ…。からかうなよな。

『はい！終わったわよ。傷開かないよう安静にしてくださいよ。…ほら、あの子たちが待ってんでしょ。早く帰ってあげなさい。』

「ああ、ありがとう。」

娘たちが待つてっからな。

本部から十分程、車を飛ばすと、家のあるドームが見えてくる。ビルが立ち並び、一面コンクリの外と違って、ドームの中は木や緑、自然でいっぱいだ。動物だっている。正確にはこの中にしか残っていないって言った方がいいか。こうゆうところは他にも幾つもあった、一戸建てに憧れて、とか、自然の中で暮らしたいってな家族が集まっている。俺も似たようなもんだ。この中に今の俺んちがある。

もう七時か…。あいつら起きてるな。

中央街から少し離れたところ：周りは木で囲まれ、子どもたちが遊び回れるような遊具なんかも置いてある。二階建てで、木でできた二家族が一緒に暮らせるくれえの大きさだ。こんだけ大きい理由？すぐわかるよ。

第二十一話 家族

ドアを開けると、ベルがなる。その音を聞いてドタドタドタ…と走ってくる足音が聞こえる。

『お帰り！ジェイク！』

「おう！今帰ったぜ！」

俺のガキたちだ。とはいっても血が繋がってる訳じゃねえんだけどな。全員孤児ってやつだ。引き取り手のない奴を集めていったら、孤児院みてえなことになった。今じゃこれが俺にとって一番守りたいもんだ。

『今日はジェイクの大好きなカレーだよ。』

いつも元気で、活発なガン。怪我ばかりしてくんだよな。木から落ちて足折ったこともある。ただ、そんな時は笑って『大丈夫、大丈夫！』なんて言ってたっけな。

『今日は何処のお偉いさん守ったの？』

イタズラが大好きなスーエン。いつも答えられないこと知ってて訊いてきやがる。

『見て！昨日ね、ジェイクの絵、出来たの。』

絵が好きなファム。ちょっと人見知りがあって、心開いてもらうの一番時間かったなあ。中に入って行けば、広いリビング、対面

式キッチンがある。だいぶでかく作ったんだが、こいつらと一緒だとまだまだ小さかったよ。

『お帰り。今用意するから。』

一番年上のレイン。俺がいないときはレインがみんなを引っ張ってくれる。料理とかメチャうめえ。

『おかえり！』

『おかえり！』

レインの隣で皿洗いしているのは、双子のエルンとバンツ。エルンが姉でバンツが弟。気弱なバンツをエルンが引っ張ってるから、二人はスゲエ仲がいい。

「ん？ カイは？」

『まだ寝ねてるよ。』

んで、最後に一番年下のカイ。素直で笑顔の絶えなくて、周りをいつも明るくしてくれる。

これで俺の家族は全員だ。家の中はいつも騒がしくなったな。最初
は静かだったのに…。

第二十二話 支えられて

初めは俺とレインの二人だけだった。

ボディーガードの仕事をはじめてすぐの頃、世話になってた暴力団の親分―俺たちはオヤジって呼んでた―が死んだ。ガンだったらしい。俺は抜けた身だから、葬式なんて行けねえ。だけど、オヤジには幼い娘さんがいたのを知ってたし、引き取り手が見つからないとも聞いていた。オヤジにはどうしようもない俺を拾ってもらったし、抜けるってときも理由も訊かずに、選別だっつって金までくれたオヤジ…。今度は俺が恩を返す番だ、と思い、引き取ることにした。初めはそんな理由だった。

だが、いつしかレインは俺にとって大事なもんになっていった。

もちろん、家族としてだ。変な意味でとるなよ！

誰かのためにつつ―ことで始めたボディーガードも汚職まみれの官僚だとか公表できねえような事をしてきた汚い連中ばかりが相手でこの道を選んだことを後悔し始めてた。だが、帰ってきたら、遅くまで起きて待ってくれたレインの笑顔みるとそんな悩みは吹っ飛んだ。俺はレインを守るために命張ってるんだなって思えた。その時になって兄貴の気持ちやと判った。俺はレインに救われたんだ。

他のガキたちも親を亡くして受け取り手がないところを家に連れて来た。こんな仕事してるからな。一人、二人…と増えていくうちに家が小さくなったから思いきってマンションからこちに引越した。うるさくなっていくな家族が俺にとって一番守りたいものになった。それが強くなれた理由なんだろうなあ。

「ほら、お前ら、話は帰って来てからだ。学校行ってこいよ。」

まあ、いつもこんな感じさ。夜に仕事に行って、あいづらが学校に行くぐらいの時間帯に帰ってくる。昨日は夕方ぐらいからだったんで、レインの飯が食えなかった。今食ってつけどな。

全員を送りだしたら、あのうるさい家もこのときだけは静かになる。さすがに疲れた、自分の部屋に戻ってすぐに寝ちまった。

第二十三話 翌日

『狼ちゃん。朝ですよ。』

ファイルを読んでいたらいつの間にか寝ていたようだ。朝になっていた。

『朝ごはんですよ。』

相変わらずの口調で相棒が叫ぶ。人の何倍もの聴覚を持っている俺にとってただの騒音にしかない、と言っているのに……。目覚めが悪い。これ以上叫ばれると厄介だから、しぶしぶ飯を食いに行った。

306号室は食堂のように改築している。厨房には冷蔵庫や一通りの道具を揃えているが、ほとんど使っていないので新品どうようである。いつも保存食ですましているからだ。

今日もそんなものだろう。

部屋を出たとき、違和感を感じた。なぜかい匂いがする……。ここに来てから嗅いだことのない匂い。その匂いにつられるように部屋に入ってしまった。

……………。

頭が働かなかった。

テーブルの上にはまるでレストランで出される料理のようにきちん

と盛り付けられた料理が並べられていた。

『びっくりしたっしょ。全部あの娘が作ったんだよ。』

あの娘の存在をすっかり忘れていた。先に飯を食っている相棒に言われてやっと思ひ出した。昨日俺が連れて来たんだった。

厨房を見ると、道具を片付けていた彼女と目があった。

『おはようございます。』

「…ああ。」

確かに昨日、料理もできる、と言っていたし、別に料理ができる娘なんて珍しいわけではない。俺が驚いたのはまともな料理がここにある、ということだ。何年ぶりにまともな飯を食べることになるのだろうか…。

『はやくたへないほへんふたへるほ。（早く食べないと全部食べるぞ。）』

「馬鹿が。そんなこと許すか。」

第二十四話 人の繋り

遅れて入ってきた狼さんもイスに座って食べ始めた。初めは手で食べると思っただの。流石に本物の狼みたいに口だけで食べたりしないだろうなあ。だけど、予想は外れちゃった。

…見てたら笑っちゃった。だってあんなに大きくて、狼なのにちゃんとスプーンとフォーク使ってるんだもん。狼ってスプーンとフォーク使って食事する？その上マナーもしっかりしてるから、すごくおかしくて…。

隠れて笑ってたら、バレちゃったみたいで狼さんに睨まれちゃった。でもね、その顔にマヨネーズが付いてるのに気付いちちゃったらもう笑いが止まらなくなっちゃって…。思いつきり笑っちゃった。

『何が可笑しい！』

狼さん怒ってたみたいだけど、止まらないんだもん仕方ないじゃない。黒髪の子―昨日あれから名前訊いたらトーイッシュ・エイデンと言うんだって―も、マヨネーズに気付いたみたいで一緒になって笑い始めた。すぐ殴られてたけどね。

こんなに笑ったのは生まれて初めてだった。やっぱり外はいいね。出てすぐにこんなに楽しい思いが出来るなんて…。これが人の繋がりっていうものかな？仲間とか家族っていうもの。習った時はよく判らなかった。当然だよ。他の人と会ったことないのに…。でも、私はとうとうその中に入れたんだ。それが嬉しかった。

笑い続けたせいかな…。ちょっと涙が出ちゃった。涙を拭いて、お

皿洗いを再開した。二人は美味しそうに私の作った料理を食べ続けた。つまらさなければいいんだけど…。大丈夫かな？

第二十五話 動き出す歯車

食べ終わって、コンピュータールームに相棒と共に行くことになった。昨日の結果だ。相棒がいつもの椅子に座り、俺は扉の横で腕を組み、壁にもたれる。いつものスタイルだ。

『まず、これ見て。』

そう言ってキーを押すとモニターにグラフが現れた。何色もあったが、一つを除いて、どのグラフも最大値まで上がっていた。

「なんだこれは？」

『昨日のテストの結果だよね。』

つまりありとあらゆる分野を試したところ、彼女は自分で言った工学の分野以外、あらゆる知識を持っている、ということらしい。

『そう！彼女が言った分野では学者もびっくりするほどの知識を持っていたよお。それがあれだけの数の分野全部だからあ…。』

「天才か…。」

『そうゆうことだねえ。でも、こっからすごいんだ。』

ん？これだけの知識を持っているだけでも十分凄いが…。

『一度教えられた事、見た事全部頭に残るんだって。だから、試しに…。』

またキーを押すと、グラフが消えた。代わりに、一面の壁ほどもあるモニター全てを埋め尽くす程の言葉が映った。

『全部で三万六千語。これをたった三秒見ただけで、全部暗記し、見ずに全て言いきったんだ。』

…神がかり的な力だな。あんな娘がそれほどの力を持っているとは…。そんな力があることさえ知らなかった。まるで機械だな。その能力のためにあんな部屋に閉じ込められていたのか…。広まれば誰しも欲しがる能力。

「その能力が幽閉する理由だとして、なぜ彼女を隠す必要がある？」

公表して、何か問題があるのか？一躍有名人になるだろうから、あの会社の名も売れることになるはず…。出来ない理由…俺には一つしか思い当たらない。

『奇遇だねえ。俺も同じ考えだよお。』

相棒も俺の顔を見て言いたい事が判ったようだ。

「…遺伝子操作か。」

『確証ゼロだけどねえ。ただ、狼ちゃんみたいな造れるなら、十分可能性はあるよねえ。』

今まで何も手掛りが見つからなかったが、あの娘と繋りがあるのかも知れない。連れて来たときはあまり考えていなかったが、彼女をここに置いておくことになるな。

やっと歯車が動き出したと感じた。

第二十六話 出勤

目が覚めると、一時を回っていた。

本当はまだ寝たかったんだが、そろそろ起きねえといけねえ。昨日の秘書さんに情報貰わねえといけねえ。メールでもいいんだが、万が一情報が漏れたりしたら困っからなあ。依頼者の目の前で情報は貰うことにしてる。

眠気の残る顔を冷たい水を被って醒まし、飯食って、スーツ姿に着替える。家の鍵はいつも犬小屋の下に隠して置く。

「フラン。いつてくるわ。留守番頼んだぞ。」

小屋から前足を出して、くつろいでいる。フランって名前はみんなでつけた。ラブラドルレトリバーで、今、三歳くらいか…。ひとなつつこいからみんなに好かれている。おかげで、番犬にはならねえんだけどな…。

ドームの地下には駐車エリアがあり、ここに住んでる奴全員の車が停められてる。地下に降りるにはエレベータがあつて、ドーム中にいくつか作られてる。家から一番近いのは中央街にあるもんだから車取りに行くだけなのに結構歩かねえとならない。それ以外は完璧な家だから気にしちやあいないけどな。

西洋風の街中を五、六分程歩くとエレベータのある中央広場が見えてくる。広場の真ん中には中央に天使の像が立っているデかい噴水がある。よくある噂でこの前で告ったら上手くいく、なんてもんがあるから、カップルがよくいる。…へいへい俺には彼女なんてい

ませんよ。

広場の角のエレベータから地下に行き俺の愛車に乗って昨日の会社に行く。社長が死んでもいつもと変わりなく会社は回っている。にしても恐ろしいよな。社長が殺されるの判ってたみたいの後見人決めてたらしいし、社長の死因も病死に摩り替えたみてえだし…。依頼人の悪口言うわこじゃねえが、対応がスゲー早い。それだけ優秀なのかねえ、あの秘書さん。

『本日はどのようなご用件で？』

受付に秘書さんとの約束がある、って伝えてたら、会議室に案内された。資料室の一つ下の階だ。来るまで少し待っててくれっていうから、高そうなイスでゆったりとくつろがせてもらおうことにした。

第二十七話 謝罪

疲れが残ってたのか、少しうとうとし始めたぐらいだった。

『お待たせして申し訳ない。』

ドアの方から声がした。少し驚いたよ。おかげで目が覚めたから丁度良かった。

声の主は昨日の秘書さんだった。ドアの方を見ると、やはり彼がいた。だが、見慣れない奴もいた。車イスに乗って、秘書についてもらっている男。俺と同じくらいの歳だろう。髪はブラウンで真ん中で別けたショートカットのような髪型。パツと見じゃあ女に間違えられるだろう。秘書さんが連れて来たってことは…。

『ご紹介いたします。こちらは新しく社長に就任しました、アーサー・ライヴェント様です。』

ビンゴ！新社長さんか。ファミリーネーム同じだから、息子さんってどこか…。

「社長さん…いえ、お父上のことは本当に申し訳ありませんでした。」

俺はそう言って、深々とお辞儀をした。失敗した後には血縁者と会うのはこれで三回目だな。他の二回は何年も前のことだ。あんまり思い出したくないことだな。

『いえ、もう済んだことです。父もいろいろとしてきたのだから、命を狙われても仕方ないことでしょう。』

気にするなっでことか…。

他の二件もこんな感じだった。家族にあまり慕われてなかったのか、それとも、怒りを隠してるだけなのか…。どちらにしろ、こっちとしてはなんて言われても申し訳ないって気持になるんだけどな。逆に怒られたほうがいいくらいだ。先輩たちは割り切らねえとやっていけねえぞ、つつってんだけど、俺には無理な話だ。

後悔はやっぱし相手が汚い人間でも残る。命って奴は重いな…。

第二十八話 搜索準備

『昨日お話し致しました、依頼の件ですが……。』

秘書さんが重くなった空気を察してくれたんだろ？な、話を変えてくれた。

『お捜しして頂きたいのはアーサー様の妹に当たる者です。彼女の写真、身長などの情報はこちらに用意してあります。』

と、言ってファイルを受け取った。一人の少女の情報にしては少し分厚い気がするが：読めばわかるか。

『妹をよろしくお願いします。』

「必ず元気な姿でここにお連れいたします。」

決められたようなセリフになってるな……。だけど、本心から言ってることだ。亡くなった社長さんの二の舞にだけはならないようにしねえと。

：新社長さんもいろいろと忙しいみたいで、話をしたのはそれ位だったか。その後、電話がかかってきて、すぐに戻って行った。金は昨日言ってた通りの額を小切手でもらった。搜索用経費ってとこだな。用も済んだし、ここを出た。その足で本部へ向かった。

さすがに一人で搜索なんて、時間かかり過ぎるからな。何人か部下に手伝わせないとな。多すぎると奴ら―ケルベロスだったか？―に感付かれる。そうなると、少なくともいいようにはならないだろう。

せいぜい三、四人程度でどこか。

だいたい目星は付けてある。あいつらなら快く引き受けてくれる
だろ。

っても、誰が手え空いてるか、知らねからな。本部行けば空いてる
奴判るしな…。金も渡しとかねえと…。ハハッ。怪我人もおいそれ
と寝かしてくれねえか…。慣れちまつたけどな。

第二十九話 外の世界

見渡す限り、人、人、人！お昼からトーイッシュに連れて行ってもらって、ショッピングにでたの！世界にはたくさん人がいるのは知ってたけど、実際見るとびっくり！“一見は百聞にしかず”ってこういうことかな？今ここにいるのは百人位だと思っただけど、奥の人たちは頭しか見えないんだもん。世界人口六十億人ってどんなのなんだろう…。

トーイッシュが狼さんと相談して決めたんだって！私、着てた白のワンピースしかなかったから、服とか揃えないと着るものないもんね。

でも、外に出られたことが一番嬉しかった。普通の女の子みたいに過ごすなんて初めてだから…。ただ何からしたらいいか全然わかんなかった。服だってどんなの選んだらいいか、なんてわかんないし…。

トーイッシュにそのこと話たら。

『大丈夫、大丈夫。そんなことだろうと思って助っ人呼んでるからあ。』

それで、今はその助っ人さんを待ってるところ。

「一時に待ち合わせてるんだよね？」

…もう二十分ぐらい過ぎてた。時計の見方間違えてないはずだけだなあ。

『そろそろ来るよお。もうちょい待ってて。』

苦笑いしながらそう言ってた。いつもなのかな？

『…あ、やつときたよお。』

三十分回ってたと思う。トーイッシュが通りの向こう側を指差した。それをたどって行くと…さきにいたのはキレイな女の人だった。携帯電話…だったよね？で、電話しながら手を振りながらこっちに来た。

『じゃあ、また後でかけなおすわね？…ええ、じゃあ。…ごめんね。ウチの新人がバカやっちゃって助けに行ってたの。』

髪はブロンドで肩まで届いてる。クルクルっとしててかわいい。背も高いスタイルいいし…なんていうのかな？…そう！女優さんみたい。ホログラムで見た女優さんに負けないくらいキレイ。

『それでその娘が話してた新入りさん？』

「セフィリアです。よろしくお願いします。」

『うんうん。…にしてもバレないようにってのは判るけど、そんな黒コート着てたら逆に目立つわよ。』

ワンピースだけだとなんだからって、トーイッシュが貸してくれたの。

『まあいいわ。これから私がコーディネートしてあげるから、つい

てらっしやい。』

なんだかワクワクしてきちゃって、お姉さんの後に小走りについて行った。

第三十話 苦悩

相棒たちを買い物に出したのは正解だな。静かでゆっくりできる。

相棒が搜索を始めた集団はまだいないから、今のうちに必要な物揃えとこうと言いだしたのが始まりだった。料理が気に入ったんだろう、株を上げようと考えたらしい。

シャワーを浴びて、身体を渴かした。この身体になったせいで、全身にドライヤーを当てないとならないのが悩み所だな。傷の部分はもうほとんど目立たない。回復力も上がっているのだ。ほとんどの傷は一日で治る。

自分の部屋に戻り、ソファにもたれた。クラシックをかけ、目を閉じる。こうして音だけの世界に入っていると心が休まる。

最近、復讐ににえたぎっていた憎しみの感情がだんだんとどこかへ消えてしまっていくように感じていた。

疲れたということなのかもしれない。

人を憎しみを抱き続け、殺してきた人間たちを同類だから死んで当然だと思い続けてきた。だが、結局自らもそいつらと同じ汚れた人間になった。たとえ元に戻っても以前のるように家族を持てるのだろうか…。いや、血で染まった人間が家族と平穏な生活を送れるはずはない。そもそも触れる権利さえないだろう。なら、俺は何のために…。

出口のない迷路をさまよっているような感覚だ。

そんなことを考えたところで何も解決しないのに……。考えずにはいられない。殺し屋として生きていくしか道がない俺が最後にどうなるのか……。誰かに殺されるのか……。それも悪くないのかもしれない……。

そんなときだった。コンピュータールームから音がした。

“ リリリリリッ ”

これは……。着信音か。かかって来るとしたらあいづらかそれとも……。

ソファから起き上がり、コンピュータールームへと向かった。

第三十一話 次の舞

コンピュータルームに入ると、かけてきたのはあいつらではなかった。

モニターに映った人物は顔を隠し、肩まで見えているのでスーツを着ている程度しかわからない。ただ、襟の部分にウロボロスをあしらったバッジを付けている。

『前回の任務はご苦勞であつた。』

合成音声を使って話をする。こいつが俺達の依頼者だ。顔も声も素性も：何一つわからない。わかっているのは仕事させるとき以外は連絡を取らないことくらいか。

『なかなか苦戦を強いられたようだな。戦利品は自由にしていゐぞ。』

相棒が昨日のうちに報告書をまとめて出してしてくれた。よく働いてくれる。

「次か？ 早いな。」

今更後には退けない。与えられた仕事はしなければ生きていけないからな。

だが、早すぎる。任務の次の日に次をもつてくるとは、今までにはなかった。

『お疲れのところすまないな。次の仕事はいつもの方法で送って
いた。さきの報酬もいつもの口座に振込んでいる。確かめてお
くれ。では、今回も健闘を祈る。』

“ブツ”

回線が切れた。この仕事を始めてから今まで、ずっとこのスタイルだ。この会話だけを盗聴されていたとしても、仕事内容まではわからない。内容自体は別回線でデータを送ってくるらしい。使い方が解らないから、相棒に説明してもらったことしか知らない。データも暗号化しているから見られるようなことがあっても、仕事をするまでに解読するのは不可能だそう。だからこそ、今までここがバレるようなことはなかった。

相棒が戻って来たら解読してもらおうか……。俺は自分の部屋に戻り、道具の手入れを始めた。仕事は渡された日の深夜に行うことが多い。すぐにここを発てるように準備をしなければ……。

テキパキと支度をするのと裏腹に頭では何も考えていなかった。考えられなかった。また後悔ばかりしてしまいそうだから……。一度手を止めて、昼間は明るく世界を照らしている月を見た。

第三十二話 我が社

「かー、最近は一体どうなってんだよ。」

俺は頭をかきながら名簿を見ていた。見当つけてた奴らが全員仕事を抱えてたんだからな。しかも長期だから他の仕事なんてもてない。こんだだけ忙しいのも珍しいな。全社員三百人に対して空いてるのが一、二人だけだからな。そいつらも怪我の治療で休んでるだけだし、有り得ねえ…。

さきにサポート頼んどくか…。工作上、情報管理とかは重要になるもんだからサポート要員つーのも必要になってくる。今回なんか誘拐搜索だからな。情報管理がいねえとろくに動けねえ。俺のデスクのある階の四階上だから：二十階だな。エレベータで上がると、カウターがある。ここで搜索内容、必要な情報なんかを申告すればそれに関しての情報を調べ、伝えてくれるサポーターを用意してくれるってな訳。今回の仕事なら一人だろうな。

申告書出した丁度そのとき、アナウンスがあった。

『ジェイク・アーベン、五十五階、社長室におこしてください。』

ん？ボスが呼んでるのか？エレベータに乗り込んでそのまま五十五階へと上がっていった。

ボスの部屋はエレベータのすぐ前の部屋だ。まるまる一階分がボスの部屋にあたる。なんでこう偉い奴の部屋って無駄にデカイのかねえ。そんなこと考えてねえでさっさと入れよ俺。

“コンコンコン”

「ジェイクです。」

『入ってくれ。』

分厚い両開きの扉を開けて中へと入って行った。中は丸い部屋になっていて、全面ガラス張りになっている。両サイドにはいくつもモニターがあり、世界中のニュースが放送されている。デスクまでは大物の企業家などとボスとの写真が飾られている。現役ん時はすごかったらしいからなあ。

デスクにはボスと…前にいるのはバンか。新N.O. 2君も呼ばれたのか…。

『チームは組めたか?』

「まだっスよ。」

そんな事聞くために呼んだんだねえだろ。

『そうだな。だがもう安心していいぞ! お前はバンと組むことに決まった!』

ふん。…へ?

第三十三話 タッグ結成

『ウチのトップ二人が動けばすぐに見つかるだろう。』

ボスが笑いながらそう言った。いやいや、N O・2まで本業から離れちゃうなんて、仕事に支障がでちゃうだろ。そう思って反論しようとしたら、それを遮るようにバンが横から口をはさんだ。

『自分が頼んだんッス。死んだ先輩たちのためにもケルベロスの思い通りにさせたくないんスよ！』

先輩：前N O・2のことだ。俺がN O・1になった後に上りつめた奴で、部下を大事にするスジの通った奴だった。バンは尊敬していた奴だったから、死んだときも相当落ち込んでいた。

『それだけじゃない。ジェイク、オメーはその獣に傷を負わされたじゃねえか。多くの実力者を殺してきた奴なんだろ。万が一のこともあるかもしれねえ。少数部隊で行くのは正解だろう。だが、これぐれえ本気でいかねえと：殺られっぞ。』

ボスの顔がマジだ。こういう時は何を言っても無駄だ。それに：その通りだ。あの殺気には中途半端な奴では耐えられない。今のウチの会社にはバンぐれえしかいねえな。これ以上被害者を増やさないためにも、この二人で行くしかないか…。

「でも、俺たち二人本業から外れること良くボスが許してくれたよな。」

話がまとまって、ボスの部屋から下り今後の行動を決めに俺のデス

クへと向かった。あの分厚い資料に役立つもんがあればいいんだけどなあ…。

『この仕事終わったら、その分働くことになってるんす。』

そりゃそうか。だったら早くかたづけねえといけねえな。ボスが社長としてではなく、一ボディーガードとしての判断だ、失敗なんてしてたまるか！

「それじゃあ、いつちよやるか！」

『はいッス！』

ファイルを広げ、俺たちは調べあげた。これから俺たちの運命を握る少女を。

月は俺たちのデスクを明るく照らしていた。

第三十四話 帰れる場所

…つ、疲れたあ。あれからあのお姉さんとずっとビルの中歩き回っているいろいろな物買ったんだけど、もう何買ったのかわかんないくらいいっぱい買ったし、階段を上へ下へって行き来してたから、クタクタ。私そんなに運動したことないのに…。

買い物している最中にトイッシュュがあのお姉さんのこと話してくれたの。名前はナーシャ・エイデン。そう、トイッシュュのお姉さんなの。ファッション雑誌の編集長をしてるんだって。“長”が付いてるから、偉い人なんだよね？同じ女性だから何がいるかとか判るってトイッシュュが頼んだんだって。というか、姉弟なんだ！よく似てるのが姉弟じゃなかったの？全然違うよ？…世界って広いんだね。

選ぶとき大変だったんだよ。服なんて、あれこれ着せられて人形になった気分。いろんな感じに変身できたのは楽しかったけどね。ただ、ハイヒールだっけ？かかとに長い棒みたいな付いてる靴。あれだけはなんだか気持ち悪かった。お姉さんはすぐ慣れるよ、って買ってくれたんだけど…。

お金払ってくれるなんて優しいなあ…なんて思ってたら、

『働いて返してねえ。』

だって。そうだよ。返さないなんて、よくないよね。むしが良すぎるって言うんだよね、そうゆうの。でも、いっぱいいいものもらったから、がんばるよ。掃除、洗濯なんでもかかってらっしゃい！買い物が終わって、お姉さんと別れて私とトイッシュュは帰って来

た。別れ際にお姉さんが、

『お幸せにね!』

って言ってたのはなんなのかな? トーイッシュも赤くなって、どうしたんだろ? 訊いても、

『気にしないで、何でもないからあ。』

ってしか言ってくれないの。気になるよお。でも、応えてくれないから、ついて行くしかなかったんだけど。

前は狼さんに目をつぶってろ、って言われたから、どうやってあの部屋まで行ったのかわからなかったんだけど、今回はちゃんと見れた。覚えておかないとね。私のお家なんだから。

第三十五話 ただいま

トーイッシュの運転する車に乗って町外れの倉庫に向かうの。古い倉庫で、小さなビルの屋上にあるみたい。だから、ガスは届かないの。トーイッシュがリモコンを取り出して、ボタンを押したら、重そうな鉄の扉が開いた。倉庫の中はボロボロで何にもなかった、んだけど、またリモコンを押したら…。

“ゴゴゴゴッ”

地響きっていうんだよね？ ホントに字の通り地面が震えてた。突然だったから、ビックリして車のイスにしがみついちやった。

『見てなよお。ビックリするからあ。』

もうビックリしてます！ しがみついたまま、うつすらだけ目を開けて前を見てたら、“ガコッ”って音がしたかと思ったら、前の地面がせり上がってきたの。ちょうど車一台が入れる位の高さで止まった。

「もしかして…エレベータ？」

『ビンゴォ！』

スゴイ違和感。

外から見たら今にも壊れそうなのに、リモコンで開閉したり、車用のエレベータがあって、下に下りたらガスの溜まってないトンネルまであるんだもん。あのおっきなコンピュータとかもそうだけど狼

さんとトーイツシュってもしかしてお金持ちなのかな？蒼白いライ
トで照らされたトンネルの中を進んでいる間そんなことばかり考え
てた。後で訊いてみよう。

十分くらいかな。トーイツシュが車を止めた。着いたみたい。

降りたら、そこは丸い小さなドームみたいになってた。真ん中には
丸い筒みたいな柱があって、その奥には見たことのあるバイクがあ
った。狼さんのだ。前のときもこの道を通ったんだ。…あんな地響
き聞いた覚えがなかったんだけどなあ。そこまで浮かれてたのかな？

トーイツシュが柱の方へ歩いて行っただ。後からついてくと、柱に扉
がついているのがわかったの。エレベーターだったんだ。ボタンを押
すと開いて、私たちは乗り込んだ。

次に扉が開いたときは私の知ってる景色が広がってた。外の世界に
私の帰ってこれる場所ができるだなんて、あの部屋にいたときには
諦めてた。今でも信じられないもん。だから、狼さんの言ってくれ
た言葉がスゴく嬉しかった。

『おかえり。』

「ただいま。」

私は今までで一番の笑顔をしてたよ。もう一度言っておこつと。

ただいま。

第三十六話 鎖

ずいぶん対応能力の強い娘だ。いくら外に出られたからといっても、何も知らず、その上こんな姿の俺さえも信用しきっている。顔を見ればわかった。ここを完全に自分の居場所だと思っているんだろう。俺たちが何をしているかも知らずに…。

あの娘には空き部屋を与えた。山のような荷物を運びこんでる様は、新しい玩具を手に入れた子供のように喜んでいる。

その間に相棒に例のデータを渡した。

『もう依頼が来たんだあ。早いねえ。』

「早く開いてくれ。」

はいはい、つとめんどくさそうに返事をしてキーボードを叩いている。

仕方ないな。

買い物について行って疲れているんだろう。姉について来てもらうと言っていたからな。姉のナーシャは相棒がIT関連の仕事をしていると思っている。相棒が社員のデータを書き換え、自分がそこで働いているかのように偽装し、こことは別にマンションを借りているからこそ、騙せている訳だ。

ちなみに今回の事は恋人として紹介したはずだ。孤児院育ちで金がなく、悪徳業者に騙され借金を背負わされ、水商売に出されそうに

なったところを助けてそのまま恋に落ちたが、その娘は何も持っていないし、業者に見つかるやバイから、必要な物を一度で集めたいっというわけをお願いした、という設定になっている。…誰もが嘘だろうと思うことを涙流して同情する姉って…。弟に甘過ぎだろうがな。

『ほい！でたよお。』

相棒がクルッと回転した。モニターに近づくと、ある男の顔写真が出ていた。

『名前はウッド・サーテン。“アマデトラ”っていう食料輸入会社の代表取締役を任されている奴だよお。今日の夜十一時、ある取引を行うんだってえ。それが行われる前に仕留めてくれ、てのが今回のミッション。』

十一時か…。あまり時間がないな。

「すぐに出る。サポート頼むぞ。」

『まかせといてよお。』

刀をさし、ショットガンを背負う。殺し屋を始めたときから付けている自分の一部ともいえる仮面の隠しきれない血の匂い。嫌悪したこともあったが、そのときからそんな資格は俺にはなかった。心を殺すその鎖を今日もまた、付けるのだ。

第三十七話 出撃

地下に下り、バイクに股がった。

あの娘の部屋の前を通ったとき、物音がしなかったので覗いて見ると、部屋は足の踏み場もないほど散らかっていた。当の本人はベッドの上で寝息をたてていた。無知とは幸せなものだ。お前と共に暮らしている人間は人殺しだというのに…。

手袋をはめ、エンジンをかける。トンネルにはエンジン音が響いている。このバイクには反重力システムは積まれていない。というよりは反重力システムはまだまだ大型で、バイクには大き過ぎるのだ。

それでも、車よりは小回りがきくので敵をまくのに都合がいい。それに道も無数に通っているので、積んでなくても問題ない。

『…ザー…準備OKエ？道のデータを送ったよお。』

さっきも言ったが道は無数だ。この仕事をしているからには、ターゲットのところまで行くのに最も人の目に触れない道を通らなければならぬ。それに…迷って仕事が出来なかった、なんてことになったら…。だから、いつも道のデータを送ってもらう。送られたデータはバイクのモニターに表示される。

「ああ、来た。」

この会話は無線を使っているんだが、特注品で、イヤリング型の受信機から声を受け、襟首のピン型の発信機から声を送るというスタ

イルだ。ここまでの小型は世に出回ってはいない。

「行ってくる。」

薄暗いトンネルの中を進んで行く。さきの見えない未来と同じ…。

今日は前回のように強い奴はいるのだろうか…？この俺の役目を終わらせてくれる人間はいるのだろうか？

エメラルド色に輝く月明かりだけは今も昔も変わらず世界を照らしている。

第三十八話 手掛り（前書き）

※NC∴NEW CHOICEの略称です。それではどうぞ。

第三十八話 手掛り

『じゃあ今日も遅くなるの?』

「ああ、悪いな。飯の当番今度代わるから許してくれ。」

『…仕方ないなあ。なら、今度のジェイクの番は贅沢にしてよ!』

「わかった、わかった。スゲーの期待してろよ。じゃあまたな。」

ふー。仕事が長引くと、いつもレインに飯番代わってもらわないといけないが、レインを頼りすぎだよなあ。すまん、レイン。

資料の方は目を通した。身長、体重はもちろん、スリーサイズ、指紋に性格、生い立ち…いくらなんでも詳し過ぎだろ。プライバシーとか関係なしッスか。アイドルでもここまではないだろ。ちよつと気持ち悪いぞ。

…で、目通し終わったなら、何してんだってーと、実は目撃情報が入ってきたんだ。“NC”っつー総合デパートの中で、それらしい少女が二十代の男と女と共にいた、って。スゲーだろ、ウチの情報力。場違いな黒いフード付きのコートなんて着てたらしいから、人目についたらしんだが…。当たりかどうか調べるために、そのデパートの監視カメラを調べてるってな訳だ。

『まさか、こんなにも早く見つかるとは思ってなかったッス。』

さっきまで顔が固まったみてーに表情変えずに資料見てたバンは安心したんだろう、少し笑みをこぼしている。

「まだ決まった訳じゃないだろ。氣い抜きすぎだぞ。」

なんて言ってるが俺も期待している。本人であれば、同行している連中から“ケルベロス”に繋がるはずだ。そうならば一件落着。彼女を救えるわけなんだが…。なんか引かかる。

『そろそろ目撃された時間ッスよ。』

時刻は十二時四十分。もうすぐ映りだすはずだ。四十一：二：三：。

ところが四十四分になるかならないか、といった時間に悪い予感が当たってしまった。

その瞬間にすべてのカメラの映像が止まった。

「どうしたんだ？」

『こ、ここから全ての記録が消えてしまっています。』

やられた。今どきネットに繋がっていない機械はない。この管理室にも繋がっているんだろ。ハッキングされ、消された可能性が高いな。こういった情報管理を行う場所のセキュリティは高いはず。ハッカーも実力が相当なものだろう。

『…結局手掛り無しッスか。』

消されていたが一応データをもらい、退くことにした。本部へ向かう車の中でバンが溜め息混じりに言った。

「いや、少なくとも本人の無事はわかったんだ。それだけでも判ればいいさ。」

そうさ。まだ始まったばかりなんだからな。あいつとの戦いは…。

第三十九話 ロックオン

出る時には全てを照らしていた月の光もいつの間にか雲に隠れていた。世界の光は俺にはまぶし過ぎる。以前はあの中にいたことが信じられない。

相棒の情報によると、ターゲットは間もなくこの道を通るそうだ。車二台の内、後ろの車に乗っているようだ。

裏取引などを行う場合、反重力システムを持つ車では足がつく。シリアル付きの発信機が付いている上、登場者の履歴がつく。というのも、全ての人にはチップが付けられているため、読み取られ、交通センターに送信される。そうなれば、密会の証拠になりかねない。

旧式の車にはそれが付いていない。個人のチップにはプライバシー保護法のため、緊急時以外の発信機能はロックされているので足がつかない。だから、この手段で移動するものが多いのだ。

相棒はそのロックされている発信機能を解除し、居場所を指示してくれているのだ。さすがハッカーだな。

全ての人：と言ったが、一部例外がいる。俺や：それにあの娘だ。昔、人間だったころは埋め込まれていたんだが、改造されてからはなくなっている。チップは生まれてすぐ心臓に埋め込まれ、取り外せば命を失うことになる。それなのに俺は生きている。どうしてかは解らないがおかげでこの仕事に役立つてくれている。

あの娘の場合は埋め込まれてはいるんだが、ロックのパターンが他とことなっているそうだ。何種類かあるロックのどれにも当てはま

らないらしい。しかも、外せはしたそうなんだが、中身が空。何の機能もないそうさ。身分証明、財布…全ての機能がない。これも前例がない。

どこまでも似ている。

遠くから車のライトが見えてきた。さあ、始まるぞ。今日の喜劇が…。

第四十話 立ち塞がる者

―ウツド・サーテン―

『代表、到着予定時刻は22..45になります。』

「ふん。分かった。」

全く、やっておれんわ。

私は代表取締役だぞ！なぜこんな旧式の車に乗らねばならんのだ。ふざけおって！

捕まれば全てがパアになることは分かっとる。足のつかん方法もこれぐらいしかないのな。だが、最近この方法も見破られつつあるではないか！人のビジネスを邪魔する奴がおる…。このことが一番腹立たしい。おかげでボディガードを増やさなならん。増やし過ぎたら目立つし…。あー！全く腹立たしい！

その時、突然車が止まった。

反動で体が前のめりになってしまった。

「な、何ごとだ！」

『こちら、トラ1。どうした、リュウ1。』

隣に座っとる、ゴツイ奴が無線で前の車と連絡を取っている。

―トラ1―

『こちら、リュウ1。何者かが道を塞いでいる。おそらく、ケルベロスだ。』

ケルベロス―来たか。ということはこの男が行う取引とやらは相当なヤマなのだろう。

「リュウ1〜4はここで奴を迎え撃て！あくまで時間稼ぎだ！命を粗末にするな？」

『了解した。ここで迎え撃つ。』

「車を出せ！」

こういった時の対処法も予め用意している。

道なら無数にある。遠回りにはなるが、時間稼ぎしている間にコースを代える。どうやってここを通ることを知ったのか分からないが、振りきればもう追ってこれまい。

―リュウ1―

代表を乗せた車は打ち合わせ通り引き返して行っただ。ここに残った我々の任務は時間稼ぎ…、なんざ控えめな。四対一なんだ。仕留めてやらあ。

全員、車から出て銃を向ける。奴はバイクからは降りているものの武器を構えも、戦う意識さえも見えない。死にたいのか？虐殺魔が！ふざけやがって。

「テメー……。死にたいなら、望みどおりにしてやるよ！ 撃て！」

引き金を引いた。引き金が折れそうになるほど力強く。

第四十一話 殺陣

バケモノめ…。

―リュウ1

銃の腕には自信があった。力み過ぎたのは認めるが、そんなことで狙いを狂わせはしねえ。そもそも四人同時に撃ってんだ。

銃声は何度も響いた。これでもか！と、言う程何度も。

だが、奴はあの体制のまま全く動かない。…しまった！

俺たちが気付くよりも一瞬早く、バイクの影から何かが飛び出してきた。

ホログラムだったんだ。あんまりにも精工なんで気付かなかった。移動用のやつじゃ、ここまでのムリなはず…。

考えてる場合じゃねえ。

奴は目にも止まらない速さで4に近寄り、一瞬で斬りさいた。

腹を真つ二つ。

勢いよく血が吹き出し、身体が崩れた。

我々が銃を向けると、身をひるがえし、仲間の血がこべりついたその刀で3の胸を貫き、いつの間に抜いたのか、左手に持ったシヨツ

トガンを俺と2に向け、躊躇なく引き金を引いた。一瞬早く気付いた俺は避けようと身体の向きを変えたその時、銃弾が俺たちを襲った。2はもろに受け、身体が粉々に吹っ飛んだ。俺は左腕、左足をやられた。

コンマ何秒前まで俺の一部だった物が、砂の城のように吹き飛ばされた。

「ぐおおおおああ!!」

叫ぶしか出来なかった。たった数秒で、地獄絵図に変わった。

奴は誰の返り血かなど、区別がつかない程血を浴びている。その血を気にもせずにこっちに近づいてくる。

「く……そ……っ。」

なんとか気力で銃を構え、的を定めようとするが、痛みで……。目が……意識が保てない。

そして、引き金から指が離れ、意識が切れた。

途切れる寸前に見たのは、冷たい鉄の顔に血を吸わせ、俺を見下している獣だった。

第四十二話 漆黒から

ートラ1

Uターンしさっきの道よりビルの二階分ほどの高さがある道路を進んでいた。

『お前の仲間大丈夫か？』

代表の声が震えている。ケルベロスの名は知っているんだろう。

「心配は要りません。優秀な仲間です。十分時間を稼いでくれるでしょう。」

本当はこんなことを言ってられない。連絡が来ないのだ。だが、そんなことを言えばこの男は今以上に取り乱すだろう。ただでさえ、触っただけで暴れだそうなんだ。これ以上、刺激を与えては…。

だが、時間は十分稼いでくれてはいるようだ。後ろから近づいてくる物はない。もしかしたらまだ戦っているだけなのかもしれない。

そう思った直後だった。

“ガシャンッ”

突然車の天井がへこみ、ガラスが割れた。

『な、なんだ！？は、早くなんとかしろ！』

言われなくとも！直ぐに車を止めさせ、車の外へと出た。車の上に

いる“物”を見てゾツとした。

人だ。しかも、左側半分が無くなっている。これは…リュウ1じゃないか。

「やってくれたな。全員、奴を探せ！」

代表を囲むように陣を組み、四方を見回す。少しでも早く奴を見つけないければここにいる人間全員が死ぬことになる。

周りは真っ暗だ。隣のもう一段高い道路の影に覆われ、黒い霧に包まれているかのように十メートル先でさえもハッキリ見えない。

自分の速くなっていく鼓動のみが聞こえる。

一瞬、チカッと光った。

“ブアッ”

見えた瞬間に引き金を引いた。それを契機に他の三人も一斉に引き金を引く。

数発撃ったところで止める。

鳴り響いた銃声が止む。

『や…やったのか？』

私の後ろで頭を鞆で隠している代表がやはり震えながら言った。

“ カンッ ”

言い切ったのとはほぼ同時に後ろから何かがぶつかった音がした。

第四十三話 一人…また一人

―トラ1

さっきの音は後ろから聞こえた。何の音なんだ？そう思っていた矢先、足に何かが当たった感覚がした。

「ん……！」

自分の足元位は見える。ぼんやりとしているが、レモンのような形でそれより一回り小さい。緑色のそれは私の足にぶつかって止まった。

俺はそれを知っている。

すぐさま後ろの代表をそれから遠ざけようと、代表に飛び付く。

だが少し遅かった。

“ドカーン”

それ―手榴弾―が爆発した。代表を突き飛ばしたおかげで、代表は無傷。だが、俺は右脚をやられた。皮膚は焼けただれ、激痛が走る。歩くどころか、立ち上がることもさえ不可能だ。

代表は恐怖で顔がひきつっている。足が震えているんだろう。立ち上がれそうにない。

私の部隊は“たとえリーダーが倒れたとしても護衛という任務に忠実にいろ”と教え込んだので、代表を囲んで陣を組んでいる。

だが、所詮人はそこまで冷静にいられない。囲んだ三人は気配を感じた所に撃ち始めた。銃声が虚しく響くだけで当たっているのかさえわからない。

“カチッ、カチッ”

三人とも弾を撃ちつくし、弾を入れ替えようとしたとき、左側から突然何かが飛び出してきた。あまりにも速く、次に目に映った光景は2が真っ二つに切り裂かれ、血が飛び散っていた。そして、飛び出してきた勢いのまま4に近づき、胸を突き刺した。

『く、くそっーーーー！』

4の右手にいた3はその影から間合いを開けようと、反対に飛びのきながら銃を構える。しかし、その動きは完全に読まれ、飛びのくのとほぼ同時に一度勢いを殺した影が、再び獣のようなスピードで追いかけて行き、そして…3の体を縦に斬り裂き、紅い血を噴き立たせた。

『ひ、ひうあああ！！！！』

その光景を真の当たりにして、代表が逃げ出した。

代表を追いかけようと身体の向きを変えたその時、私は奴に銃弾を一発くれてやった。

第四十四話 チェックメイト

本当は何発も撃った。だが、痛みで手が震え、狙いがさだまらない。かろうじて当たったのが奴の左肩に一発。

当たる前に何発も外したのに奴は避けようとしなかった。

私が撃ち尽くすと、こちらを向き、私の方に近づいてくる。

急いで弾の入れ替えをしようとしても手が震え、上手くない。

“コツツ、コツツ”

奴はさっきまでの速さとうって変わって、一步、一步ゆっくりと近づいてくる。

もう少し…よし。

冷静さをなんとか保ちながら、弾を入れ替え、銃を構える。奴はもう目の前にまで来ていた。

“シュッ”

構えた瞬間、私の右手が銃と共に消えた。奴はまたあの速さで、私の手首を切った。速すぎて刀が見えない。

私は声にならない悲鳴をあげた。切口を押さえ、体を丸める。痛い…。私はここで死ぬのか？

『…ここで…死な…』

奴が何か言った。上手く聞き取れなかった。

刀を私の方へと向ける。冷たい光を放つ刃が私を映し出し、そこに仲間たちの血が流れてくる。振りかざそうとしたその時だった。

“ブロロロロ…”

これはエンジン音か？そんな音が聞こえた途端、振り上げた刀を構え直し、音のする方へと走り去った。

―ウッド・サーテン

じよ、冗談じゃない！こんなところで死ぬるかあ！黒服の男がボディーガードたちに気を取られている間に逃げてやる。

車に乗り、エンジンをかける。鍵はささったままだから、回すだけですんだ。エンジンはすぐかかった。

「よし！じゃあ、さっさと…」

アクセルを踏んで車をだそうとした時だ。

“ドン！”

突然、車全体が揺れた。逃げ出すなんて、不可能だった。奴が車に飛び乗った。左足の銃を取り出し、フロントガラス越しに銃を構える。は、早く車を出さないと…、そう思い、アクセルを全力で踏んだ。

だが、焦る気持ちと裏腹、車はなんの反応もしない。

「な、なんでだよ。早く動いてくれよ。」

もう一度踏み込もうとすると、

“コッソ”

黒服の男が銃をガラスに当てた。撃つ気だ。

「ま、待て。殺さないでくれ。金ならある。貴様は雇われてるんだろ？雇主よりも、もっと出してやるから。」

奴は何も返事をしない。だが、目が：殺気が答えを物語ってやがる。

NOだ。

撃たれる。とっさに車から出ようとドアに手をかけた瞬間、

“バーン”

『任務…完了。』

第四十五話 治療の合間に

ふと気がつく、私はベットにもたれていた。片付けてた時に疲れて寝ちゃったみたい。もう日付が変わってた。あちゃー。まだ全然片付いてないよ。

とりあえず、部屋全体を見渡そうとすると、私にかかっていた毛布が落ちた。落ちるまで気付かなかったの。無意識に自分でかけたのか…それとも、…。

どっちでもいいや。とにかく、もう遅いから、簡単にまとめて置いておいて、片付けの続きは明日にしようと思って片付けてる最中だった。

“チン”

確か…エレベータが着いた時の音。誰が上がってきたんだろ。

気になったけど、眠気が勝っちゃったから、そのまま片付けを続けた。だけど、

“ドサツ”

何かが倒れる音―ドアの向こう側からだからエレベータの方から聞こえたから、何事！って思ってた。ドアを開けちゃった。

エレベータの前に行ったら、見たことある光景が映った。

狼さんが倒れていたの。それも初めて会った時とほとんど同じ形で

…。ちょっと違ってたけどね。

またケガをしてたの。今度は右の肩に。前と違って今回はすぐに起き上がった。

「大丈夫？」

『大した事ない。』

肩に穴空いてる人が何言ってるのよ。狼さんはケガばかりするんだから。ほら、足もフラフラじゃない。

「また診てあげるよ。」

そしたら、やっと狼さんとお話できるしね。もう眠気も吹っ飛んじやってた。

『…いや、…』

「人の好意をムダにする気？」

トーイッシュのお姉さんが使ってた言葉。こう言えば大抵相手は言うことを聞くんだって。

『…わ、わかった。頼む。』

さっすがナーシャさん！

…とりあえず、狼さんの部屋に行った。治療道具はそれなりにあったからあの時よりはまともな治療が出来るって自信があった。

まず、キズ口をしっかり見たいから上全部脱いでもらった。今さらだけど、狼さんって大きいね。両手伸ばしてなんとか肩幅と同じくらい…ちよつと大きすぎるかな…でも、それくらいに見えるよ。あと、身体中キズ後だらけ。いろんなところにいろんなキズがあるの。一体、どこからもらってくるんだろうね。

「キズだらけなんだね。」

まあ、気になっちゃうよね？ストレートに訊いてみた。

『まあな。』

…そんな答え求めてない。もっとストレートな方がいいのかな？

「なんでこんなにキズだらけなの？」

右肩のキズ口を縫いながら訊いてみた。麻酔いらないんだって。痛くないのかな？というか毛が…フサフサだから縫いにくい…。

『そうゆう仕事なんだ。』

「仕事？そんなに危ないの？」

『…いつか見せてやる。』

今は内緒なの？教えてくれたっていいのに。そんな危ない仕事見たくないなあ。

静かに治療を続けた。

第四十六話 差す光

あの時―側近の奴が撃ってきた時―十分避けた。だが、身体は避けようとはしなかった。心の何処かに：命を失うことを望んでいたのかもしれない。

自分の手を血に染めることを―。

生きていくことを―。

この道に落ちる時の決意は本物だった。だが、この復讐の被害者は自分自身のみ。所詮、自分の人生がねじまがっただけだ。他人の火を消す罪悪感はいえられなかったのかもしれない。

そう考えると、余計この娘に殺し屋であるということを話せそうにない。自分を救った奴がそんな者であるなど、知りたくもないだろう。見せる、と言ったが、そんな気はさらさらない。

今となってはこの娘は俺とコインの表と裏ほどの違いがあるだろう。外に出て見たこともないものに囲まれ生きていると実感している娘。心が死にかけている俺。

「外は楽しかったか？」

治療の音しかしなくなっていた俺の部屋で俺から話しかけた。考えでも暗くなるだけだ。生きる道は今さら変えられない。

『うん！あのね、人がうじゃうじゃいたんだ。それでね…』

彼女も話したいのを我慢していたのかもしれない。栓を抜いたよう

にとめどなく言葉が出てくる。

訊いておいてなんだが、話の内容はほとんど覚えていない。ただ、彼女の目の眩しさだけは頭にはつきりと残っている。

『よし！出来たよ。上出来でしょ？』

口だけでなく、ちゃんと手も動いていたようだ。しっかりと包帯も巻かれている。これだけできるなら今度から彼女に頼むか…。

「ああ、ありがとう。」

報告だけしないといけないからな。コンピュータールームに行こうと立ち上がりながら言った。

『そうそう！狼さんは笑った方がいいよ。』

無意識に微笑んでいたのか。そんなつもりは微塵もなかったのに…。もしかしたら、彼女は気付いていたのかもしれない。だからこそ、俺が聞いていなくても明るく話し続けてくれたのかもしれない。

『…だから、シンだ。』

当たり前の答えしか言えなかった。考え過ぎだったかもしれない。それでも表情に出さないよう気をつけたが、心の中では何かが揺れていた。何の感情か判らない。久しぶりの感情で判らない。それに戸惑っていた。

心にかかっていた霧が少し…晴れたような気がした。

第四十七話 夜が明けて

「つたく、こんな時間に出ねえとまらないなんて…。」

時計は六時を少し回ったところ。朝っぱらからスーツ着させるんざ最悪だ。ネクタイ曲がってねーか？

つーのも、またケルベロスが動いたらしい。いろいろ調べたがケルベロスが動くとすれば間に一週間は空く。しかも、この前の傷が残ってるはずだ。そんなんで動くか？

しかも、お偉いさんだけじゃねえ。ガードも付いてた。うちの会社ほどじゃないが、それなりに力のあるところのトップグループに入ってるメンツだ。それをあんな体で仕留めるとは…。恐れ入ったね。

警察じゃないもんだから、現場検証には立ち会えねえが奴の首には金かかってるから警察もある程度情報を流している。だから被害者とかも分かるんだがな。

あいつらは今寝てる。昨日遅かったから、朝も会えなかったら怒るだろうなあ。悪い。

起こさないよう下に下りると、キッチンからいい匂いがしてくる。

レインだ。朝早く起きてみんなに弁当を作ってやってるんだ。レインはしっかりしているからつい頼っちゃう。家事や食事、下の子連中の世話とか…。それでも成績は学年トップ。毎晩遅くまで頑張ってるのを知ってる。きっと友達とかと遊びたいとか思ってるはずだ。…俺がしっかりしないといけないな。

『おはよ。もう出るの?』

俺に気付いたレインがにっこりと笑いながら言った。

「ああ。行ってくるわ。」

俺も笑って言った。ただ、それだけじゃいらなかった。

「レイン…。」

『何?』

“ポン”

レインの頭に手を乗せた。よしよし、と小さい子を褒めるように…。

「ありがとうな。…」

ちいーと恥ずかしくなって、手を離れた。

「じゃあ、行ってくるわ!」

俺が大黒柱としてみんなを引っ張っていかねえといけねえのに、レインやみんなに頼りっぱなしだな。働くだけじゃだめなんだ。俺がただ一人の親なんだからな。

まだ人もほとんどいない街の中を独り歩いて行った。

現場までは結構距離があった。車で二十分くらいか。着いたときに

は警察は調べ終えたんだろうな。警察の車両は数台だけで、その周りには―たぶん賞金稼ぎだろうな―何台か普通車が止まっている。賞金稼ぎってのはその名の通り警察が出している賞金首を捕らえる連中だ。団体が少なく個人や数人のグループってのが多い。賞金首の中にはかなり少数だが殺してもいいと付けられている奴がいる。捕まえるよか、命を奪ったほうが早いからなあ。しかも額が相当な場合ばかりだ。だから、どんな凶悪犯だとしても、そいつらを狙うのが多い。ケルベロスなんてまさにそれだな。

俺たちはどっちかってつと誘拐犯として追ってる。だから生かして捕まえないと場所を吐かせられねえ。だが警察は何十人と殺してきた殺人犯を野放しになんか出来ねえからな。そもそも生かしてるはずないって考えだ。だから、殺してでも止めさせたいから、一生遊んで暮らせる位の額を掛けている。

絶対に遅れをとったらダメだ。

第四十八話 惨状

『先輩。おはようございます。』

現場に着いた俺をバンが迎えた。こいつも眠たそうな顔してるなあ。人のこと言えねえから口には出さないでおこう。

「どうだ？」

『ええ、ターゲットはウッド・サーテン。アマデトラと言う中規模の食品輸入会社の代表取締役を勤めてました。ボディーガードが時間稼ぎしている間に逃げようとしたところを撃たれたみたいッス。頭を貫通して即死。ボディーガードは一名が意識不明の重体。残り四名は…全員悲惨な死に方ッス。さらに離れたところ…大体五百m後方に当たるんスけど、もう一台同型車があつてそこにも犠牲者が三名。同じく悲惨な姿に…。二台で敵をまく作戦だったようッスけど、ケルベロスには通用しなかったようッス。』

昨日肩と片足をやられた奴が出来ることなのか？つっても、こんなこと出来るのはケルベロスしかない。あいつは一体何者なんだ？

現場にはもう死体は片付けられていて、テープで型どった人型と乾いて道路の色とあんまり変わらなくなった血、あと、爆弾でも使ったのかアスファルトにひびがはいっている位しか残っていない。

「家族だっていただろうに…。」

俺は手を思いつき握りしめていた。

奴の犯行だったのはわかった。だが、肝心の居場所についての情報はない。ターゲットの関連性もねえな。重役ばかりだと思ってる、芸能人も手にかたりする。裏で何かしてるって判ってる奴もいれば、なぜ狙われたのか判らないような奴まで…。だから、奴を待ち伏せて捕らえるってことが出来ねえ。俺たちが見れるのは全て終わった惨状だけっつー訳だ。

そりゃ、こんなこと言いたくなんかねえよ。だけどよ…。くそ…。

自分のふがいなさど、奴への怒りをどこにも発散できず、自分の中に溜め込むしかなかった。

警察からの情報を待つため、一旦本部へと向かった。

デスクに上がるエレベーターの中であの口うるさいに会った。

『あんた、安静にしときなさいって言ったのに、何出てきてんの！』

サロナ…。てめーは俺の保護者かってーの。

「うるせーよ。このくらいなんでもないっつーの！」

怪我気にする暇なんてねえよ。アイツ捕まえねえといけねんだからな。

『そうッスよ、先輩。ここんとこ毎日遅くまで帰らないんスから、たまにはレインちゃん達に楽させてあげてくださいよ。』

バン、お前まで…。

「だがよ…。」

『大丈夫ッス。こっちは俺に任せて下さいッス。何か重大なことが分かったら、報告するッスから！まあ、後輩を信用できないんでしたら残って頂きたいッスけどね。』

…全く。

「なかなかいい口持ってんじゃないかよ！…わかったよ。ありがとう帰らせてもらうよ。」

悪いな、バン。この礼はいつかちゃんとすっからよ。

第四十九話 心の洗濯―前編

まあ、帰るつつつてもここまで着たからな。デスクまで行って仕事用のメールチェックだけはしといた。ああ、それとこれまでケルベロスが起こしたと思われる事件をまとめた資料が出来てたんで持って帰ることにした。こうして見ると結構な数になるんだな。ここまであってわかんないなんてな…。

後はバンに任せて俺は早々に部屋を出た。家に着いたのが…十二時前だったな。昼飯は昨日の残りもんでさっさと済ませて、さあ！これからだ。みんなにお返ししてやらないとな。

家の中は分担して定期的に掃除してるから、そうゆうところより、いつもやらないところしねえとな。例えば…庭の手入れとかな。

芝生なんて二週間もほったらかしにしてたら案外伸びてたりするなあ。いやいや関心してる場合じゃねえや。

倉庫から芝刈り機引っ張り出して、電源をいれる。古いもんだからちょっとうるせーけど、切れ味は文句なし。ただ、フランはあまり気に入ってないみたいだな。電源つけるといつも小屋の中に逃げこんでる。今日もそうだ。その様子がまたなんか面白いんだがな。

一通りかけ終えたら、次はフランの散歩と買い物いっぺんにしちまおう。

首輪に紐をつけて鎖を外す。その間フランずっと尻尾振ってやんの。喜んでもらえて光栄だよ。

街の建物は外観が悪くないようあんまし高いものはない。あつて三階ってとこだな。だからデパートみたいなのはなくて、専門店が中央に固まってる。商店街って感じだな。

肉屋に八百屋に：いくつか店回って安くていいもんを探し回った。あんまり高えもん買うとレインに怒られるからな。行く先々で声かけられたなあ。『よう！今日は綺麗な若妻さんじゃないのかい？』とか言いやがる。うるせえっての。買っていかねえぞ！

買い物が終わったら、気付けばもう三時を回っていた。そろそろ学校が終わるなあ。せっかくだし迎えに行くか。

俺たちの家は街の中央から見て北東にあるんだが、学校は中央から見て南東。家から歩いて二十分かかるかどうかって距離だ。小、中、高校が固まってるから迎えにきやすい。学校に着いたら、授業が終わりみんな下校して行くところだった。小さい学年はもう少し早く終わるんだが、ウチは全員一緒に帰るから、校舎で遊んで時間を潰して、最後のレインが来るのを待ってる。部活は吹奏楽部に入ってるんだがな。俺がいないときは抜けてるみたいだ。フルートを使ってる。よくみんなが寝静まった後、外でみんなを起こさないよう吹いてるがみんな知ってる。

『あ！ジェイクだ！』

聞き慣れた声が遠くから聞こえた。グラランドの方だな。声の方を振り向くとガンとスーエンが他の連中とサッカーしてんのが見えた。あの二人は最近中学に入ってサッカー部に入った。運動部だから帰りは別になっちまったな。遅くなった日は皿洗いの当番になる。

『ジェイクー！フランー！』

今度は校舎の方からか。ファムだな。見ると、カイも一緒だ。他に女の子が二人一緒にいたが、ファムは二人に何か話した後、カイを連れてこっちに向かって来た。ファムは今小三。すぐ向こうにある保育園に通ってるカイを迎えに行ってくれてる。いいお姉さんだな。

『昨日は遅かったのに。』

『今日は早いんだね。』

教室から俺の姿が見えたんだろうな。エルンとパンツが校舎の方から歩いてきた。ちよつと息が荒いところを見ると、走って下りてきたんだろうな。

「悪かったよ。で、後はレインか。」

『もう来てるわよ。』

突然、真後ろから声がした。まあ、気付いてたんだけどな。振り返るとそこにはレインが立っていた。

第五十話 心の洗濯―後編

「今日は俺がいるからよ。ゆっくりしていてもいいぞ。」

『そう。よかった。久しぶりに行ってこよっかな?』

『行っておいでよ、お姉ちゃん。みんなでするから大丈夫だよ。』

ファムがレインの背を押してやってる。ファムは俺よりも先にレインに心を開いた位だ。そうとう気に入ってるんだろうな。

『わかった。じゃあ、ファム、みんなをよろしくね。』

『うん!』

そう言うと、校舎の方へと駆け出して行った。レインも嬉しそうだったが、ファムは帰る間ずっと笑っている程喜んでいた。まあ、自分の一番好きな人に認められるんだから、嬉しいか。

さて…と。家に戻ってきた。道中は最近の出来事を山のように聞かされた。ケンカで窓ガラス割った奴がいたとか、こんな芸人が最近流行ってるとか。半分くらいしか覚えてねえ…。でも、四人ともスッゲエ笑顔を見せてくれた。心の奥にある苛立ちを和らげてくれる。温かいなあ、やっぱり。

「それじゃあ、取り掛かるぞ!」

フランを鎖に繋いで、家の中に戻り、俺はみんなに言った。エルンとバンツ、俺で洗濯物を取り込み、ファムはカイのお守りだ。取り込みに行こうとすると、ファムが服の端を引っ張ってきた。どうしたんだ?

『私も洗濯物手伝う。』

いつもはそんな事言わないんだが……。多分、レインだな。任せられたから張り切ってたんだ。

「でもなあ……。カイはどうするんだよ。」

でも……。と顔をうつ向かせたファムを見かねたのか、エルンが、

『仕方ないわね。ファム、代わって上げるわよ。』

と、言った。気のせいか？なんか自慢気に見える。態度がデカイのはいつものことなんだがな。……。もしかして、一番年上だからお姉さん気分を堪能してんのか？

俺とパンツ、ファムで洗濯物を取り込み、畳む。普段俺がいる時はこんな感じに分担してやってるんだぜ？仕事は不定期だし、長くかかることだって少なくない。その間こいつらしいからな。分擔しないと終わらない。

畳んでしまった後、みんなに宿題とかさせ、俺は晩飯の準備を始めた。

出来るかって？そんな野暮なこと訊くなよ。レインに料理教えたのは俺なんだぜ？まあ、今はもう抜かれたけどな……。

何作ったのかはあいつらが戻ってきてからだな。

時計の針が七時半を回るかってくらいか。飯の支度ができ、みんな席について残りを待っていた。

『遅いね…。』

パンツが不安そうに声を出した。部活が長引いてんのかな？仕方ないな。

「先に食べるか。」

そう言った矢先だった。ベルが鳴った。誰か帰って来た。席について待っててもいいのに、全員出迎えに行った。そうゆう俺もいったんだけどな。玄関まで走って行くあいづらを追いかける。歩幅が全然違うから歩いても追いつく。

玄関にいたのはレインだった。

『おかえり！』

みんな口を揃えてレインに言う。

『ただいま。ファム、みんなしっかりやってた？』

『うん！私、しっかり見てたから、大丈夫！』

よしよし、とファムの頭に手を乗せる。ファムは最高の笑顔をしていた。それから、ファムたちに急かされレインが上がった時だった。

『ギリギリセーフ！』

バン、とドアを開けて入って来たのはガンとスーエンの二人だ。全力で帰ってきたんだな。汚えジャージのままだし、息も切れてる。何がセーフなんだかわからねえよ。レインも帰ってきてるし…。

飯食う前に二人には風呂に入らせ、先に食べることにした。

『すごい料理…ねえ。』

小声でレインが言ってるのが聞こえた。

今日俺が作ったのはハンバーグだ。あと、ポテトサラダとか細々したものもあるが、メインはそれだな。

他のみんなは喜んでいるけど、レインは知ってたんだろうな。ハンバーグって案外簡単なのを。まあ、ちょっと工夫はしたけど、いいじゃないか。定番だけどうまいんだから。

『いただきます。』

手を揃えてみんなで声を揃えて言う。

『おいしい!』

なんて言って貰えるとやっぱり嬉しいねえ。

『中にチーズが入ってる。』

そう!これが工夫。つってもこれだけなんだけどな。

『なんだよ。もう食ってんのか？スーエン、俺たちも食おうぜ。』

シャワー浴びてきた二人が戻ってきた。席についた瞬間、いただきます、つって早速食いだした。早いなあ。

「どうだ、レイン？」

隣の席に座っているレインに尋ねた。

『七十点かな。』

「ハハ、厳しいなあ。」

『皿洗いと掃除してくれたら百点にしてあげる。』

うまいこと言うな。百点欲しいからする羽目になるんだろうけど。

今日一日は、俺にとって大きいもんになると思う。またこんな風に楽しくできるのはいつになるかわからない。また負担かけることになるかもしれない。ごめん。そして、ありがとう。

第五十一話 三の舞

終わった。疲れた。

今日は一日働きっぱなしだったの。昨日は結局、狼さんの治療して寝ちゃったから。部屋の片付けしないといけないし、家事の方だつてあるから大変だった。全然掃除してないみたいでホコリとか溜まり放題。頑張って全部掃除したよ。ゴハンも作ってあげないといけないし、スゴく疲れたよ。

トーイツシュはゴハンの時だけ出てきたよ。でも、その後どこか行っちゃった。お仕事かな？

ただ、狼さんは一度も見なかったの。昨日のケガが痛いのかな？部屋の前を通るとうなされてるみたい。大丈夫かな？

とりあえず、部屋をキレイに出来たんだし、今日はもう寝よつと。その前にお風呂入る。

“ガバツ”

『ハツ：ハツ：。』

嫌な夢だ。ここのところよく見る。

窓を見るといつもの冷たい月が輝いている。夜か……。時計を見ると、十時になるかといったところだ。身体を起こし、ベットに座るようになった。傷はもうなんともない。身体の疲れもとれている。ただ、

身体が重く感じる。そういえば、飯を食ってないな。丸一日何も口にしていないんだ。当然か。何かあるだろう。部屋を出て食堂に行くことにした。

「あつ。」

：思いつきり驚いちゃった。だって今日はもう会えないと思ってたから。

「ケガは大丈夫？」

『ああ、お陰でな。』

ホントかな？毛がいつぱいで他はよく分かんなかったけど、黒の：袖のない服って：タンクトップ？が濡れてる。うなされてたもん。

『悪いが…。』

？。どうしたのかな？

『何か食い物だしてくれないか？』

そっか。全然ゴハン食べてないんだ。

「わかった。ちょうど狼さんの分とってるから、それでいい？」

『ああ、助かる。』

ホントに大丈夫かな？狼さんって呼ばれてるのに全然怒らないよ。

食堂まで行き、なんとか席につく。少しふらつく。流石に連続で受けるのはこたえるな。腹が減ってるのもあるのかもな。

夜の残りを暖めてだしてあげた。そしたら、ガー！っと食べちゃった。早いよ。詰まっちゃうよ。あつ、と言う間に食べきっちゃった。

『ありがとう。うまかった。』

「え？…あ、うん。」

…心配して損した。呆氣にとられた、ってこうゆうの？返事もちゃんと返せなかったし。

突然だった。

“ リリリリリッ ”

あの音だ。不吉な音。今度は仕事はなしの労いだけならいいんだが。嫌なことは続くものだ。

「悪い。…後は任せる。」

彼女にそう告げ、部屋を出た。

第五十二話 発覚

悪い事を考えると大概当たるものだ。

コンピュータールームにると、モニターには雇主が既に映っていた。

『やあ。お疲れさん。今日はゆっくり休めたかね?』

「…そんな社交辞令はいいから、本題に入ってくれ。」

勿体ぶらずさっさと話してくれた方が楽だ。

『そうだな。前回の件はよくやってくれた。報酬はいつものように送っておく。あと、もう一つ。』

悪い勘が当たりそうだな。

『また新たに一件頼みたい。データはもう既に送ってある。』

「…了解した。」

『それでは健闘を祈る。』

これで今週に入って三件目か…。今までと比べてずいぶん間が詰まってるな。相棒に知らせるか…。今日は偽装用のマンションに戻ってる日だな。メールを送ろう。

前に言った埋め込まれたチップにはメール機能もついている。胸に送信用のバッチを付けければ、専用の機械で読んだり書いたり出来る。

なんでもチップ自体にメールが送られるから他人に読まれる可能性が低くなるそうだ。

俺にはチップが付いていないのでこの方法が使えない。かわりにコンピュータで出来るようにしてくれてるんで問題ない。

どうゆう原理がよく判らないんだが、向こうからでもこのコンピュータを操作出来るらしい。相棒が出ているときはいつもこの方法で解読してもらっている。

本文を書き終え、送ろうとした時だ。

“ リリリリリッ ”

また電話だ。まさかとは思うが…。

『 やっほおう。俺が居なくて寂しかったあ？ 』

やっぱりか…。

「電話回線を使っただけからここへの連絡はお前自身に目をつけられる可能性があるからやめておこう、と言ったのはお前だろ。何してる。」

一度でも目をつけられるとどこまでも見張られると言うのに…。

『 仕事のデータ解析しなきゃなんないんでしょう？ 気にしちゃダメだよお。 』

はあ…コイツは。

「それで？終わったのか？」

『当たり前じゃん！今から送るよお。…出た？今回のターゲットはターシャ・フイーメル。最近売れ出した歌手さんだよお。“盲目の天使”って呼ばれてて、目が見えないんだ。明日の夜コンサートがあるからその中で仕留めて欲しいそうだよ。』

今度は歌手か…。他の二件と比べたらずいぶん感じが変わるな。

「わかった。これ以上の会話は不要だな。回線を切るぞ。」

『へーい。』

新しい仕事か…。一日空いてるのがせめてもの救いか。ふう…、と溜め息をついて椅子に座り、背もたれに体を預けた。

『電話終わったの？』

「ああ、今切ったところ…。」

直ぐに気づけなかった。あってはならないことが起こっているのに。

声のする方を振り返ると、そこには彼女…セフィリアがいた。

第五十三話 無知の罪

『いつからいた？』

狼さんが急に恐い顔をして訊いてきた。

「え…さ、さっきベルがなった時ぐらいから…。」

何を怒ってるのか分からない。でも、本当に恐くて、オドオドしちゃった。

『何故入ってきた。』

恐い顔のまま、また訊いてきた。

「お、お皿洗うの終わったからお風呂に行こうと思って、この部屋の前に来たらベルがなってトーイッシュの声が聞こえてきたから…帰ってきたのかな？って思ってた…。」

はあ…。つまり仕事の内容は全て聞かれたのか。間の悪い時に…。

だが、これはいい機会なんじゃないのか？共に暮らしてるんだ。いずれ知られる事だろう。

ただ、早くなっちゃったただけだ。それにどんな反応をされても出て行かせる訳にはいかない。

彼女が俺たちを見る目が変わってしまうだけだ。

『…仕方ない。聞かれたからには話してやる。俺たちの事を。』

恐い顔をやめて、いつもの顔に戻って話し出してくれた。ほっとしたよお。

後ろにあったイスを近づけて座った。

「以前、俺の仕事が何なのか、って訊いてきたよな。」

「うん。教えてくれるの？」

あんなにはぐらかしてたのに、結構早かったね。

『ああ…。その前に一つ言っておく。これを聞いたとしてもこれからの生活は変わらない。…いいか？』

今さらもったいぶっちゃうなんて、早く教えてよ。

「大丈夫だよ。それより、早く！」

俺は目を閉じ、ほんの少しだけ間をあけた。伝えなければならないことをまとめた。この娘が俺のような存在を知らないかもしれないからな。

目を再び開け、口を開いた。

「俺は人の命を奪うことを生業としている、殺し屋だ。犯罪である殺しをすることで、金をもらって生きている。俺は…悪魔なんだよ。」

悪魔。最も邪悪な印象を受けるものを、と思い、最後に付け足した。だが、事実、世界が：そして自分自身がまさにそう思っているのだ。ここまで言えば彼女も解るだろう。そして、俺を恐れるんだだろう。俺という存在を一字一句伝えることが、俺の責任だ。この道を選んだ…。

『へえー。だから、あんなにキズだらけなんだ。』

俺が予想していた言葉とあまりにもかけ離れた返事に、目を疑った。彼女の顔は驚愕の表情を示すどころか、笑みをうかべている。まるでなぞなぞの答えがわかって満足している子どものように。

「俺の話を聞いていたのか？」

『うん。殺し屋でしょ。地位の高い人を狙ったりする。歴史とかに出て来たよ。人を殺す人。』

彼女は平然と答えた。：もしや、人の死というものを知らないのかもしれない。

『それに、人間って戦争とかでみんな殺し合ってるんだし、気にしないよ。』

「なんだって？」

この言葉には本当に驚かされた。それと同時に心の底から怒りがこみ上げてきた。俺が苦しんで苦しんで、それでも消えない苦しみを味わうほど、重みのある命。それほど重い命を軽くあしらう。許せ

なかった。認められなかった。

『ふざけるなよ。』

声押し殺して狼さんが睨むように言ってきた。ほ、ホントの事言っただけなのに…。

『…わかった。お前に俺の仕事をさせてやる。いいな。』

「う、うん。」

そう返事をするとうちから追い出された。なんで？間違った？人はいつか死んじゃうんだもん。殺されたって早くなるだけじゃない。

お月様に訊いてみたけど、黙ったまま私の方を向いてた。

第五十四話　いつもの朝

“ジリリリリッ”

“カチッ”

朝か。起きねえとな。

昨日はあれから大変だったな。たまってた話をみんなから一斉に聞かされるし、遊んでなかったからいろいろやったし。その上、あいつらなかなか寝ないしよ。だけど、大変だとは思ってたが疲れは感じなかったな。逆に疲れが吹き飛んだくらいだ。

シャワーを浴びに下りて、バスルームに向かった。目覚ませたいからな。

カーテンを閉め、スイッチを押すと少し熱目の湯が降ってきた。

今日からまた奴を捜すことになる。人殺し。早くアイツを見つけて、妹さんを助けねえとな。でないと、こうゆう日を長くもってやれない。

シャワーを止め、部屋に戻り、いつものスーツを身につける。身支度ができたら、朝飯だな。下りてリビングの方へと向かう。テーブルにはすでにバターを塗りたくったパンを食っているスーエンと学校に行く支度をしているレイン、そして、レインから後を任されたエルンがそこにいた。

『おはよ。』

「おはよ。」

誰からとなく声をかけ、それに返事を返した。

「レインとスーエンは朝練か？」

『そう。私はもう行くね。』

そう言って玄関の方へと向かうレイン。

『俺も行くか。』

最後の欠片を口に収め、テーブルの下にあるカバンを肩から下げ、食器を流しに浸けるスーエン。

「ガンはどうしたんだ？もう行ったのか？」

アイツもサッカー部だろ？

『蹴っても起きないなら仕方ない。』

ハハハ。スーエンらしいな。

『はい、コーヒー。ブラックだったわよね！』

コーヒーをいれてくれたエルン。

「おお、ありがとな。」

俺もゆっくりしてられないし、さっさと食って行くか。

丁度、食べ終わったところに、パンツが起きてきた。

『おはよう、ジェイク、お姉ちゃん。』

エルンとパンツは毎朝交代しながらレインのバトンを受け取っている。今日はエルンの番だったんだな。

『やべー！先輩に殺されるー！』

ドタドタと廊下を走ってくるガン。朝から騒がしいな。パンを口に加えてあとはスルー。

『いっぺきまーぷ。（いってきまーす。）』

言えてねえよ。ガンがスルーした分はパンツに任せという俺も行くか。

『いってらっしゃい。』

カバンを持って行こうと立ち上がった時だった。今起きてきたファムが後ろからそう言ってきた。だから、俺も頭だけ振り返って、

「おう。行ってくる。」

そう返して、家を出た。

第五十五話 来客

『それで…ハッ…昨日は…ハッ…孝行はできましたッスか？』

「ああ。しっかりやれたよ。…ハッ…悪いな、氣い使わせて。」

ボディーガードの会社だからな。本部にはこういった施設もあるんだ。トレーニングルーム。動かないで勘が鈍って殺られるなんて、話になんねえからな。いつまでもサボってばっかいられねえよ。

一通りすませたら、シャワーを浴びて、ジャージからスーツに戻った。

デスクに戻ったのは十時半ってところだったか。

「昨日はどうだった？なんか情報は入ったか？」

俺は席につき、バンに昨日の様子を訊いた。

『ダメッス…昨日報告に入った事件の中でケルベロスがやったと思われるものはなかったッス。でも、昨日の事件の被害者が意識を取り戻したそうッス。もしかしたら、奴について話が訊けるかもしれないッスね。』

回復したのか。そりゃよかった。傷が残ったとしても生きているほうがいい。それに何か手掛かりが訊けるといいんだがな。

「なら、そいつのと——」

『ジェイク・アーベン。お客様がお越しです。接客室の方までお越しください。』

人が話してんのに、挟むなよな。アナウンスだからって。

『何スカね？…先輩、行ってきてください。その間に車まわしときますね。』

「ああ、頼む。」

一体誰だ？

接客室は二、三階に何室かある。どの部屋かはチップにメールくるから、それで分かる仕組みだ。安全のための工夫ってやつ。それにアナウンスで部屋番号までいうと長ったらしいってボスが言ってたな。…どっちがホントなんだか。

メールだと208号室つつってたな。トレーニングがてら階段で行くっていう手もあるが、汗だくで客の前に行くのもマズイか…、と踏み止まり、エレベーターで下りることにした。

二階。ウチは一階～五階まで部外者が入ることができる。それ以上は情報が漏れる恐れがあるからな。接客室も下の方の階にあるっつゝ訳だ。エレベーターの扉が開き、208号室へ向かう。どの階とも同じ、青が基調のフロアだ。まあ、部屋の配置とかは違ってたりするが…。

降りて、左へと進む。211…210…209…丁度、角にあるのが208号室だ。さあて、中には誰がいらっしゃるんでしょうかね？

“コンコン”

『失礼します。』

入りゃわかるか。ドアをノックし、中へと入って行った。部屋に入ると窓際に立っている男が一人と、ソファに座ってる女が一人いた。スーツ姿、がたいのしっかりした肌の黒い男―黒人か。俺と同じ匂いにする。客はもう一人の方だな。

部屋の中央にある接待用のソファ―、扉側に座っているから顔が見えないが、女性の様だ。

俺が入ったのを見るとボディ―ガードがその女性に耳うちし、手をとって立ち上がった。

そして、その人は俺の方を振り向き口を開いた。懐かしい声だった。

『久しぶり。また会えたね。』

第五十六話 久しぶりに

「そ、その声…ターシェか？」

『覚えていてくれた？ジェイク。』

わかりやすいくらいに驚いた。しゃーねーよな。ガキの頃以来なんだから。何年ぶりだ？二桁はいつてるよな。

『声かっこよくなったね。きっと見た目もかっこいいんだろうね。』

そうだ。ターシェは目が見えないんだ。生まれつき全く光が見えないんだ。

にしても、ずいぶん変わったな。もちろん、いい意味でだ。美人だぞ。髪は紺で床につきそうなくらい長い。顔も色白で瞳はエメラルド、小顔で少し幼い感じを受ける。童顔。背は高い方だな。俺とデコ一つ分くらいしか変わらない。

面影はある。あっても…やっぱりちがう。

なつかしいな。小学校三年ぐらいか？最初に会ったのは雨の日だった。実家は道場だからドームみたいに広いとこの方が適してたんだ。学校からの帰り道、突然雨が降ってきた。ドームでは予めいつ降るって予報してんだけど、すっかり忘れちゃってて…。

その時近くにあった店に寄ったんだ。シャッターは閉まってたんだけど屋根があったから雨宿りにはなった。

「冷てえ。結構ぬれちまったよ。」

体育の時用に持ってたタオルを使って濡れたところを簡単にふいた。そのままタオルをかぶって帰ろうとした時だった。向かいの店の前にも俺みたいに雨宿りしてる奴がいた。俺と同じくらいの背。でも、向こうは俺のことに気付いてなかったみたいだった。白いステイックを持っているのに気付いてわかった。目が見えないんだ。

目の見えない人なんて会ったことがなかった。だから、すごく気になった。

俺は屋根の下から出た。家に帰るんじゃない。隣に行くために向かいの店の下に行ったんだ。

その子は音に気付いて少しこっちを向いた。だけど、それだけ。また雨の降る店の外の方を向いた。

「あんたも雨宿りしてるの？」

俺の方から声をかけた。そりゃそうか。気になったのは俺の方だし。

その子は少しだけこっちを向き、小さな声でこう言った。

『私?…ううん。コンサートを聞いているの。』

何言ってるんだ? 最初聞いた時は目が点になった。

『目を閉じて。それがチケットだから。』

よく分かんねえけど、とりあえず言われた通りにしてみた。目を閉

じたらコンサート？何だよ…。

真っ暗になった世界に雨の音だけが響く。それだけじゃない。所々に雨が水溜まりに落ちる音、屋根に当たって弾ける音、葉っぱに当たって弾ける音。少しずつ違う音がまるで曲のように流れていく。まさにコンサートだった。

「スゲエ…。」

こんな風に聞いたことなかったからな。感動したに近い感覚を覚えた。

ターシャとの出会いで俺は色んなことを学んだ。

一つ目がこの

“ 雨の日の楽しみ方 ”
だな。

第五十七話 “音”の世界

『あたしね：目が見えないの。でもね、その代わりにみんなが知らない世界を知ってるの。』

雨が降り続ける中、俺はその子と話をしていた。雨の音は大きく、声は小さいのに、消えたりはしなかった。

透き通ってるって感じかな。雑音の中でもその声ははっきりと聞こえた。

「今みたいなのか…。」

『うん。音の世界。』

不思議な奴だなあ。それが第一印象。武術と遊びしか知らない俺には他の分野を全くと言っていいほど知らなかった。ガキなんてだいたい興味のあること以外知る必要なんてないからな。

「目が見えないのになんでここにいるんだ？」

目が見えない⇨動けない、そんな図式しか持ってなかった。

『歩いてきたんだよ。』

当然のようにその子は言った。チップには地図を示す機能がある。直接脳に働きかけ、どっちに目的地があるか感覚的に伝えてくれる。とは言ってもそこまで正確な物ではなかったし、そもそも回りに何があるか、といったものまでは分からない。

しかも、目が見えないという状態がどんなものか、俺は知ってた。稽古の中に“心眼”というものがある。気配を感じとるというもんだな。目隠しをつけ、気配だけで組手を行う。

…恐かった。何も見えない状態で闘うんだ。敵がどこにいるか…いや、自分がどこにいるかさえ分からない。

でも、俺の目の前にいる子はいつもその暗闇の中にいるんだ。それなのに外に出歩いている。そして、雨を楽しむ余裕さえある。…スゲー、ボキャブラリー無くて悪いな。その時はガキだ。仕方ねえ。

『何やってるんだ？』

そんな風に彼女と話してた時、兄貴が前を通り、声をかけてきた。

『お前、そろそろ帰らねえと稽古に間に合わないぞ。』

時計を見てなかったから時間なんて全然…。時計機能もチップには付いてるんだ。メールを読むときと同じ小型の読み取り機で見れる。カバンから出して見てみたらもう五時を指していた。

「うお！やべえ。」

今日の稽古は六時から。時間的には余裕に見えるよな。だが、俺と兄貴は道場の人間だから少なくとも二十分前には入ったかないとダメなんだ。だから、実質五時四十分がタイムリミット。帰って、着替えやら準備やらしてたらギリギリってところか。

『帰るの？』

「おう。独りで大丈夫か？」

『…うん。』

「傘は？」

『…ない。でも止んだら帰れるから。』

ドン、と兄貴が肘で俺を突いた。なに？、兄貴が何か言おうとしたのがわかったから、小声でそう返した。

『雨、あと二時間くらいしなないと止まないぞ。もう一本有るから渡してやれ。』

そう言って折りたたみ傘を出してきた。流石…用意がいいこつて。

片手を立て、ありがとって合図を返した。

「ほら、傘貸してやるから。これで帰れるよな？じゃあな。」

そう言って、手に傘を持たせてやって、俺は兄貴の傘に入って帰った。

これが最初にターシェに出会ったときだった。

第五十八話 初恋

その次の日、同じ道で帰った。まあ、通学路だからなあ。

昨日、あの子が立っていたとこの店のシャッターが開いてた。そこは楽器専門店だ。バイオリンとかギターとか置いてる。いつも前を通るとクラシックが流れている。聞いたことのあるもんから、全然知らないものまで。この日は稽古は休みで、晩飯までには帰ればいい。（飯の後にあったりするんだがな。）だから、寄り道しようと思ったんだ。昨日のあの場所に。

中に入るとやっぱり流れていた。聞いたことない曲だったな。別に何かする訳でもなかったが、中を回った。

奥にまでいったとき、驚いた。

昨日のあの子がそこにいたんだ。

クラシックの流れるスピーカーの前のイスに腰掛け、人形みたいに手を揃えて、聴きいていた。

「こんにちは。」

びっくりしながらも、挨拶をした。昨日会ったのに挨拶しない方が変だろ？でも、目が見えないのをすっかり忘れてたけどな。

『…その声…昨日の子？』

少し遅れて返事を返す。誰か聴き別けてるらしい。

「き、昨日は帰れたか？」

何か知らねえけど、緊張してたなあ。何でだ？

『…お陰様で。はい。借りた傘。』

イスの足に立掛けてた兄貴の折りたたみを手に取って俺の方に差し出してきた。まあ、手の位置がちよっと低かったのは仕方ないか。

「いつもここにいるのか？」

傘を受け取り、カバンに入れた。今までここに何度か入ったことがあったんだが、一度も見えたことなかった。どこの子なんだろ？ 気になるだろ？

『…うん。私このお店の近くに引っ越して来たの。お父さんとお母さん、ケンカしちやってお母さんと二人で。』

後で聞いた話なんだが、このケンカつてのは別居を越えて、既に離婚までいってたらしい。そんなときはよくわからなかった。

『…このお店ね、いつもきれいな音楽を流してるから、よく聴かせてもらってるの。昨日は休みだったの忘れてて、帰ろうとしたら雨が…。ホントはどうしようかちよっと困ってたの。ありがとう。』

「き、気にするなよ。」

ありがとう、と言ったときの笑顔にちよっと照れた。…わかってる。傘は兄貴のだよ。

お互いのこと話したりして時間は過ぎた。帰るとき、

『…また明日、来てくれる？』

「おう！」

その次の日から俺は毎日この店に通った。もちろん、彼女と話す為だけにだ。初恋…になるんだろうな。後、暗闇に負けない強さに対して憧れみたいなのもあったんだろうな。いろんなことを話したし、他のダチ連れてきてみんなでどっかいたり。家にも行ったこともあったな。

そんな生活が三ヶ月位続いた。

突然、彼女がいなくなった。離婚して次に行く場所探しのための一時的な滞在。外国に行ったときいた。

引っ越しの日は聞いていた。だけど、俺は結局部屋に閉じ籠って最後まで会わなかった。後悔したけど―するのはわかっていたけど―それしか出来なかった。

そして、今、目の前にいる。

第五十九話 再会の予兆

「ターシェも変わったな。しかし、懐かしいな……。でも一体どうしたんだ？俺んどこになんか来て？」

他にも言うことあるか……。いいよな？別に……。

『うん……。実は私ね、歌手になったの。外国でだから知らないよね？でもね、今日こっちでライブすることになったの。いろいろあつて直前になっちゃったんだけど、来てもえないかな？』

音楽に関わる職業。それがターシェの夢だった。夢を叶えたんだなあ。

「今日か……。悪いな、仕事がたてこんでて、行けそうにねえな。」

『その事でご相談しなければならぬ事があるんです。』

黒人の側近が話に入ってきた。どうしたんだ？

『先日このような文章が送られて来たのです。』

腕にはめた腕時計型のモニターに触れると、立体映像が飛び出してきた。

映し出されたのは、機械で書かれた文章だった。

“コンサートを中止せよ。さもなくば、命は保証しない。―ケルベロス”

「ケルベロス!？」

試合が始まる前にいきなり右ストレートもらった気分だった。ターシェが：狙われてるのか？

『理由はわかりませんが、この通り、ターシェ様を狙う者がいるのです。私どもは他国の者。この者がどのような者なのかわかりません。』

モニターを閉じて更に話を進めた。

『そこで奴について調査しているあなたに情報を頂こうと伺った訳です。』

「よーするに情報をよこせと…。」

つかかかるような言い方だっただろうな。この世界、なめられたらおしまいだ。

向こうは俺が睨んでも、顔色一つ変えず返してきた。

『はい…。正直そのつもりでした。ですが、あなたの事を調べて考えが変わりました。この国でトップの実力をもち、数々の成果を上げた方、その上彼女のご友人であるあなたならば、我々の申し出を受けて頂けると思いまた。』

「申し出?」

今度はターシェが割り込んできた。

『ハック達と一緒に私を守ってほしいの。』

途中からだいたい言いたいことはわかった。だが、ケルベロスの今までの事件の中に犯行予告を送りつけたもんなんてない。なんかのイタズラかもしれないねえ。

俺の考えてることがわかったのか、ハックと呼ばれた男が付け足してきた。

『確かにイタズラの可能もあります。ですが、そうでない可能もまた、あります。あなたの今の任務は一時、私の部下に引き継がせてください。ですから、我々に力を貸して下さい。』

可能性は低いだろうが、行くしかないだろう。

ターシェを手にかけさせるなんて絶対にさせない。

「わかった。俺にも手伝わせてくれ。」

第六十話 変装（前書き）

遅くなって申し訳ありませんでした。だいたい十日サイクルだったんですが、忙しくて。待ってくださいった方もそうでない方もどうぞ楽しんで行ってください。

第六十話 変装

『じつとしててねえ。』

私が座っているイスの後ろから、トーイッシュユが髪飾りを付けてくれた。

「そんなの付けてどうするの？」

『見ればわかるよお。』

髪飾りをいじりながら返してきた。―カチッ―、と髪飾りが鳴ったみたい。

『鏡を見てごらんよお。』

手鏡をもらって顔を見てみた。鏡って自分の顔を映し出すものだよね？そこに映ってたのは：誰！？

『この髪飾りは髪を好きな色に一瞬で変えられるんだよお。』

鏡に映ってたのは髪が真っ黒な女性：私なんだって。髪の色が違うだけじゃないの。お化粧とか服とかもいろいろと変えたら、全然私には見えないんだあ。

なんでこんなことしてるかって言うと、昨日の事覚えてる？私が狼さんを怒らせちゃったときのこと。仕事を見せてくれるって。でも、私、よくわからないんだけど、誰かに探されてるんだって。ずっと一人だったのに。

それで、見つかったらお仕事見れないから、こーやって変装してるの。

「これなら私だって判らないよね？」

イスから立ち上がって大きい鏡の前まで行ってみた。さっきは手鏡だったから顔しか見えなかったんだけど、全部みたら昨日までの私と全然違うかった。なんていうか：外の人だなあ、って。

『オッケーだねえ。全然わかんないよお。でも助かったよ。服のコーディネートは姉ちゃんのを見てたからできたけど、化粧なんて知らないからあ。覚えててくれてさあ。』

変装の手伝いをしてくれたトーイッシュが後ろから腰に手をあててそう言った。ちょっとだけ、二人が姉弟だって信じられるような気がする。

『せっかくそんなに変わっんだし、まだまだ時間あるから、外出ようかあ？』

「ホントに！？」

私の心を読んだみたい。したいことを言ってくれた。やったあ。

『ちょっと準備してくるから、先に下に下りといてえ。車鍵あいてるからあ。』

「わかったあ！」

ちょっと子どもっぽかったかな？ トーイッシュが部屋を出た後、私もカバンを持って部屋を出た。

ついこの前外に出れたのに、初めてるとき見たいにうれしかった。今度は何が見れるのかな？ どこに行けるのかな？

―足が止まった。

狼さんの部屋の前。

昨日、なぜ狼さんがあんなに怒ってたのか、まだよくわからない。まちがってるなんて思っていない。人間は何度も何度も戦争つてものをして、世界をこわして、人をこわしてきた。その時の写真とかを見て、ひどさが伝わった。だから、人間なんていらぬものだ。そう受け取ったの。

だから、私は狼さんがちがうって言う訳がわからなかったの。

なんの音もしないドアの前に立っていたけど、玄関に進んだ。まだ慣れないハイヒールをはいて、下に下りて行った。

第六十一話 責任として

コツン、コツン――。

コンクリートの床を踏む度になる音は狭い通路の闇の中に吸い込まれていく。

様々な太さの管が無数に通り、壁には負けないくらいの数のひびが入っている。

見放された都市――。

地上にはビルが小綺麗に立ち並んでいる一方で、地下は工場が無秩序に存在する。いや、存在しているようだ、と言うのが妥当か……。窓を覗いたところで、ガスのせいでメートル先さえ見えないのだから、どうなっているかは中からではわからない。

コツン――。

扉に『AC-3-68』と書かれた部屋の前で足を止める。

こういった意味かはわからない。ただ、そんなことはどうでもいい。ノブに手を出し、こちらへと引く。

古いからだろう。開けるとに少し力がある。キィィィ、とかん高い音とともに分厚い扉が開く。

中は外とは異なり、コンピュータや様々な機械が押し合いながら部屋の中に収まっている。最先端の機械があるこの部屋を見ただけでは地上の世界と見間違ふ。

『よう来たな、ワンコウ。』

奥のカウンターの影から老人が出てきた。カウンターと言っても機械のパーツやボロボロの設計図が覆い被さり、役目を果たせていない。また、老人とは言ったが、しわだらけの見た目だけで、小うるさく、かなり元気だ。

「いつものを。」

俺がケルベロスと呼ばれているからで、この男は仮面の下を知っている訳ではない。あくまで組んでいるのは相棒だけだからだ。

『あいよ。』

カウンターの下から小箱を取り出してきた。受け取って、中を確認する。

中には銃弾。そうだ、ここは大まかに言えば武器屋だ。俺の刀、銃といったものは全てここで―この男の手から生まれたものだ。この工業地区も昔はガスなんてものは溜まっておらず、排気ガスや下水はきれいにされ、外へと戻される。そして、それをまた使う…この循環が整っていた。

『反重力システム』が実用化されてからの約半世紀、世界は一気に変わった。

人は当に飛べるようになった。

ありとあらゆる空間を活用出来るようになり、世界が広がった。

そうなれば人は増え、工場がフルで活用されなければならなくなつた。排気ガスや下水は処理仕切れなくなり、地下に溜まり、地上へと溢れでる程。全国を統括する国連は事態を抑えるべく、工場の稼働に規制を掛け、さらに浄化システムを増加した。抑制には成功したものの、削減にまではいたらず、現状維持で終わっている。

規制を受けたため、収入が減ってしまった企業がすること―リストラだ。コンピュータ管理された生産ラインでは、若い労働力の方が必要となる。だから、この男のような年配者が貧乏くじを引く。

だが、彼らには技術がある。それを活かし、リストラされてもこの男の様に独自に、または複数で新たな物を産み出し、生活の糧としている。公認でしているのではないため、裏の人間たちが客であることが多い。

『お前さん。若い女拐ったんだって?』

嫌味な顔をして言う。

『あんな餓鬼と二人じゃ、やる気も起らんさ。連れ去りたくもなるわのう。』

今じゃ後悔しているよ。あんな爆弾娘。

「確認した。金はいつものところから取ってくれ。」

弾を確認し終え、冷めた口調で言った。案の定、男は面白くない、と顔に出している。

「あと…“アレ”も。」

『ほお。今回は“アレ”を使うんか。力が入っとるんじゃないのう。』
カウンター奥の扉を開け、中の暗闇に消えていった。弾をしまっている間に戻ってきた。

『ほれ、取ってきてやったぞ。』

俺はそれを受け取り、さっさと部屋を出て行った。

地上へ戻る通路の中で、何度も心に誓った。

人の命がどれだけ重いものか、それを教えるのも彼女を連れ出した俺の責任なんだ、と。

第六十二話 同業者は仲が悪い

『デカイツスねえ。』

この国で最もデカイドーム会場―サクヤドーム。ターシャが今日ライブをする場所だ。

生き残った奴に会うつもりだったんだが、先に行った警察との面会で疲れきっているから、つつわれて引き返すしかなかった。

また別の日に出直しだな。

つー訳で、会場まで来たって訳だ。

車の中で、バンから聞いたんだが、ターシャの人気は相当なもんらしい。国を越えて人気があり、このコンサートチケットもすぐに完売しちまって手に入らなかったらしい。

『こんな形ツスけど、歌聴けるなんて最高ツス。』

なんて言っていた。もしかして、レイン達も知ってんのか？なら、サインでももらって帰るか。

中に入るとすでに警備員が配備されていた。まだ開演までは六時間はある。つつつても、いつ来ても文句なんて言えねえんだ。やり過ぎでも足りないくらいだな。

案内されたのはターシェがいるの控室の真横の部屋。ここを基点として行動するようだ。中の空気は既にピリピリしていた。

ターシェと共にいたハックって奴がリーダーらしい。他は部下か？全員胸に同じマークのバッジを付けている。：にしても、目がこえーなあ。敵意剥き出しっつーところか。

『よく来てくれた。みな、彼がこの国一のガードのジェイクだ。』

ハックが前に出て、手を出してきた。ちゃんと握手したさ。

『君たちが手伝ってくれるなら心強い。』

「ありがとう。」

社交辞令はさておいて、本題に入った。

『ケルベロスについての情報はあるが、やはり対決した者の意見を聞きたい。』

全員の目は相変わらず緩む様子はない。チーム以外の奴が入るのは気に入らねんだろうな。全く：あからさま過ぎるっつーの。

「奴の動きは半端なく速い。ケルベロスなんて変な名前で呼ばれるだけある。武器の火力もすさまじい。気い抜いてると、殺られることに：。」

『殺られてんのはこの国の連中が弱いからだろ。』

ハックの右隣にいる少し長めの金髪の男が割り込んできた。

『アーデイス！』

ハックの呼びかけを聞かず、アーデイスと呼ばれた若い男は続けた。

『そーだろ、ボス？この国の連中は腰抜ばかりさ。その中で一番強いっつってもたかが知れてるよ。』

『なんだと、先輩は本当に強いんすよ。』

バンが我慢しきれずに返した。

「気にするな、バン。」

俺がバンを止めるのと同じく、ハックもアーデイスを止めた。

『失礼な事を……。申し訳ない。』

慣れてるよ。

『ですが、元は我々のヤマ。貴殿方を見くびる訳ではありませんがこちらの指示に従って頂きます。』

第六十三話 等しく過ぎた時間

『…ゴメンね。突然こんなこと頼んで。』

「気にすんな。上手くいけばこっちで奴を捕まえられる。」

ハック達が俺達に要求したのは一つ――邪魔になるなって事だ。ローテーションを組んで監視区の担当を替えるんだが、俺達はターシャの護衛後、後は全部観客席での見張りだ。ライブ中もここ。ターシェの知り合いだから、始めだけ会わせといて、後はどいてろ、だよ。

まあ、黙っててやるつもりなんてこれっぽっちもないがな。

『でもジェイクがガードをやってたなんてね。』

「なんだ？ 以外だったか？」

『ううん。そんな気がしてた。』

なんだよ、それ。

『俺、前で見張ってます。』

なんか笑いながら出て行った。なんだよ、全く。

『優しい後輩さんね。』

「どこがだ？…って、そんなことより、ターシェだってそんな売れ

てる歌手になるなんて思いもしなかったよ。」

『そうだね。あれからいっぱい頑張ったから。』

長い髪をかきあげた。

「だよな。夢叶えたんだからな。：あ、そうだ。俺のダチ、今何してると思う？」

仕事：として来た、なんてことはわかってる。憎い奴にターシャが命を狙われてるってことも十分わかってる。だけど、今くらい羽目を外したって罰は当たらないだろ？

昔の連れの話から始まって、荒れてた時や兄貴が死んだこと、レインたち家族のこと。何から何まで話した。ターシェには不思議とどんなことでも話せた。間抜けでダッセー失敗を隠さずな。

ターシェの方もいろいろと話してくれた。

俺達と離れて海外へ渡ったこと、言葉の違いで苦労したこと、向こうで出来た仲間に助けられたこと、再婚相手との仲で悩んだこと、音楽の勉強を続けデビューしたこと…。

ターシェは明るく話していた。時々笑ったり、ただ楽しかったかのように。だが、話の内容はそんな甘いもんじゃなかった。苦しくて、辛く、厳しい時の方が多かったはずだ。それでも、夢のために耐えてこれたから、ここにいるんだ。やっぱりターシェは強い。昔と変わらない。俺の憧れた強さだ。少しは近づけただろうか…。

コンコン。

『先輩、もうすぐ交代の時間になるッスよ。』

「ああ、わかった。」

『もっと話たかったんだけどね。』

「ライブが終わってから会えるだろう？」

『…そうだね、また会えるよね。』

「当たり前だろ？この俺がついてるんだ。絶対守ってやる。」

フフッ、と返してきた。

「そうだ、終わったらサイン貰えるか？レインたちにやりたいんだ。」

「

『いいよ。何枚でも。』

「約束だからな。じゃあな。」

笑って手をふるターシェに親指を立てて返事を返した。ドアを閉め、
気合いをいれるため両手で顔を叩く。

パシッ。

廊下に響く。

「…シャァ！行くか！」

『はいッス。』

第六十四話 集う役者

「次は何処に行くの？」

車を運転してるトーイッシュに弾んだ声のまま訊いてみた。いろいろ回って来たから楽しくって楽しくって。

この前は服とか家具とか、そうゆうお店ばかり回って来たから、ちょっと感じを変えて、ハイテク機械のあるところとか、音楽関連のお店、いろんな生き物がある場所とか。まだまだ全然外の世界には面白いものがある。一週間世界を回っても、きっと見れてないものはたくさんあるんだろうなあ。これからゆっくり見ていくんだ。

『次はアレだよお。』

トーイッシュの指差した方には何かドームが見える。でも、ドームって家とかが中に入ってるから、もっと大きいんじゃない？一回りも二回りも小さいけど…。

『元々ドームってアレくらいの大きさなんだよお。それをモデルにしたのがあ、今、住宅街の“ドーム”なんだよお。』

そうなんだ。習わなかったなあ。

「じゃあ、あの中には何があるの？」

この問いにトーイッシュの口が少しニヤツとしたことに気付いた。

『ライブなんかをしたりするんだよお。今日のケルベロスの獲物み

たいなのがねえ。』

そうだ。忘れてた訳じゃないけど、狼さんの仕事を見れるんだ。：ちよつと変な気分。見たいって思ってた。今も思ってる。でも、狼さんが怒ってた顔を思い出すと少し怖かった。そこにはきつと私の知らないものがあるんだと思う。：複雑な気持ちって言うんだろうね。

近くに行くと大きさが際立った。住宅街のあるドームと比べたら小さいけど、歌を聞くために集まるんだったらスゴく大きい。どれだけの人たちが入れるんだろう。

地下に駐車場があって車から降りる。それからエレベータに乗ってドームの中に入る。何もかも大きい。駐車場は向こう側が見えないくらい広いし、エレベータも五十人くらい乗れそうな大きさ。：なのに、車はいっぱい止まってるし、エレベータもギュウギュウってまではいかないけど、いっぱい人が乗ってた。

「狼さんの狙う人ってどんな人なの？」

こんなに人気のある人がどんな人なのかな、って気になって訊いてみた。

『海外で歌手をしてるんだよお。国の境目なしでスゴく人気のある人で、この国初ライブだからスッゴい人だね。なんたって、初めてこのドームを満員にしたんだから。』

「ま、満員！？この席全部埋まるの？」

その時、ちょうどホールに入ったところだったの。観客席は二階、

三階まで続いてた。いたる所にイスがあってもう七割は埋まっていた。向こうにいる人なんて点くらいにしか見えない。一体何人入るの？

薄暗いつてのもあったのかも知れない。真ん中の真っ白なステージがスゴく際立っていた。真上にあるライトに照らされて銀色にも見えた。

「…素敵。」

『見とれてないで早く座ってえ。みんなの邪魔だよお。』

ちよつとボーっとしちゃって後ろから来てる人たちに気付かなかった。

「あっ…。ご、ごめんなさい！」

『気にすんな。』

後ろにいたスーツ姿の人が、優しく声をかけてくれた。よかった、恐い人じゃなくて。

トーイッシュは先に座ってた。隣に座ったらイスがフカフカで気持ちよかった。

『さあ、もうすぐ始まるよお。観客十万人を迎えた中での晴れ姿がねえ。』

トーイッシュは楽しそうに言った。

第六十五話 光に誓って

スゲー人だなあ。サクヤドームが満員になるなんて初めてなんじゃないか？ターシェ嬉しいだろうな。…なんか知らねえが俺も嬉しいよ。

だけど、見回りしにくいとこだけなんとかならねえかな。さっきも女子高生が邪魔で通れなかったしな…。まあ、隣に座った彼氏っぽいのがどかしてくれたがな。

『もうすぐ始まるッスね。ターシェさんのライブ。』

三階の最前列を見回ってたときにバンがづぶやいた。

「お前：なんのためにここにいるか、ちゃんとわかってるよな？」

今は絶対俺にバレないように声小さくしたんだろ？周りがうるさいから聞こえないと思ったんだろう。残念でした。

『わ、わかってるッスよ！護衛ッスよ。』

：わかりやすいな。痛いところつかれて苦笑しているバンを見て、俺も笑ってやった。あくまで嫌味っぽくな。

時刻はすでにライブ開始三十分前。だいぶ人の流れが落ち着いてきた。

俺たちの担当は二階の最前列。ターシェが立つステージがよく見える。

これからターシェの上がるステージを見ながら考えていた。

―ターシェは何でケルベロスに狙われてるんだ？―

ケルベロスの狙う人間は年齢から職業までかなりの違いがある。恐らくケルベロスは依頼を受けて人の命を奪っている。依頼を受けているような奴は簡単に別けたら二通りの人間しかない。一つはただの殺人狂。殺すことに主軸があり、対象を特に選ぶような趣味を持っていない人間。もう一つは目的が別にあり、その過程で“殺し”というスキルが必要な場合。生きるため、とか、復讐するため、とかだ。ケルベロスは後者に当たるだろう。あの殺気は何か別に目的があるように感じた。

憎悪。

復讐が奴を駆り立ててるのかもしれない。

とすればターシェを狙う理由は：情報との交換といったところか。しかも何人も手をかけているところをみると情報はまだ貰えていないのかも知れない。そして次のターゲットがターシェなのかも知れない。あくまで仮説だけだな。

どんな理由だろうと、復讐の踏み台ならなおさら、ターシェの命を奪わせる訳にはいかない。絶対を守るんだ。

気付かない内に思いつきり拳を握っていた。もうイタズラの可能性なんて考えていなかった。

『先輩、知り合いだからって熱くなりすぎるといざというときちゃ

んと動けないッスよ。』

後ろに仕事モードに入ったバンが真面目な顔をして立っていた。

「ハハ……。お前に言われるとはな。」

そんなとき、明かりが落ち、辺りは暗くなる。

ステージがさらに輝きをます。

そして…始まった。

第六十六話 嵐の前の静けさ（前書き）

突然長期間お休みしてしまいました。メッセージを送ってきてくださった方、定期的に來てくださった方ありがとうございます。更新はまだペースが落ちるかもしれませんが、少しずつ書いていくつもりですので、よろしく願います。

第六十六話 嵐の前の静けさ

“ワァー！ー！！”

スゴい歓声。こんなにたくさんの方がいるんだもん。当然かな？それにしたって…耳が痛い。

ステージに青い髪の女の人が出てきた。白いドレスでステージに負けないくらい輝いてる。その手を―スゴく対象的な感じの―真っ黒な人がひいている。フードを被った大きな人。女の人の一回りは大きい。

―

「あれって…ハックか？」

『良くわかったツスね、先輩。毎回ライブではガードのリーダーである、ハックが誘導してるそうツス。』

まああの体格だからな。しかもそういう危ない位置、他にさせないだろう。

「…怪しい奴はいるか？」

『今のところはナシツス。』

どのタイミングでいつ来るか。可能性は山のようにある。…なんて泣き言は言えねえ。可能性が山のようにあるのがチャンスは一回。それさえ守りきれば俺たちの勝ちだ。

『今日は私、ターシェ・フィーメルのライブに来てくださって本当にありがとうございます。精一杯歌わせて頂きますので、最後まで楽しんでいただけると嬉しいです。それじゃあ、さっそくいきまーす！』

さっきよりも大きな歓声が響いて始まった。明るい調子の音が広がり、一つずつの形になって最後に女の人の声も混ざる。

とってもキレイだった。なんだか人の声なのに楽器から流れる音色みたいだ。音楽なんてそんなに聞いたことないからかな？とにかくすごいと思った。胸の中が熱くなって、脈が速くなってるみたい。

あの声を初めて聞いたときのことはよく覚えている。心の中にまで響いてくるような透き通った声。今まで相当鍛えてきたんだ。歌い方は全然違う。でも、あの声の感じは変わらない。きつとみんなそこにひかれてるんだろうな。…すげえよ、お前は。

にしてもずっと思ってたんだが、連中定期連絡をなんで徹底してないんだ？『なにかあったら連絡せよ』、なんて、有り得ないだろ。ライブの警備員じゃないんだ、万が一ってことがあるだろ？

そんな違和感を持っていたても、よそ者の意見なんか聞くわけがないんだ。無駄な口論増やすよりはしっかりと見張ってた方がいいか…。

止まらない音楽はここにいる全員に駆けていく。

もう何曲目か分からないほど流れて、女の人が始めた。

『長い間お付き合いありがとうございます！…次で最後です。ライブの時はいつもこの曲で終わらせてる、最後の曲です。聴いてください。…また、明日。』

歓声がまた上がった。今日一番じゃないかな？

歓声が終わったのと入れ替わりに音楽が聴こえてきた。ボールが跳ねるような、明るい音が響く。

「最後か…。ここまでなんにも動かないっつーことは、これが終わったらくるんだろうな。」

『…ここまでないとガセってことも、って痛いッスよ、先輩！』

思いつき髪を引っ張ってやる。

「そんな疑い持ってたらいざというとき動けないだろ。ガセならラッキー。来ると思って構えとけ。」

『す、すみません。…でも、ケルベロスもッスけど、連中もうんともすんとも言いませんね。』

確かに。いくらなんでも静かすぎねえか？

『そんなことよりちゃんと見張っている。』

…心配して損した。一端通路に出てまで確認してみたのに、時間の無駄か…。

でも、…何か引っ掛かる。

どうだった？って顔をして戻ってきた俺を見てるバンに、首を横にふって、問題ない、と合図を送った。

コンサートも終りを迎えていた。

第六十七話 届け！

音楽が止まった。すこし間を空けて手を叩く音がドームに響いた。まだまだ終わらないでーそう言ってるように俺には聞こえた。

『今日は本当にありがとうございました。』

拍手の音が小さくなり、消えるか消えないか、のところで話し始めた。顔には歌いきった達成感よりも終わってしまう淋しさが色濃く出ていた。

一呼吸おき、ターシェは再び口を開いた。

『私がこうして故郷でライブが出来たのは皆さんのお陰です。本当にありがとうございます。』

―ドクンッ。

その時、最も恐れていたものを感じた。―アイツだ。この鋭く冷たい殺気…一度しか戦ったことはないが、間違いない。

こんな仕事してたら殺気だの憎悪だの、そういう人の出すものには嫌でも敏感になっちまう。

“近くにいる”。俺の第六感がそう言っている。

『とても懐かしく大事な人にも会えました。』

『せ、先輩！？』

次の瞬間には足を進めていた。全速力で。ステージへと。

『子供の時にほんの少しだけ一緒にいただけなんだけどー。』

ターシェの言っている言葉が耳に届かない。とにかく早く、少しでも早く走れ。それしか頭になかった。二階の観客席から下へ飛び降りる。高さはかなりある。今考えれば、衝撃吸収材がなければ骨が折れてたろうな。そんなことなんて頭になかった。

『私の夢を―生きる意味を作ってくれた人。』

ステージ上のハックがターシェの方に近づいていくのが見えた。殺気を感じ、身を守ろうとしているのか。なら、援護に回らねえと。

少し安堵し、スピードを緩めてしまった。

『私がここに立っていられるのはその人のお陰です。』

ステージまであと少しまで来たところでやっとわかった。身体中の血が一気に凍るようだった。

ハックは守るために近づいてるんじゃない。いや、ターシェの後ろにいるのはハックじゃない。今、ターシェの後ろにいるのはまさに姿のままの…死神だ。

ターシェの真後ろにいるせいで狙えない。くそっ…。

もっと速く。足がもがれてもいい。ターシェを守れば何も残らなくていい。

『最後になったけど伝えたいの。』

ステージにまで辿り着いた。階段を一気に駆け上がり、ターシエの前に――。

『――本当に、ありがとう。』

なにかもを受け入れたような笑みには涙が流れていた。

第六十八話 — Another Side — 天使の企み

―数時間前。

「ハック、上手くいってる？」

後一時間程でライブが始まる。控室で待ってる私が心配しているのはライブのことじゃなかった。今までいくつもライブはしてきた。その度に不安にさいなまれていた。今回も例外じゃないんだけど、もっと気になることがあった。

『はい。最前列とはいきませんが、ベストな位置につけさせています。気が散らないよう無線も最小限しか使わないよう指示しています。』

私、女優じゃないし、そもそも嘘をつくのなんてあんまり得意じゃなかったから、バレないか不安だった。

そう、あの脅迫は嘘。ハック達に作ってもらったの。ライブをジェイクに聴いてもらうための作戦。だってこっちでライブするのはジェイクに私の生の歌を聴いて欲しかったからなんだもの。

ジェイクが何をしているのかはすぐにわかった。ハックに探してって頼んだら、知ってたんだもん。有名人だって。だから、もしかしたらライブの日に仕事が入るかもしれない。そう思って、ジェイクの関わってる事件の犯人の名前を借りて犯行声明を作ってたの。こうすれば、来ない訳にはいかないでしょ？

歌を出来るだけ楽しんでもらえるよう、通信も最小限にしてもらっ

た。初めは万が一の場合があるから駄目だ、って却下されたけど、人員を増やすって事で許してもらえた。

ここまで上手くいってるから、もう大丈夫だよな？後は歌の方を頑張ったらいんだ。そう、自分に言い聞かせ、歌に集中できるように心を落ち着かせた。

↓

『ウチのお姫様もやりますね。こんな芝居するだなんて。』

アーデイスが嫌味のような笑みを浮かべ、そう口にした。

警備室には私とアーデイス、後数名の部下が待機している。ここからは会場の全てのエリアが確認できる。無線での通信を行わないため、監視カメラからの映像が頼りとなる。だから、リーダーである私はここにいる必要がある訳だ。

アーデイスがああ言うのも無理はない。ターシェ様は嘘がつけるようなタイプの人間ではない。顔に出てしまうのだ。だが、今はまるでイタズラ好きの子悪魔のように上手く騙している。恋の力とでも言うのか…。

彼女のデビュー以来、ボディガードとして任されているが、彼女はそう言ったことは必ずする、強さを持っていた。いくつも驚かされたものだ。四十度の熱があってもライブをやり遂げた時は彼女に敬意を評したものだ。

だから、彼女がこの作戦を申し出た時も止めても無駄だとすぐに悟った。流石に無線の事は認めたくはなかったんだが…。

『それにしても、ジェイクさんに喧嘩うつちまった。嫌われちゃまったかな？』

「気にするな。全て終わればターシェ様がちゃんと真実を話してくださる。」

アーデイスは元々ジェイクのファンだ。彼の名は他国である我が国にも広まっていた。だから、憧れる奴も後を絶たない。この配役も部下の中でくじ引きで選ばれたらしい。嫌われたくはないから、だとか。後で話が出来そうだ、と引きたい奴もいたが悉くハズレ、引きたくない奴が引いた、と言うわけだ。

とは言え、アーデイスはよくやった。我々がよそ者である彼を嫌っていると思うてくれれば、無駄に口論を増やそうとは思えないだろう。

当の俳優は他の仲間泣き付いている。いつまでやっているんだか。

“コンコンッ”

『弁当買ってきました。』

腹ごしらえに飯を買いに行かせた部下が帰って来たか。今食べておかないと私はこの後、ここを部下に任せて、ターシェ様と共にステージに立たなければならぬからな。食べる暇がない。

「ああ、入れ。」

モニターから目を離し、皆が飯を待った。モニターに映るべき姿が

映っていないことにも気付かずに…。

第六十九話　— A S —　忍び寄る魔の手

『美味しそうな弁当ですよ。』

買ってきた部下が弁当を配る。なんでもライブのスタッフが我々の分も用意してくれたようだ。弁当を受け取って開けてみると、確かに……。この弁当はアタリの様だ。美味そうだ。

『そう言えばハックさん。さっき新しい衣装見せてもらいましたよ。カッコ良かったです。』

二口ほど口にしたところで買い出しに出ていた部下がそう口にした。新しい衣装？何のことだ？

「何の—」

”ドン—ッ！”

突然、弁当箱が爆発した。音は小さく、威力も大きくはない。ただ、攻撃としては十分だ。俺の左手が肉がえぐれ、血に染まっている。

「ぐっ……。。」

痛みで声が漏れてしまった。他の部下も皆、手を負傷したようだ。痛みで叫ぶ者、腕をつかみ、体を丸くして、痛みに耐えようとする者もいた。早く医療班を……。無線に手をかけようとしたその時だ。

”バンッ！”

突然扉が開かれ、フードを被った全身黒で統一した男が姿を表した。部屋へ入りフードを外す。そこには獣をおもわせる仮面があった。

「…っ。」

ここにいる全員が銃に手を伸ばそうとしたが、左手の痛みがあるせいか、右手まで震え、構えるまでに時間がかかってしまう。

なんとか構え、銃口を向けるが震えてしまい、まともに狙えない。

仮面の男はその間に刀を使い、尋常でない速さで、部下の体を切り裂いていく。

構えるころにはアーデイスと私しか残っていない。

狙いの定まらないままだが、引き金を弾こうとした。

その瞬間、右腕に痛みを感じ、銃を手放してしまった。腕には小型のナイフが刺さっていた。こんなもので離してしまうとは…。左手の痛みも合わさってなのかもしれない。

“サッ”

もう一つの銃をだそうとしている間にアーデイスが殺られた。斬る音もほとんど聞こえない。

“ゴッ……”

足元に何か当たった。見なくてもわかる。…頭だ。視線を落とせばそれだけ隙を作ることになる。それよりも…早く…はや

“シュツ”

奴の刀が振り下ろされたされた時は、何を斬られたかわからなかった。

さっきまで引き金を弾こうとしていた右腕に感覚が無いことに気付いた。

：手首から先が斬り落とされていた。

「ぐっ…。」

斬られたと認識した途端、痛みが全身を駆け巡る。痛みのあまり、膝についてしまった。

奴を見ると既に目の前にまで来ていた。血だらけの刀をゆっくりと振り上げている。

ターシェ様…、申し訳ありません。

ジェイク、この殺人鬼を止めてく……………。

―

これで全員か…。

刀をしまいながら、周囲を確認する。

全く、呆気無さすぎる。警戒心が無さすぎる。本当に守るつもりがあるのか？

情報通り、何か目的があるのか、警備が随分ずさんだ。突然の人員増加、連絡の遮断など、守るつもりなど全くないのではないか？

人員を他から得るなど、潜り込むことも難しいくはない。ライブ中での連絡遮断は明らかに愚かな事だ。

入り込めば後は簡単だった。ライブで使われる衣装に全身を黒で覆ったものがあった。それを身に纏えば違和感なく動けた。着る人物は始まる一時前までは監視室に籠るのだから、その人物として振る舞えばいいだけだ。

弁当に小型の爆弾を仕掛け、それを渡して部屋へと持って行かせる。カメラは一部同じ画像をループさせていた。監視室の前で待ち、タイミングを見計らい爆発させる。殺す程の威力では音が外部に漏れてしまう。だから、回りくどいが、負傷させる程度の威力に抑え、俺自身で息の根を断つ。

やはり、自分の手で仕留める方がいい。自分の罪をしっかりと背負えるからだ。

「無線は切ったか。」

『もち。』

次は歌姫か…。

第七十話　— A S —　天と地

本番まで後少し。…この時間が一番苦手。始まったら後は楽しむだけだから、どこに置き忘れたんだろうって位、緊張は消えてしまっただけど…。今はうまくいくかな、なんて心配しかできない位テンパってる。

胸に手をあててみる。判りやすいくらいに脈が早くなってる。

腕をあげ、降ろす。大げさなくらいに深呼吸をした。これくらいしないと意味がないように思えて。

それでも脈は早いまま。むしろ、さっきより早くなった気がする…。いつもなら少しは効果あるのに…。

いつもとは違う。今日は特別だからかな？

もう一度深呼吸しようとしたとき、ドアをノックする音が聞こえた。

ハックかな？そろそろ入る時間だし…。

「はい、どうぞ。」

ちょっと声が震えてる気がした。しっかりしなさい、私！

『失礼します。ステージに入る時間がきました。』

…あれ？ハックじゃない。

「今日はハックじゃないの？」

『はい。今回は隊長は監視室で会場全体を見張るそうです。無線を使わないから、監視室の人員を増やすそうです…。今回だけ私です。』

あー…私のわがままを通してくれたからだね…。

「そうなんですか。それじゃあ、よろしくお願いしますね。」

そう言って、手を出した。近づいて来てる気配がしたから。ちょうどダンスをするときのように、手の甲を上にして差し出した。

その人は下からゆっくりと手を包もうとしてくれた。

けど…。

触れた途端、ぞっとするような、何か冷たい感覚が体中に広がった。

途端に手を離し、その人の気配から離れた。

「あなた…誰？」

少なくともハックの下にいる人達の中で、こんな人はいなかった。触っただけなのに、まるで、心臓に銃を向けられたみたいなの…。

『…誰、か…。』

声がさっきよりも深くなった。

『自分から呼んだのに、判らないとは…。』

呼んだ？こんな恐い人を？一体なんの…、と考えてはつとした。

「あ、あなたが…。」

―ケルベロス。

―

まさか、手に触れただけで気付かれるとは、思いもしなかった。鋭い女だ。

『で、でもあの脅迫状を作ったのはハックで…。』

かなり動揺しているな…。当然か…。

「それとは関係ない。こちらの仕事で来たただけだ。」

『じゃあ、私を…。』

「殺す。」

避けようとしていた言葉を冷たく言い放つ。死刑判決。…正直なところ、あまり言いたくない。だから、今まではターゲットと話す前に仕留めてきた。だが、今回はそういう訳にもいかない。

「だが、お前が死ぬのは今じゃない。」

彼女は塞ぎこんでいた顔に少し疑問の表情を表しこちらを見上げた。

『それはどう言う―』

「お前にはライブを最後までしてもらおう。その後でみな目の前で殺す。」

あまりにも予想外過ぎて混乱しているのか、表情がさっきから固まったままだ。無理もないか…。

それでも、俺は話を進めた。

「もちろんだが、おかしい真似はするな。しなければ、最後の曲の後に別れを言う時間をやろう。あまり長くはやれないがな。」

彼女は再びうつ向いた。少しして口を開いた。

『わかりました。』

表情はさっきとはまるで違う。覚悟を決めた顔だ。

「…いい顔だ。」

改めて彼女の手をとり、部屋を出た。

第七十一話　— A S — 想う時

…最後なんだ。せつかくまた会えたのに…。

“殺す” って冷たい言葉が心に突き刺さった。足が震えて、立てずに座りこんでしまいそうだった。

死ぬことよりも想いを伝えられないことの方が辛かった。だって私はそのためだけに頑張って生きてきたのだから。

ジェイクと知り合って間もなく、将来の夢について話したことがあった。

『とにかく強くなる。』

それがジェイクの話してくれた夢だった。それって夢なのかな？、ってクスクス笑っちゃった。ジェイクは顔を真っ赤にした。

『な、なら、お前はとうなんだよ。』

「私は…。」

私はうつ向いて黙りこんでしまった。その時の私にはなんの取り柄もなかった。目が見えないから、誰かに助けてもらいながらじゃないと生きていけない。そんな私に何ができるんだ？それにあんなに優しかったお父さんも、私の世話に疲れて何処かへ行ってしまったんだ。…そんな風に暗く、沈んでしまっていたから、夢なんてなかった。

『やっぱり音楽に関わるもんなのか?』

私が黙りこんでしまっていたのを見てか、ジェイクが話を続けてくれた。

音楽関連…か。

「…でも、目が見えないし…。」

『目が見えないからって何にも出来ない訳じゃないだろう?』

「…見える人には分からないじゃない。」

ジェイクの言ったことに少し頭にきてしまった。悪い事を言ったのは直ぐに分かったけど、謝ろうとはしなかった。その日は何だかそれ以上遊ぶ雰囲気にならなくて、帰った。

次の日、私はいつもの通りあのお店にいた。昨日あんな態度をとったからもう来てくれないんじゃないか、って思ってた。謝った方が良かったかな、て少し後悔してた。

『いらっしやい。』

『こんにちは。』

店長さんと…ジェイクだ。来てくれた。ほっとした。今の友達はジェイクたちしかいなかったから…。

『ターシェ…。』

私の目の前まで着た。突然手を取って、

『一緒に来てくれ。』

と、引っ張り上げられた。全然訳が分からなくて、戸惑ったけど、どこへ行くのか教えてくれないし、仕方なくついて行った。

ジェイクが止まった。急だったから、ちょっとぶつかった。

「…着いたの？どこ？」

けっこのような距離を歩いてきた。チップから地図を頭に取り出したけど、全然知らないところだった。

『ここか？…俺ん家だ。』

ジェイクの家？どうしてそんなところに？

『ターシェにいてほしんだ。俺だって暗闇に勝ってみせるから。』

ジェイクはやっぱり昨日のことを気にしてたみたい。当然だよな。きつとジェイクなりに私を励まそうとしてるんだ、って気付いた。

これからすることは私の目には映らない。だからこそジェイクは私の目の前でしようとしてくれる。

目に黒い布を巻き、その状態で投げられたボールを全て受け止める。

あまり怖いように思えないかな？でもね、普段目に頼ってる人たちにとってこれはかなり怖いと思う。周りに何があるのか、というこ

とが分からない。そんな真っ暗な世界から突然自分に向かってくるものがある。その恐怖はきつと何が近づくか、なんて関係ない。

私はその恐怖に少しは慣れてはいた。生まれてからずっとだからね。ジェイクは私を元気づけたいから、少しでも私に近付こうとしてくれた。自分が勝てれば私だって勝てるんだ、って…。

第七十二話　— A S — 夢への翼

“バシッ…バシッ…”

人に物が当たる音が響く。始めてから結構な時間が経つ。その間、球を準備している時以外ずっとこの音が響いている。…つまり、ジエイクは休まず球を受け続けている。まだ一つもしっかり受け止めれてはいない。きつとアザだらけだ。

『一度休憩をはさもう。』

お兄さんが休憩をもちだした。すぐには止めようとしなかったみたいで、少し間を空けてこっちに来る足音が聞こえた。

『やっぱりそう簡単にいくもんじゃないな。』

トンつと私の隣にジエイクが腰を下ろした。ボールをあんなに受けて痛いはずなのに、そんなことを微塵も感じさせないくらい明るい声。…すごく罪悪感を覚えた。

「…ごめんなさい。」

『なにが？』

また楽しいみたい…。余計に心が痛む。

「私があんなこと言ったから、こんな目にあわせて…。」

『何言ってるんだよ。いつか俺はこれができるようになってなんなくちゃい

けないんだよ。それが少し早くなるだけ。ターシェのせいじゃない。』

そうなのかもしれないけど、でも、私には謝ることしかできなかった。

『…それよかさあ。いまいちコツが掴めないんだよなあ。なんかないか?』

少しは私も力になれるかもしれない。

「なら…前に連れて行ってあげたよね? 音の世界。また、行ってみたらどうかな?」

『音の世界…かあ。よし、試してみるか。』

そう言うと、ゴクツと何かを飲み、一息ついて再び練習を始めに立ち上がった。

ジェイクが止まり、深呼吸している。きっと集中してるんだ。

音の世界。私は何度も助けてもらってる。車や自転車が来るときは音でしか方向が分からないから。ジェイクも同じ状態なら、きっと役に立ってくれるって思った。

そして、再びボールを放つ音が聞こえた。だけど、そこからはさつきとは違った。ボールが体を打つ音で満ちていたのに、今度はもっと小さく、心に刺さらない音。そう、ジェイクはこの試練を乗り越えたんだ。…少し…怪しんだ。以前からできていたのかもしれないって。あまりにもタイミングがよく、あまりにもありきたりな展開だから。だけど、次の瞬間にはそんな疑いはこれっぽっちも残って

いなかった。

『やったぜ！ターシェのお陰だ！やっぱりいてもらってよかった。』

「でも：私何にも：。」

『そんなことねえよ。だって昨日あれからずっとしてたのに、全然できなかったんだから。』

ジェイクは嘘がわかりますい。すぐ声に出ちゃう。きっと顔にも出てるんだと思う。でも、その声はいつもと同じ、優しいジェイクの声だった。嘘なんかじゃないんだ。

『これで証明できたな。目が見えなくなっただって何にもできない訳じゃない。そして、何にも伝えられない訳じゃないって。』

はっとした。そんな意味もあつたなんて：。そうなんだ。私にだってできることがある。私にだって伝えられることがある。：無力じゃないんだ。そう思えたことが嬉しかった。そう思わせてくれるジェイクの心が嬉しかった。

『お、おい。泣くなよ。』

知らないうちに涙が出ていた。我慢できなくて、ジェイクの前で思いつきり泣いた。

：大分落ち着いて私は帰ることにした。ただジェイクに言わないといけないことが残ってた。

「本当にありがとう、ジェイク。お兄さんも。私も頑張ってみる。」

私にできることを。だから、少し待っててね。」

これがジェイクに言った最後の言葉。本当は私にも夢があった。だけど、無理だと押し殺していた。でも、もう決心した。私だってジェイクみたいに頑張ってみせるって。

その夜、私は母さんに私の夢を話した。悩んでいたことも、友達に勇気を貰えたことも…。

『そう…。優しい子ね。その子に感謝しないといけないわね。あなたがそんな風に言ってくれるんですもの。それに…。』

「うん。私お母さんと一緒に行くよ。」

母さんは舞台女優をしている。こっちの国で公演があるから離婚しても一時的に滞在している。次の公演が近づきそろそろこの国を去ることになった。だけど、私はついて行くことを拒んでいた。ジェイクみたいに仲良くなれた友達と離れたくなかったから…。でも、私はついて行くことにした。今度会う時は夢を叶えてから、だって。

そこから数日はあの店に行かなかった。きっとジェイクも気になっただろうけど、家には来なかった。

最後の日、ジェイクは来なかった。お兄さんの話だと、部屋に引き込もってるんだって。淋しかったけど、少しほっとした。今あったらどうしたらいいんだろう、って不安だったから。

だんだん離れていく家を見て、少し込み上げたけど涙は流さなかった。強くなるんだ。夢を叶えられるくらいに。

第七十三話　— A S — 袖裏

ステージ横に着いたが、さっきから歌姫は黙り込んでいる。

「…大丈夫か？」

しっかり役目を果たしてもらえないとな。

俯いていた頭をあげ、しっかりとした目でこちらを向いた。

『…少し考えてただけ、大丈夫。それより聞きたいことがあるんだけど。』

「何だ？」

『ハック…いえ、あなたが代役になってくれてるけど、本当の役者はどうしたの？』

「言わなくてもわかってるだろ。」

『そう…。もういないのね…。』

そう言って彼女は再び下を向いた。わかっていたが聞かずにはいられなかったというところか…。

隊長を殺した後、一時的に無線を切った。完全に切ってしまうと、途中で気付かれる可能性が大きいから、あくまで一時的にだ。歌姫の部屋へ行く前に、側近である隣部屋の人間を始末した。この衣装ならば、顔が見えなくても怪しまれない。お陰で事がすみやすかつ

た。そして、彼女を連れだした後で無線をいれさせた。もう助けを呼ぶ危険性はないようだから…。

『…どうして別れを言う時間をくれるの？』

俯いたまま悲しい声で尋ねてくる。

「これから死ぬ人間には応える意味はない。…いらないならすぐに殺してやるぞ。」

そんなつもりは毛頭ない。だが、情けだと考えられたくはない。そんなものは捨て去ったのだから…。生かしておくのはあの娘の目に命の消える瞬間を焼き付けるためだ。

『…いえ、すごく嬉しかったから。』

嬉しい…か。そう言っているようには聞こえないなあ。

確かに酷なことをしているな。別れが言える、ということはつまり、死を先延ばしにするということである。死という未来を受け入れ、ただ別れを言うためだけに生き延びている。それは死刑囚が極刑を受けるまでの順番待ちのような。長ければそれだけ死への恐怖が大きくなる。

…止めよう。殺す相手のことを考えるのは…。今までだってそうしてきたんだ。

ただ、せめて、死に様は綺麗にしてやろう。

さっきまでと違い、すごく冷静になれている。死んでしまうなら、もう嘘がバレる心配なんてしなくていい。ただ思いっきり歌おう。

ハックが死んだと聞いたときは辛かった。私のせいで命を断たれたんだもの。それに、きつと他にもいるんだ。…どうしようもない悲しみがのしかかってくる。

別れを言えるのは嬉しい反面、心が痛かった。私のせいで巻き込まれて死んでしまったみんなには、そんな時間なんてなかったはずなのに、当の私にはあるだなんて…。

それでも、別れは言おう。こんな気持ちを明かさずに消えてしまいたくない。みんなには悪いけど、伝えるって決めたから。

『ターシェさん、ハックさん、スタンバイオッケーです。』

行こう。最後の舞台に。

第七十四話　— A S — 届いて！

手を支えられながら歩みを進めていく。しんとした静かな空気が一気に変わる。みんなの歓声がすべてを覆う。この瞬間が一番嬉しい。みんなが私を知ってくれていて、私の歌を聴いてくれる。私を認めてくれる声に後押ししてもらって全てが始まる。

これから先の事をすべてを忘れさせてくれる。

マイクを受け取っていつもしているようにみんなに声をかける。

始まってしまえば、もうジェイクに聴いてもらっても恥ずかしくないうように、としか考えられなかった。

何曲目かに入ったとき、ふと違う考えが頭を巡った。

…まだ…死にたくない。

みんなの声を受けて、私はここにいていいんだって…。ジェイクに気持ちを伝えるだけじゃない、もっと一緒にいたい。なんで死ななくちゃいけないの。

…ダメ。ここで泣いたら怪しまれる。そんな事になったら、きっとジェイクは私のところに来てしまう。そしたら、ジェイクが危ない目にあう。もうこれ以上私のために命を失わせたくない。

なんとか涙を堪えて歌い続けた。

…とうとう最後の曲だ。これで終わりなんだ。そうだ、今になって

まだ別れの言葉を考えていないことに気が付いた。ハハ…そのために頑張って我慢したのにな。なんて言おう…？名前を言うのは止めよう。変な疑いかけられたら嫌だし。好きだ、なんて最後までいいないよ。…だったら、あの言葉しかないよね。

とうとう歌い終わった。全部。ジェイク、しっかり聞いていてよ？

『今日は本当にありがとうございました。』

—

もうすぐか。彼女が別れを言ったところで命を断つ。本当はアレで一じいさんから受け取った道具一で奪うつもりだったが、刀で仕留めることにした。…俺も甘いな。

『…ザー…なんでまだ殺らないのお？…。』

相棒か。

「死に際の人間の言葉を聞いた方があいつの記憶にも色濃く残るだろう？」

こっちの勝手に殺されるんだ。それくらい構わないだろう。

『…ふーん。でも、失敗しないでよ。』

最後の部分が妙に深く聞こえた。いつもの伸ばす感じもなかった。…気のせいかな？

—

『私がこうして故郷でライブが出来たのは皆さんのお陰です。本当にありがとうございます。』

堅苦しい挨拶。ただ、突然言うのは訳がわからなくなるし、落ち着くためにも必要なこと。

『とても懐かしく大事な人にも会えました。』

すごく回りくどい言い方かな。でも、判るしいいよね？

『子供の時にほんの少しだけ一緒にいただけなんだけどー。』

—

『…誰か気付いたみたいだよ！早く！殺って！』

勘のいい奴だ。確かに潮時か…。だが、まだ距離がある。もう少し時間をやろう。

カツ、カツ、と意識させる程度に近付いていく。

『…ちよつと！早く殺らな…。』

悪い。切らせてもらう。せめて、もう少し…。

—

少しずつ近付いてくる感じがする。あまり時間はないみたい。

『私の夢を―生きる意味を作ってくれた人。』

フツッ。普通に聞いたら年配の人が言ってくれたみたいだね。

『私がここに立っていられるのはその人のお陰です。』

心からそう思ってるよ。

—

少しずつ背後に近付いていく。向かってくる奴の影は確認した。あの位置からは狙えないだろう。他に気付いたような者はいない。…もう少し。

—

後少し。

『最後になったけど伝えたいの。』

—

あの影がステージ手前まで近付いて着た。そろそろ限界か…。刀に手をかけ、最後の時にそなえる。

—

『―本当に、ありがとう。』

気付かないうちに涙が出ていた。

—

別れの言葉を聞いて、一気に背から刀を振り下ろした。

第七十五話 傷ついた天使

時間の流れが急に遅くなった。

紅い翼が地を飛び立とうと羽ばたいた。ゆっくりと…。天使がもつには異様なそれを大きく広げて。

嘘だ。これは…違う。目の前の光景を俺は認められなかった。

ターシェが…斬られた？背から…血が…。

だが、あの量は深くない。まだ、助かる。斬られ倒れこんでくるターシェを見て、現実へと引き戻され、すぐに支えた。

「ターシェ！」

返事がない。気を失ったようだ。

「しっかりしろ！目を覚ませ！」

冷静になんていられなかった。観客が悲鳴をあげながら逃げ惑うのも、血を吸いたりない化け物が近付いてくるのも、気が付かなかった。

“バーン！”

突然響いた銃声にやっと反応して、振り返った。

バンが観客席から銃を構えこちらを向いている。化け物は一さつき

の銃声を聞いてか、後ろに下がっている。

『先輩、早くこっちに！』

そうだ、早くターシェを連れ出さないと。ターシェを抱え上げ、バンの方へと走り出した。

—

狼さんが斬った人。あの人には好きな人がいたみたいなのに、もう会えないから。好き、っていう気持ちがよく分からないからかな？ 可愛いそうだと思うんだけど、それ以上はあまり感じなかった。

それより、トーイッシュの方が恐かった。いつもの明るい感じが消えて、声も低くなってる。

『あの役立たず。何考えてる。』

そうってパソコンを操作してる。こんなトーイッシュを見たのは初めてだから少し恐かった。

狼さんの方は逃げて行く歌手さんたちの後を追って行こうとしてる。だけど他の敵が近付いて来てる。足止めを受けそう。

歌手さんの方は抱えられてとあんまりよくは見えないけど、よくないと思う。力無く腕が垂れて、青く長い髪は血の紅が混じり、切られて短くなってる。でも、狼さんはあの人を殺さないといけないんだから、失敗しちゃったんだよね…。だから、トーイッシュも怒ってるんだよね…。

『…セフィリア、ちょっと行くとこできたんだあ。ここであるよお。』

さっきまでカタカタパソコン触っていたのに、閉じてもうカバンを背負ってた。早いよ。私もすぐにカバンをとった。

—

殺すつもりだった。真っ二つにするつもりはなかったが、少なくとも致命傷を与えるつもりだった。だが、何故だ？どうして腕を引いた？なぜ、浅く斬るような事を？

すぐに斬りかかろうとしたが、銃弾に阻まれ進めなかった。後に下がり体勢を立て直して再度かかろうとするも、他のガードが近寄ってきた。囲まれている。

『止まれ！隊長だけではなく、ターシェ様まで！許さない！』

ああ、さすがに気付いたか。それよりも早く追っていかないと…。だが、周りを囲まれている以上、逃げ切るのは難しい。殺るしかないか…。

—それにまだ殺しの恐ろしさを教えていない—

—

囲まれちゃってる。大丈夫かな、狼さん…。

『おーい、早く行くよお。』

トーイツシュがもう扉のところまで行ってた。ちょっと、早過ぎだ

よ！

急いで駆け上がって行った。だけど、

『ぎいやああああっ！』

私はここで命を奪う人の背負う罪を知ることになった。今でも脳裏に焼け付いている記憶を。

第七十六話 イフリートの腕

恐ろしい叫び声がドームの中を支配した。まだ逃げてる人たちの中には振り返っている人もいたけど、まるで幽霊でも見たかのような顔をしてすぐさま逃げて行った。私は：その光景に取り付かれたみたいになじつと見つめて、足が止まってしまった。

狼さんの腕が人のお腹の部分を貫いていた。持ち上げられてるその人は燃える焔の中で苦しんでいた。

腕を引き抜き、狼さんは他の敵に狙いを変え、襲い掛かった。

狼さんの周りを囲む人たちの顔は逃げていく人たちの顔と比較にならないくらい恐怖に歪んでいた。震える腕で必死に銃を構えて引き金を弾いていた。狼さんの速さもあつたけど、あんなに震えてたら当たらないよ。

案の定、狼さんにかすりもしないで弾は誰もいないところにばかり飛んでいった。次々と頭や胸、お腹なんかを切り裂いていった。切り口から焔が回って身体中を包んでいた。痛みと熱さに襲われて、人の声と思えない声で叫びながらのたうち回っていた。でも、まるでネジがきれたおもちゃみたいにみんな止まってしまった。

脚が震えてる。いつの間にか汗でぐっしよりだった。息も：しずらい。なんなんだろう、これ？

『ねえ、行くよお。』

トーイツシュが近付いて来て、私の肩に触れた。その瞬間、突然立

てなくなってその場にへたれこんだ。

『ちよっ、しっかりしてよお。』

トーイッシュに支えられてやっと立てた。肩を借りて扉へ向かって行った。

扉の向こうまで着たら大分楽になって、もう肩を借りなくても歩けた。

さっきのはなんなんだろう。

今も戦ってる狼さんがいるはずのステージはもう完全に見えないけど、そこへ通じる扉を振り返り、すぐに先に行くトーイッシュの後を追っていった。

—

この武器は俺がこの姿になった時に付けられいた。金色に光る、手から肘までを覆う籠手。指の先はかなり鋭利になっていて、人の身体を簡単に貫き、引き裂く。そして、その部分には血液と反応し、燃え上がる物質が塗り込まれている。体内の血液を燃やせば、血管を伝い、全身の血を燃やし尽くすまで燃え続ける。

最も俺が嫌悪する武器だ。

ほんの小さな傷でも、その人間の命を奪い、死してなお、その人間の存在を許さないかのように、骨さえも…跡形もなく燃やし続ける。

殺す、ということのさらに上をいくこの兵器を使えば、あの娘にいやがおうでも考えが変わると思い、今までに二度だけしか使ったことのないこれをもう一度腕にはめた。

…本当は歌姫に対して使うつもりだった。だが、やはり甘さがあつたのだろう、使うことはできなかった。彼女は俺の勝手で殺されるのだ。どうしても悪魔にはなりきれなかった。

だが、ガードは死ぬ覚悟ができた上でここに立っている。だから、この役目を引き受けてもらう。…俺を憎みながら死んでいってくれ。その方が一。

第七十七話 逃避

バンが俺の後ろについて、俺はターシエを背負って階段を駆け降りて行く。本当は何段も飛んで下りたいところだが、傷ついたターシエの身体に響くといけなから、一段ずつ下りないとな。

今俺達が向かってんのは運搬用出入り口ーステージに荷物を運ぶ際に使うとこだ。一般出入り口じゃ、この混乱で人がいすぎて通れないだろうし、なにより奴が追いかけてきたら、余計に被害が出る。

階段が終わり、広い空間に出た。運ばれた荷物を一時的に保管するスペース。この先に運搬用の車があるはず。そいつを掻っ攫って乗ってけば…。

『先輩、先に行ってください！』

数え切れないくらいの木箱やなんかを通り過ぎて、もうすぐ駐車場が見えてきそうなどこまで来て、バンが壁の方へと走りだした。正直、走り出したから気付いたが、なんて言っただけのかわからなかった。

“ ギギギギギッ ”

コンクリでできた倉庫内に重たい音が響く。音のする方を向くとシヤッターが下りてきている。なるほど、よく周りが見えてやがる。

『ちょっとは時間稼ぎになるかと思うッス。』

追いついてきたバンが少し息をきらせながら言う。

「十分だ。ありがとよ。」

俺もこういう時こそ冷静でないと…。ターシェをしつかりと抱えなおした。

駐車場に着き、近くの車に駆け寄る。黒のワゴン。これを使えばターシェを救える！

『先輩、下がっててくださいッス。』

言うと同時にバンが持っていた銃を、思いっきり振りかぶり、運転席のガラスに打ち付けた。ガラスは跡形もなく砕くだけ散り、少し残った部分も砕ききる。鍵を開け、バンは運転席、俺はターシェを後部座席に下ろし、背中 of 傷を見た。

傷自体は浅く、血も命に関わるほどは出てはいない。つつても、余裕があるわけじゃねえ。まだあいつが追ってきてるにちがいない。だから、早くここをでねえと。

「バン、出せるか？」

『もう少し待ってくださいッス。』

このタイプの鍵は—今広まってる車全部についてるんだが—チップでの認証確認でエンジンがかかるようになってる。登録されてる奴にしか運転できないって訳だ。つまり、俺らには運転できないってことでもある。

そこで登場すんのがバンの持ってるハッキングソフト、フェイクだ。

これはインストールさせると、今までの履歴をあさって、一番最後に使った奴のアカウントで入り込んでしまおう、っつーもんだ。昔の連れがくれたもんでなかなか重宝してる。

“ピッピーツ。”

『先輩、開きー。』

丁度、バンが後ろに振り返った時だった。突然、車全体が揺れ、低い爆音のような音が響いた。きやがった。

恐らく今のはバンが閉じた防壁を爆発してんだろう。ただ、今のこもった音だと、まだもってるみていだな。つってもかなりの振動だった。次もつかわかんねえぞ。

「バン！早く出せ！」

俺が言い切るのが早いか、バンが振り返るのが早いか、すぐに振り返ってエンジンをかけた。

『出します！しっかりつかまってくださいッス！』

一気に踏み込んだから少しよろけちゃったが、止血してる左手は離さなかった。

すぐに立て直したが、再度あの揺れがきた。さっきよりも耳に響く爆音とともに…。

第七十八話 現れし憎悪

やはりこの兵器は悪魔だ。

ステージに上がってきた十人程のガードが今は白いステージに黒い人型の灰しか残していなかった。

座席部からまだ撃ってくる者もいたが、どうでもよかった。それよりも後を追うことが最重要だ。

後を辿るのはそう難しい事ではなかった。ステージ近くでは焼けた臭いで満ちていたが、奴らが向かった出口に向かうと、少なからず血が落ちていたし、鼻も利くようになった。全く：皮肉もいいところだ。階段を下り終え、倉庫に入った時点で壁は閉じる直前だった。無駄だとは思ったがパネルを見つけた。案の定パネルは壊され、こちらからは操作不能になっていた。仕方ない。

腰のベルトに備え付けている手榴弾を取り出し、中央あたりにあるダイヤルを目一杯時計回りに回す。そのままピンを抜き、防壁に張り付けた。

この手榴弾はダイヤルを回すことで威力を変えることができる。最大まで回せばダイナマイトをも越える威力になる。弁当箱に仕掛けたのはこれの超小型版だ。ただ、最大で使うのはだいたいこういった壁を壊したりだとか、物にしか使わない。前にも言ったが、あくまで最後は俺自信の手で仕留める。

爆発前に距離をとり、さらに耳を手で塞ぐ。かなり力をいれても響くほど聞こえるこの耳のせいで、この時だけはどうしても両手が使

えなくなってしまう。

“ドォーン”

耳だけではなく、振動が身体中に響いた。壁の方を見るも、爆煙ではつきりとは分らないが、一発では開かなかったようだ。少しずつ薄らいできた煙の中に入り壁を確認すると、ひびが入っている。もう一度試すか。予想していたのですでにダイヤルを回していた手溜弾を同じところに設置し、再び壁から離れた。：また両手を塞がれる訳だ。

“ドォゴォーン”

この響き：どうしても慣れないな。爆音がさつきとは異なり、砕けた音が混ざっている。爆煙も風を受けてか、乱れている。どうやら破れたようだ。風で煙が晴れ、人一人分は通れる程の穴があいていた。あれだけ空けば十分だ。その穴へ少し態勢を下げて駆け抜ける。

穴を通過すると同時に、少し離れたところからエンジン音が響いてくる。まだ間に合うのか：。俺は音の響く方へと脚を進めた。

—

「バン！もっとスピード出ないか？」

『こんなに周りにいろいろあったら上げられないツスよ。』

大型車ばっか停めてあるから、邪魔なのは分かるが、それでも奴はまだ近くにいる。追い付かれる可能性はまだある。

そんな時だ。目の端に黒い影が見えた気がして、座席の後ろに振り向いた。くそっ、しつけないだよ。

黒い塊がこの車の後を自分の脚だけで追いかけてくる。こっちは車だつてのにしつかりとついてくる。

「バン！」

『わかつてるツスけどこれ以上はー。』

「これから狙い撃つからあんま揺らすなよ！」

バンの話を無視し、上着をぬぎながら伝えたいことだけ口にした。命令口調ってあんま好きねえけど、こういう時はこっちの方が丁度いい。バンは理解したみたいで、何も言わなかった。

脱いだ上着をターシェの傷口に巻き付けた。少し離れるから、止血ができない以上、なにもしないよかマシだろ。

銃を腰から抜き、もう一列後ろに下がり、後ろをつけてくる奴を狙う。どうやら向こうからはこっちの様子が見えないらしく、ガラスに銃を晒してもなんの変化もない。丁度いい。これで脚でも撃ち抜きゃ、追ってこれねえだろ。

奴は駆けて追ってくるし、車も揺れる。だが、弱音なんて吐いてる暇はねえ。しっかりと狙いを定める。

引き金を引くときになって、突然悪魔の声が聞こえた。

脚ですませるのか？ターシェを傷つけた代償はその程度なのか？

命を払わせろ。

俺は…引き金を引いた。

第七十九話 野獣の如く（前書き）

更新が遅れて申し訳ありません。流れをどうするか考えて何回か書き直したので遅れてしまいました。読んで頂けたら幸いですm（
）m。

第七十九話 野獣の如く

俺の放った弾丸はガラスを破り、奴めがけて飛んでった。地面に下ろそうとしている左足の太股から血が飛び出し、左足は地面を踏み外し、態勢を崩して転がってる。これで走れねえだろ。

確かにあいては憎い。ターシェを傷つけたから……。だが、まだ生きてるだろう人を見つけ出せなくなるなんてのは最悪だからな。今は生かしといてやる。

—

ガラスが破れたのに気付いたときには遅すぎた。弾は左足の太股を貫通した。突然の痛みで踏み外し、態勢が崩れ、勢いを残していたので、転がった。

このままなら俺は車に追いつけず、彼女は助かるだろう。だが、悪いがそうさせることはできない。彼女だけを例外にはできない。

—

「…は？」

銃弾が突き抜けた穴からひびの広がったガラス越しに見た光景は信じられなかった。

奴は回転の勢いを殺さず態勢を直し、四つん這いになった。仮面が仮面だし、手を前に出し、犬科が威嚇してるみたいに見え、殺気も混ざってまさに狼と思えた。

問題なのはこっからだ。

まさに獣。比喻とかじゃなくて。四足歩行でしかも立ってたときよか速いってなんだよ！人間じゃねえだろ。

さっきの倍ぐらいのスピードで俺が銃を構え直すまでにすぐそこにまで近づいてきた。ビビったから時間がかかったって言うてもたかが知れてる時間だ。そんだけ速いってことだ。

直ぐに引き金を引いたが、さっきと違って割れた隙間から俺の姿が見えてるから簡単にかわされる。さらに悪いことに奴の姿がみえなくなつた。：まさか車にくつついたのか？いや、なんも音してないし：。完全に見失つたと思つてたときだ。今通り過ぎた柱に爪で引っかいたような傷が見えた。直感で動いた。ターシェの横になつて座席に戻ろうとしたまさにその時だった。

“：ドンッ！”

何かが当たつたような音。いや、あの野郎が車体の側面にしがみついたに違いねえ。真っ直ぐターシェを狙うつもりだ。

座席に戻つたとき、窓の向こうであいつはまさに牙を振り下ろそうとしていた。

「ざっけんなあああつ！」

ターシェの背を支え、一気に抱き寄せた。間一髪だ。ガラスが割れ、奴の紅黒い腕が突き出てさっきまでターシェが横になってた椅子にでかい穴を空けた。

左手でしっかりと抱え、右手に握りしめた銃を向け、弾を放った。反射的に引き金を引いたもんだから、狙いは頭に向けちゃってた。

気がついた時にはもう遅く、奴の頭は後ろにのけ反っていた。しまった。手掛かりが…。

しかし、危機つつーのはしつこいもんで。奴ののけ反った頭はゆっくりと戻っていった。さっきのスローで巻き戻ししてるみたいだったその様子を、息を飲みながら見ていた。元の位置に戻り、奴と目があう。

考えてみりゃ、今回初めて奴の眼を見る訳だ。前の時と同じ、いや、それよりももっと深いものが見えた気がした。：正直に言う。元に戻るまでなにもしなかったのは完全にビビってたからだ。足撃ち抜いても四つ足で追いかけてくるわ、頭撃ち抜いても平然としてるわ、もうバケモンっとしか言葉が出てこねえよ。

まあ、二つ目は大袈裟に言い過ぎなんだけどな。元の位置に戻ったときに気付いたが、頭を狙った銃弾は仮面に守られて、ひびを入れたままで止まっていたみたいだ。おかげ、なのか、せいで、なのか：微妙なところなんだが…。

たくよ、なんつー眼してんだよ。そんな眼で睨まれても絶対ターシエは放さねえぞ。ターシエを支える手にさらに力をいれた。

『先輩！しっかりと捕まってくてください！』

突然バンの声が響いた。

第八十話 払い落とし

正直なんでバンがそんな風に叫んだのかなんてわからなかった。それでも、しっかりとしたその声は十分信用する価値があった。俺はすぐに両手でターシェを抱いて、助手席とドアの角に体重をかけた。

奴もバンの叫び声を聞いて車の前に振り向いた。仮面してっから表情なんて読み取れないぜ？でも、奴はすぐに訳がわかったみたいだった。なにせあんなにしぶとかったのに、呆気ないくらいパツと姿を消したんだから。今の状況においてかれちまってどうなったんのかわからなかったが、言うまでもなく、次の瞬間にはわかったよ。

“ガガガガガ…”

すんげえ振動に喧しい音。俺にとっては反対側にあたる向かいの窓にはコンクリの灰色しか見えない。つまり、思いっきり壁にすりながら走ってんだ。そりゃまあ離れなけりゃ潰れちまうわな。

壁から離れ、揺れがおさまった。すぐに後部座席後ろの窓から奴を見た。

—

こうも対応が早いとは思わなかった。仕留め損ねるとも…。

運転手を先に仕留めるべきだったのか？…いや、それでは車体の制御がきかず、その後どう動くかわからなくなってしまい、肝心の彼女が仕留められるかわからなくなってしまふ。だからこそ直接狙った。躊躇などせずに、だ…。

それでもしくじった。どうやらあの男とはなにか縁でもあるようだ。前回は逃げる際に、今回は完全に妨害された。

奴と目が合った。あの時一俺が一撃もらった時と同じ、恐れはあったがしっかりとした目だった。当然だな。ここまで動けるのだから、かなりの覚悟ができている。そんな目だった。

あの籠手をつけたまままでいたから、窓を貫き、そのまま狙った。金色だったその籠手も、血を浴び、赤黒く染まっていた。血を燃やせるのは指の先端一爪の部分のみであるので、どうしても残ってしまう。

かすりさえすれば全て終わっていた。彼女も。もちろん奴も。

だが、二人とも無事だった。完全にかわされた。予想だにしていなかったためか、銃を向けられる様に反応できなかった。

仮面の耐久性に救われた。とはいえ、かなりの衝撃に一瞬もつていかれるところだった。視界が歪み、車体に突き刺した左手に助けられてなんとか落ちない、そんな状態だった。

歪む視界の中、なんとか奴を確認したまさにその瞬間、前から声が聞こえた。身を隠せ、と。車体の進路を見ると、冷たい色の壁が近づいてくる。直ぐさま車から腕を抜き、飛びのいた。

両足で着地するも撃たれた足がとうとう悲鳴をあげ、その場で足をついてしまった。…全く力が入らない。遠ざかる車をただ見ているしかなかった。

こうなってしまうばもう追いつけない。動けないのだから。…失敗か…。消されるのだろうか。それも…いいか…。

—

もう…追ってこねえよな。地面にうずくまって動く様子はない。助かったか…。

小さくなっていく黒い塊を見て肩の力が抜けた。その時だ。

『…苦しい…。』

突然腕の中から声がしたもんだから跳ねのいた。さっきからずっと抱いたままだったのすっかり忘れてた。

ターシェの意識が戻った。

第八十一話 鎮魂歌―感謝をこめて

「傷…痛むよな。本当に悪かった。“守る”つつたのに。」

ターシェを俯せに寝かせ、前に屈んで傷を抑えながら、心から謝った。謝ったって何にも変わんねえし、何にも終わらない。そんなことはわかってるがそう言わずにはいられない。情けないな…俺は。

顔色の良くなった顔をこっちに向け、ニツコリと笑いながらゆつくりと口にした。

『そんなことない。ジェイクがいなかったらきつと私はここにいなかった。だから、…ありがとう。』

ついさっきまであんな化け物とやり合ってたから、ターシェの笑顔が場違いな気がした。“ありがとう”って言われて、やっと逃げきれたんだと理解ができた。

『それに私も謝らないといけないことあるし…。』

「…え？」

ターシェの顔に影が入った。さっきの笑顔から一変し、泣き出しそうな顔。少し涙が浮かんでいた気がする。それでも話すのをやめなかった。

『私が悪いのにみんな巻き込んだじゃった。…本当にごめんなさい。』

話を聞いていた間、車内は静かなもんだった。

あの脅迫状が偽物だったこと、歌を聞かせるために俺を呼んだこと、警備を緩めろと言ったのは自分だと…。

正直、ターシェの話した事はすぐに納得できた。疑問に思っていたことだったし、何よりつじつまが合っていたから。だから、奴はあそこまで入り込んだ。そうなるって知ってたのか？

ターシェが悔やんでるのはハックたちが自分のわがままのせいで死にしまった事だ。あんなことを頼まなければこんなことにはならなかったんだ、と、自分を責めているんだ。

「ターシェのせいじゃねえよ。あんな奴が来るなんてわかんねえよ。悪いのはあの人殺しだ。」

そう言い返したが、態度は変えられなかった。

『それでも、私がいたからみんなが傷ついた。みんな…なんにも悪くないのに。あんな事思わなかったらよかったのに、私なんていなかったらよかったのに。』

「…やめろ。」

声押し殺して言った言葉が聞こえたみたいでターシェの口が止まった。

「ハックたちはお前に生きていて欲しかったから命放り出して闘ってきたんだ。そのお陰で今生きてんだ。謝る事より感謝しろ。静かに眠られるよう祈れ。守られた奴は下を向いてちゃいけない。あいつらの生き様見て、しっかり生きていかなきゃいけないんだ。だから

ら、しっかり前を見ろ。ターシェ・フィーメル。」

俺が話している間、ターシェはずっと俺の目を見ていた。見えていないはずだが、それでもそう思えた。一つ一つの言葉をしっかりと胸に刻むように。ステージの上で見たときのように頬を涙で濡らしながら。

少しの沈黙の後、少し震えが残っていたが、さっきよりも張った声で応えてくれた。

『…うん。天国のみんなが誇れるような人間になってみせる。…だから、今だけ、胸を貸して…。』

わかってる。人間そんな強くねえ。俺が言った通りに頑張れる奴なんて見たことない。そんなに軽いもんじゃないから。かなりきついことを言った。それでも、生きてかなきゃなんなんだ。人の命ってのはそれだけ重いつてことなんだ。だから、支えてやる手も少し強めにしないと倒れちまう。一度倒れると起きられないかもしれない。そんな姿、連中は望んでねえ。俺だって…。

今は思いつきり泣いちまえ。こんな胸でよかったらいつでも貸してやる。だから…負けるなよ。

着くまでの数分間、ターシェは声を出して泣いた。壊れてしまいうで、愛おしかった。…こぼれてしまわないよう、両手で包んだ。

第八十二話 はじまりの記憶

—おはよ—

—わかってるよ。大丈夫だって—

—行ってくる—

「やっぱり駄目だったみたいだよお。」

会場から真っ直ぐ戻ってきたから、もう我が家についちゃってる。あれから狼やんは近づけたみたいなのにまた失敗してやんの。役立たず。今まではなんだかんだでちゃんと仕留めてたのに。

にしてもお、後ろがさっきから気になる…。

『狼さん放っておいて大丈夫なの？』

セフィはその事気にしてたんだ。だから落ち着かなかったんだ。

「大丈夫だよお。死んだりしないし。」

笑って言ってるが、内心かなりムカついてる。何へまやってんだよ。自室に入っつてすぐにPCを動かす。セフィの事気にしてる暇ないし。あんまり遅くなるといけないしね。よい子は早寝だよ。遅起きだけどね。

—ただいま—

一真っ暗だなあ。電気つけなよー

「ほらほら居たよう。」

バカ犬発見。ドームの地下だね。発信機が動かないとこみると雑巾みたいになっちまってんのかねえ？ いいきみ。ちなみに死んだら発信機壊れるから生きてはいるよ。

「さてさて、歌姫さんはどこに逃げたかなあ。」

楽しくなんかないよお。でもこんな感じでないと頭が沸騰しそうなんでねえ。

歌姫さんのアドレスはもう知ってるからすぐわかる。打ち込んだらすぐ出て来た。やっぱし逃がしてんじゃん。

ドームから数キロってとこだね。病院結構近いじゃん。急いでよかった。ちゃっちゃと入っちゃお。

『トーイツシュは心配じゃないの？』

声が震えてる。本当に心配してんだねえ。でも、そんな事したって知らないよ。

「うん、これっぽっちもお。」

お、入った入った。って言ってもオレってバレないよういろんなとこ経由して病院のホームページに入っただけなんだけどね。こっから次はデータ管理用のPCまで潜らないといけないんだよね。した

いことするには…。

—誰もいないの?—

『トーイツシュって冷たいんだね。』

手が止まった。…冷たい?俺が?あんなけだものよりも?うるさいよ。何も知らないくせに。わかったように言うな。

「そんなことないよお。悪い子にはお仕置きするものでしょ?それと同じ。」

感情を表に出さないのはなれた。出さないって言うより出したくないの方が正しいかなあ?たまって寝たら全部忘れちゃうし全然平気。

『…トーイツシュは…何してるの?』

「探検〜。」

データベースまできた。こっから少しお待ちを。お楽しみには我慢があるもんだよねえ。

—…とーさん?かーさん?—

さーて第二ラウンド開始までカウントダウン始まるよ〜。がんばれ〜歌姫さん。

第八十三話 オーディンの槍

ターシェが泣き止んで間もなく、車は病院に着いた。バンと共にターシェを連れて行くとすぐに治療を受けるため手術室へと運ばれることとなった。

「俺達はここで待ってるよ。がんばれよ。」

『うん。』

担架で運ばれる姿を見て何か言わずにはいらなかったんだが、中途半端な感じになっちゃったな。

『ジェイク、バン君本当にありがとう。』

『そ、そんな、ターシェさんが助かったのは先輩のお陰ッスよ。自分は何にもできなかったんスから。』

「そんなことねえよ。お前がいたお陰だ。」

ターシェが傷ついてからは俺は完全に動揺していた。何をすべきか見失っていた。ステージから逃げ出すのも、奴を振り払うときも、かなり助けられた。

『いいコンビだね。ジェイクってちょっとドジだけど、よろしくね。』

『は、はいッス。』

「おいおい、誰がドジだ。訂正しろよ。」

さっきまでのことが全部悪い夢だったみたいに薄れていく。忘れたいはしない。二度とあんな危ない目にあわせないう、しっかり守らねえとな。もう二度と…。

「どうやらそろそろみたいだな。」

白衣を着た連中が来たのが見えた。これからターシェの傷を塞ぐ。あの傷なら綺麗に見えなくなるだろうな。他にも検査をするだろう。つても、強く打ったりしてないから斬られた傷以外はないだろう。

『じゃあ、またね。』

手術室へと消えていく前にターシェが微笑みながら優しく言った。

「ああ。」

久しぶりに笑みが自然に出た気がした。

—

一昨日強盗が入って一家惨殺ですって。唯一家にいなかった長男だけ助かったそうよ—

「きくたきた。」

全く待ちくたびれて死んじゃうよ。何分待たすきだよ。五分も待ったんだよお。

えーと、そ、この、手術室に行くにはっと。壁一個越えなきゃいけないのか。医者のパスありゃいけるか。さっき管理のところで履歴あさったとこにあったのが…、よしよし、入った入った。さあて、こっからなんだよなあ、固いのは。何十にも層があるから通りにくいっただらありゃしない。…あれを使うしかないんだよなあ。

—私のところに来なさい。お前に生きる術をやる—

—ただし、覚悟があればだが—

「あのさあ、俺が冷たいって言ったよねえ？でもホントはとってもやさしいんだよ。」

足を勢いよく振ってイスを回転さして、セフィーの方に向いた。

「なんたって狼ちゃんができなかったことを代わりにしてあげるんだからあ。」

やっと俺の言いたいことがわかったみたいで、下を向いてた顔を上げた。顔色悪いねえ。ビビっちゃったのかねえ。

「どうしたのお？恐いのかなあ。大丈夫だよ、あんな気持ち悪い声なんて聞こえないし、キー押すだけだよお。」

俺の言葉に首を振る。何が？

『ちがうの。声とかじゃなくて…、よく…わからない。』

あつ、そう。もうちょっと骨があると思ってたのにここまでかあ。まあいいや。

「よこせ！あいつにケジメつけなきゃ生きていけない！」

「じゃあちよつとウルサイけど…いくよ。」

「殺人プログラム。だっさい名前。せっかくだからかつこよくいこ」

実行。部屋中のモニターが全部真っ赤になり、ブザーが鳴り響く。
慣れてないからうるさくてしかたない。

「誰も避けられない裁き」

そして、赤いモニターに文字が映る。今日の主役の登場だ。

「オーデインの槍」

第八十四話 偽りの安息

手術室前、幅の広いイスに深く座った。だらしねえ格好だな。気にするほど体力なかった。

『先輩、どうぞ。』

ホント、気が利くよな。

「悪いな。」

バンが差し出したコップを見ると思い出したみたいに喉の乾きが鮮明になった。と、なりやあ一気に飲んじまう訳だ。コップを逆にするまであつと言う間もなく飲み終えた。

飲み終えてやっと考えが廻るようになってきた。今頃かって感じだが、かなり違和感を覚える。

「…なんで、ターシェは生きてんだ？」

『…え？』

かなり問題発言をした俺を疑惑と憤怒を抱いた表情で見るバン。当たり前だよな。ターシェが生きていてくれたのは嬉しい。ただ…。

「ステージで…なんであいつは斬る力を緩めたんだ？半身吹っ飛ばしたりとかしてきた奴が。今更躊躇なんてしないだろ？」

心の中に燻る疑問をそのまま言葉にした。その言葉は中に漂うだけ

で誰かに向けた訳じゃない。届かない言葉に答えが返ってくる訳もない…。

『わかんないツスけど、今は…。』

時間が止まったみたいに静かだった。動かしたのはバンの方だった。

「そうだな。…悪い。」

今はターシェが助かった事を喜び、帰りを待ってやるべきだ。気にはなるが、今は忘れるか。

『これからターシェさんどうするんスカね？』

「それでも、歌、続けるだろな。あいつの夢だし、それに俺の言葉ちゃんと受け止められてた。あいつは強いから大丈夫さ。」

…気のせいかな？言い終わった時に見たバンの顔がこれでもかって位にやけていたぞ。

『先輩って、あんなキザな事言える人だったんですね。』

こ、この野郎！そう言われて今になって恥ずかしくなってきた。…どんだけいっぱいだったんだよ。まだなんか残ってないよな？

「うるせえ。」

あの時はそう言わずにはいられなかったんだ。しゃーねえだろ。

身内が殺されて、魂が抜けたようになって、憎悪で復讐に取り付かれたり…、以前の自分を完全に失った人間を何人も見てきた。…見れたもんじゃない。一度落ちたらそうはい上がれない、奈落到ちたかのように一。

ターシェにそんな風になって欲しくなかった。だから、あんな言葉がでたんだろうな。まあ、俺の先輩の言葉なんだけどな。受け売ってやつだ。

『なら、余計早くあの“犬”捕まえなくちゃなんないツスね。』

やっと不気味な笑みがひいたな。…その通りだ。ターシェがまた活動できるようになるにはあいつを確保する必要がある。次逢ったら覚えてやがれよ。ぼこぼこにしてやるからな。…にしても一。

「“犬”かよ。」

『はい。“犬”ツス。』

二人して笑った。なんかわかんねえがツボに入った。急にスピードが上がったときに見せたあの姿が犬が威嚇するときみたいだったのを思い出したからかな。

「よっし！ターシェの件が一段落したら一。」

“ブンツ”

突然廊下中のライトが消えた。手術中を示す赤いランプだけが不気味に灯っていた。

『い、一体なんスか？』

直ぐに明かりが戻った。たいしたことなかったのか？突然のことに考えが廻らなかったが、ただ不安だけが心に浮かんた。

嫌な予感なんてのは当たるもんだ。するんじゃないかった。後悔したって何も変わらないが、何度も何度も心に爪をたてた。

第八十五話 天使墮つ（前書き）

小説の一部を以下二点修正しました。間違った情報を書きまして申し訳ありませんでした。

・ターシェの名前が一部、ターシャになっていました。正確にはターシェです。

・この第85話で、オーディンをギリシャ神話の神と書いておりましたが、正確には北欧神話ですね。

後、オーディンの槍の名前はグングニルという名前です。名前を直接使用しないのは、イフリートの腕と対にしたかったためです。

さらに、三つ首の番犬、ケルベロスの名前より、フェンリルの方が狼なので、適していると思っていたのですが、どうもフェンリルは神話の中でオーディンと絡みがあるようなので、ギリシャ神話のケルベロスの名前をお借りしました。三つ首じゃないんですけどね。

以上、裏話でした。それではどうぞ。

第八十五話 天使墮つ

真っ赤に変わってたモニターの色が緑になり、けたたましいブザー音が止まった。“Complete”と表示された文字がとても冷徹に見えた。

「一体…何をしたの？」

恐ろしかったけど聞かずにはいらなかった。さっき言ってた言葉で予想はつくけど、それでも…。

『全部説明すると長いからちよつと省くよお。』

—

手術室から人が出て来た。さっきの白衣じゃなかった。…表情が固いが何か…。

『今のはいったいなんスか？』

「わかりません。これから確認してくるところです。」

彼らにとっても不測の事態なのか、焦りが見えた。だが、俺にはそんなことはどうでもよかった。扉が閉まる寸前に聞こえた音が、どうしても気になっていた。

『き、君！』

出て来た医者が俺が入ろうとするのを止めようとしたが、聞く耳を

もっていなかった。

気のせいでいてくれ。

—

『姫さんが向かった病院に先回りしたんだあ。もちろん、ネット上でね。』

トーイッシュが誇らしげに話している。普段ならなんとも思わないのに、胸が締め付けられるみたいに痛む。

『んで、運ばれた手術室に入り込んで、さっきの使ったんだあ。』

私の心の中とトーイッシュは全く反対になってるんだろうね。すごく楽しそうに話している。

「オーディンの槍？あれは一体なんなの？」

重く、冷徹な、あの感じ。聞かなくても恐ろしいものだと分かる。

『北欧神話のオーディンって知ってるう？俺も詳しくは知らないんだけどお、その神様の持つてる槍、投げたら百発百中なんだって。だからねえ、その名前をつけたんだ。必ず：裁きが下るように、ってね。』

「裁き…。」

—

『入るなと言っているだろうが！』

後ろにいる医師が声を張り上げて怒鳴る。駆け寄ってきて、肩を掴まれ、その手を払いのけても止めようとする。俺は例えようのない不安に襲われてかなり焦っていた。ただ早く入らなければ、と。だから、邪魔をするこいつは――

敵だった――。

“ドスッ”

腹に一発重いのをいれちゃった。当たった感触で目が醒めた。わりいことしたとは思ったが、止まってる時間はない。扉の方へと振り返ってもう一度手をかけた。

――

『言葉通りだよ。本物の槍じゃあないけどねえ。』

トーイツシュは話すことに夢中になってる。きっと途中じゃ止まらないと思う。

『手術するとき、必ずチップから脈拍とかのデータを取り出すんだあ。つまり、その時は外部とチップが繋がるんだよ。普段はかなり固いガードがあってね、せいぜい位置情報しか取れないんだあ。まあ、普段はこれだけで全然オッケーなんだけどね。』

一呼吸ついてまた口を開く。

『それで、橋が架かってるみたいなものだからあ、渡らせてもらっ

てチップ内に到着う。それでねえ、チップの緊急時用の機能を無理矢理動かしたんだあ。』

「…緊急時用？」

『そうそう、チップがどこに付いてるか知ってたらあ、だいたい分かるよお。』

—

扉を開いた。

目に写った世界のはステージ上でのような…夢の中みたいにぼやけていた。医師たちがなんか言ってるが音だけで何を言っているのかわからない。俺に気付いてるんだろう、こっちを見てる奴もいるみたいだ。ただ、あの音だけは鮮明に聞こえた。

—

「…何？」

トーイッシュの口がはつきりとわかるほどつり上がった。何がそんなに面白かったんだろう。

『本来は命を救うもんなんだけどねえ。物は使いようってことかなあ。』

—

“ピーーーーー”

ついさっきまで考えられなかった最悪の未来が、そこにあった。

第八十六話 代償

『電気ショックってやつだねえ。心臓が止まったら電氣流してまた動かそうとするやつ。あれをねえ、電圧あげておもいつきり流してやったのさあ。そのロックがねえ、いろいろ大変な訳なんだあ。だから、やってもらったんだよねえ。』

生きてる人に？そんなの：助からないじゃない。

『全部バカ犬が悪いんだよお。しっかりしないからこんなことになるんだ。：そういうえば、肝心のワンコはどこにいったのかなあ。』

そういつてまたモニターの方に向きを変えてキーを押しはじめた。

トーイッシュのイメージが一変した。こんなに冷徹で恐ろしい人だったなんて…。

人間はみんな表裏があるのかなあ。

『なんだあ、戻ってきてるじゃん。』

狼さんを見つけたみたい。下にいるのかなあ。きっとまたケガをしてるんだと思う。手当しないと。

『あゝ待って待って。セフィーは部屋にいてえ。先にお話ししないといけないからあ。』

私が部屋から出ようとしたのに気付いてトーイッシュが私を止めた。しようとしたことがバレバレだ。

「で、でも、またケガ―」

『聞こえなかったのかなあ？お部屋で待っててくれるう？』

怒鳴る訳じゃなく、静かに、ゆっくりと言われたのに、鳥肌が立つくらい恐かった。何を言っても無駄なんだ。

「わっ、わかった。」

『いい子だねあ。ありがとう。すぐ終わらせるよ。』

納得できなかったけど、言う通りにするしかなく、部屋を出た。

—

さすがにきついな。隠しておいたバイクに乗り、運転してきたが、目が霞み、何度か危うかった。足を撃ち抜かれ、他に数発受け、コンクリに打ち付けられ…。それでもなんとか戻ってきた。

失敗して、それでも帰ってきた。何故かなんてわからない。この業界がそれほど甘いものでないことぐらい十分にわかっている。俺を生かしておくはずがない。…帰る場所がここしかないから、なんだろうか。

左足を引きずり、エレベーターに乗り込む。ボタンを押す手が少し震えていた。やはり血を流しすぎたのだろうか。でなければ震えることもないだろう。

エレベーターの扉が開き、いつもの部屋につく。見慣れているはず

だが、どこかいつもとちがうように感じる。変わらぬ静けさが妙に違和感を出していた。

向かうのは相棒がいるコンピュータルームか。足を引きずり、壁にもたれながら進む。一步一步が重く感じた。

扉までたどり着き、ノブを回す。少し甲高い音をたてながら開く。でかいコンピュータの前の定位置には、くしゃくしゃの髪が見える。

『お疲れえ。そこに座ってえ。』

普段は置いていない椅子。部屋の真ん中に置かれたそれを指しているのだろう。俺は何も返さずそこに腰掛けた。

『ねえ、狼さん。今俺は猛烈に頭にきてるんだあ。…なんで分かる？』

「俺のせいだ。」

席を立ち俺の方へゆっくりと近付きながら言葉を放つ。前を向くのも疲れ、俯いたまま返した。

それがカンに障ったのだろう。

“バンツ”

四つ足で立っていた椅子が一つ欠け、俺の身体ごと後ろに倒れた。斜めに倒れたため、椅子から完全に離れた。横に移った気配は、俺の胴を踏み付けた。

『ああそうだよ！てめえがヘマなんてしてっからだよ、バカ犬！散々好きなことさせてやってんだ、てめえの仕事ぐらいこなせ！』

頭の近くで、カチリツ、と金属音がした。

『俺をなめんなよ。てめえを殺すぐらい俺にだってできんだぞ！』

“バンッ”

第八十七話 知らぬ痛み（前書き）

大変遅くなりましたが、明けましておめでとうございます。今年も Clored World をよろしくお願いします。

第八十七話 知らぬ痛み

「ぐっ…。」

頭に向けられていた銃口は引き金を引く直前に向きをかえ、放たれた銃弾は右肩を突き抜けた。左手で傷を押さえたが、その手を踏み付けられた。

『でもねえ、死んでもらっちゃあ困るんだよお。てめえの同類探し出して殺すまでえ、頑張ってもらわねえといけないんだよお。』

「……ッ！」

踵で手を踏みにじる。痛みで声にならない声をもらした。

『お姫さんの事はもう心配ないよお。もう終わったからあ。』

口調が少し落ち着いたが声色がまだ低い。ただ、終わったとはどうゆうことだ？表情から読み取ったのか、相棒が付け足した。

『俺にだって人一人殺すくらいできるんだよ。』

傷を踏んでいた足をどけながら、続け様に言う。

『もう休んでいいよお。言いたいことこれだけだし。でも…次はないからね。』

「ああ、わかった…。」

そう答えたものの、何も考えられなかった。

『そうそう、分かればいいんだよお。じゃ、もう戻っていいよ。』

背中を向け、イスへと戻って行く。残された俺は痛みを堪えながら、部屋をでた。

—

銃声が聞こえた。恐くて目を閉じた。力いっぱい。

あの時の光景が目の前に広がった。ステージで人が燃えていく…。

胸がくるしくなった。理由なんてやっぱりわからない。だから余計に恐い。ただ堪えるしかなくって、ベットのなかで、震えを止めようと、丸まっていた。

結構な時間が経ったと思う。やっと震えが止まった。ベットから起きて一番最初に思ったこと—狼さんに会わないと。わからないこの震え、狼さんならきつとわかる。だって—。

部屋を出て狼さんの部屋にいったんだけど、そこにはいなかった。トリーツシュに聞こうかなとも思ったのだけど、今のトリーツシュに話しかけるのは気が引けた。

どうしよう…と思ってたら、床に赤いものが見えた。血だ。きつと狼さんのだ。廊下の明かりが少し暗くて見えなかったけど、どうもエレベーターとトリーツシュの部屋の間にしかついてなかった。部屋にいるときに誰かが前を通り過ぎる音を聞いたから…、もしかして、エレベーターで違う階に行ったのかな？そう思ってエレベー

ターに乗ろうとした。

やっぱり違う階に行ったみたい。エレベーターが一番上から下りてきた。屋上：なのかな？目の前の扉が開いた。：やっぱり狼さんみたいだ。床に血がついてる。大ケガしてるはずなのになんでどっかいっちゃうのかな？早く行ってあげよ。ちゃんと前に貰った治療道具を持って一番上のボタンを押した。

第八十八話 命

やっぱり屋上だった。エレベーターが着いて、扉が開くと、暗い小さな部屋があつて、その奥にまたドアがあつた。金属で出来て、少し重かつたけど、それでも押し開けた。

外は：明るかつた。眩しいって言うほどじゃなかつたけど、はっきりとそこにいる人はわかつた。手摺りの一部だけ空いたところの手前に足を組んで座つてた。背中を見ただけでもわかる。血がついてる部分が色が変わつてゐるから：。痛そう。

『よくわかつたな。』

顔は向こうを向いたまま話しかけてきた。なんて声をかけようかし迷つてたからちようどよかつた。

「うん。血が付いてたから。」

『そうか。』

寂しように応えた。いつもの大きな体が今はとても小さく見える。傍にいてあげないと。なんとなくだけど、そう感じたんだ。だから、狼さんの隣に座つた。視線の先には明るい光で輝いてる街が見える。

「狼さん…ごめんなさい。」

『ん?』

最初に言いたかつたこと。それは狼さんへの謝罪の言葉。私が間違

っていたから。

「なにも分かってないのにあんなこと言って。」

『…どう感じた？』

言葉に表せるような、はっきりとしたものじゃなかった。命が消える…その瞬間。胸が締め付けられるような…脈が激しくなって、苦しくなった。呆気ないくらい、簡単に死んでしまうのに、残るものはすごく重い。だけど、その残るものがなんなのか、よくわからない。

『…あくまで俺の考えだが、』

全て話しきって、狼さんが続けてくれた。

『“殺す”とは、“命を奪う”ということ。奪うというからには殺した人間の命を貰いうけるわけだ。命とはその人間の全て。記憶や想い—あらゆるものだ。だが、生きている人は既に自分の命を持っている。到底持ちきれぬものじゃない。奪った命は負担となってしまう。それが罪であり、罰なのだ。』

そんな風に思ったことなかった。ううん、私はずっと与えられた知識を詰め込んでただけ。狼さんはすごいなあ。

『これは直接見なければ見当さえもつけられないものだ。お前はあの場所にいたから、その片鱗を目にし、その“重さ”に恐れを抱いたんだ。…それで当然なんだ。』

やっぱり私が間違えてたんだって、改めて思った。人は戦争ばかり

している、ろくでもない連中だって、だから、人の命を奪うってことは全然悪いことじゃないって、ただそう教えられたからそうなんだと思ってた。自分じゃ何にも考えてなかった。

「私…シンに連れだしてもらってよかった。やっぱり、外に触れられてよかった。」

ふと、いつもと違う呼び方になっていた。向こうも気付いたみたいで、少し驚いていた。

『…あんなものを見たのにか？』

「だから余計にだよ。他の人と関わってこそわかるものなんだもの。あの中にいたらずっと間違ってたままだと思う。」

そういう私を見て、シンは少し微笑んでいるみたいだった。

『そうか…。』

だけど、悲しみを含んでいるようにも見えた顔を見て、今になって疑問に思った。

「でも…なんで、こんなに辛いことをしようと思ったの？」

トーイツシュに追い出されてからずっと気になってた。なんでそんなに命の重さが分かってるのに、一体どうしてなんだろう。シンは少し目を細め、月を見上げた。何か考えてるみたい。辛そうな顔をしながら、私に言った。

『…少し俺の話をしよう。』

第八十九話 零の舞

五年前になるか……。今の俺と全く異なる俺だった頃だ。こんな身体でなく、他人との繋がりもあった。妻と幼い娘がいて、仕事も充実し、人生で最も幸せだった。

それは突然だった。

仕事を終え、家族の待つ家へと向かっている時だった。少し冷えていて、帰路を急いでいた。

ある角の街灯が故障していたのか、月明かりが届かずうつすらと先が見える程度だった。向こうから近づく人もいるということしかわからなかった。

“ドスッ”

すれ違うまさにその瞬間だった。腹に何か当たった感覚がした。

気にも止めていなかった通行人が随分近くにいた。ぶつかってしまったのか。道をあげようと左にどこうとして、やっと違和感を感じた。：身体が重い？瞬間、足に力がいらなくなった。立ってられず、膝で立つ。ここになってやっと痛みが身体中を廻った。腹部には柄の部分のみが奇妙に出ている。周りからは真っ赤な染みが広がっていく……。ついさっきまで近くにいた人影はもう既にいない。残っていた。周りには他に誰もいない。死ぬのか？俺は？大切な家族を残して？

ほんの少し前まで当たり前だった光景が目の前に広がっていく。：

あれが走馬灯というもののなんだろう。意識が薄れてくるとそれさえも見えなくなっていく。

ただ死にたくない、そう思うだけで精一杯だった。

そして、全てが闇になった。

どれだけの時間がたったのかわからない。光を…感じたんだ。眩しいくらいの光を。

目を開けた。ずいぶん眠ってたことになるんだろう。簡単には瞼は開かなかった。光源は真上にあった。手術室にあるような巨大なものだ。左右を見ると、レントゲン写真やメスなんかの道具が見えた。どうやらここは手術室のようだ。不思議と頭はすっきりとしていた。ただ、違和感にはまだ気づけなかった。

そうだ…俺は刺されたんだ。だから手術を受けてここにいるのか…。そう考えれば安心できた。俺はまだ帰れると。

ゆっくりと身体を起こす。力が入らず、何度か崩れたものの、少しずつ感覚が戻ってきてようやく起き上がれた。ここでふと思った。…誰もいないのか？患者一人手術室に置き去りになんて…。奇妙に思ったものの、考えていてもしかたがない。誰かに知らせるしかない。

足を横に滑らせ、台から下りた。さっきまででだいぶ感覚が戻ってきたのか、ふらつとはしたものの、倒れずにはすんだ。壁につきまりながら、扉へと近づいた。開くかどうかなんてわからないが、扉を開こうと手を出した。この時、目が覚めて初めて自分の腕を見た。腕にはイフリースの腕が着けられていた。金色の腕。名は内側に彫られていた。見た瞬間はかなり驚いたものの、自分の腕に着けられているだけだと分かると、少しほっとした。

なぜこんなものが……。自分の腕に何かあったのかと不安になり、それを外した。そもそもこんなものを着けているのに、なぜ気付かなかったのか、と疑問に思ったが、自分自身の腕を見た瞬間にそんな疑問はどこかへ消えた。

異質なそれを見て現実だとは到底思えなかった。皮膚が見えないほど黒い体毛に覆われ、爪は以前の二倍は長く、鋭くなっていた。

何かの間違いだ、そう思い、もう片手で改めて腕を触る。触り、触られる感覚はしっかりとある。それどころか、もう片手さえも化け物のようなだった。かなり動揺し、出ることよりも、自らの姿を確かめることの方が先決だった。鏡を探そうと周りを見ようとした。……俺はまさに固まった。頭の中さえ働かない。全身を写し出せるだけのひび割れた鏡には、この世のものとは思えないような生き物がいた。全身真っ黒な化け物。

「ウオオオオオオン！！」

受け入れられるはずもなく、拒絶するように叫んだ。だか、その声はさらに自分が人とは違うものであるという現実をしめすものでしかなかった。

第九十話 光に縋る

肉体的に変化してしまっただけならなんだろうが、初めはまともに言葉を話せなかった。出せたのはまさに獣の唸り声だけだった。いくら自分自身で体感しているとはいえ、今の現状を受け止められるはずがなかった。夢である信じ、目が覚めることを待った。だが、そんな時は訪れなかった。今も一。

助けを呼ぼう。とにかく人に会わないと。

少しでも安心したかった。今の状況を打開できずとも、共にいてくれる人が必要だった。

さっき触れた扉には鍵がかかっていた。誰かと会おうと必死だった俺は何度試しても開かない扉に怒りをぶつけた。

“ガン！”

：扉が開いた。映画のように蹴り開けた。ただ、扉は無事ではないようで、足が当たった部分がかなり凹んでいた。金属製の扉に跡が残るだから、その時から筋力が格段に上がっていた。それどころじゃなかった俺は開いたことだけにしか関心がなかった。蹴り飛ばした扉がまだ震えている内に外に飛び出した。

外に出ても不安が消えることはなかった。そこに人はいなかった。むしろ、長い間誰もいなかったように壁や床にひびが入り、窓のない閉鎖空間がさらに俺から希望を奪っていく。外に繋がる扉はないか、必死に探した。

扉は：見つかった。

しかし、その扉はあまりに場違いだった。

この扉だけが妙に新しく、生体認証によるロックがかかっていた。職場にもあったシステムだが、なぜこんなボロい場所に、と、さすがに違和感を感じ、すぐに立ち寄ろうとは思わなかった。そもそも開けるには網膜をスキャンされる。俺のが通るかなんてわからない。むしろ、通らない方が自然だ。：とりあえず、保留して他を調べたものの、他に出口らしいものはなかった。

通れるなんて思わなかった。当たって碎けろ、とその程度の考えだった。カメラに近き、右目を開いた。ここが通れなければ俺はどうなるのだろう。誰かが来るまで待たなければならないのか？最近つけられたような新しい扉があるから誰も来ない、なんて事はないんだろう。ただ、訪れる奴らは俺をこんな身体にした連中しかない。目的はわからないが、いい方向に進むはずがない。：どうすればいいんだ？

“ガチャッ”

考え込んでいる間に認証は終わっていた。今の音、開いたのか？恐る恐る扉を押すと確かに開く。奥には白い明かりに照らさる、真っ黒な壁に囲まれた廊下が続いている。ここにいてもしかたがない。開いたことに疑問をもちながらも進むことにした。

時間感覚が狂っていないければ、だいたい数分程度だろう、突き当たりにまた扉があった。黒い木製の扉。また鍵がかかっていたが、今度は壊せということなのだろうか。さっきと同じように扉を蹴り上げた。：少し馬鹿だった。さっきとは違い、木なのだから薄ければ

穴が空くだろうに。扉には大きな穴が空いたものの、通れるようなものではなかった。しかも、足を抜く際、破片で軽く足を切った。軽率さを恥ながらも空いた穴から腕を入れ鍵を開けた。

ライトはついておらず、真っ暗な部屋。スイッチは入ってすぐだったため、時間をかけずにすんだ。明かりが照らした部屋に俺は鏡を見たときのように驚いた。

武器…いや、兵器庫だった。

第九十一話 世界の異物

中央だけでなく部屋の隅々に透明なケースが広がり、サイズの様々な銃、刀、矛……中には使い方のわからないものもあった。全てが全て異質な光を放っていた。あそこで見たもので記憶に有る限り、既製の物と全く同じものを見たことはない。イフリートの腕同様、何か特別なものだろう。

そんな知識などなくても、たかが一サラリーマンでしか俺があれば、ど大量の兵器を前にして平常でいられるはずがなかった。ここにいたままでは何をされるかわからない。目が覚めてから一番強くそう感じた。突然、人に遭うことが恐ろしく思えた。逃げ出そう。誰かに見つからないように、と。

入ってきた扉と対角にまた扉が見えた。どこまで行けば外へ出られるのか。扉は延々と続いているのではないかと不安を抱いた。それでも一本道なのがせめてもの救いだった。

扉に触れられる距離まできた。できれば少しは希望の見出だせるような部屋が広がって欲しい。そう願いながら扉を開けようと手を伸ばそうとした。

武器を持っていった方がいいんじゃないか？

こんな部屋があるのだ、武装した人間がいるかもしれない。だったら、何かしら持っていた方が……。いや、銃なんて使ったことはないし、他の物も大して使いこなせない。そもそも、ケースを壊したら誰か呼ぶことになりかねない。そっちの方が危険だ。だとしたら……。

“ガチャッ”

自らの腕に着いていた金色の籠手。外した後、とりあえず左手で抱えていた。これならいわば素手のようなもの。他よりはよっぽどマシだろう。もう一度着けることにした。

そういえば、先に包帯が巻かれていたんだった。さっきの怪我に巻いておこう。痛みはなかったが、血は出ているはずだ、と傷口を探したが、血の跡は毛に付いているものの、傷口が全く見当たらない。破片に血が付いていたように思ったのだが、気のせいか、それで済ましたが、実際は怪我をしていただろう。あの時は全く気が付かなかったが、治癒力が強まっていた。常人の何十倍も。こんな俺を造った奴らの技術はどれだけ先のものなのか…。

結局、傷を見付けられず、包帯はその場に捨てた。外す時とは真逆の順序で着け直す。着け終わって改めて感じた。重さや圧迫感…違和感を全く感じない。身体の一部のように馴染む。俺のために造られたようなそれ…。少し心強く思えた。

しっかりと着け終わり、今度こそ扉を開いた。

また同じ真っ黒な廊下が続く。どこまで続いているかわからない。終わることはいんじゃないか…。進んで行きながら、不安ばかりが大きくなった。

だが、この不安は終わることになった。より悪い形で…。

第九十二話 広がる恐怖

あまりにも突然だった。

“ドカアアアン！”

数歩前の壁が爆音と共に吹き飛んだ。衝撃で後ろに吹き飛ばされた。壁にぶつかり、勢いは止まったものの、背中に痛みが広がる。一体何なんだ、と崩れた壁へと目を向けた。

穴の向こうから光がもれていた。そして、照らしだされている一つの人影。逆光のせいではっきりとは見えなかったが、目の前まできてはつきりとわかった。武装した兵士だ。恐れていた現実に怯え、身体が動かなかった。

『動くな。』

銃を構え、たったそれだけを口にした。いや、たったそれだけで十分だった。俺は動けなかった。ただ、その中で頭だけはよく働いた。こいつは俺を捕まえにきたのか？俺をどうするのか？…だが、逆に悪い方にしか考えられず、むしろ、何も考えられない方がマシだった。

人影はさらに増えた。穴から三人増え、全員で四人。顔の鼻から上はゴーグルのようなもので隠れていて、身体のサイズ程度でしか区別できない。内二人が俺に銃を向け、他二人で外部と連絡をとっているようだ。

『はい、今確保しました。』

離れている二人の内、背が高く、細身の男が話している。

無線を使っているんだろう。これから俺をどうするか決めるのか……。この人間たちなのだろうから、いいことは起こらないだろうな。……もちろん、かなりの恐怖で心が満杯だった。ただ、あまりにも日常から逸脱した事しか起こらないからだろう、頭と心が離れ、第三者として見ているかのように頭は冷静だった。

『…はい、了解しました。』

二言目にはこの言葉が続いた。今思えば、俺の処置は予め決められていたのだろうな。背の高い男がゆっくりと近づいてくる。

『立て。…私について来い。』

短く、必要最低限の事しか言わない。だからこそなのか、威圧的で拒否することなど微塵も考えられなかった。恐る恐る立ち上がり、その男の後に着いていこうとした。

“ ヲァァァン！”

「……………ッ！」

足に響く痛み。耐えられずにその場に崩れ、少しでも和らげば、と痛む場所を抑える。右足の太股から赤く、生暖かいものが溢れていた。

『…生かしておくのが命令だぞ。』

背の高い男が強く言う。俺の右側にいた、銃弾を放った男は悪びれることなく返す。

『こんな化け物何してくるかわかんないからなあ。用心ですよ、用心。』

痛みを受けてやっと頭と心が繋がった。恐怖が意識さえも蝕んでいく。まだ、死にたくない、と、心の奥底から悲鳴を上げた。

『それに一発や二発すぐ治るんでしょう？もう一発撃つときましようか？』

銃をもう一度構えてきた。そこまでは覚えている。ただ、銃口が目に映った瞬間からぷつぷつと記憶がない。

気が付いた時には何もかもが終わっていた。

第九十三話 本能

今、目が覚めたかのように切れた意識が戻った。

そこからはさっきまでいた連中が消えていた。

周りを見渡し、どうなっているのか、今を確認した。

撃たれた右足の傷は残っていたものの、痛みは少しましになった。まだ痛むが……。ただ、他にも傷が増えていた。身体中が痛い。

壁にはあの大きな穴以外に小さな穴がいくつも開いていた。周りにひび割れがあるのを見ると、銃弾でも当たったのだろうか？

少し歩くと足に何か砂のような感触が広がる。しゃがみ、手にとってみる。黒い砂……。灰か。なんでこんなところに――。

『ぎゃあああああつ！』

思い出した。俺は大変なことをしてしまった、と。

ステージの上でのことを見ていだろう。なら、大体予想がつくだろう。

意識はあった。だが、止まらなかった。止められなかった。

銃を向けられたまさにあの瞬間。自分自身の意識とは違う何かが腕を動かし、爪を立て、腹を突き刺した。向けた銃の引き金を引く前に、流れた血から火が広がった。炎が全身を覆うまでに引くことは

なかった。

『ぎゃあああああ！熱い！熱い！』

火だるまになりながらも身体を転げ、消そうとするも体内から燃え尽くす炎からは逃れられる訳もなく、その動きは止まった。

『射殺しろ！』

リーダー格の男が言う。ほとんど同時に三人が銃を向け、引き金に指をかけている。その動作がまさにスローモーションのようにゆっくりと見えた。俺の心は止まったまま、身体だけが動き出した。右端にいる奴の俺から見て右側へと移動するのとはほぼ同時に爪を揃え、切りつける。ちょうどラケットを振るような動きだ。たったそれだけで人の命を奪えるなんてな。切り口から、火がめぐり、二人目の被害者となった。

まだ燃え切らない内に残りの二人が狙いを定め、銃弾を撃ち出す。銃声と同時に態勢をおとす。そのまま二人に近づいて行く。その間も撃ち続けてくるため、何発か当たったが勢いは殺さず二人に目掛け腕を伸ばした。左手は腹を貫いたが、右に手応えはなかった。

一人だけ残った。リーダー格の男一人。手を伸ばしたさらに右へと飛びのいていた。すでに態勢を立て直し、俺の頭に狙いを定めていた。

狙いを定める、か……。銃弾までは見えないが、引き金を引くその一瞬を何倍にも感じられるのだ、避けるなんて造作もない。狙いをつけることは俺に対して隙を作ることにはかならない。本能的にその事を理解したのだろう、あの時の俺はそういう振る舞いをしていた。

銃口を向けられたままでも動こうとはしなかった。敵が一人だけになったのだから、最も隙のできる瞬間を待っているのだ。

『…バケモノめ。』

引き金にかかった指がゆっくりと動いて行く。完全に引き切る寸前で、態勢を落とし、足に力をいれ、一気に近づく。そして、また犠牲者が増えた。

今思うとリーダー格の男はもう逃げられないとわかっていたのかも知れない。だから、あんなにも潔く引き金を引いたように感じた。

第九十四話 起因

こうして何年も経ち、殺し屋を続けているからこそ全て思い出すことができる。だが、あの時の俺に耐えられるはずがなかった。あの耳に残る悲鳴。それだけでも重過ぎた。

断片的な映像も頭を過ぎる。腹に腕を突き刺し、燃え上がる人間。まともでいられるはずがなかった。そして、追い討ちとなったのがあの言葉。

一バケモノめー

俺は身だけでなく、心までバケモノになってしまったのか？頭を押さえ、うずくまる。身体中が震える。人の命を奪った。あの時の自分がなんだったのかわからない。だが、この事実は変わらない。

次の瞬間には俺は走り出していた。逃げたかった。この現実から。この事実から。逃れることができるはずもないが、俺は走り続けた。いくつも扉を開き、部屋に入るも、一体どんな部屋だったのか、また、いくつの部屋を回ったのか。部屋を回る時間が永遠だとさえ思えた。どこまでもどこまでも続いているように。そして、最後の扉を開けたとき、隙間から強い光が漏れていることに気が付いた。早くこの悪夢から逃れたい。力一杯扉を開いた。

光の中で、俺はまた意識を失った。どうしてかは今になってもわからない。ただ、それまで眠っていたものよりも短かったことは確かだ。

『どう※※つも※※よ！』

眠っている間に聞こえたのか、断片的な会話が頭に残っている。

『※の同類と※※しろだと！ふ※※るなよ！』

声を荒げ怒鳴っている男。

『だが、君の※の唯一の※※※※なんだ。何か分かるかも※※※いだ※う。』

正反対な態度を取る男。二人の声はハッキリとは覚えていないが、怒鳴っているのはどうも相棒だったように思う。相手は…依頼者だったのだろうか。

目が覚めると俺はベットで寝ていた。周りは白で統一され、病室のような印象を受けた。ただ、ここにも窓はなかった。

記憶が混乱していた。何があってここにいいのか？どうだったのか？

上体を起こし、その時に目に入った腕を見て蘇ってきた。あれはやはり夢でなかったのだ、と。なら、扉を開け、それから？…やはり、後の記憶はない。

『やっと目が覚めたあ？犬ツコロオ。』

突然の声。すぐさま声のした、扉の方へと目を向ける。そこには青年と言うには少し幼さを残した、相棒の姿があった。この時はまだ十代だったからな。今も餓鬼のような所もあるが…。

「いっずあ…。」

“ここはどこだ？”と、聞きたかったのだが、少しは音になったも

の、まだ言葉にならなかった。

そんな俺に対して相棒は話すな、とばかりに手を自らの口に当てた。

『あんたの質問なんてどうせ大したこと答えらんないしい、話せないならちよっと黙っててえ。とりあえず、あんたに今すぐ危害を加えるう、なんてないからねえ。』

態度が悪いことよりも、“危害を加える”なんて言葉が出てくることに驚いた。ふつうならあまり口から出る言葉じゃない。

『とりあえず、見てわかると思うけど、ここ病院ねえ。あんた、廃ビルで倒れてたのを運んできたんだあ。んで、そんな姿だから他人に見られないよう隔離してるんだあ。だから、外出ちゃだめだよ。後、その身体普通の病院でなんて治せないから当分そのままあ。ここまでいい？』

一テンポ遅れて、首を縦に振る。当たりか。こんな身体に人を改造できるなんて聞いたことがない。相棒は俺がちゃんとついて来ていることを確認して話を続けた。

『だからねえ、あんたは普通の生活はできない訳え。もし見つかったらさあ、バケモノだからってすぐに殺されちゃうよ。最悪一生実験対象かもねえ。檻の中で死ぬまで腹とか裂かれるなんてえ…。ああ、大丈夫。俺達はそんなことしないからあ。』

表情を曇らせた俺に助け舟をいれてくれたが、これが地獄への渡り船だったと知ったのはすぐ後の事だ。だが、言っている事に嘘はなかった。

『それでねえ、提案があるんだあ。』

提案とはよく言ったものだ。俺に選択権などなかったのに…。

『俺と一緒に組んで、あんたをそんな身体にした奴らを探そうよ。』

第九十五話 深淵へ

組もうといわれ、この時は本当に助かったのだと思った。元の姿に今すぐ戻れる訳ではない。それでも味方ができることでかなり救われた。拒否するなど毛頭なく、首を縦に振った。

相棒は無邪気な笑顔で俺の返事を受け止めた。今でさえも変わらな
いあの作り笑いの裏のどす黒さ……。あんな若いころからかと思うと、
恐ろしい。相棒の過去に何があったのか知らないが、心が歪む程の
事を経験したのだろう。

『よかったあ、よかったあ。断られたらどうしようかと思ってたんだあ。』

白々しい内容だ。断られることはないと確信していたくせに…。

『とりあえず今は身体治してねえ。ついでに話す練習もしたらいいよお。後、当分その姿だろうからあ、ちょっと検査とかすることに
なるよお。その時はよろしくねえ。』

それだけ言うと相棒はさっさと出て行った。あまりにも唐突に話が
進み、いまいち状況を掴めていなかったのだが、とりあえず、一歩
は事態が好転する方向へと踏み出したのだと思えた。実際はさらに
深みへ足を踏み入れることになるなんて考えもしなかった。

次の日からこの身体に慣れる訓練を始めた。言葉を取り戻すことか
ら始め、聴覚、嗅覚の変化への適用、傷が完全に治ってから身体
能力に慣れるべく、身体を動かしていた。こんな身体になっていた
ものの、血液等体内に異常はないらしく、定期的に何かを摂取しな

ければならないということはないそうだ。専門的なものは分らないが、遺伝子の不適合だのなんだのがあるんじゃないか、という不安はなくなった。

少しずつ、物事を落ち着いて考えていくことができるようになってきた。これから俺はどうするか……。―復讐。この姿にした奴らへの。人生を狂わされた奴らへ。そう……。あくまで奴らだけへの。

半年もすればかなり自分の身体に慣れてきた。……。どうも聴覚と嗅覚にはまだ違和感があった。今はさすがに慣れたがな。病室から離れ、俺は軍事施設のような場所へ移ることとなった。データも採り終わり、病院に居続けるよりも少しでも手がかりを見つける手助けになりたかったから。そして、何よりも俺をこんな姿にした奴らが武装集団であつたことから、俺自身が奴らと戦いたかつたこともあつた。そこで約二年間、銃や格闘術等の戦う技術を学んだ。あくまで俺は自分を取り戻し、奴らの行いを阻止したかつた。ただそれだけだつた。だからこそ、そこまでできた。

それから、ここへとやってきた。その頃から原型はほとんどできていた。俺の部屋ぐらいか……。ここを拠点とし、奴らの施設を潰していく。それが俺が聞かされていたものだった。

ここへ着いたその日の夜のことだつた。俺はやっと自分の立っている舞台がなんなのか知ることになった。

第九十六話 本題

荷物という程のものはなかったが、部屋に運び込み一段落し、相棒の部屋へとやってきた。今後の話があるからとかで呼ばれていたんだ。

部屋に入ると、相棒はあの椅子に座り、巨大なコンピュータのキーを叩いていた。

『ちょっと待っててねえ。』

叩く速さを全く変えずにそう言った。一体何をしているのだろうか？

“カチツ”

案外答えはすぐに出た。何も映っていなかった巨大なモニターに人影が映った。顔の見えない、襟に丸い蛇のようなバッジを付けている。これがウロボロスだと相棒に教えられたのは後の話だ。輪廻だとか、そんな意味を含んでいると……。俺は今までに見覚えがない人物が突然映り、少し身構えた。

『心配しなくていいよお。今までワンコに手を貸してくれた人だからあ。』

話には聞いていた。相棒が全てを取り仕切っているとは考えられず、聞いたことがあった。誰か上にいるのか、と。いずれ会うことになるから、それまでは秘密だ、とはぐらかされ、それまでだった。

『初めましてだね。いろいろあって顔は出せないんだ。悪いね。』

声は機械で変えていなければ案外若い感じがした。流石に十代はないだろうが、せいぜい三十代までではあるだろう。

「別に構わない。こっちには感謝しきれない恩があるんだしな。」

言葉を取り戻した際、口調も変えた。あの時のリーダー格の男のように威圧的になれるようにと。俺はこれから戦うのだから。

『ありがとう。それじゃあ、今後の方針についてだが…まあ、トーイッシュから聞いているとは思うが、これからは私の専属の戦士として仕えて、任務をこなしてもらう。その見返りとして、私の情報力を用いて君の自由を奪ったやつらを探し出す。…それでいいかな？』

「ああ。…ただ、任務についてそろそろはつきりと言ってもらえないか？」

トーイッシュにははぐらかされ、詳細は全くわからなかった。それでも、その頃にはもう既に戻るような考えはなかった。

『トーイッシュ、話していないのかい？…そうか。君は嫌うかもしれないが、多くは私たちにとって障害となるものを取り除いてもらいたいのだ。』

「用は…人殺しをしろと。」

『必ずしも…という訳ではないが、そうなることも多いだろうね。』

予想通り…か。

俺は仕事柄、社会の黒い部分を呆れるほど見てきた。人を騙し、法を犯し、自らの繁栄のためならば他人を傷つけることを厭わない人間。法で裁けず、苦渋を飲んだこともあった。そんな連中を殺すのであれば少しはマシか…なんて、甘ったるいことを考えていた。どれほど苦勞するかも分かっていなかった。

「わかった。そもそも選択肢なんてないしな。」

厭味ったらしく言ったことでか、少し気を落とさせてしまったようだった。

『…ありがとう。それではいきなりだが、最初の任務を行ってほしい。』

今だにわからない。ターゲットがどう決められるのか…。

第九十七話 存在意義

「どうということなんだ…？」

『だからあ、こいつがターゲットだってえ。』

モニターにはすでに送られたターゲットの情報が映し出されていた。ただ、それはあまりにも予想していないものだった。

「十六：子どもじゃないか！」

『実力試しなのかなあ？それにい、十分大人だよお。』

子どもだの大人だのの問題以前に狙われる理由がわからない。親が有名な会社の重役である以外はいたって普通の学生にしか思えない。一体なぜ…？

『理由なんて考えたって考えてもわからないよお。それにい、考える必要なんてないしい。』

相棒は困惑していた俺に対し、いつもの口調ではあるものの、全く感情を込めずに答えた。それが当たり前であるかのように、平然と。

「必要がないって…、これから殺す相手だぞ？依頼者を詮索するな、と言いたいのだろうがそれでも実行するのは俺なんだ。ターゲットに疑問を持ってもー。」

『元に戻りたいんだろ。黙って働けよ。それとも何？あんたの覚悟はそんなもんだったのか？』

相棒の本当の顔を見たのはこの時が最初だった。モニターを見ていた態勢のまま少し振り向き、片目だけ俺から見えるような状態。その顔の表情はとても二十代の青年が見せるものではなかった。影を含み、目の奥にはギラギラと光るものがあり、深い深い憎しみを含んだその顔はまさに鬼のようであった。その顔を見ていると背筋が凍るようだった。

『あんたに理由があるのと同じで俺にもあるんだ。足引っ張るなら俺にも考えがあるぞ？まあ、あんたがもう元に戻って家族んとこ戻るの諦めたんならしかたないけど。』

「…わかった。」

家族と言う単語を出され、そう答えるしかなかった。そうだ、家族の元に帰ることが最終目的だ。妻や娘との生活を取り戻すこと。そのためなら何でもすると決めた。だが、どうしても揺らぐ。そのために罪のない人間を殺していかなければならない。それでも、俺は俺の居場所に帰りたい。

だから、俺は仮面をつけることにした。これをつけている間は鬼になろう。例えば血に染まっても決意が揺るがないように。ただ、せめて自らの糧となる者たちの命の大切さを忘れぬよう、できるだけ、重火器では殺さないでいよう。そう決めた。

だが、仮面が、手が血で汚れるたびに、重くのしかかってくる何かがあった。夢の中では命の消した瞬間が何度も繰り返される悪夢ばかりだ。それでも、思い出という光のみで進んできた。

お前と出会う一つ前の任務のことだ。任務を終えてここへの帰路

についていた時だ。俺は自分のしてきたことに意味をみいだせなくなった。あるビルの巨大モニターに映る光景を見てしまっただけ……。

そこには俺の妻と娘、そして、ある男が映っていた。俺の大学の同期の友人で、何かの開発主任とか言っていた。内容は頭に入っていない。そこでは、三人が家族として映り、幸せそうな笑みを浮かべていた。俺の居場所を取られたという憎悪は無かった。それよりも、幸せそうだし、あいつになら家族を託せるという安堵感のほうが大きかった。俺がいなくなり、俯いてばかりいるよりも、前に踏み出してくれているのだ。そう……俺の帰る場所はまだ塞がってしまった。なら俺は何のためにこんなことをしているのだ？ 復讐なんて、飾りだ。帰る必要がないなら、もうどうでもいい……。ここで終ってしまった。でも、いいだろう。

少し長くなったな。これくらいでもういいだろう。

第九十八話 居場所

狼さんはさっきまでと違って、少しだけ明るさを増していく月を眺めながら黙り込んでしまった。

多分昔の話をあまりしたことないんだと思う。話が所々まとまっていかなかったから。そんな話をしてもらえて嬉しかった反面、胸が痛くなった。狼さんは今どんな気持ちなのだろう？ 私には少しだけわかる気がする。私は生きていく意味が分からなかった毎日から外に飛び出して、まだまだだけど居場所ができてきた。だけど、狼さんは居場所を失って取り戻すためにあんなにもつらいことに耐え続けて帰ろうとしてたのに、もう帰れないなんて……。私と逆。だから、居場所の大切さはわかる。だけど、狼さんの失った悲しみは予想するしかできない。何もなかったころの私のように心が死んでしまっているのかもしれない。もっとつらいのかも知れない。簡単にふっきれるものじゃないんだと思う。

でも、居場所がないんだったらまた作っちゃえばいい。今の私みたいに。

「狼さんの家族は狼さんが生きてるかどうか知ってるの？」

『死んだことになっている。背格好の似た、顔のわからない焼死体に俺のチップが埋め込まれていたようだ。チップが普及してからはDNA鑑定なんてされなくなったからな。チップを読み込むだけで済まされる。誰も気がつかないさ。』

「そんな……」

『いや、かえって都合がよかった。無駄な希望を持たせるよりずっといい。』

狼さんは少し笑いながら言ったけど、そのせいで帰れなくなったんだから全然よくないよ。

「じゃあ…これからどうするの？」

望みもないのに続けていけるものじゃないよ。あんなに苦しいこと。

『少なくともお前を連れて来た責任は果たすつもりだ。その後はわからない。』

私の意思じゃなかったみたいに話すから言い返した。

「責任って？ 私は自分で出たいからついて来たんだから、そんなのじゃないよ。」

『だが、拒否することもできた。…そう怒るな。せいぜい俺ができるのは居場所を見つける手助けくらいだ。』

…そう言ってもらえとうれしいけど、それってなんだか寂しい。居場所が見つかったらさよならってことなんでしょ？ よく考えたらその方が無責任じゃない？

言い返そうとした。だけど、言えなかった。これを言ったらただ狼さんを傷つけるだけだから。何も言わずに俯いてる私。どうしたらいいかわからなかった…。

そんな私を見かねてか、狼さんは立ち上がった。

『疲れただろう。そろそろ下りよう。』

狼さんの顔を見た。そういえば、昔話を始めてから一度も顔を見ていなかった。寂しそうだっ表情がどうしてかな？胸につつかえてたものが取れたみたいになすつきりしたって感じの表情だった。…なんで？

少し困惑して動かなかった私に手を差し出してくれた。あわててその手につかまって、起こしてもらった。

『大丈夫か？』

「う、うん。何でもないよ。」

そうか、ってつぶやいてさっとエレベーターの方へと歩いて行く。私は明るい街の光を少しながめてから、その大きな背中について行った。

第九十九話 月に眠る（前書き）

この話で物語の約三分の一が終わります。書くのが遅いとは思っていたのですが、一年かかるとは…。もしよければ、ここまでの感想・評価を書いて頂ければ幸いです。今後の参考になります。どうぞ、これからもよろしくお願いします。

第九十九話 月に眠る

どこで間違えたのだろうか？距離があっても本部まで連れて来て治療を受けさせるべきだったのか？それとも、命令を無視してステージ付近に待機すべきだったのか？いや、力づくでもライブを中止させるべきだったのだろうか？

『先輩。。。』

「。。。」

止まった歩を再び進めてバンの前を無言で通り過ぎた。周りを気にする余裕なんてなかった。ただ歩くだけで精一杯だった。

ターシェが死んだ。

あんなに生きる意欲に満ちていたのに……。犠牲になった連中のために生きると決意したばかりなのに……。人はこんなにも呆気なくいいのか？

冷徹な音が広がる中で何度も呼びかけた。起きてくれ、と。何度も、何度も……。

微動だにしない体。段々と蝕んでいく冷たさで、受け入れざるをえなかった。

ターシェの母親と連絡が着いたのは一時間ほど後の話だ。母親も忙しい身であったため、ライブには同行せずに国に残っていたために遅れた。説明を聞いても信じられなかったようだが、ターシェの眠

っているような姿を見て、やっと現実だと受け止めたようで、泣き崩れてしまった。

『ジェイク君ね？ターシェを…月まで連れて来てくれる？』

「…はい。」

たったそれだけしか言えなかった。謝って許されるようなものじゃないが、その謝罪の言葉さえいえなかった。無力さを噛み締めるしかなかった。

月の中には何億という数の遺体が眠っている。月に到達して、天候管理以外の機能として最初に見つかったもんだ。カプセルの中に入れた、昔の人間たちの遺体が完璧な姿で保管されて、歴史なんかに新しく付け足されたり、ある程度調べがつくと、現代の墓地としても使用されるようになった。金にかかるが、反重力が出来てからは月へ行きやすくなり、増えている。

俺も毎年月へ行く。任務に失敗して亡くなった人と、兄貴に会いにな。話かけたら返事を返してくれそうなくらい完璧な姿。だから、よく相談している。仕事の事とか、レインたちのこととか一。

病院から専用の車へと乗る。救急車より一回り大きい車。送月車なんて呼ばれるようになったのは結構最近の話。全体は黒く塗装され、エメラルドグリーンの月が描かれている。三時間もすれば着いてしまう。何も考えられなかった俺にとって、その時間は一瞬ですらなかった。

着いた場所は冷たい鋼鉄で造られた車庫。送月車が他に何台か並んでいた。そこを出てすぐの待合室には既にターシェの母親が待って

いた。ターシェと同じ碧い髪。やっぱり十何年も経っているから、老いは隠せないが、昔の印象と同じ、優しそうな綺麗な姿だった。泣き続けたんだろう、目元が赤く腫れていたし、声も少しかれているようだった。

『あなたとの再会がこんな形になってしまいうんて…本当に残念だわ。』

「…お嬢さんを守れず、本当に申しわー」

言い終わる前に、ハグをされた。俯いていたから、近づいて来るとさえ気づけなかった。

『あなたの所為じゃないわ。自分を責めないで。』

言葉を遮られ、言われたのはまさに俺がターシェに言った事と同じだった。

—自分を責める暇があるなら、死者を弔え。嘆く暇があるなら前を向け。—

夢から覚めたみたいに、やっと意識がはっきりとした。まさか、あの言葉が自分に宛てたものになるなんてな。ターシェに言い聞かせるとして、自分は出来ないだなんて最低だ。模範を示さないとな。

表情に出たのか、彼女は少し笑顔を作り、言葉が続けた。

『それで…あの娘のライブはどうだった？』

後半は少し鼻声になりながら、目に涙を浮かべながら、尋ねられた。

答える言葉は決まっていた。

「本当に最高でした。」

その言葉が引き金になって、彼女の我慢していた涙が溢れてきた。

もう一度ハグをした。俺も耐えられなくなったから。同じようにターシェを失った悲しみを分かち合えたから…。

ターシェはただ眠っているだけのようだった。化粧をされ、綺麗な白いドレスを纏い、ステージの上で歌っていたあの姿に近い格好で棺というカプセルに入った。

その様を見ながら心の中で誓った。

憎しみなしの決意。

あの“犬”を取っ捕まる。

だから、ここで待っていてくれ。ここからなら捕まえるその瞬間も見えるから。

第二〇〇話 閉ざされた人々（前書き）

今回の話は今までの登場の紹介です。簡単にまとめましたので、至らない部分があるかもしれませんが、こいつ誰だ？、というのがあれば利用していただけると幸いです。

第一〇〇話 閉ざされた人々

シン：狼の姿をした人間。自らの身体を改造した者達を捜すために殺し屋になる。セフィリアが自分の姿に被ってしまい、連れていく。

セフィリア：あるビルの一室に幽閉されていた少女。記憶力が非常に高い。外の世界に憧れ、シンについていく。

トリーツシュ・エイデン：シンの相棒。ハッカーであらゆる機関に侵入できる。語尾を伸ばす癖があり、チビでニキビの後が残っている。料理の上手いセフィリアを気に入っている。

ナーシャ・エイデン：トリーツシュの血の繋がっていない姉。ファッション雑誌『クロープ』の編集長。トリーツシュとは全く似ておらず、ルックス、スタイル抜群のキャリアウーマン。

ジェイク・アーベン：ボディーガードNo. 1の実力者。自宅で孤児のガン、スーエン、ファム、レイン、エルンとバンツ、カイと共に暮らしている。

バン・ヘルゼン：ジェイクの会社で現No. 2の実力者。ジェイクを尊敬している。サロナ・フローラ：ジェイクの同期。医療科でも優秀な人材。

アーサー・ライヴェント：新社長。セフィリアの搜索を依頼した張本人。一見すると、女性に見える。脚が悪く、車椅子に乗っている。

ウッド・サーテン：某食品輸入会社の代表取締役。“次の舞”にて銃殺される。

トラ1：ボディーガード。サーテン護衛。“次の舞”にて半身を失う重傷を負うも生存。

リュウ1：ボディーガード。サーテン護衛。“次の舞”にて大量出血によるショック死。

ターシェ・フイーメル：ジェイクの旧友。歌手。“盲目の天使”と呼ばれている。“三の舞”にて“オーデインの槍”により殺害。

ハック・デイヴァン：ターシェの専属ボディーガード。“三の舞”にて、心臓を一突きされ、即死。

アーデイス・セスピング：ハックの部下。ジェイクに憧れていた。“三の舞”にて、首を斬られて死亡。

第一〇一話 舞台裏

誰がどう思ったとしても変わらないものがあり、それが事実だとわかると、絶望以外の感情が浮かぶことはない。

目の前に広がる夜景には何の感情も浮かない。私には既に関係のない世界。それでもここにいるのは“必要”だからだ。

定時を迎え、部屋を囲うガラス窓には一瞬で夜景から黒い人々の集う、会議室が映った。そこは薄暗く、陰気臭い。好みじゃない。

モニター越しに集まった会員の中、一人が立ち上がり語り出した。

『計画は予定通り進んでいる。』

男か女かはつきりとしえない、無機質な声が流れる。会員にさえ素性がバレないようにしている。この十一人の自分以外誰もわからない……ようになっている。

『問題があるとすれば、筋書きから1mmすらズレていないことぐらいだろう。』

冷笑。当然だ。センスがない。

『我々はこのまま傍観者の立場を変えない。さすれば、世界は自ずと進むべき道を辿るだろう。』

そう。それが最も適切な手段だ。最も悪質でもある。

『では、また後日会おう。』

モニターの中に映っていた人物が消えた。それを合図に他の影も消えていく。私もその中の一人になる。

『会議は終わりましたか？』

「ああ、ただの報告だけだったがな。」

通信が切れた直後、部屋の外からヤジが入ってきた。ヤジは私の協力者だ。かの一員になった直後に知り合ってから以来、ずっと私の元で動いてくれている。任務に忠実で、期待以上の働きをしてくれる。私が唯一信頼している人間だ。

彼には全てを話している。私の計画を。目的は異なるが、望む結末は同じ。だからこそ信頼できる。

『我々の計画に変更は？』

「なしだよ。今後の動きは既に伝えた通りさ。」

ヤジは部屋の角のワインセラーからボトルを取り出し、グラスに注ぎ、私に勧めた。それを受け取り、一口口に含む。

「旨い。…私達だけなんだ。君も呑むだろう？」

飲み込み、自らには注がずにボトルを仕舞おうとした姿を見て尋ねた。それでも、彼は動作を止めようとはしなかった。

『仕事がありますので…。』

鋭い視線を扉に向けると、微かに開いていた扉が動いた。誰か聞いていたらしい。

「あまり汚さないように頼む。」

『承知しております。』

彼はさっと手袋を外しながら部屋を出た。優秀な彼ならば、あつと言う間に始末してくれるだろう。再び誰もいなくなった部屋を見渡し、紅いワインをのみほす。窓を見ている、夜景を見ている訳ではない。あの日…計画の主軸となる二人がここで衝突した、その様を思い描いていた。

長かった。もうすぐだ。私の求める未来に後少しで手が届く。

立ち上がり、窓へと近づきこの世界で唯一興味のある物を眺め、部屋を後にした。

第一〇二話 齒痒さ

ーレイン

「お疲れ様。…何か飲む？」

早朝。みんなのお弁当の準備をしていると、玄関から音がした。こんな時間になるのはジェイクしかないからすぐにわかった。

『ビール注いでくれるか？飲んだら寝るよ。』

居間に入って来た姿を見て気付いた。礼服だ。きっと失敗してしまったんだ。そんな時はお酒を飲んで。やけになって飲むんじゃないかって、次の仕事に気持ちを切り替えるためにふっ切るようにしてるらしい。その時の顔がどこか辛そうで、見ていて心が痛んだ。

「はい。一緒に何か食べる。」

グラスに冷蔵庫から出した缶ビールを注いで渡した。少し見えた表情は今までよりは目に力があつたけど、やっぱり辛そうに見える。

『いや、すぐに行くよ。あいつらにこんなところ見せたくないからな。』

グラスのビールをさっと喉に流し込んだ。一缶分丸ごと…。

『ごちそうさま。悪いが、もう行くよ。』

グラスを差し出して、私が受け取ると、さっと背を向け二階へと足

を進めようとした。

「…あんまり無理しないでね。」

苦しそうな背中を見たら、声をかけずにいらなかった。ただ、こんな事しか言えなかった私が少し齒痒かった。

いつも私たちや周りの事を気にして、自分の事を労ってあげないところがある。多分ジェイクは自分が家にろくにいないから、私たちに苦勞をかけてるなんて思ってる。私たちは誰もそんな風に思っていないのに。ジェイクに会えない日はみんな私に聞いてくる。ちゃんと帰って着たのか、怪我はしてなかったか。体を張ってるのを知ってるから、寂しくても部屋まで押しかけたり、文句を言ったりしない。みんなで分担して家事をするのもジェイクに負担がかからないように、ってみんなで決めた事。子供が家事を手伝うのは当然だもの。父親は仕事だけに集中してたらしいのに。

『…心配かけて悪いな。でも、もう大丈夫。』

足を止めて、振り返りながらそう言った。あー、逆に気を遣わせたなあ。

「なら、いいけど、明後日の事ー。」

『そっちの心配か。ちゃんと覚えてるよ。』

少し笑いながら答えた。確かに大丈夫そうだからよかった。

今までに二回くらいこんなことがあったけど、最初はかなりひどかった。

なんとかみんなには隠せてたけど、かなり荒れた。帰ってきたのが深夜だったからよかった。飲み潰れてずっと泣いてた。その人には幼い子供がいた。その子は父親の弟夫婦に引き取られたらしいんだけど、私たちとダブったらしくて、自分のせいで私たちみたいな子を増やしてしまった、って嘆いてた。結局自分がしてることはただの偽善じゃないかって。

あの時叩いた手の痛みをちゃんと覚えてる。初めて人に手をあげたから。弱さを見せるのは仕方ない。ジェイクだって一人の人間だから。だけど、私たちといることやジェイク自身の決断を偽善なんて聞きたくなかった。だから、手が出た。：なんだか懐かしい。たいして時間は経ってないのに。

『おはようです、レイン姉。後は代わりますわ。』

エルンが起きてきた。もうそんな時間なんだ。

「ありがとう。私、もう行くね。」

さっとエプロンを外して、鞆を取りに行った。今日は早いからみんなが起きるまでいられない。顔を見れなくて少し寂しいけど、犬小屋の中から出てきたフランにだけ手を振って、私は家を出た。

第一〇三話 気分一新

目が覚めると窓から光が入ってきてた。もう朝なんだ。昨日は夜遅くまで起きてたから、まだ眠い。だけど、朝ごはん作らないと…。

眠さで閉じようとする目をこすりながらベッドから起きて、服を着る。昨日は選ぶのが楽しかったけど、なんだか今日は面倒な気がする。眠いからかな？

さっと選んだのを着て部屋を出た。昨日あんなにいろいろあったのに、すごく静か。少し怖いくらい。

食堂に来て、それは変わらなくて、時間が止まっているかのように静かなまま。あの部屋に戻って来たかのように。

食卓の上に一枚、紙が置いてあった。

“今日は夜までいないから俺の分の飯はいらないよ。ートーイッシュ”

トーイッシュってこんな字を書くんだ。形が崩れてて少し読みにくい。夜までいないんだ…。ということは、今日は一日ここにいて事かな。狼さんは仕事以外じゃ外に出ない、って言ってたし。でも、ちょうどいいのかも知れない。ここにきてから毎日大変だったからちよつと休憩。それに掃除しきれてないから、大掃除しよう！

「よーっし、がんばるぞ！」

手をにぎって声を出した。こうした方がやる気がでるからね。誰も

いないから結構響いてびっくりした。それに先に朝ごはん作らないとね。簡単なのでいいや。

『突然どうした？』

ドキッとした。いるのを忘れてた訳じゃないけど、起きて来てたなんて。しかも、さっきの聞かれてたなんて…。

『…相棒は今日は向こうか。』

さっき私が見た紙を見つけて狼さんはそう呟いた。どこにいるか知ってるみたい。そんなことより、さっきの聞かれたんだったら、この際、言っちゃおう。

「そうなの！だから、大掃除しようと思うんだけど、手伝ってくれない？」

一人より二人の方が効率いいしね。狼さんはなぜかキョトンとしてる。私、変な事言った？

「…おかしい事言った？」

言葉に出してみた。自分じゃわからないもん。だけど、心配してた程、悪い答えじゃなかった。

『いや、そんなことはない。…そもそも汚したのは俺達だからな。手伝わせてくれ。』

むしろ大成功。そうと決まれば、もっとやる気が出てきた。

「わかった！じゃあ、ちょっと待ってて。何か作って来るから。」

—

そう言って、彼女がすぐに作ったサンドイッチを食べ終わり、掃除の準備を始めた。

掃除なんてろくにしていなかった。だからと言って、という訳で承諾した訳でわない。気晴らしになるというのもあるが…、早い話、見られたくないものもあるんだ。

『まずは溜まった埃を落とそう！』

どうも彼女のテンションの高さがわからない。昨日あんな事があったのに、どうして明るくいられるのだろうか。いや、だからこそなのだろうか。

考えこんでいたせいか、すでに彼女が掃除を始めていたことに気付かなかった。

『手が止まってるよ。ほら、叩いて。』

「…ああ、悪い。」

今は考えるのを止めよう。たまにはいいだろう。

第一〇四話 古い知合い

『これから会いに行く人って誰なんツスか？』

助手席に座っているバンが尋ねてきた。

「俺の古いダチだよ。」

俺は顔を向けずに答えた。

昼前に目覚め、会社には寄らず、直接バンを迎えにきた。あいつの居場所を知ってるのは俺だからな。どうしても、必要な情報があるんだ。

「着いたぞ。」

ある古いビルの前で車を止めた。外見はひびや欠けている部分が目立ち人なんていないように見えるが、中は対照的で物が溢れ、人がごった返している。

ここにいるのは外人やハーフだ。地下がまだ工業やらでちゃんと回ってた頃に、安い労働力として雇われてた奴らが職を失い、家を失った後、集まって古いビルを買い取り、自分たちの家にした。今じゃ、いろんな国の文化が混ざって、新しい国みたいになっている。

「スーツなんて場違いだろ？」

『そうツスね。先輩が言ってくれなきゃ、浮いてたツスね。』

郷に行っては郷に従え、だったか。まあ、一回スーツで来たときに気付いただけなんだがな。

「この店だ。」

朱い看板にテレビとかでしか見たことないような食いもんが並んでいる。前はカバンとか並んでたはずなんだが…。

『こんな所にそんな人がー。』

『見た目で物事判断するは良くない事。』

突然後ろから声がしたら、そりゃ人間ビビるわな。俺はこいつのノリを知ってるから、そろそろ来るだろうな、って思ってたんだが。バンはかなり反応しちまって、振り返って身構えていた。

『反応はまあまあ。でも、少し鈍い。やっぱりまだまだだ。』

『し、失礼ッスね。誰ッスか、あんた。』

そろそろ間に入るか。

「バン、こいつが話した奴だよ。ったく、ザイレイ、お前の人をからかう癖、まだ治してないのか。」

『前に言っただけは忘れたか？ からかう、でなく、試す、だ。』

相変わらずだな、ザイレイ。背は小さく、ぱっと見だと中学生と間違えるくらいだ。いい年なんだけどな。普段、顔はなんつーか…何考えてんのかわかんねえ。死んだ魚みたいな目だし、口はどことな

く怒ってるように見える。もう少し、女らしくならないもんかと散々苦労したのを覚えてる。

『目で訴えるな。変わらないは悪くない。』

聞いててわかる通り、言葉の繋ぎが変だ。こいつは母親が外人のハーフ。けど、難しい言葉はよくしってるんだ。俺なんかよりよっぽど、な。

『それで、わざわざここまで来たは何故か、セン。』

『セン…?』

ったく、またややこしい事を…。

「昔のあだ名だ。そんなこたどうでもいいから、早く本題に入るぞ。」

「

店の中にさっさと入っていった。行くべき場所はちゃんとわかってっからな。

店の奥へ進んでくと、横からさっとザイレイに抜かれた。

『センが先に行っても入れない。相変わらず馬鹿。』

てめえも相変わらずひねくれてるなあ。バンのツメの垢を飲ませてやりてえよ。

こいつに知り合ったのは、俺がオヤジんどこにいた頃だ。ザイレイが暴力団にいた訳じゃねえぜ? こいつは情報屋だ。父親からだから

二代目だな。父親はもう引退してて、夫婦でどっかのドームにいるはずだ。この店で働いてるのはザイレイの同業者連中だ。

『ちよつと待つ。』

奥のドアを開けてすぐ、ザイレイに止められた。俺は言うより先に止まってたがな。ザイレイはどこからか、カードキーを出して、柱と壁とのすき間にしか見えない間に差し込んだ。カードが出て来た直後、鈍い音がし、部屋が揺れた。

『な、何ッスか？』

突然の事にバンが声を荒げた。

「安心しろ。いつもこうだよ。」

『その通り。間もなく私たちの部屋だ。』

第一〇五話 地底の情報屋

『今の内に銃を出せ。』

部屋の揺れがおさまる前に武器を取られた。規則だから例外はなし、だと。

『腰のナイフもだ。』

探知器でもあんのか？見た目じゃわからないものまで指摘してきた。バンは渋々小型のナイフを差し出した。

『別室から見ている。センもそのスタンガンいらないから渡せ。』

こっちもバレバレか。グローブを外し、ザイレイに投げた。渡すのを見計らっていたかのように、揺れが止まった。

『よし。出て突き当たりの部屋まで行く。』

扉が開くとさっきとはかなり雰囲気が変わっていた。細長い廊下が続いていた。壁は灰色でかなり汚れが目立ち、所々ひびが入っている。廊下の左側にのみ扉が並び、そのどれもが金属の重厚な印象を受ける。対して、右側には窓が並んでいて、そこから見えるのは一。

『外ガスしか見えないし、この廊下の雰囲気…。ここって工業区ツスか？』

「大当たりだよ。」

さっきのはわざわざ言わなくても分かっただろうな。エレベータは地下まで続き、工業区の建物の中にまで伸びている。この階以外に数階分ある。その部屋の中で、情報の売買がされてるって訳だ。

情報屋がこうして集まってるのはめずらしいんだ。普通、他の連中が手に入れられる以上の情報を仕入れてやる、って躍起になるからな。そうでないと買ってもらえないしな。だから、個人で他の連中に知られないようこっそりと動いてたりする。

ここは前にも言ったが、工業区で働いてた連中が集まって出来た街だ。みんなが同じような経緯で集まったからこそなんだろうな。昔からこの街に住む連中は家族のような結束力があつたらしい。今話してるのはザイレイから聞いた話だ。

そんな結束力の中で生まれたからかわからないが、個人の多いこの稼業も組織を組んで行っている。数がいるために足がついたりすると、全員が何らかの仕打ちを受けることになるかもしれない。売った情報のせいで恨まれることもあるだろうからな。ただ、利点も多いらしい。情報の共有や身の安全も取りやすい。何より、多くの場所から情報を得られる。ネットが張り巡らされてるつつつても、全てそこから得られる訳じゃねえからな。別の組織に潜入するやらを一人の人間だけじゃしきれない。上手く役割分担されている。

要はここはかなり情報が集まる場所なんだ。警察も情報を買いに来ることがあるらしいな。まあ、俺もそんな連中の一人なんだけどな。望むものがあれば、一番いいんだけどな。

第一〇六話 X-File

緩いカーブをえがく廊下を進んで行くとその終りに扉がある。この扉も他と同じで金属製の重っ苦しい感じだ。ただ、妙に傷だらけのように思うが…。

ザイレイが手を出し、扉横の一部色の違う壁を触れる。一瞬光ったかと思うと、金属の擦れる嫌な音とともに扉がスライドしていく。

部屋の中は外と違いかなりきれいだ。当然窓なんかないが、部屋の真ん中には四角い机があり、それを挟んで黒のソファが二つ。俺より頭一つ分程小さい観葉植物が部屋の角にある。後はパソコンを置いたデスクが壁に向かって置かれている。

『それで何の情報が欲しいか？』

ザイレイはデスクに着き、俺達はソファに腰を下ろす。そういやまだ話さないから当然か。

「“オーディンの槍”って知ってるか？」

『単刀直入だな。…聞いた事はある。確か何年も前に一度使われた、クラッカーのプログラムか。』

クラッカー？ハッカーみたいなもんか？いや、今そんな事はどうでもいい。

「そうだ。その前の事件について知りたい。」

『わざわざ来るということは閲覧禁止か、そもそも無かったものにされてるか。』

“オーデインの槍”と言う名は案外すぐ知れた。ウチのサポートにターシエの様な事件はあったか、と聞くとすぐに答えてくれた。なんでもハッカーとかの間だとかなり有名なんだとか。

ただ、それは噂でしかなかったらしい。事実、それについての事件を調べてもザイレイの言う通り、無かった。当たり前と言うべきだろうな。そんなもんが知れたら、病院になんて信用できなくなっちまう。：なんて言っていられないのがまた辛い。

「見つけられるか？」

『もちろん：と言いたいが。』

：どうかしたのか？、と口に出そうとしたが、画面の表示に言葉が止まった。

“X-File”

『ダメだ。ここからではわからない。』

「X-Fileってなんだ？」

バンもソファから立ち上がり、パソコンの前に着た。

『簡単に言うと極秘事件扱ッス。公表すると多くの問題を生むで隠されてて、管理は一つのコンピュータで行われ、ネットワークに繋がっていないからどうやっても侵入不可能なんスよ。しかも、内部

の人間でも、かなりの位の人間じゃないと入ることすらできないん
ス。』

くそっ。…にしても、詳しいなバンは。

『“ケルベロス”についてはどうッスか？』

バンが最終目標を聞いていた。だが、あまり期待できない。

『残念だが、それについての情報で有力のものはない。情報量が
なりだが、ガセか推論程度。』

うなだれるバン。そりゃそうさ。警察が情報公開して、懸賞までつ
け捕まえようと躍起になってるんだ。そんな情報があれば直ぐにひ
ろまる。

警察にコネはねえし、いくらボスでも難しいか？お手上げか、そう
思った時だ。

『先輩、警察に行きましょう。』

何か策が浮かんだか、と振り返ったが、今までにないほどバンの表
情が険しかった。怒りとか…そんなものが含んでいるような気がす
る。

『行くなら、何か入れれば連絡する。金は貰うが。』

「分かったよ。」

やっぱし、金取んのかよ。まあ、商売だしな。

バンの表情からはさっき感じたものは見えなくなった。それでも、さっきのは気のせいじゃない。警察に：なんかあるのか。疑念は晴れないまま、俺達は部屋を後にした。

第一〇七話 身近な探検

ホントのことを言うと、私は狼さんもトーイッシュも恐くなった。特にトーイッシュ。あんなに冷たくなれるなんて今でも信じられない。私だってまだよく人の命がどれだけ大切なのか、分かっていないと思うけど、スイッチを押すだけで命を奪えるなんてそんな簡単に言っているものじゃないから。

あんな事をした狼さんだったけど、私に共感してくれた。気持ちを理解してくれた。いつも恐ろしいことをしてる訳じゃない。そんな所を目に焼け付けたかったの。

掃除はテキパキ進んでいった。やっぱり二人の方が早い。高いから私の届かないところにも手が入るから助かる。ただ、毛に埃が付くのがすごくうっとうしそう。払っている姿を見ると少し笑えた。…埃が周りに広がっていくのに気づいたら、笑えなくなった。

狼さんも私に気をつかってくれたみたいでいろいろ話してくれた。一番印象に残ったのはやっぱりあれかな。ここが三階なのにガスがない理由。実はここ、ホントは十三階なんだって。だけど、トーイッシュが不吉だからって、13の1を全部取っちゃったんだって。そんな所は妙に神経質なんだね。

後は私が写真でしか見たことがないような所に行ったことがあるか、とかそんな事を話してた。どうでもいい内容だけど、大切な話。

ゴミを捨てに下に下りた。

バイクが置いている以外は隅の箱しかない空っぽの空間。

金属でできた箱の手前側にある取っ手を引くと中には何もない。狼

さんはここだって言ってたし、少し不安になりながらも、中に入れた。後は特に気にするものもなかったし、エレベーターに乗っているのボタンを押そうとした。そういえば、屋上についてた血が消えていた。きっと狼さんが拭き取ったんだと思う。

それに気づいてもう一つの違和感を覚えた。ここに着た次の日。トイッシュのお姉さん、ナーシェさんと買い物をして帰って着た時、いつもの階の一つ下、十二階になるのかな？ ボタンはガスの届かない階にしか割り当ててないらしくて、十三階にあたる所が下から三番目。その一つ下だから…、やっぱり十二階なのかな。そのボタンに青い塗料がついていたのを覚えている。狼さんやトイッシュが他の階について話していた事なかったし…。何かあるかなんてわからないけど、消えてるのに気づくと、行ってみたくて仕方がなかった。好奇心ってものなんだろうね。でも、やっぱり何も知らないところだから、恐くもなかった。

結局は好奇心が勝って、青の消えたボタンを押した。

エレベーターは普段と変わらない様子で上がっていく。そんなの当然だけど、私の胸の鼓動は高まった。

そこはいつもの場所と変わらないのかもしれない。だけど、全然違っているのかもしれない。私は最初に考えていた目的をすっかり忘れてしまった。というより、もう満足だったのかもしれない。いっぱい笑えたから。

第一〇八話 油絵の墓標

“チーン”

着いた。十二階…。この扉が開いたら、きっと違う光景が広がってるんだ。

：確かに違う光景だった。私は単純に“違う”って事を期待してたけど…。何か違う。しかも、違うっていうか…。

ボロボロ…。

埃は溜まり放題だし、クモの巣はいたるところにある。せっかく着たけどこの様子だと何かあるように思えない。探索するのを諦めて上に上がろうとしてボタンを押そうとした。

床をよく見たら所々埃がないところがある。誰かが歩いて行った…。そんな感じ。じゃあ、やっぱり何かあるのかもしれない。私が下りようとするのとほとんど同時に扉が閉じ始めた。

恐かった。閉まるよりも少しだけ早く、私は外に出た。危うくぺちやんこになる所だった。：大袈裟かな。鼓動が早くなってる気がする。だから知らないけれど、余計に奥が気になる。

埃が消えた足跡は奥へ奥へ続いていく。それを辿って恐る恐る進んでいく。やっぱり恐いのは変わらなくて、ゆっくりと進んでいくしかできない。それでも、戻ることは考えなかった。今でも好奇心が勝ってる訳で…。

突然、足跡が消えた。ちょうど、ドアの方へと入って行くようになっていた。ここに何かあるってことなんだと思う。他の部屋のドアより少しだけ汚れていないけど、それ以外は他と全然変わらない。中に何かがあるんだろう。鼓動は今までで一番早くなっている気がする。

呼吸を調え、ドアノブに手を伸ばす。ドアノブにも埃はついていないくて、誰かがこの部屋を使ってたのがわかる。よくよく考えたら誰かわかったんだろうけど、それは正直どうでもよかった。ただ、ここに私の知らない“何か”があって、それを見たい。ただ、それだけだった。

ドアを開けた。開いた時に嗅いだことのない臭いが鼻に入ってきた。臭くはないけど、強い臭い。油に近い。だけど、どことなく違う気がする。ドアを開けきり、中に入ってなんなのかはつきりした。

油絵。

絵の具やパレットが古い木の机に無造作に置かれている。その隣にはまだ陰だけのキャンパスが置かれていた。そこに描かれていた人物には見覚えがあった。

「この人…。」

『ターシェ・フイーメル。』

突然後ろから声がして、びっくりした。振り返ると、そこにいたのは狼さんだった。

『ゴミを捨てたらすぐに戻って来いと言ったはずだろ。しかも、頼

によってここにくるとは…。』

ため息をもらして、頭をかいている。

「…ごめんなさい。」

狼さんの態度を見ると、なんだか謝った方がいいように思えた。でも、説明しなかった狼さんも悪いじゃないか、と思うとせめてここが何かぐらい知りたくなった。

「それで、ここは何？ なんであの人の絵なんて？」

『…ここは墓場だ。』

悲しそうな声で、狼さんは答えた。

第一〇九話 死者の美術館

「お…墓？」

帰ってきた言葉はあまりにも以外なものだった。聞き間違えた訳じゃなかった。

『ああ。』

狼さんはそれだけ言うと、部屋の左側にあるドアへ近づいて行く。私はその後について行く。狼さんはおもむろにズボンのポケットから何か取り出した。

“カチャッ”

音でわかるね。ドアの鍵だ。鍵をかけてるってことは大切なものがあるんだろうね。お墓って言ってたし、誰か眠ってるのかな。

ドアノブを回してドアを開けてくれた。頭を一度中の方へ振って入るように促した。私はゆっくりと進んでいく。窓がない部屋で電気が消えているから、ドアから差し込む光しか明かりがなくて、中の様子がイマイチつかめない。ただ、さっきよりも油のような臭いが強くなった。

“カチッ”

足元でさえわかりにくくなった時、狼さんが明かりを点けてくれた。突然の光に少し目が眩んだけど、すぐに慣れて、閉じたマブタを開いた。

目に飛び込んで着たのは色のついたキャンパス。それもすごい枚数。部屋はあまり広くなくて、キャンパスが置かれた棚が両方の壁を隠してしまってる。一番奥には、女の人と幼い女の子が描かれた絵が掛けられてる。

『俺が今まで殺してきた人達の墓。ただの絵だが、俺にとっては墓標なんだ。』

狼さんは話を続けた。昨日のように、少し切なく、寂しそうに…。

『訓練を受けていた頃だ。毎晩夢を見た。見知らぬ部屋で殺した奴らが夢に出た。死者に追われる夢。顔までが克明に映る。俺はどうすればいいのか、わからなかった。』

後ろにいる狼さんの方を見ると、俯いてしまってる。

『そんな時に思いついたのがこれだ。死者を弔うこと。そして、俺が殺したのだと受け止める。そうした時、初めて夢を見ずにすんだ。以来、続けてきたんだ。』

「すごい数…。」

狼さんが今までしてきたことがここ全てなんだ。昨日、私が感じた感情を数えきれない程経験してきたってこと。…考えられないなあ。

一枚絵を見てみた。そこには、少し白髪が混じった、頬がこけた男の人が描かれていた。なんとなく、悲しい目をしてるように感じた。…ちがう。なんとなくだけど、奥の壁に掛けられてる絵だけは他とちがう気がした。

「…奥の絵は誰なの？あれもお墓？」

唐突に聞いた。気になるから。

『あれは妻と娘だ。…ただの思い出だよ。』

あれが…狼さん、ううん、シンの求めた家族。どうしても取り戻したかったもの。それがもう戻らない。

先にシンはこの油の強い臭いのする部屋を出ていった。私はまたその後についていく。机の上の歌姫さんの絵を手に使っていた。

「描いてるところ…見てもいい？」

『…好きにしろ。』

シンはこっちを見ないでイスに座り、筆を取った。私は色がのっていくのを眺めてた。

第二〇話 親父（前書き）

だいぶ遅れて申し訳ありませんでした。

六話一気に掲載しましたので、よければ読んでください。
後、ブログ始めました。

犬小屋の屋根裏部屋

<http://emeraldnightsky.blog45.fc2.com/>

これからは近況をここに書いておこうと思います。
感想とか、リンクとか諸々よければお願いします。

第二一〇話 親父

ーバン

X-File。結局俺はそういうのに付き纏われる運命なんだろう
か…。

警察署のエレベーター内には警官の制服姿の変ちくりんなマスコッ
トが描かれたポスターがあった。“君も警察官になろう”。…勝手に
どうぞ。

ここには今俺しかない。先輩は今まで面会できなかった生き残りに
会うために病院に向かってもらった。ここは自分に任せてもらっ
たんだ。自分の考えなんて何にも話していないのに信じて任せてく
れた。大事な役目でもそうやって信用してくれるのは先輩を尊敬し
ている点の一つだ。

目的の階に着き、歩を進める。

ただ、考えを聞かれても答えることはなかったはず。任務だといえ、
これは完全に私情だから…。

いかにもって感じの扉をノックし、開ける。

『…何の用だ?』

扉を開けた先にはでかい木製の机の前に高そうな椅子に座った男。
警察署長である、デリル・ハルゼン。ファミリーネームの通り、俺
の…。

「親父…。」

『お前が私のことをそう呼ぶのも久しいな。』

口を閉じたまま、歯を噛み締めた。少し唇が動いただろうが、どうでもいい。親父の方と言うと、机の上に手を組んで座ったままだ。相変わらずの威圧的な態度。

「あれから会ってないのだから当然だろ。」

『なんだ、その事で謝罪でもしに来たのか？』

「関係ないし、そんなつもりもない。欲しいものがあるだけだ。」

頼みごとをするならそれ相応の言い方がある。普段でさえ、こんな口調もしない。でも、相手が親父なのだ。…無理だ。

『何が欲しいんだ？』

「X－File。」

『…駄目だ、帰れ。』

威圧的だった態度がさらにきつくなった。当然だ。息子と言えど、外部に流せないのがX－Fileなんだから。いや、俺達にとってはもっと大きな意味を持っている。

『あの事は諦めろと言っただろう。』

「お袋とは関係ない！それに、今動ければ助けられるんだ。」

思わず怒鳴った。お袋の事が話にあがった。それだけで俺はもう感情を抑えられなくなった。

『…まずは、どういう事か話せ。人にものを頼むならそうしろ。』

俺はなんとか自分を落ち着かせて今の状況を話した。ターシェさんの事件も案の定”X-File”に入れられたらしく、親父の耳にも入っていたらしく、話が早かった。

「だから、その”オーデインの槍”の情報が必要なんだ。一番はじめに使われた事件の話を。」

親父は席を立って、窓から外を見ていた。

『話はわかった。だが、お前は私がどんな人間か分かっているんだろう？』

「それでも警察の中で一番地位の高い知り合いは親父しかいないんだ。背に腹はかえられない。」

なんか使い方間違っていないか？…今はどうでもいい。

『すでに”オーデインの槍”については知っているようだが、それでも話す訳にはいかない。それがルールだからな。事実、私の部下にも話せない。』

親父は外を見たまま動かない。だいたい予想はしてたが、実際言われるとな。

「さっきも言ったら！早く動かないと、もしかしたら三人目の被害者が―」

俺は言葉を止めた。親父がこっちを向き、指を二本出した。将棋をさすような動作。俺が黙ったのを確認すると、親父は話し始めた。

『ここから私が言うのはただの独り言だ。聞くなよ。』

気づくのが遅かった。部下にも言えないってことは親父は捜査をまともにできないんだ。”オーディンの槍”がX-Fileに入れられたのは、病院にハッキングされ、人を殺すことができる、ということだ。俺たちはそれをもう知っているのだから、それ以外はあくまで事件の内容を話すだけ。ならまだ話せるよな…。俺は黙って親父の話を聞き続けた。

第二一話 追憶く親父の背中く（前書き）

更新が不規則になってすいません。

文字数を見て頂いたら納得していただけるでしょうか？

バンの過去の話です。

ブログ←

<http://emeraldnightsky.blog45.fc2.com/>

第一一話 追憶／親父の背中／

親父は義父だ。血の繋がった親父は俺が幼い時に死んだ。殉職。未亡人になったお袋は慰めてもらっていた親父の親友である義父と再婚した。俺が小学生の頃だった。義父は仕事熱心であり、子供の俺にとってはいてもいなくてもあまり変わらなかった。学校行事にはお袋しか来なかったし、遊んでもらった覚えはない。ただ、親父がそうだったように、警官だった義父に憧れがあったのだけは覚えている。それに一時塞ぎ込んでいたお袋がまた明るくなれたのだけでも良かった。

高校にまで上がり、俺は本格的に警察官を目指そうとしていた。男は背中で語る、なんていう訳じゃないが、親父や義父に触発されたのは多かれ少なかれあっただろうな。ちょうどこの年、義父は署長の席についた。祝いの年のはずだったのに、すべてが狂い始めたのはここからだった。

それは突然だった。

梅雨の時期だった。バスケ部だから天気は関係ない。部活が終わり、ロッカー室で着替えていた時のことだ。携帯に着信があった。親父から……？そもそも、親父からの着信は初めてで、何か嫌な予感を感じたが、電話に出た。

『母さんが捕まった。』

冷たく言い放たれたその一言は昨日聞いたかのようにはっきりと耳に残っている。俺は何を言っているのか理解できなかった。

雨が降り続いていたドームから出て、俺は親父の部下の人の車に乗せられ警察署に来ていた。警察署なんて何度も来たことがあるのだから、ここに来たところで未だに信じられなかった。母さんが人を殺したんだと…。

階を上がって行く。階段を上がりきったのと同時に、部屋から出てくるお袋が目に入った。

「お袋！」

『バン。心配しなくても大丈夫。』

お袋の声を聞いたのはこの時が最後だった。どこか影があったが、微笑んでいた。だから、少し安堵した。母さんがそんな事するはずない。きっと何かの間違いだ。親父だって分かってるはずだ。大丈夫だ。すぐになんていかないかもしれないけど、家に帰ってくるさ…。

俺は親父の所へ行った。話を聞ければもっと安心出来るだろうと思った。親父は全く表情を変えていなかった。いつもと変わらない難しい表情のままだった。どうして捕まったのか聞いてもほとんど答えてくれなかった。殺人事件の容疑者として身柄を確保している。誰を、とかは聞けなかった。その方が安心した。親父は事件の事をほとんど話さない。そりゃあ、普通は家族が捕まってるんだし、話せ！って感じなんだが、普段と違うことをされるとそっちの方が不安になる。俺に話す必要もないって考えれば心配するまでもない。捕まった、なんて言うからかなり動揺しちゃった。あゝあ、心配して損した。

俺は一階にまで下り、入り口付近に置かれていたソファに腰掛けた。

親父の部下の人に手が空いたら家に送ってもらうことになった。自販で買ったジュースを飲みながら待っていた。持って来てた小説でも読んでたか……。推理物だったと思う。そうそう、あとちよつとで読み終わるところで、主人公が犯人を追い詰めていたところ。落ち着いたら思い出して鞆から出してた。

入り口が開いた音が聞こえて、条件反射で目を向けた。視界の端でなんか光ったらそっちを見ちまうとかそんなもん。そこにはなんか知らないが黒いスーツを着た、五、六人程度の集団。いや、まだ外に何人か居た。その集団は奥へ奥へと進んでいった。様子からして、地位の高そうな印象を受けた。何しに来たのかなんて知らないし、どうでも良かった。それよりも入れ替わりに部下の人が下りてきて、家へと帰った。いつもお袋が居るからたった一人で家に居るって新鮮だった。飯も適当に済ませてすぐに寝た。心配しすぎて疲れたんだろう。どうせこんなのも今日一日で終わりだろう。そう思うともったいなかったけど、眠気に負けた。

変化に気づいたのは次の日になってからだ。朝、目が覚めてテレビを見ながら朝飯を食っていた。いつもは時間ぎりぎりに起きて慌てて学校に行ってたんだが、案外誰もいないと早くおきるもんだな、なんて思いながらテレビを見ていた。そういや、親父昨日は帰ってきてなかったのか。最近だと、珍しいが特に気にはしなかった。

ニュースで報道された内容に全神経が奪われた。

お袋が……殺人犯で捕まった???

一今朝、エイル・ハルゼン容疑者が殺人の疑いで逮捕されました。昨日の午後三時頃、被害者のフィエロ・バーベラさんが死体で発見され、刺し傷が二十箇所以上あることから、怨恨によるものと判断

し、警察は友人であるエイル容疑者を事情聴取。自白したことにより、逮捕に至った模様です。――

自白？そんな訳ないだろ！なんだよ、これは！

親父に連絡しても繋がらない。学校なんてどうでもいい。警察署へ行こう！足はタクシーでもよべばいい。

警察署について全速力で親父のところへと向かった。エレベーターなんて待ってられない。階段を走って上っていった。部屋に着いた時にはもう喋れないほど息切れしていた。親父は署長室の椅子に座っていた。

「お、親父！どうなってんだよ！…ハア、ハア。」

『…ニュースを見たか。』

親父の表情は微動だにしなかった。ただ口だけが動いていた。

『お前が知った通りだ。それ以上でも、それ以下でも――』

「ふざけんな！！お袋がそんなことする訳ないだろ！親父だって分かってんだろ！なのに、…なんで。」

怒りと悲しみが同時に襲ってきて、頭が混乱している。とりあえず、今お袋はどうなってるのか、それだけでも聞かないと。

『証拠も出ている。それにすでにここにはいない。だから、どうしようもない。』

「なんだよ、それ！自分の妻が捕まったんだぞ！たったそれだけなのか！」

親父にぶつけても仕方なかっただろうが、そうするしかなかった。

『…』

「黙ってないで、何とか―」

『今はまずかったかな？後にしようか？』

後ろで突然声がした。誰か入ってきていた。どこか見覚えがあった。黒いスーツを着た黒のオールバックの男。そうだ、昨日、帰る前に入ってきた奴だ。

『いえ、構いません。バン、学校があるだろう。早く行きなさい。』

「でも、まだ―」

また怒鳴ろうとしたが、親父が指を二本、将棋を指すよう動きを見せた。…俺は黙って部屋を出た。頭の中はまだ怒りと悲しみでいっぱいだった。でも、あの動きを見たら、言うとおりにするように、って合図だった。ただし、言うとおりに、だ。

扉を閉め、外に出た。そこで終わり。エレベーターには戻らなかった。扉に耳を当て、中の話を聞いていた。

扉のせいなのか、声が小さいのか、ほとんど聞こえなかった。

その中で聞いたのが、”X－File”だった。

何度も出てきたし、微妙に親父が声を大きくしてくれたから聞き取れた。それ以外は音としてしか聞こえなかった。

あまり長居していたらまずい。俺はそこを離れた。

結局学校には行ったものの、ずっと奥上に居た。誰にも会いたくなかった。絶対何かしら訊かれるに違いないから。それに一人で考えたかった。”X-File”ってのは一体なんなのか。それがなんなのかはこの時は知らなかった。ただ、親父がそれを聞かせたかったんだから、お袋の話と何かしら関係があるんだ。親父からは何も言えなかったんだろう。”上がルールを守らずして、下が守るはずがない。”そういう人間だから、こんなときでもそれは変わらない。だから、俺が勝手に動く。その時のためのあの合図。数回しか使っていないけどな。

とは言っても、それだけで考えたって分かるはずない。検索でもしてみるか。暗い雲からポツポツと雨も降り出しだし、学校内のコンピュータ室に向かった。授業中で誰もいない室内であんまり慣れていないキーを打ち始めた。”X-File”で引っかけたものはほとんど映画のタイトル。こんなもんを親父たちが話してる訳ないよな……。何個も見えていったが、よさそうなのが見つからなくて諦めようと終わろうとしたとき、ある単語に目が止まった。”警察”。そうだよ、警察も一緒に検索にかければよかった。そのサイトに入って記事を読み進めた。

”警察には外部に公表されると社会的・政治的に混乱を招くような事件を公表せず、機密情報として闇に葬っている。それを通称”X-File”と呼んでいる。”

なんだよ、このマンガみたいなもの。読み進めても妄想だとは思えないようなもんしか書いていない。親父はこんなことを言いたかったのか？もしもこれが本当にあるとして、お袋となんか関係あるのか？隠された事件。中には別の犯人を出すなんてして隠したなんてのものもあるらしい。冤罪じゃねえか。そんなの、ありえな――

まさか、お袋……も。

だから、親父も手を出せない。だから、お袋が捕まった。だから、だから、だから、……。

すぐにでも親父に確認したかった。だが、もう一度警察署に行ったところでろくに話なんてできないだろう。せめて、家で話せば少しはマシだろ。帰ってくるまで待とう。

となると、もう学校になんていれない。昨日は帰って来なかったから、今日は早めに帰って来るかも知れない。今すぐにでも帰ろう。俺はコンピュータ室を出た。

帰る前に部長に練習を休む、と伝えた。理由は聞かれなかった。もう知られてたみたいで、“がんばれよ”、と声をかけてくれた。詮索されなかった事が一番ありがたかった。なんたって、俺の方がよくわかってないんだから。

家へ走った。歩いたって十数分程度しかかからないような距離だから、走ればすぐだ。家に着いても親父がいなけりゃ、できることもなく、もどかしいだけだが、今はそうするしかない。帰ってこないときは……そんなときはそんなときだ。

家が見えてきた。いるかどうかわかんねえ。今更になって、先に連

絡いれときゃよかった。スピードは緩めず、玄関へ。親父の靴はあった。帰ってきてる！履いている靴を雑に脱ぎ散らかし、二階の親父の部屋めがけ、階段を駆け上がった。

「親父っー！ー！！」

扉を開けるよりも先に叫んでいた。部屋には制服を脱ぎ、ラフな格好に着替えていた親父の後ろ姿。こんだけ大声出しながら部屋に入ったのに、こっちを振り返ることもなくベッドへ向かっている。

『ノックしろ。』

とか、よく言われた。この時も何もせずに扉を開けたが、俺の声が代わりになったのか知らないが、何も言われはしなかった。むしろ無視。

「お袋のー」

『話はまた後にしてくれ。疲れた。』

予想外の返事だった。帰ったら話す、そんな感じだったじゃないか。：まあ、徹夜明けなら当然と言えば当然なんだけどさ。これだと、俺だけが蚊帳の外じゃないか。

「じゃあ、一つだけ教えてくれよ。：X－Fileなんてホントにあるのか？」

『…。』

親父は何も返さなかった。それで十分だった。俺はすでにベッドに

入り、頭しか見えない親父を少し見た後、静かに部屋を出た。

自分の部屋には行かず、バスルームへ直行した。全力で走ってきたから汗だくだし、他にできるような事もないから。考えるのにもいいだろ。

シャワーを浴びて、汗を流す。気持ちいい、なんて思えたのは最初だけ。すぐにまた考え込み、シャワーなんて気にならなくなった。親父の無言はYESの意味。X-Fileなんて本当にあるのかよ…。じゃあ、親父は上からの圧力でお袋のことに手を出せないのか？帰ってこなかったのは、どうにかして、お袋を助けようとしてたんだろうな。そりゃ、お袋はまだ殺人犯扱いだけど、今は休んでもらわないとな。親父が倒れたら、悔しいけど、俺にはなんにもできない…。

無意識に壁を叩いていた。結構力んでて、痛かった。

シャワーから上がり、リビングへ。

本当はテレビなんて見たくなかったが、お袋が今どうなってるのかは知る必要がある。批難は聞こえないことにしよう。そう思いながらテレビを見てたが、どこのニュース番組にもお袋の事件は出てこなかった。変だ。その日の朝ニュースになったのに、昼過ぎにはもう取り上げられないなんて。しかも、殺人だ。一局くらいはないとおかしい。

仕方なく、適当なニュース番組をつけたまま、何も考えずにテレビを眺めていた。そんなときだった。

一本の電話。親父はさすがに疲れて気づかないみたいだ。いつもなら、ちょっとした物音で起きるのにな。ソファから立ち上がり、受

話器を取った。

「もしもし？」

『バン君？』

親父の部下の人だ。

「署長に繋がらないんだけどいるかい？」

「は、はい。」

『ならすぐに署に来てくれるよう言ってくれ。詳しくは署に着てから伝える、と。』

返事を返す前に切られた。かなり焦ってたみたいだけど、何があったんだ？まさか、お袋のことでなんかあったのか？

『…今の電話は？』

のそのそと親父が部屋から下りてきた。やっとの眠りを邪魔されて不機嫌だ、と顔に書いてあった。俺は部下の人に言われたことをそのまま伝えた。

「親父、俺も連れていってくれ！」

部屋に戻って着替えを始めた親父に頼んだ。

『ダメだ。』

即答。短く、強く否定された。それでも、置いていかれる、なんて訳にはいかない。

「お袋の件に関係なかったらすぐ帰る！家族なのに、俺だけ何も知らない、なんて嫌なんだよ。」

親父は黙って着替えを続けた。唐突にさっきの返事を返した。

『仕方ない。だが、口出しはするなよ。母さんの事を思うなら…。』

「わかった。」

案外すんなり通ったもんだった。いつもなら、一度親父が拒んだら、縦に首を振るなんてなかったのに…。そのときは、気づかなかったんだけどな。お袋のどこに行ける、何か分かる。ただ、それだけだった。

警察署に着いて最初に聞いた言葉に耳を疑った。信じられなかった。

お袋が自殺した。未遂だったが、意識のない重体。

「じ、自殺！？お袋が、そんな訳…。な、なんで自殺だなんて―」

親父の目に言葉を遮れた。いつもの目より威圧感を感じた。

『遺書が見つかったんです。署長とバン君宛ての。』

部下の人が親父に遺書を渡した。俺には見えないようにして読む。表情が強張っていくように思えた。

俺が言葉を発するよりも早く、親父はお袋の遺書を渡してくれた。

一貴方とバンへ

こんなことになってごめんなさい。二人には迷惑をかけてしまうから、私は消えてしまおうと思います。バンには二度も親を失う悲しさを与えてしまうけど、あなたは強いから、私が生きているよりは負担にならないと思う。貴方、バン、今まで愛してくれてありがとう。――

名前は書いてなかったけど、この字はお袋だ。…そんな訳ない。否定したかった。何度見ても、お袋の字にしか見えない。

「嘘だ…。」

それだけ搾り出すだけで精一杯だった。お袋はなんにもしてないのに、それでも捕まった自分が負担にならないように一ちがう、ちがう！考えたくない。お袋が死のうとしたなんて、考えたくない！

そこから記憶が少し飛ぶ。お袋の事でかなり衝撃受けたし、まともでいられるはずがなかった。そういう事なんだろうな。

気がついたときには病院の廊下にいた。

『着いたぞ、ここだ。』

着いた？どこに？

『…母さんの所だ。』

お袋…。そうだ！お袋は…。

やっと覚醒し始めた脳。まだ動きの鈍い俺よりも先に、親父が病室の扉を叩いた。ゆっくりと開いていく視界の中にお袋は映らず、カーテンで覆われた。中へ入っていく親父の背を追う。…少し小さくなってしまったような背を。

窓際に置かれたベッドにお袋は眠っていた。呼びかけたら起きてきそうな、そんな自然な感じだ。むしろ、俺達に心配かけさせたいから、寝てるふりしてるだけじゃないか？

「お袋、起きてくれ。俺、聞きたいことがあるんだ。」

声をかけても、ぴくりとも動かない。もう一度、声をかけようとしたところを親父に止められた。

『手首を切ったらしい。発見が早さと蘇生処置があったから一命を取り留めたが、心臓が止まっていたそうだ。それで…後遺症が残るかもしれない、と。』

いつもの威圧感はこれっぽっちもなかった。今思えば、親父もかなりシヨックだったんだな。自分のことでいっぱいいっぱいだった俺は気づけなかった。

「なんで…なんでだよ！」

俺の中の感情が…爆発した。

「親父、あんた偉いんだろ？なんで…なんでお袋を助けてくれなかったんだ！そうしたら、こんな事にならなかったのに！」

『私は：偉くなどない。』

「そんなのは聞きたくない！自分の首が飛ぶくらいの覚悟なら、こんな事にならずにすんだんだ！それに、もしかしたら、お袋、死んでたかも知れないんだ！今だって障害が残るかもしれないなんて：。」

許せなかった。懂れていた警察に裏切られ、信じていた男の背が嘘だと知った。結局、親父は自分が大事だったんだ。俺やお袋は二の次、いやもしかしたらどうでもいいんじゃないか。：何もかもが悪い方向にしか考えられなかった。理不尽だなんて考えてる余裕がなかった。自分だけがズタズタになったと思っていた。

『：すまない。』

「謝ったって仕方がないだろ！」

『落ち着いて、バン君。ここは病院だ。気持ちわかるけど、抑えてくれ。』

部下の人にそう言われ、仕方なく怒鳴るのを止めた。それでも、抑えられる訳がなく、俺は病室、病院を出た。

どれだけ時間が経ったのかよくわからない。中も外も真っ暗だ。伸ばした手でなんとか明かりを点けた。明るくなった部屋が、目に入った。

ぐちゃぐちゃ。まさにそんな言葉があてはまる。泥棒にでも入られ

たようだ。…そんな訳ないか。

帰ってきて、抑える必要がなくなり、俺は暴れた。部屋中のものに当たり散らした。元の位置にあるものが一つもないようにするくらい…。

そりゃそうだろう？お袋はすぐに目を覚ますんだとしても、障害がないんだとしても、警察のせいでもそこまで追い詰められた傷は残る。もう二度と同じ事をしないなんて言えないだろう？

ものに当たるしか出来ず、虚しくなるだけで、ベッドに倒れるように横になった。怒りが鎮まると、急に哀しさが込み上げてきた。俺達を裏切られ、お袋をあんな目にあわせた警察。そんな警察に今更になりたいなんて思えなかった。

「親父：俺、どうしたらいいんだろ…。」

いつもは机の上に置いていた親父の写真。暴れた部屋だと、ベッドの上に乗っていた。俺が幼い頃に殉職した親父。一番憧れた背中。親父は通り魔を追っていて、襲われそうになった人を庇って刺された。

今思うと親父らしい最後だったと思う。義父から聞いた話ばかりだったけど、それだけで親父がどんな人間だったのかわかった。情に熱くて、仲間思い。誰かを守るためなら命だってかけられる。そんな人間。

俺が憧れたのはその男の背中だ。それだけは変わらない。だったら、何も警官になる必要なんてない。

安直かもしれないが、俺がボディガードになるのを決めたのはこの時だった。二つ上の先輩がボディガードになったから、すぐに浮かんたのかもしれない。結構人気のある仕事だからなのかもしれない。少なくとも、警察から離れればそれでもいいと思っていたから、十分だった。

お袋に話したら、なんて言うだろう。危険だからやめなさい、って否定されるだろうか。素敵じゃない、って応援してくれるだろうか。どっちでもいいから、早く話したい。まだ起きていないんだろうか。明日は学校に行こう。その帰りに、遠くなるけど、病院にまで行こう。

寝たせいか、暴れ回ったせいか、とにかく落ち着いてくると、頭がよく回るようになった。おかげで、こんな部屋を片付けようだなんて考えさえ浮かんた。自分でしたこととはいえ、片付けても片付けてもなかなかよくならない部屋にかなり悩まされた。それでも、不思議と手は止まらなかった。

この日から親父とは全くといっていいほど、話をしなくなった。数日間は多少話したかもしれないが、お袋が一週間以上目を覚まさない状態が続くと、話しなんてしたくもなくなった。

高校を出て、すぐに先輩の下で働き始めた。その先輩を鍛えていたのが元NO.2だった人だった。今は亡くなってしまったが、尊敬している一人だ。

そして、今にいたる。昔話はここまで。

第一一二話 消えた生存者

やっとだな。病院のエレベータに乗り、目的の病室へ向かう。今まで警察から許可がおりなくて会えなかったが、やっと会える。ケルベロスの被害者に。

ただ、どうも気になる。バンは単身警察署に向かったみたいだが、どうするつもりなんだ？ いや、俺が行ったところで何も変わらないし、あの自信なら考えがあるんだろうが、どうやって？ …やめよう。任せてくれ、と言われたんだ。バンならどうにかするか。俺なんかよりよっぽどしっかりしてんだしな。

エレベータが止まった。着いたか。扉が開くと病院独特の真っ白な廊下が広がっていく。その道をただ真っ直ぐ進んで行く。一度前まできて追い返されたから、道は知っていた。迷うほど入り組んでもないけどな。

部屋に近づくとき警官が二人立っていた。連中にとっても重要な情報源だからな。守っておきたい、ついより、手放したくないんだろうな。わかりやすい。

そもそも、警察関係者でもない俺が面会できるのも、奴と対峙して生き残った人間だからだしな。俺達が出会うことで新しい情報が見つかれば、なんて考えてるんだろう。もちろん、それに協力するんだが、あいつを捕まるのは俺だ。それは譲らない。譲るわけにはいかない。

「どうも。面会予定のジェイク・アーベェンです。」

軽く会釈をする。二人の警官は表情を全く変えずに返してくる。

『お待ちしていました。』

棒読み。特にリアクションする訳でもなく、淡々と話が続く。

『ご存知と思いますが、彼は半身を失っており、あの者に対するかなりの恐怖と憎悪を持っています。会話の内容によっては、容態が急変することもあります。それをお忘れなく。』

そりゃそうだよな。自分の半身もっていった奴なんだ。そう思っ
て当然だ。ただ、それでもあいつの話をしないといけない。酷かも
知れないが許してくれよ。

『あと、会話の内容はこちらで全て記録させて頂きます。それも覚えていてください。』

さっきまで無表情で突っ立っていた、もう一人の警官が付け足す。
別に聞かれても困ることなんて話さねえよ。

「わかりました。」

たった一言だけの意識表情。それで十分だ。愛想ねえしな。

俺が病室のドアを開けようと、取っ手を掴んだ。開こうと力をいれた瞬間だった。突然横から手が伸び、取っ手を抑えた。

『くれぐれも容態を崩させないように。』

小さく、ただし、強く言い放った。怪しい笑みを浮かべた表情に、

悪寒が走った。気づいたときにはさっきまでの無表情のまま突っ立ったままだ。…気味悪い。さっさと聞くこと聞いて帰ろう。今度こそ、俺はドアを開けた。

ドアが開ききつたのと同時に風が吹き抜けた。窓でも開けてんのか？特に気にすることなく、中へ進んでいく。ドアから見えないってことはベッドは左にあるみたいだ。中へさらに足を進め、視線は左によせる。半身失った人間か…。今まで会ったことのある人の中で一番酷い状態だ。表情には特に気をつけないとな。

ベッドが見えてきた。しっかりと心構えをしてまた一步足を進めた。せいぜい四、五メートルの距離が随分長く感じた。もうすぐだ。

白いベッドには誰かが横になってる事を表す山が出来ていた。こいつが俺と同じ生き残りか…。半身を失ったおと…。

思考が一瞬止まった。おかしい。半身を失ってる人間のかさじゃない。そもそも怪我人が頭から全身を隠すようにシーツを被るか？それに、窓は閉まっていた。

最悪な考えしか浮かばなかった。俺は答えを出すより早くシーツを掴み取った。

相変わらず悪い予感やら考えは当たる訳で、そこに人の姿はなかった。やられた。空を刺してる機器はまるでそこに人がいるかのようにならず動いている。すぐに駆け出して部屋を出た。

「おい！あんたらちゃんと見張って…。」

さっきドアの横にいた二人を探したんだ。だが、最初にいた場所に

は誰もいない。どこに行きやがった。

"ドンドン"

左右どちらから探そうか、迷っていた時、部屋の中から物音がした。壁を叩くような音。振り返ると、入ってすぐのドアが揺れていた。トイレだと思いがなぜそんなところから音がするのか？不信に思いながらもドアを開ける。

『んゝゝ。』

拘束された男が二人。それからわかるのは…。

「…クソツタレ。」

第一二三話 隠された事件

—

八年前、十二月二十五日。

零時丁度、ロライス・グラインが死亡。死因は一般には心臓麻痺による自然死と公表。実際は殺害。それも心臓に取り付けているピックを誤作動させ、電気ショックを起こしたという、前代未聞の事件だった。

犯人はロバート・アウデイス。犯行後、警察署に自ら自主してきた。

彼によると、

” 自らの犯した罪が恐ろしくなり、自主するに至った。 ”

とのこと。犯行についても自供している。

” その男が入院していることを予め知っていた。病院のデータベースに侵入し、入院している病室を調べ、チップに繋がっている機器へ移り、セキュリティをかい潜って誤作動させた。 ”

彼はチップへのハッキングを成し遂げた。自作プログラム” オーデインの槍 ” による侵入。チップへのハッキングさえ異例であるのに、最深部である生命器官へ到達した。これに対し、国際連合は早急にセキュリティの改善を行っている。

動機については、娘の敵討ちと答えた。同年の八月十五日、彼の娘

であるシアル・エイデンが夫、次男と共に殺害されるという事件が起こった。犯人は特定しておらず、有力な証拠も見つからず、捜査は難航していた。

また、この情報は外部に漏らす事を禁止し、以後、"X-File"に区分するものとする。

—

『大体そんなものか…。』

親父の話が終わった。正直、こんなにもすんなりと話してくれるだなんて思ってもみなかった。だからこそ、何かあるだろうと疑った。

「見返りに何が欲しいんだ。」

未だケンカ腰になってる自分が少し間抜けに思えた。それでも、変えたくはない。ただの意地だとしても…。

『簡単なことだ。早く奴を捕らえて、身柄を渡してくればいい。話せば捕らえてくれるんだろう？』

簡単に言ってくれるな。あんたらだって苦労してるくせにさ。

『それよりも、早く出て行ってくれ。私も忙しいんだ。他の事は自分で調べてくれ。』

窓の外を眺めていた親父は振り返り、机へ向かう。そして、部屋に入ってきたときと同じ姿勢で書類に目を通し始めた。欲しい情報は貰えたんだから、もう出て行くべきなんだろう。少し沈黙した後、

後ろの扉に近づいて行く。

「親父。」

取っ手に手をかけたとき、どうしても一言言いたいことがあった。

『何だ？』

「…ごめん。」

取っ手を引き、部屋を出た。

行きと同じエレベータに乗り、下の階のボタンを押した。手掛かりはあった。”オーディンの槍”を作ったロバート・アウデイス。そいつに会うことで、何か得られるはずだ。先輩も何か得ているだろうから、それと共に追おう。ただ、一通り話してくれた後、親父が少し付け足したことも、少し気になった。それも話しておくべきだな。病院に居るはずだから、迎えに行こう。

…二手に分かれようと提案したのは、先輩に親父とのことを知られるのが嫌だったのもあるが、病院に行くのも辛いからだ。お袋は閉じた瞼を開けないまま、ずっと眠っている。たまに顔を出しているが、その顔を見ているのが辛く、話しかけてはいるがあまり長い間いない。いない、というか、居られない。

下の階に着いた。入口の方で何人が固まっているのが見える。何かあったんだろうか？遠目から見えていたら、そこに知った顔があったことに驚いた。

『先輩！どうしたんスか？！』

第一一四話 手がかり

『災難でしたね。』

「全くだよ。」

警察署を出て、近場のビル内の定食屋で遅目の昼飯をとることにした。バンに言われて腹減ったことに気づいた。それどころじゃなかったしなあ。

「まさか、あの状況で引っ張られるとは思わなかったよ。誰のおかげで迅速に動けたと思ってんだか。」

『仕方ないツスよ。タイミング良すぎたんスし、先輩はその二人の顔を一番見た訳なんスから。』

その通りなんだけどな。でも、それがなけりゃ、何かしら掴めただろ、と思うと腹が立つ。：バンに当たっても仕方ないな。本題に入るか。

「：で、何か掴めたか？」

バンが軽く頷く。

『詳しくは場所を変えて話しますが、手掛かりはあったツス。』

さすがだよ。さっきの警官の態度から考えると、地位の高い知り合いがいる、ってとこなんだろうな。

「よし！じゃあさっさと食って探しに行こうぜ。」

飯を食い終わり、車へ向かった。車内でバンから話を聞いた。俺から話せる事がないのが癪だ。

「つまりは”オーデインの槍”はそいつのもんだった訳か。」

『そういう事になるんす。ただ、複製の後はなかったらしいッスし、セキュリティ自体当時よりかなり嚴重になったから、同じものでない可能性が高いッスね。』

誰かが新しく作ったもんだと考えた方がいいのか？

「にしても、また使われたら防ぎようがないんじゃないか？そんなもの。」

『そうでもないみたいッス。チップに一度侵入したら、印が付くらしくて、印の付いた者がもう一度侵入しようとする、その時点で確保・特定が起こりらしくて…。よくわかんないッスけど、大丈夫らしいッス。』

苦笑いをしながら話す。誰かからとりあえず聞いた、って感じだな。

「なるほど。…で、手掛かりつてのは、その爺さんなのか。」

捕まった時で六十代。今じゃ七十越えてるんだろうな。

『そうッス。ただ、今どうしてるかまでは聞けなかったんで、それ

は調べないと。』

「って事だ。ザイレイ、頼んだぜ。」

『わかった。』

通信機越しに返事を返したザイレイ。バンは一瞬固まった。顔には疑問の色しか浮かんでいない。

『え…？ザイレイさん、いつから聞いていたんですか？』

「『最初から。』」

何故かハモった。

『安心しろ。これほど重要な情報売りはしない。警察の重役に脅す程度だ。代わりに報酬分の手を貸す。』

脅す程度ね…。まあ、これで当分ザイレイは働いてくれるだろうな。バンはあんまり納得してないみたいだが。

「心配すんな。情報屋は嘘は言わない。売らないつつたら、絶対売らないさ。」

『そうッスけどー』

『出たぞ。』

バンの声を遮り、少しノイズの混ざったザイレイの声が届いた。さすがに早いな。運転席と助手席の間に備え付けている小型のモニタ

ーに顔写真が映る。シワの多い年季の入った顔。丸い眼鏡の奥の目が細く、優しいおじいちゃんって感じた。とてもあんな恐ろしいものを作ったなんて思えない。

『ロバート・アウデイス。事件後、刑務所に入っていたが、その翌年に死んでいる。』

「『死んでる！？』」

あ、またハモった。今度はバンか。…じゃねえ。

『ああ。どうやら刑務所に入る前にはすでに末期癌だったようだ。それで、獄中で病死扱い。』

おいおい。それが本当だと、また振り出しだぞ？

「本当に死んでるのか？」

『そこまでは調べようがない。カルテ、死亡診断書から見ると、死んでると考えるのが普通だろう。それほどの技術があるのだから、どこかで利用されてるとも考えられるが、そうだとすると、見つけ出すのはかなり難しいだろう。』

つまり、じいさんの線は無理ってことか…。うなだれた俺とは違い、バンは口に手をやり、何か考えているような仕種をしていた。

『だとしたら、もう一人の線を追いますか。』

もう一人？誰だそいつは。

『動機の事件が起こって、ロバートは娘夫婦の長男を引き取ったん
ス。今だと二十代になる男。名前はトーマス・エイデン。側に
いた彼なら、もしかしたら容疑者になり得る人間を知ってるかも知
れないッス。』

なるほどな。まだ道はあるのか。

「ザイレイ、そいつが今どこにいるかー。」

『今やってる。』

さすが、よくわかってる。

『それと、気になる事があったてすね、半年前の事件、実はその長
男が第一発見者だったんスけど、事情聴取の時に言ったのがです
ね。。。』

「ん？」

「"白い狼が殺した"、だったらいいんス。」

第一一五話 謎の封筒

「今日はここまでだ。」

何色も色の混ざったパレットと筆を置き、立ち上がった。キャンバスに描き上げている人物の顔を見る。二百人近くもの人の顔を描いているからか、明らかに始めに描いたものよりも本人に近い形になる。：皮肉なもんだ。

顔は何も見なくても描ける。話したように何度も夢に出るのだ、嫌でも覚える。その顔は皆、俺を睨みつけているようにしか見えなかった。だから、俺が描いた絵はそんな顔しか残らない。

『歌姫さん：笑ってるみたい。』

隣で見ていた彼女はそう言う。改めてみても俺を睨みつけているようにしか見えない。それでいい。憎まれるのは俺なんだから。

見られたくないもの、まさにこの事だった。相棒も知っているだろうが、ここに入らせたことはなかった。彼女も入れるつもりなんて皆無だった。なのに、どうしてなのか、見つかることが分かっていたかのような態度をとっていた。拒むこともせず、むしろ受け入れている。自分の考えている事がわからない。ただ、彼女が隣にいて描いていた時がよく筆が動いた。

『ねえ、狼さん……。』

キャンバスを乾燥棚にしまい、戻ってきた時、彼女は机の上に置いた色の染みたパレットを見ながら言った。

『また、描いてるところ見てもいい？』

「…好きにしろ。」

自然と言葉が口から出た。本能で悟ったのかも知れない。俺達にはこんな時間が必要なんだと。それが例え短いものだとしても。

『うん。』

彼女は視線を変えずに静かに答えた。彼女は今何を感じているのだろうか。あの絵が笑っていたなんて…。

片付け終わり、部屋を出る。廊下の汚れ様を見て、掃除をしたい、と言い出した彼女を止め、上に上がるのは一苦労だった。確かに、ここは埃の絨毯とでも言えるほどだし、蜘蛛の巣のカーテンなんて表現も似合うかもしれない。この酷さは認めよう。それでも、こここの家具は変えない。毛に付く埃が気になるとしても、ここは最初に見た様と変えない。変なこだわりだが、なんとか彼女を止めた。

『絶対掃除した方がいいのに…。』

膨れても駄目なものは駄目だ。結局、まだ諦め切れていないようだが、なんとか押し切った、そんな感じでしかなかった。勝手に入られるよりも、勝手に掃除されないかの方が心配になってきた。

「アトリエの中は綺麗にしてるんだから、構わないだろ。」

なんて言い訳に満足してくれる訳もなく、ふて腐れたまま、エレベーターを待っている。参ったな。満足のいくような答えが浮かばない。

『仕方ない。狼さんの意外な趣味を見つけたんだし、許してあげよう。』

どうして上から人を見てるんだよ。それでも、これで掃除されなくて済むんだから、それだけでもいいとするか。

「何か…趣味はあるのか？」

当然の受け答え。ただ、彼女はずっとあの中にいたのだから、普通とは違う。訊くのを一瞬躊躇ったが、一度声にしたのだ、最後まで声にした。

『私の？…うん。』

"チーン"

答えを返すよりも早く、エレベータが着いた。よく考えてみると変だ。俺がこの階に降りて着たのが最後のはず。なら、エレベータはずっとこの階にあるはずだ。トイッシュが帰ってきたのか？そうだとしても一つ上の階にあるはずだ。俺達以外の人間がここに入ると警報が鳴る。なら、故障か？それはそれで問題だが…。

"ガサッ"

『ん？』

何の気無しに乗った彼女が止まった。何か踏んだようだ。封筒？なんでそんなものがここに？

「貸してくれ。」

彼女から受け取った封筒の中をあさる。中には、一枚のディスクと…。

「カードキー？」

青い一枚のカードキーが入っていた。文字は何も入っておらず、三角形に三本の線が斜めに入ったロゴが描かれている。俺はこれを知っている。

"チーン"

扉が開くのと同時に歩き出す。相棒に連絡を取ろう。俺が知らないなら相棒しかいない。似たようなことがなかった訳ではないしな。

『私…戻った方がいい？』

弱々しい声で彼女が言う。仕事関連の話だと分かったのだろう。昨日聞かれた時に怒鳴った訳だしな。ただ、もう既に一件聞かれているし、見られてもいるしな。聞かれたところで何ともない。

「好きにしろ。」

俺の後ろから、軽快な足音がついてきた。

第一六話 接触

あー、面倒臭い、面倒臭い。なんでこっちにいないといけないんだよ。そりゃあ、あんなもん使っちゃまったんだし、仕方ないったらそこまでなんだけどな。あんのバカ犬、帰ったらまたぶん殴ってやろうか。

昼前に刑事がやって来て、いろいろ聞いてくんだよ。

そりゃ、あのじいさんの作ったのが始まりなんだしな。

じいさんと親交の深い奴知らないか、なんて聞かれた。はい、俺がやりました！って、叫んでやりたかったな。我慢して、適当に何人か言っちゃった。俺が容疑者に入る訳なかった。当時まだガキだったし、そんな高度なプログラム、作れる訳ねえ、って思うわな。残念ながら俺が作ったんだよ。努力の賜物だよ。

当分ここに来るだろうから、向こうには帰れそうにないなあ。まあ、遠隔でも大概動かせるからなんとかなるでしょ。さてと、そろそろ晩飯考えないとなあ。何買っちゃこよ。

”コンコン”

財布を取って外に出ようとしたまさにそのときだ。何かしようとするって決まってジャマが入る。また刑事か？適当に答えて返すことにしよ。

「誰ですかあ？」

静かになった扉を開けると、男が二人立っていた。刑事だと思っていたが、違う。ジェイク・アーベン。セフィーを探している奴。意

外と早かったなあ。もつとかかるもんだと思ってたのに。

『突然すいません。我々こういう者なんです、少しお聞きしたいことがあります…。』

そういつて、名刺を渡された。まあ見なくてもあんならのは知ってるよ。もう一人がバン・ヘルゼンだってことも。

「はあ。聞きたいことってのは、やっぱりあの…祖父のことですかあ？」

刑事にさんざん聞かれてるんだから、当然の反応だね。向こうは反応していたけどな。予想外だったのか？

「昼ごろにも刑事さんが来たんですよ。その時は祖父のことを聞かれたんです。」

『刑事が？…何を聞かれたんですか？』

やっぱり予想外なのか。別に関係ないな。言うことに変わりはないよ。

「えーとお、祖父の知り合いについて…です。ただ、俺も子供のころだったし、半年くらいの話だったのでほとんど答えられなかったんですけど。」

『その人たちの名前、教えてもらえませんか？』

そうくるよな。答えてもいいけど、都合よく、刑事どもが忠告してくれたしな。

「すみません。刑事さんが他の人には話さないように、と言われたのでえ。それにさっきも言った通り、はっきりと断言できるものじゃないんですよ。」

俺っていつも思うけど、俳優になれんじやないかな？思ってることと真逆のことでもなんともないしな。二人は少し気落ちしてるようだ。まあ、詰んだだろうし、しゃーないね。

『そうですか…。おじいさんはどのような方だったんですか？』

「祖父ですかあ？…温厚でとても優しい人でしたあ。未だにあんなことをしたなんて信じられません。」

哀しみを含んだ表情で答えた。他人から見たじじいの性格を。温厚？優しい？自分で言ってる笑いが出そうになる。抑えろ、抑えろ。

『そうですか。お手間をおかけして申し訳ありません。最後に一つだけ、構いませんか？』

「なんですかあ？」

まだなんか聞くことあんの？…なんだろうね？

『“白い狼が殺した。”と、言うのはどうゆう事なんですか？』

固まった。頭ん中が、思考が。なんでそれを知ってる。調書の中の記述は消されたはずだ。残ってる訳ないんだ。

別に俺がそう言ったことが知られても、問題ない。恐怖のあまりに

そう見えた。それで十分だ。肝心なのはそこじゃない。問題なのは思い出してしまうこと。あの時を。あの情景を。頭に血が上って、まともに演技なんてできなくなってくる。なんとか答えないと。

「あ、あんな光景見たんで、そんな風に見えたんだと思います。：すいません、思い出したくないんで、これでいいですか？」

『：すいません。ありがとうございました。』

そそくさと帰っていった。最後は雰囲気が変わっちまってたか。しやーないな。これでも耐えた方だから：。

”ピリリリリリ”

ケータイか？誰だ？：バカ犬。

「はい、なに？」

『相棒か？パソコンを少し使いたいんだが、いいか。』

声を聞くだけでいらだってくる。あいつを思い出して怒りしかわいてこない。

「そんなことで一々連絡しないでいいよ。勝手に使って。」

電源を切ってベッドに投げ付けた。：飯、買いに行こ。

第二一七話 四の舞

随分機嫌が悪いようだ。昨日の事を引きずっているような感じではなかったようだが（もしそうなら電話にすらでない）、何かあったのだろうか？ 気にしても仕方ないか。使っても構わないなら、それでいい。相棒は言っている事がよく変わるから、勝手に使って愚痴を言われるとたまったものではない。

ディスクを取り出し、パソコンに入れる。機械が苦手とは言ったが、ディスク内のデータくらいは見られる。ディスクの中には画像が一つと文章が一つ。たったそれだけだった。

そういえば相棒が持ってきたのか聞きそびれた。まあ、相棒以外いるはずないしな。構わないか。そんなことを考えながら、文章を開く。

開かれたページには簡潔に全てが書かれていた。

—
獣の出生を紐解いた。

明日の午前三時に地図の場所に潜入せよ。

ただし、鍵、地図は全て頭に完璧に畳み込むべし。

—

獣…俺だ。俺をこんな体にした奴らがとうとう見付かったのだ。あまりに唐突で、心が反応できない。それでも、ここに書かれた通りなら、間もなく元に戻るに違いない。

『…狼にした人達が見つかったってこと？』

少し時間がかかって、内容を理解した彼女が疑問を残したまま声にした。確かに少しわかりにくい文だな。

「そう言う事らしい。」

肯定の答えを聞いて、表情が明るくなった。

『じゃあ、元に戻るんだ!』

さっきとは対照的に声を張り上げて言う。自分の事のように喜んでいる。

「恐らくな…。」

『うれしくないの?』

彼女とは対照的に静かに答えた俺を不思議そうに見る。だが、何か悟ったのか、直ぐに表情に雲がかかった。

『戻っても、奥さんたちのところに帰れないから?』

改めて思うと彼女には本当に色々と話したものだ。望みを失って比較的早かったからなのかはよくわからなかったが、少なくとも誰かに俺を理解してもらいたかったから話した。そう言う事なんだろう。

「ああ、戻っても意味がない。そう思えてな…。」

思ったままを答えた。いや、答えられた。

『どうするの？行かないの？』

「…。」

どうするのか。これは任務ではなく、俺への報酬。選択権は俺にある。数日前ならば迷わず選んでいたものも、今更なんの意味があるのか…。俺の居場所は今なくなったんだ。

『居場所がなくなっただっていいじゃない。』

静かにゆっくりと彼女は言う。何を意図しているのかさっぱりだ。だから、俺は俯いたまま聞き返した。

「どういう事だ？」

『また作ればいいってこと。』

「随分簡単に言うんだな。」

そんなものはいらない、とでも言い出すのかと思った。前例があったからな。それでも、酷な事を言ってくれる。そんな事ができれば誰も苦労はしない。

『だって、私にもできたんだもん。』

彼女の居場所…ここか？居場所なんて人さえいればできるが、俺や相棒が居場所と言えるのか？

『だから、きっと元に戻れば作れるよ。それに、そうじゃないと…。』

途中で彼女は言葉を切った。言わなくてもわかる。殺した人間たちがなんのために死んだかわからない。その通りだ。ここで元に戻らなければ、罪滅ぼしさえ出来ない。居場所がどうなるかはどうでもいい。だが、せめてそれだけはしなければ。少なくとも、今のままでは何もできない。

「…わかった。行く事にする。」

『うん。それがいいと思う。』

俺はモニターに向き直すと、残りの画像ファイルを開いた。

第一一八話 消せない想い

『そんなことあったのによく傷口開かなかったものね。』

トーイッシュ・エイデンに会った後、俺たちは本部に一旦戻ってきた。報告やらなんやらしないといけないからな。で、エレベータで上がってるときにフローラに会っちゃって、医務室まで引っ張り込まれたっていうとこだ。一応主治医みたいなもんだから、俺の体を気にしてくれる訳だ。

「頑丈なもんでな。」

包帯を取って斬られた傷口を診られた。言われてみりゃ、あんな動き回ったのによく開かなかったな。開いたとしても関係なかったろうが…。

フローラの言い方でわかると思うが、ある程度昨日の事を話した。もちろん、"オーディンの槍"の話はなしで、だ。幼なじみのターシェがケルベロスに襲われた。ほとんどそれくらい。

『…それで、あんたは大丈夫なの?』

新しい包帯を巻き直しながら、声を落としていった。

「それを今診てくれてんだろ？」

変な事を聞くもんだ。なんて、笑いながら答えた…んだが、直ぐさま真剣な口調で言い返された。

『茶化さない。心の方よ。』

ああ、そういう事か。

「大丈夫だよ。あいつと約束したし…。」

『ホントなんだろうね?』

随分心配してくれるんだな。

「ああ。」

包帯を巻き終えて、机にもたれかかり、俺の目を見つめてくる。少しの間そうしていたが、納得したらしく、再び口を開いた。

『それならいいけど、あんまり心配かけさせないでよ。レインからのメール見たときは、また昔みたいになるかってヒヤヒヤしたんだから。』

なるほど、レインか。心配かけちゃったな。

『帰ったら、ちゃんと安心させてあげなさいよ。』

「ああ。悪かったな。」

そう返すとはにかんだ笑顔をしながら返す。

『これが仕事だもの。そうそう、明日行けそうにないから、これ、ファムに渡してくれる?』

おもむろに取り出したそれは包装紙に包まれた小さな縦長の箱だった。ペンダントなんかが入ってそうな大きさだ。

「分かった。伝えとくよ。…邪魔して悪かったな。そろそろ行くよ。」

『また寄りなさいよ。』

返事は返さなかった。なんて返せばいいのか良くわからなかったんだ。"ああ。"と、正直それだけで良かったんだろう。ただ、それだとも逃げ道を作るようで嫌だった。心の整理は自分の事なのだから、自分だけの力で解決しないといけない。特にあいつらにこれ以上見せてはいけない。

平静を保とうとしても、心の根底に潜んでる感情を隠そうと必死になっただけなんだ。ターシェを守れなかった絶望感、望まない形で復讐しろという憎悪。誓ったってすぐに消えるはずのない感情をどうにか押し殺そうとするが、どうしても消えない。"俺は奴を捕まえて、拉致された少女を救うんだ。"何度そう反芻しても、"奴を見つけ次第殺す。"という言葉に飲み込まれる。落ち着けよ。せめて、救い出すまで、それまで待てばいい。そろそろなら…。何を考えてんだ、俺は…。

"ピリリリリッ"

メールだ。バンからか？結局、報告全部任せちゃったな。悪い事をした、なんて考えながらメールを見る。それはバンではなく懐かしい人からのメールだった。

第二一九話 フリーフィング（前書き）

ホラーものの短編も始めました。

想いの調べ

<http://ncode.syosetu.com/n4328>

h／
ブログ

<http://emeraldnightsky.blog45.fc2.com/>

第二一九話　フリーフィンク

「…。」

画像ファイルに写っていた地図をかれこれ三十分ほど睨み続けている。いつもは侵入プランごと渡されるため、その通りにしかしてこなかったため、いざ自分で考えてみようとしても、どうすればいいのかわからない。

何よりも、最後が最大の障害なのだ。ターゲットである人物、データの両方があるとされているその部屋に入るためには中の人間からの許可が必要になる。まず、小さな小部屋に入り、そこで連絡を取る。まず、小部屋に入り連絡を取る。中にいる人間の許可を得ると扉が開き、十メートル程の人が二人並んで歩ける幅の廊下が続く。そこで金属探知をされ、それがパスされると、扉横のカードリーダーにカードキーを通してやっと入る事ができる。

友人の家を訪ね、上がらせてもらう。

丁度そんな感じだ。

中に誰もいない場合は金属探知とカードキーのみであり、侵入は簡単であるが、そんな状態は有り得ないよう交代に研究員が出入りしている。騒ぎを起こして、逃げ出したところを押さえる、というのも不可能である。銃弾程度ではビクともしないような扉が二枚も続いているのだ。中にいたままの方が安全なのは言うまでもない。どうにかして侵入するしかない。

"リリリリリッ"

着信…、相棒からだ。

「どうかしたか？」

『いやあ、なんでPC使うのかなあって思ってたねえ。』

さっき簡単に説明したんだが、まあいいか。

「上からディスクが送られてきたからそれを見るために使わせてくれ、だ。」

『ふーん。内容はあ？』

何故かは知らないが、機嫌は直ってるようだ。俺とは違う事で何か頭にくる事があったんだろう。

「いいのか？」

『大丈夫、今は盗聴されちゃいないから。』

「そうか。俺の身体を変えた奴らが見付かったらしい。」

聞かれたから答えたものの、あまり言いたくなかった。相棒の目的の前に俺が目的を遂げるのを良くは思わないはずだからな。

『へえー。』

少し声が震えたように聞こえた。また怒りが表れたようだ。正直ここで電話を切ったかった。だいたい予想できたからな。

『…面白そうだねえ。俺にも手伝わせてよお。』

「ああ。：ん？」

皮肉を山のように言われるものと思っていた。それがまたどうしてそこまで協力的なんだ？

『なにい？そんなに予想外だった？俺は単純にその顔じゃなくなるなら、よろこんで手伝うよお。』

そういう事か…。それでも相棒が手を貸してくれるのはありがたい。

「ありがとう、助かる。」

『じゃあさつさと戻ってよねえ。データとかって今見てるよねえ？』

早速向こうからキーボードを叩く軽快な音が聞こえてきた。

『トーイツシュは何してるの？』

離れて様子を見ていた彼女が尋ねてきた。声の大きさからして、俺に対してのようだ。

「向こうに置いてあるパソコンとここのを繋げて動かしてるんだ。」

返事を聞く前に相棒の作業が終わったらしく、悲鳴のように声をあげた。

『ええーっ！！情報少くないい？今度かけて着たら文句言ってるう。』

いつもは完全に相棒に任せていたデータ管理。だから、俺が見たところが多いのかどうかわからなかった。

「そうなのか？」

『そうだよお。だってこれだけじゃ、どこにハッキングしたらいいか、とかわからないじゃないかぁ。』

「会社名なら分かるぞ。”サイテックス”。反重力システムの核を造っている会社だ。」

カードキーにロゴが描かれていたからな。

『あああ、最近コアの小型化に成功したとかでニュースになったところお。それで調べてみるかなあ。』

またカタカタと軽快な音が聞こえてきた。少し待てばいいか。

『狼さん…。』

「ん？」

彼女が近づいてくる音が聞こえる。

『私も…何か手伝わせて！』

第二〇話 協力者

『何を言い出すかと思えば…ダメだ。』

私の提案はすぐに却下されちゃった。でも、今回は引けない。引きたくない。

「私だってきつと何かできる！だから…」

『駄目なものは駄目だ。』

さっきよりも少し強く言われた。…私は力にならないのかな？

『そうも言ってられないかもしれないよお。』

さっきまで黙っていたトーイツシュがまだキーを叩く音を続けながら、棒読みで言った。

『どうした？』

モニターはさっきから地図しか写っていないけど、狼さんはそこを見てる。だから、私もそこを見てる。

『ん〜とねえ。無いんだよねえ、その場所にその会社の施設う。』

今度はテンポが遅い。打ちながらだちゃんと喋れないのかな。

『つまり、ダミーか？』

『そうなんじゃない？ 社名偽ってるなんて、中でスゴイ事してるんじゃない？』

入りたいけど入り口がわからない、そんな感じなのかなあ？

『たださあ、そのせいでどこから行けばいいかわかんないんだよなあ。だからあ、現場行って直で回線取るのが早いんだけどお、俺行けないじゃん。それでねえ、セヒィーにも手伝ってもらおうかなあ、と。』

チャンスだ。私を手伝うなら、今しかない。

「私、やるー」

『待て。それなら俺がすればいいじゃないか。』

言い切る前に私の言葉は掻き消された。そんなに私に手伝わせたくないのかあ…。でも、狼さんの反論は通らなかった。

『そうもいかないから言ってるんでしょうがあ。そりゃあ機械取っ付けるだけだからあ、簡単だけどお、問題なのはそこじゃないんだあ。見つかつてえ、機械引っこ抜かれたらあ、そこでおしまい。』

つまり、私が行って…何をすればいいの？

『配線のメンテナンス用の小屋にワン公が行くとしたらあ、警備員倒さないといけないだろお？ それだとお、連絡なくなったって気づかれるよねえ。だからあ、小柄な体型の奴がこっそり忍び込んで取り付けるのが一番なんだよお。見回りの奴がわざわざパネルの中まで見ないだろお？ こそつとしてればこっちの勝ちい！』

そうか！私なら小さいし、狭い通路でも入れるもんね。狼さんにはどうしても無理だよ。

『確かに…。侵入経路は…、その通風孔か…。』

モニターに映ってる地図に赤い丸がついた。多分トイッシュがつけたんだと思う。狼さんは納得したみたいだけど、まだ首を縦に振ってくれなかった。

「大丈夫だよ。絶対失敗なんてしないから。」

『だが…。』

『悪いけどお、それ以外思いつかないならあ、拒否権はないよお。』

口を開けても声を出せてない狼さんの様子を見ると、他に思いつけていないみたい。すぐに動かすのを止めて、黙っちゃった。

『…わかった。だが、危なくなったらすぐに呼ぶんだぞ？』

しばらくして、とうとう許してくれた。

「大丈夫！」

少し声が大きくなっちゃった。いいよね？だって、嬉しいんだから！

第二二話 先輩

この仕事を始める時、俺はある人の下についた。ゴードン・シュワルツ。家庭を持ちながらも、こんな危険な仕事をしていた。理由を尋ねると、こう返された。

『守るもんあるから、命張れるんだよ。』

その時の俺にはいまいちピンとこなかったが、こうしてレイン達を引き取った今なら、わかるような気がする。先輩はそんな人だった。ちよつとキザな言葉をよく使っていた。ターシェに言ったあの言葉とか……。ユーモアのある人で、他人を笑わせるのが好きだった。

一人前と認められ、個別で仕事を請けるようになってすぐだった。俺はどうも他人の死に目に会えないらしい。連絡を受けた時には遅かった。

先輩は亡くなった。妻子を残して。

先輩が霊安室で横になってるのを見ると、兄貴を思い出した。なんで、こう……いい人から死んでいくんだろうか、と誰でもない何かを怨んだ。奥さんはショックは受けていたようだが、比較的落ち着いていた。取り乱したり、泣き崩れたりはしなかった。

『あの人がこの仕事を続けると言った日から、こんな日がくるんじゃないか、と覚悟していました。』

少し眼を潤ませながら、しっかりとそう言った。強い人だ。先輩はその強さに惚れた、なんて言ってたっけ。息子は中学に入ったばか

りの歳でかなりショックを受けていた。当時はよく家により、話をしていた。時間はかかったが、なんとか立ち直った。

それから月に一度位は顔を出していたが、今の家に着てからはあまり顔を出せていない。今回は半年ぶりくらいか…。

メールの送り主はランタン・シュワルツ。先輩の息子だ。内容はたった一言。

“ちょっと来てくれ。”

久しぶりのメールがそんだけってどういうつもりなんだか…。アイツらしいと言えばそれで終わるんだがな。

ボスの所に向かうとすでにバンが報告を終えていた。その足で、サポートの方に顔を出し、トーマッシュ・エイデンのデータを受け取った。ザイレイから貰っても良かったんだが、まあ、頼みすぎて肝心な時に働いてもらえない、なんてのは困るからな。こっちで出来ることは済ましといった方が無難…ってな訳だ。

『じゃあ、これ送って送ッスね。』

少し残る、と言っていたバンを残して俺は先に社を後にした。今日はランタンに顔を出したら帰ろう。明日は大事な日だから、準備がある。しておきたい事がたくさんあるんだから、大した用じゃなければさっさと終えてしまおう。

第一二三話 手伝い（前書き）

いろいろあって、勝手ながら長い間休載していましたが、今回からまた再開させていただきます。また、更新は遅いですが、もしよければまた読んでください。

第二二話 手伝い

「で、わざわざ呼んだ理由が…これか？」

俺よりも少し高い衣装ダンスを持ち上げ、外へ運んで行く。反対側を
持っているのがランタンだ。細身だが、しっかりと筋肉がついて
いて、体型はいい。目は二重で大きく、鼻も高いから、かなりモテ
ているらしい。…全部本人が言っていたんだが。

『決まってんじゃない。こうすりゃ、引っ越し屋呼ばなくて済むだろ
？』

「なら、バイト代取るぞ？」

『それぐらい渡すよ。』

今、払うじゃなかったな。十中八九金じゃない。先輩の死から立ち
直ったのはいいんだが、それ以来、ひねくれやがって。

奥さんが再婚するそうだ。

それで再婚相手の部屋に越すらしいんだが、ランタンの奴、金が勿
体ないとか言って自分達で荷物を運ぶ、なんて言ったらしい。軽い
ものを運ぶのは自分達とかでもできる、とかで、夜のうちに重いも
のを俺に手伝わせて運ぶ、なんてせこい事を考えたんだ。こっちは
仕事で疲れてるんだってのによ。

「にしてもよ、どうなんだ？再婚相手とは…。」

ランタンの両口角が上げる。あー、なんか余計な事言おうとしてやるな。

『なに？母ちゃん取られて悔しいの？』

「ばーか、そういう事じゃねえよ。」

『はいはい。』

昔はもつと素直だったんだがなあ。全く。

『いい人だし、仲は悪くないよ。ただ、まあ：俺もこの歳だし、簡単に父親になる、なんて受け入れられないんだよなあ。母ちゃんの旦那ってのは、むしろ嬉しいくらいなんだけどよ。』

軽い口調でぼんぽん口に出す。他人事のように…。だが、内心は真逆なんだ。そういうもんだろ？

「無理することねえよ。ウチの連中みたいにしてればよ。」

『…そうだな。』

聞こえるかどうかの境目程度の声で返した。聞こえた訳だが。普段からこう素直だといいいんだがな。まあ、グレてた俺が他人の事は言えないか。

『俺の事よりさあ、バンこそ何かあったんじゃないの？』

唐突な質問に体が止まった。意図的に隠してた、って訳ではなく、普段通りにしていたんだがな。わかりやすいのだろうか？

「どうしてそう思う？」

一呼吸置いた後、ランタンはどこかさびしげな表情になり、答えた。

『父ちゃんがさ…失敗した時と一緒にだから。』

「そうか…。」

先輩と一緒に…。息子だけあってそういう所はよく見てるな。

「当たり前だよ。俺にとって大事な人だったのにさ。」

『やり返せよ、そんな最低な野郎。』

顔を歪ませ、嫌悪を含んだ声でいった。そうさ、そうすればいいなんて何度も考えた。いや、まだ考えている。そうされても仕方がない奴なのも納得している。

でも、俺はもう復讐を考えたら駄目なんだ。ターシェとも約束したし、何より…。

玄関先に止めてある車にダンスを乗せ、次を取りに行く前に返した。

「一止めよう、こんな話は。それより、お前、バイト代って何渡すつもりなんだ？」

『さあね。お楽しみにとっという。』

逃げるように家に入っていく。ろくなもんじやないのかあ？ 後をわざと音をたてながら追いかけた。

第一二三話 引き継ぐもの

「これで最後か？」

最後だと思いう荷物をランタンと共に車に乗せ終え、確認をする。結構な重さのあるものなんて、結局たかが知れた数しかなかったな。それだけなら、一時間もかからなかった。

『ああ、後は母ちゃんと二人で出来るから帰っていいよ？』

そうか。んじゃ、帰るか…。と、口にしようとして、大事な事に気がついた。同時に自分に呆れた。

ランタンの方に体を向き直し、溜め息混じりに言った。

「…バイト代は？」

『あゝ。』

随分低い声と共に、家へ向かおうとしていたランタンの脚が止まった。なんだ？ ホントに忘れてたのか？ いや、これも演技か？ しらばつくれんの得意だからな。

『なんだよ、その目は？ 本当に忘れてたんだからな。そもそも、ちやんとあるんだし。』

顔に出たらしく、俺の言いたい事がバレバレだ。でも、本当にバイト代があるらしい。これには少し驚いたな。

「へえ。じゃあ、それをもらえるか？」

『家人中だから取りに来てくれよ。』

そう言って駆け出して行くランタン。顔を見せないようにふさいでいたように見えたが：気のせいかな。その背中を静かに追いかけた。

再び姿を見つけたとき、ランタンは自分の部屋にいた。天井から階段を下ろし、天井裏に上ろうとしていたところだった。

「おいおい、そんな所に片付けてたもんなのか？ いらないもん押し付ける気じゃねえだろな。」

本当にそんなつもりなら叩き返すからな、と若干声を強くしながら言う。が、薄暗い隙間からは、ランタンが何か持ってくるまで、何も聞こえなかった。

抱えて下りて来たのは黒いトランクだった。見覚えがある。この中にあるものも知っている。

「これを…か？」

まだ俺をおちよくっているのか、とか疑っていた訳じゃない。顔を見りゃわかるさ。ただ、それはランタンがどうしても自分が持っていたと言っていたものだ。先輩の身につけていたものだから、と。

『ああ。新しい家に持つてくのも気が退けるっつーか。それに使つてやれないままじゃ、父ちゃんにも悪いしな。ジェイクなら使えんだろ？ だからさ、貰ってくれ。』

拒む理由なんてない。ないんだが…。

「本当にいいのか？」

『男に二言はねえよ。』

そういう眼はしっかりと俺を見ていた。その眼を見れば十分だった。聞き直したりするべきじゃなかったな、なんて少し反省させられた。

「わかった。ありがたく使わせてもらうよ。」

『そういやさ、聞いてないけど、…使えるのか？』

お前な…。今言う事じゃねえだろ。トランクを受け取りながら、顔でそう返した。使い方なら大丈夫さ。この眼で何度も見てきたんだ。使いこなしてみせるさ。

『さて、バイト代も渡したし、母ちゃんが帰って来る前に帰った帰った。』

そう言われて、やっと気がついた。奥さんがいないときに運んだたのは、負担をかけさせないためじゃなくて、これを見せないとめだったのか。ランタンの優しさ、か。気にしなくてもあの人なら大丈夫だ、とは言えないか…。

「そうだな。そろそろ帰るか。ありがとな。」

『それはこっちのセリフだろ？』

鼻で笑って俺に返す。

「違いねえな。」

左手にトランクを下げ、軽く右腕を上げて、ランタンの家を後にした。

第一二四話 備え

複雑な胸中が少しは纏まりつつあったのに、さらに混乱の色を帯びた。元に戻る事を望むと決意した直後にこれだ……。彼女の手を借りなければならぬ。俺の存在と掛け離れた、ただの華奢な少女。失敗するかどうかなど、どうでもいい。身を危険に晒す事が問題なのだ。人殺しのために傷を負うようなことはあってはならない。まして――

“コンコンコンッ”

『今、いい？』

「あ、ああ、入ってくれ。」

唐突な訪問に驚き、慌てて返事をした。何もおかしくない、むしろ当然であったのに……。

扉がゆっくりと開けられ、彼女の服がまず目に入った。そういえば、そんな服を着ていたのだ、と今頃思った。朝から見ていたはずなんだがな。見えていなかったのか……。色が目立つし、動きにくそうだ。後で着替えさせた方がいいな。

扉から見えた彼女の表情はどこか誇らしげに見えた。その表情にまた意志を揺らされる。つくづく自らの優柔不断さが嫌になる。

『どういう事をすればいいかはわかったんだけど、準備って何したらいいのかなあ？』

大まかな作戦を決め、俺は自室に戻り準備を、彼女は残り相棒に詳しい作業内容を聞いていた。相棒はやはり最後まで面倒をみなかったようだ。

「まず、格好だな。もっと目立たず、動きやすいものもいい。髪の色も変えた方がいい。後、取り付ける機械があるのだから、鞆もあればいい。…あるか？」

自分で言いながら気づいたのだが、そんなものを持つてるはずがない。

『ジャージくらいならあるけど…。』

その程度だろうな。いや、それが普通なんだ。ただ、彼女は誰にも見つかることなく潜入しなければならないのだ。不十分であるの言うまでもない。

時間はまだある。探しに行くとするか。

「なら、ついて来てくれ。買いに行こう。」

彼女の横を通り、先に部屋を出た。エレベーターのスイッチに手が触れたのと扉が閉まった音はほぼ同時だった。

『買いに、って外に？』

「少し特別な場所だ。」

まさか、彼女を連れて行くことになるとは。本当に未来なんてわからないものだ。目の前の扉が重い音を発てながら開いていく。中に

入り、一番下の階のボタンを押す。そういえば一緒に下に下りるのは初めてなのか。

『入り口の所？』

「着いてから説明する。」

今その時間はない。少し足を使わなければならないからな。まさか、彼女を連れて行くことになるとは。本当に未来なんてわからないものだ。目の前の扉が重い音を発てながら開いていく。中に入り、一番下の階のボタンを押す。そういえば一緒に下に下りるのは彼女が最初を連れてきた日以来か。

『入り口の所？』

「着いてから説明する。」

今その時間はない。少し足を使わなければならないからな。扉が開き、小さな箱の中から下りると、薄明るい空間に出る。彼女を連れ、先にバイクに跨がる。

「被れ。」

仮面を被りながら、彼女にヘルメットを渡す。受け取るが、少し戸惑っているらしく、すぐに被ろうとしない。

『ねえ…、狼さんが外に出たらまずいんじゃない？』

「そんな事か。着いたらわかるから、早く被れ。」

まだ腑に落ちない様子ではあるが、少しは動きが早くなり、俺の後ろに座った。それを確認し、エンジンを掛ける。独特の熱い音が冷たい空間に反響している。

「しっかり掴まれよ。」

少しだけ首を傾け、そう言うと、腹に腕を回すのを感じてから、バイクを走らせた。

第一二五話 三つ首

薄明るい明かりのなかを進んで行く。途中いくつも岐路や上り、下りを経て二十分程走った辺りでバイクを止めた。少し道が凹んでいる場所に止めて、下りるよう促す。

『ここ？』

脱いだヘルメットを手渡しながら尋ねてきた。鍵を抜き、これからさらに歩いていかなければならない方向を向きながら答えた。

「まだ先だ。」

取り出したカードキーを壁のスロットに通し、扉を押す。重さはないが、金属の擦れる高い音が鳴った。錆び付いた階段が下へどこまでも伸びている。実際目的の階はかなり下だ。

「さっきも言ったが、これから行く場所は、今回の潜入用の準備をする。」

階段を下り始めて数段というところで、話しはじめた。今説明するのがベストだからだ。

「俺の姿や名を知ってるのは相棒とお前くらいだ。だから、これから会う奴らの前で“シン”や、“狼さん”なんて呼び方をするな。自分の名もだ。」

正確には組織の一部も俺の事を知ってるんだろうが、今は関係ない。正体に関わることは全てタブーだ。

コツン、コツンという足音が一定の感覚で響く中で、少し大きめの声で彼女が訊いてきた。

『じゃあ、なんて呼べばいいの?』

当然の質問だ。ただ、考えてなかったな。

「ケルベロス、いや…。」

ふと、世間で呼ばれてる名を使う事も浮かんだが、すぐに止めた。バカバカしい。子供が考えたような名前。ふざけているようにしか思えない名で呼ばれたくない。ならば、まだ、

「“狼さん”でいい。」

結局これしかないのか。ろくなものがないな、と思うと、溜め息が出た。その様を見てか、くすくすと足音とともに届いた。

『狼なのに犬なんだ。』

「俺が付けた訳じゃない。」

どうでもいい事ではあるのだが、腹が立ってしまう。不思議なものだ。

『でも、合ってると思うよ?』

この返事はからかっているのだろうか?理由を言うよう促すように、少し視線を横に向けた。

『トーイツシュと私を入れたらちょうど三つ首だよ。』

「イヌ科は俺だけだぞ。」

『まあ、そうなんだけどね。』

なんてどうでもいい会話なんだか。元に戻そう。

「とにかく、“セフィリア”という名を出すのも駄目だ。偽名を使う。名は―」

何にしようかと考えようとして、少し言葉が途絶えた、その少しの間に、彼女が言葉を挟んだ。

『アルセラがいい。』

あまりにも早く答えた事にも驚いたんだが、理由がわからず、気になった。

「構わないが、どうしてその名なんだ？」

偽名に使う代名詞という訳ではないし、俺は今まで聞いたことがない名だった。何かの学者の名なのだろうか？

『…わからない。おかしいな、忘れる訳ないのに。でも、それがいいの。』

「そうか。」

絶対ではない、という事なのだろう。それでも十分過ぎるほどの記憶力を持っている事には変わらないのだが。

「後少し下りて、窓のある通路を進むと目的地だ。言ったことは守るように、な。」

昔はこのエリアを表していただろう、壁に掛かっている汚れて何の数字かはっきりと読み取れない印を目印に、もう一度忠告した。

昔はこのエリアを表していただろう、壁に掛かっている汚れて何の数字かはっきりと読み取れない印を目印に、もう一度忠告した。

第一二六話 心一変化

薄汚れた分厚い鉄の扉を開けると、窓のある通路が伸びていた。つい昨日も来たはずなのに、随分久しく思える。

『そういえば、どういう所なのか教えてもらってないと思うんだけど…。』

準備をしにきた、だけでは物足りないらしい。まあ、俺がその立場なら、同じように気になるだろうが…。

「服屋だと思えばいい。それ以上は着いてから考えればいい。」

事実、彼女に関係があるのはそれ位だ。後は護身用にスタンガンでも持たせる程度だろう。彼女も少しは納得したらしく、再度尋ねたりはしなかった。

『AC-3-68』と書かれた扉を開く。昨日と変わらず、部屋は機械だらけだ。一日で変わるはずもないか。

『なんだ、今日も来たのか、ワンコオ？繁盛して一んん？』

部屋に彼女が入るやいなや、彼女に目を向けた。そう言えば昨日、噂で聞いたとかで確かめようとしてきたんだった。

『ほお。この嬢ちゃんが噂のかい？わざわざ顔見せに来てくれたのかい？嬢ちゃん、名前は？』

『アルセラです。初めまして、おじ様。』

打ち合わせ通り、しかも自然に名乗った。上出来だ、が、なんだ、その返しは？そんな風に話しているのを聞いたことはないが…。

『お、おじ様！かぁー、いいところのお嬢ちゃんなのかい！いい娘だねえ。』

おじ様なんて言葉が似合う要素のない爺さんだ。初めて言われて照れながらも喜んでいる。

「彼女に合う、潜入用のスーツを頼む。」

もう少し爺さんを見てるのも面白いが、そんな事ばかりしている訳にはいかない。なにより、少し気持ちが悪い…。

『そうかい、そうかい。なら、奥に行ってくれるかい？うちの従業員がいるからそいつに言えば用意してくれるからね。』

『ありがとうございます。』

彼女は深々と礼をし、奥の部屋に続く扉を通って行った。改めて考えると、俺は彼女が相棒以外の他人と話している様子を知らない。案外、買い物に行ったときにそう話していたのかも知れない。

『おい、犬ッコロ。一体どういうこった？』

彼女がいなくなり、二人になると、爺さんは元に戻った。そうでないと困る。説明するのは骨が折れそうだ。適当にごまかすのが一番だろう。

「いろいろあるんだ。あまり詮索しないでくれ。」

そういった俺を見ながら、鼻で笑い、こう返してきた。

『別にどうでもいいが、誘拐したあんな小娘仕事に使うなんて、どんな神経してやがるんだ、と思ったただけだ。』

そうだったな。仕事の内容を聞いてくるはずがなかったか。それに、爺さんの意見は最もだ。いくらこの機を逃さないため、とは言っても数日間前に連れ出した少女に頼るだなんて、有り得ない。

ただ、危険な目に合わせたくはなかった。否定していた理由はそれだけだった。よくよく考えてみるとおかしい話だ。なぜ、俺は仲間として彼女を見ているんだ？ たった数日いるだけで、しかも、昨日俺達の正体を教えたばかりなのに、なんの疑いもなく仕事を任せたり、彼女が外部の人間と繋がっているとしたら、俺達の居場所から、かなりの情報を漏らされる。

考えなかった訳ではないはずだ。仕事がばれた時、始末すべきだ、という考えがどこかに浮かんでいた。あの時は…、そうだ、彼女の言葉に我を忘れたんだ。人の命を軽くみた事怒りを覚え、それ以外の考えが吹き飛んだ。その次に、彼女と話をしたのは昨日の深夜。考え方が変わっていたことに安堵し、胸を痛めた彼女に一その時の考えがはっきりわかる訳ではないが一俺自身がその答えを出すようになるまでを話したかったんだろう。

そんな風に接していたためだろうか、疑う意識などもうもっていなかった。ああやってこの件にも名乗り出してきたときも、その考えがなかった。だからなんだろうな。彼女の心配しかなかったのは…。

ただ、これも今回だけだ。彼女が人殺しの仲間だ、と思われるようになる前に離れなければならない。この姿を捨てられなかったとしてもだ。姿を変えても人殺しは人殺しだ。離れるのが最善の選択だ。

『おお、いい感じだのう。』

考え込んでたためか、彼女が戻ってきた事に気づかなかった。全身を包む黒のスーツ。光を反射する素材ではないし、髪も黒に染めているため、暗い場所に完全に一肌の白さが若干気にはなるが一溶け込めそうだ。

「ああ。いい感じだ。後は…。」

潜入に必要な道具をそろえて、さっさと戻ろう。

第二七話 将来

『ランタン君の所行ってたんだ。』

食器を洗う俺の後ろで明後日の準備をしながらレインが言った。

「悪いな。行かなかったらみんなと飯食えたのによ。」

『いいよ。明後日さえ遅くならなかったらいいから。』

ちょうど真後ろにいるようなもんだから、首を少し捻っただけじゃ表情が見えないが、声から怒ってないのがわかる。それならいいんだ。

「わかってるよ。それより、準備は進んでるのか？」

『あんまり、かな。あの娘のいないときにしかできないし、今年は忙しいのが多いから。それでも、明後日までに仕上げるよ。』

自分だって忙しいだろ。無理するなよ。

「俺がやっとくから、たまには早く休めよ。いつも遅くまで起きてるんだろ？」

洗い物を終え、食卓に座り、レインがしている事と同じ事を始めた。

『みんな心配すぎよ。私は大丈夫。それにしたいからしてるのよ。』

「そうか…。」

これ以上言うのは逆に気を使わせるな。話題を変えるか。

「そういやレインは高校出たらどうするか、決まったのか？」

まだ時間はあるが、そろそろそんな時期だ。父親なんだから、ちゃんと知っとかないとな。

『うん…大学、行きたいなって思ってるんだ。』

驚いた。それ以上に嬉しかった。レインは勉強できるんだし、別に驚くようなことじゃないかもしれない。でも、ウチはこういう家庭だからな。正直、すぐにでも働く、なんて言い出すんじゃないかってひやひやしてた。

『何？そんな顔して。私が働くとか言い出すと思ったの？』

顔に出たみたいだな。

「凶星だよ。」

『ちょっとは隠してよ。…始めはね、そうしようかって考えたんだあ。』

手を止めて、ほんの少し間を開けてから話しだした。俺も手を止めて話を聞いた。

『だけどね、思ったの。私が働くのをみんながみたらどう思うかな

って。私がどう言っても、きっと無理してるんじゃないか、って感じるんじゃないか。だってみんな私の夢知ってるもんね。』

そう言ったレインの言葉を聞いて思い出した。前にみんなで将来の夢を話したときがあったが、あのまま、なんだな。

「そうだな。」

相槌だけ打つ。話の邪魔はしたくないからな。その言葉を待っていたかのように、再び口を開いた。

『みんなに気を使わせたくなかないから、だったら、私がかんばってどこかの大学の特待生になって負担を減らした方がいいんじゃないかなって、ジェイク見ててそう思った。』

「おいおい、なんだよそれ。」

俺見てそう思ったって、気い使わせた事なんて…、あったのか。

『自分は無理してないつもりでも、周りから見たらそう見える事もあるの。なにより、何も考慮しないでどうしたいか考えてみたら、私は大学に行きたい、って思ったから、どこか無理してみたい。』

そうなのか。自分だと気づかないもんだな。他の誰かだったらすぐわかるのによ。

『だから、ジェイクももっと自由にしたらいいよ。あんまり私たちに気を使わなくていいから。この家の主なんだし、威張っていいんだよ?』

「?」

手を再度動かし始めたレインを横目にしながら答えた。

『さっ、後は部屋でしよっと。』

俺なんてどうでもいい、って感じで突然立ち上がって自分の部屋に向かっていった。…まあいいか、俺ももう少ししたら部屋に戻ろう。

第二八話 一首一忍ぶ

午前二時四十八分。私は弱い光を目の前に、薄暗い影の中にいた。目的の建物からの光があまり強くなく、人がいるのか少し怪しいくらい。あの中に狼さんは潜り込もうとしてる。三時ぴったりに作戦が始まる、その時まで待機。三時までに私はこの先にある小屋の中のパネルに、トーイツシュからった小さい機械をつけないといけない。後、十一分になった。そろそろ行くよ。

ここの建物は長方形の場所にだいたい三分の二位を占めてて、角に当たる二辺はビルに接してる。残りのL字型の長い方の中央に小屋があるの。ただし、建物に向かい合う方向に一人と、反対側に一人見張りがいる。ここからだ、建物の方にいる人は見えないんだけど、扉があるのが建物側だから絶対にいる、ってトーイツシュが言ってた。反対側の一私の前にいる一人ははしごの前に立ってるのが見えた。ライト持つてるからすぐわかったの。この二人に気づかれないように小屋に入らないといけない。

小屋に入るための通風孔は屋上にあるの。だから、まずは屋上に行くのが目的。ただ、はしごは使えないから、別の方法じゃないと。：と、言うか、始めからそのつもりなんだけどね。

上に上がる方法だけど、その前にまず誰もいない小屋の側面に行かないといけない。ここで一時間位待機してたんだけど、全然動かないみたいだから、トーイツシュが言うには、気を逸らして、その間に行かないといけない。その準備もしたし、これからまさに始めるって感じ。

“カーン”

少し離れたところで金属の甲高い音がした。ライトがその方向に向いた。今だ！態勢を低くして走った。音があんまり鳴らないように気をつけて。

側面に着いた。あんまり壁から離れると気づかれるかも知れないらしいから、ぴったり壁に張り付く。気づかれて…ないみたい。よかった。

『ザー…うまくいつてるう？』

イヤホンからトーイツシュの音がした。無線で連絡できるようにしてるんだあ。

「うん、順調。」

『ならいいよお。時間に余裕はないからきびきびねえ。』

それだけなんだ。わかってるよ。

腰についてるホルダーの中から、細長いつつを取り出した。ホルダーに十分入るから、鞆はいらなかったんだあ。取り出したのは手の平から少しはみ出すくらいの小ささのもの。こんなに小さいのが、これから四メートルくらいの高さを上るのに大切だなんてね。

そのつつの曲面の真ん中にある穴に、手首に巻いてる腕時計の下に突起に挿した。“カチッ”って、音がしてすぐ時計の数字が動いた。さっき見た時より二増えてた。順調、順調。時計からつつを話すとつつからワイヤーが出てきた。しっかり繋がってるのを確認して、壁に当てた。手を離してみると、つつは壁に張り付いている。落ちそ

うな感じはない。うまくいきそう。丸い端にあるボタンを押した。

つつは上り出した。静かなくせに速かった。つつの両端がタイヤになってるから、ワイヤーを巻き込んだりしないんだ。あつというまに上りきって見えなくなっちゃった。それじゃ、上りますか。壁に足の裏をつけて横になって、腕時計の付けた腕を少し上に挙げた。それから、腕時計のボタンを押した。

ゆっくりと、だけどしつかりとワイヤーが巻かれていく。壁を床みたい歩いていくのは不思議な気分だけど、滑りにくいクツのおかげで全然こわくなかった。むしろ、楽しかった。それでも、普通に歩いてるときと比べたらやっぱり疲れるみたいで、少し辛くなったくらいに上に着いた。つつからワイヤーを外したら、また一つ数字が増えた。後九分。絶対大丈夫。

第二二九話 二首一待機

後九分か。それまで俺は静かに待っていなければならない。何もできないとは、…もどかしな。

今までは相棒がハッキングをしてサポートしてくれていたため、こんな身体でもある程度は侵入が出来た。映像や音声、利用できるもの全てで。だが、今回はギリギリまでサポートを受けられない。

三時きっかりに相棒が全てのセキュリティを一時的に停止させる。カメラ、通信機も全てだ。彼らが異常に気づき、研究室に連絡が入られるまでに最短で約五分と想定いる。その五分で目的地にいかなければならぬ。全力で移動すればなんとか、と言うところだろうか。相棒はセキュリティを停止した後、研究室への訪問履歴から、映像と音声を取り出して、その…なんだ、中にいる人物に扉を開けさせる。扉が開く前にはそこに辿り着き、開いた瞬間に研究室に駆け込む。中に入りさえすればこっちのものだ。この騒ぎで警備が動くから、彼女はその間に逃げる。計画の概要はこんな感じだ。

この計画には警備員の配置は推測でしか入っていない。いつもはこの警備の配置も情報として受け取るらしいが…、なかった以上、仕方ないな。想定はかなり嚴重だろう、としている。人の目がある外にはあまり人は置けないだろうから、中に重点的になるはずであり、なにより、高度な技術があるなら、少ないはずがない。

彼女は大丈夫だ。必要なものは全て渡した。するべき事をわかっているし、俺が警備を引き付けければ、ちゃんと逃げられる。だから、俺は失敗しなければいい。ただ、それだけだ。

本当にここに俺の身体を変えた人間がいるんだろうか。いや、少なくとも、彼女はそう信じているんだから、俺も信じるべきだ。一体、どんな人間なんだろうか。どこでこんな技術を学んでいたのだろうか。内容によっては、まだ人間に戻るべきでないのかもしれない。

：それでも構わない。今まで奪ってきた命も少しは報われる。また業を増やす事になるかもしれないが、それで俺のような化け物が生まれなくなるなら。

後七分か。少しずつ近づいているその時を、静かに待つことにした。

第三〇話 一首一設置

後六分。少し時間がかかった。音をたてないように通風孔を開けるのが大変だったの。でも、開いちゃえばこっちのもの！

下りるときも音がならないように気をつけた。そういうクツなんだろうけど、全然音がしない。どんなに気をつけても、少しくらいは音がするはずなのに、全くならないの。すごいね。

中は狭くて、はっていかないと進めなかった。私でこうなんだから、狼さんが入れるはずないね。役に立てる、そう考えただけで心が弾んだ。だって、私に意味があるって実感できたから。だから、絶対成功させるんだ。

進む先はまともに見えないくらい暗かった。明かりなんて点ける訳にはいかないけど、ちゃんと見えるよ。コンタクトを入れるだけで、真っ暗でもよく見える、なんてすごいよね。すぐに出口が見えた。少し先の通路の右側に金網がある。そこを入ったら、あと一步。金網の真横にまできた。腰の右から二番目にあるホルダーに手を伸ばして、切る道具を掴んだ。後四分。トイッシュュは一分あれば準備できる、って言ってたから、実質三分。焦らないで、音をたてないように気をつけるだけ。

“ ギイ ”

突然の音に手を止めた。まだ切り始めてないし、動いてないから私じゃない。そんな事を考えていると、金網の向こうから光が見えた。誰か来たんだ。

鼓動が早くなった。その音だけでもバレそうなくらい。あわてちゃだめだ。あわてちゃだめだ。それだけしか考えられなかった。ゆっくりと金網の前から下がって、光の当たらない所まで下がった。大丈夫。きつと気づいてない。ちゃんと静かに下がれたもん。だから落ち着いて、私！

何度か金網に光が当たった後、また暗くなって、何か音がした。出ていった？気づかれなかった。ほっとしたんだろうね、鼓動が気にならなくなった。

すぐ時間が経ったように感じた。急いで時計を見ると後三分。たったの一分しか経ってない。よかったんだけど、信じられなかった。でも急がないと。

ホルダーに伸ばしてた手で道具を掴んで、カバーを外し、金網に当たった。当たった所がすぐになくなってく。私が通れるくらいの大きさに動かしていくと、カッターナイフで紙を切るみたいにスラスラ切れる。このナイフの原理は教えてもらえなかった。金属をこんなに早く切るだなんて、なんだろう…熱？酸？でも熱くないし、酸だとかここまで早くはないだろうし…。水？

金網を一周して切り終わった。切り取った部分が落ちて音がしたり、なんて失敗しないように、ちゃんとつかんで線を繋げた。ほとんど全部切り取って、そこから部屋に入る。さっきみたいなのが起らないように、静かに静かに…。よし、下りれた。

後二分。ギリギリだけどやっぱりあせっちゃダメ。音をたてないよう、少し早歩きでパネルに近づいた。後はフタを開けて、中にこの機械をつけるだけ。別のホルダーからドライバーを取り出して、ネジに当てる。あせて外れる、なんてことがなくてよかった。ネジ

を取って、中の基盤に機械をゆっくり、しっかりと…挿した。

「ふー。こちら、セフィリア、終わったよ。」

『了解い、ハッキング開始い!』

よかった。なんとか間に合った。後は狼さんがうまくいくのを祈ってよう。

第二三話 二首一突入

三、二、一、三時。目の前の電子ロック式ドアが開いた。予定通りだ。連絡が入ったから、必然ではあるか。人二人が前に並べる程の間に飛び込んだ。

そう。まさに飛び込んだ。

通常は非常口として使われるその扉。そこを侵入経路に選んだ。電子ロックでハッキングで開閉可能であること、また、目的地に比較的近いことが理由だ。他の入り口になりうる場所は、案の定警備がいるか、音の目立つようなものばかりだ。この方法も一つ間違えれば、それだけで全て水の泡になる。だが、今までだってそんな事ばかりだった。いまさら気にすることではないし、今回は成功する確証のようなものを感じた。

隣接した建物の屋上からは一階分の高低さがあり、距離は車を四、五台縦に並べた程度。この身体で飛び越えるのは容易な事だった。扉の大きさも十分。自信があったのはそれらだけではなかっただろう。おそらくは一。

少し右にズレたようで、壁に触れそうになったが、問題なく侵入した。その勢いのまま右へ走り出した。幸運な事に誰もいない。警備は構造的にもいないと推測していたが、他の研究員なりはどう動かわからないからな。突き当たりを左に。そこにも誰もいない。階段を下りるときに後ろから扉を開ける音がしたが、おそらく見えていない。無視した。一階につき、フロアの奥の階段を目指した。

研究室は地下にある。その部屋に行くには一階の一番奥にある階段

からしかたどり着けない。最も見つかる確率が高い。だからこそ一気に駆け抜ける。見つかったも通信は切れており、すぐには連絡を伝えられない。見つければ、口をふさげばいい、という訳だ。階段の前に一人いるのが見えた。向こうもこっちに気がついたようだ。服装から警備員ではないようだが、通信機で連絡しようと口に手を当てようとしていた。すかさず近づき、腹部に拳を当てる。それだけでその男は態勢を崩した。気を失ったはずだ。確認する暇などない。そのまま突き進んでいった。

地下に下り、小部屋が見えた。想定していたよりも警備が薄く、かなり早くここまで来れた。後は、相棒がここの扉を開けさせれば、突っ込むのみだ。

第一三二話 三首一偽装（前書き）

この話のクイズの内容ですが、全くの想像です。
今後も出てくることのない内容なので、
スルーしてもらって結構です。

第一三二話 三首一偽装

セフィーが用意出来た一分。かなり少ないように見えるけど、案外十分なんだあ。なんたって直通回線から入れるんだ。外から入るのだと、壁が何箇所あるから時間かかるけど、これならウイルスでもばらまくだけで終わり。楽だねえ。

さてさて、次はワンコが入れるようにしないとねえ。ウイルスって言っても、俺以外の奴がセキュリティを操作出来なくする程度のもんだから、送ってからでも十分あされるんだよお。入室時の映像と音声を保管した場所を見つけた。一番最近のは、つい二分前の少し白髪の混じった頭の薄いおっさん。こいつが今入ってんのか。交代だ、と言ってるねえ。中からの記録もついでる。うん、いいねえ。昔のもあさって画と声集めてえー

『一認証部屋まで到着。まだか？』

「いいよお。入ってえ。」

袋に入ってたカードキーはあの小部屋に入るための鍵で、挿して承認したところから通信が始まる。ワンコの姿が一瞬でも映らないように差し替えないとねえ。タイミングもかなり合わせとかないと。ここまでできておじゃんにしたくないしい。

『了解。…いくぞ。』

引っ張ってきてた小部屋内の記録が始まった、まさにその瞬間から切り替えた。まあまあじゃない？まあ、ホントに面倒なのはこれかなんだけどねえ。

“ID130609、キース・イヴィアンです。入室許可をお願いします。”

再生させた映像に映る人が話してるのをそのまま流した。こっちは三十代くらいの容姿の整ったおっちゃん。若干頬がこけてるのが残念だねえ。

室内の映像にさっきの映像に映ってたおっさんが出てきた。目え細めてる。疑ってるなあ。

『お前さん、さっき製品運びに出たばかりじゃなかったか？』

あらら。まあ、想定内だね。自然に返そう。

“忘れ物を取りに戻りました。”

今までのデータから大体口調は掴んどいたし、音声データも集めといたから、新しく作った分を言わせるのもできるようにしといた。仕事が早いでしょ？

『忘れもの、か……。まあいい。』

まだ疑ってるみたいだけど、開けてくれそうだ。やったねえ。

『遺伝子工学における亜種生産技術はこの十年で飛躍的に向上したが、当時のある生物学者の名をとられた理論を基にされている。この理論の名は？』

「へ?。」

突然言われた事が何の事なのか全くわからなかった。思わず変な声が出たくらいだ。

『どうした？我々なら当たり前の事だろ？それとも聞こえなかったか？』

クイズってかあ。うっとうしい事すんなよお。遺伝子が…なんだってえ？

『カレンサラス理論。』

俺としたことが、焦っていると、無線のセフィーが何か言い出した。答えか？そりゃ助かる。

「もっかい！」

『女性生物学者である、カレン・サラスの名からきたカレンサラス理論。現在は他の理論とともに亜種論と呼ばれることがある。』”

キーを叩き、一言一句漏らさずに入力した。ちよっと答えるのが遅れたけど、このタイミングなら全然怪しくないね。

『完璧な答え有り難うよ。入ってくれ。』

サンキュー、セフィー。助かったぜえ。あー久々に焦った、焦った。無償に笑いたくなって、我慢する必要もなく声を出して笑った。

後はいくら次第だぜ、シン。

第一三三話 二首一確保

目の前の分厚い扉が低い音を発しながら開いていく。無線からはうまくいった事を喜んでいるのか、相棒の笑い声が響いてくる。いつもは出来て当たり前前、と言うように、笑ったりはしないんだが…。

研究室までの二枚の扉はほぼ同時に開く。走り出すタイミングとしては六割ほど開いてからだ。それまでは姿を隠しておく必要がある。早過ぎると気づかれて閉め出されるし、それ以上では、怪しまれ、閉められてしまう可能性が高い。早く中に入り確保したいが、今は耐えなければ。理由はいろいろあるが、切羽詰まっている問題があるのだ。

そろそろ半分程度になる。姿が見えないと、若干怪しく思いはじめるかもしれないが、まだだ。後少し。

まさに今、と言うところで扉が止まった。気取られたか。だが、もう十分開いている。扉を抜け、走り出した。扉を越えて向こうの扉を見たとき、まさに閉まりはじめた。隙間から俺を見て、ボタンを何度も叩いている男がいるのを確認した。あいつがターゲットか。

もっと早く走る事もできる。あの時一車を追い掛けた時のように、獣のように四つ足なら。だが、通路はいいが、扉の隙間を通るには不便な態勢な上、態勢を変えるのに多少だが、時間を無駄にすることになる。これがベストだ。

扉に徐々に近づいていくと、それに比例するようにターゲットの手の動きが遅くなっていき、扉が手の届く範囲に入ると、諦めたかのように完全に止まった。

今度は左肩を扉に擦った。右肩といい、傷を負った訳ではないが、とことん締まらないな。気にすることはないか。勢いを緩める事なく、男を押し倒した。

『なんだ？ すぐに殺さんのか？』

少しも抵抗する様子はなく、抑えつけている俺を見ようもしない。それだけの事をしてきた、という事なんだろうか。どうやら当たりのようだ。

「お前に聞きたい事がある。」

『悪いが私が言える事など』

「これを見ろ。」

マスクを外し、顔を晒した。金属探知機があるために、別のものを付けた訳だが、素材のためか、痒くて仕方なかった。やっと外せた。

男はゆっくりと首を捻り、こちらを見た。ある程度こちらを見ると、驚いたようで目を見開いた。

『これはこれは…。』

まさに目を丸くし、口を開けた驚嘆の表情。口にした言葉はちよつとした雑音でも掻き消されそうなか弱い音だった。

『その顔、いや身体全部本物か？ ボディスーツとかの類ではないな？』

抵抗する様子もなく、姿を見せるためにも拘束を解いた。二、三度目線を上下させると若干表情を変え、目を輝かせている。その顔を見て察した。当たりであり、ハズレなんだ、と。

『当てが外れた、という顔をしているな。私にとってはこれほど素晴らしい来訪者はいないんだが。』

ああ、まさにそんな顔をしてるよ。わかりやすい男だ。シワがはいり、白髪も目立つようないい歳であろう男が、新しい玩具をもらった子供のように目を輝かせているのだから。

『是非話をさせてくれ。代わりと言ってはなんだが、何でも協力しよう。』

声を弾ましている。奇妙な気分だ。彼女に出会ったときに似ている。全く、変わった人間ばかりだ、と思うと溜め息が漏れた。

第一三四話 遺伝子学者（前書き）

この話の中の遺伝子操作に関する話も私の空想の産物です。
作者はせいぜい高校生物までの知識しかないので、
大目に見ていただけると幸いです。

第一三四話 遺伝子学者

『目が覚めたら化け物だった、というのは確かなんだな？』

「ああ、そうだ。」

結局こうやって話す事になるのか。何をしてるんだ、俺は。ここに来た目的は俺の姿を見ておおよそ把握したらしい。『お前は戻りたい。私は調べたい。だから、協力しろ。』筋は通るが、彼女といい、この男といい、この姿を見て恐れる様を全く見せない。悩んでいた自分が…、いや、二人がおかしいのだ。俺じゃない。

『既に構成しきっている人の遺伝子を書き換えた、というのか。…素晴らしい、実に素晴らしい。』

他人事だからと、好きなように言うものだ。こっちにとってはいい迷惑だというのに。

「それでどうなんだ？ 戻せるのか？」

重用なのはそこなんだ。出来ないのなら、ここに用はない。

『さあなあ。』

「…。」

はつきりしない答え。

『まだ何もしてないんだ。当然だろう？ それとも薬でも飲めばすぐ

戻れるとでも？」

その通だ。ここまで時間に追われていたために、少し焦っていたようだ。落ち着け。ただ、気を緩めるな。

「そうじゃないが、ただ単にあんたの意見が聞きたかったただけだ。」

『私の意見、ねえ。』

トーマス・デナス。遺伝子学者であり、数年前からこの研究所に就いたらしい。『したいことをするにはこしかなかった。』そうだ。遺伝子操作。その中でも、亜種や新種を生み出す事を研究しているらしい。全て本人曰くだ。

『さっき言ったのが私の本心さ。こんな事例、初めてだからな。』

顎に手を当てたまま、続けて話し始めた。大学の講義を思い出した。

『私達が遺伝子操作する対象は基本的に受精卵だ。生物は細胞分裂によって身体を構築する。構成する細胞内の遺伝子は全て受精した際に決定されるからだ。元を変えれば後は勝手に広がる訳だ。口で言えば簡単だな。だが、お前は元は人間であり、なおかつ成人に達した後に遺伝子を操作され、完全にある生物として安定している。言ってしまうえば、天と地程の差があるのだ。』

前置きが長かったが、できない、と言ってるようにしか思えない。

『しかし、だ。』

さっきよりも声が大きく、力強くなった。

『成功例が目の前にいて、研究に協力的である。二番煎じなのは癪だが、前進すれば構わない。』

随分演技がかっているが、本人はやる気なんだろう。こちらとしても協力的で助かるのだが、これでいいのだろうか？

遺伝子学について、詳しくはないが一般常識程度ならわきまえている。現在存在するものの亜種や新種を創る事は法で禁止されている。現在存在する生物、と言ってもその生物はほとんどが遺伝子情報を用いて復元されたものであり、遺伝子操作を用いられている。その時点で話が合わないようにも思うが、今の法ではそうなっている。この男は先も言っていたように亜種、新種を研究していた。違法な研究。だからこそ、ここにいる。納得だ。

「あんたたちの技術はどの程度のものなんだ？」

天と地ほど、男はそう言った。それはつまり、俺を研究対象にすることで俺をこんな身体にした連中の技術力に近い者たちが増えるということだ。実験を行う際には、人を用いられる事も必ずあるはずだ。そうなれば、俺の望まないことが起こる。元に戻る可能性を捨てて、協力すべきじゃないのかもしれない。

『これから協力してくれるんだものな。気になるか。隣の部屋に成果がある。ぜひ見てれ。』

自らの席についていた腰を上げ、隣の部屋に続くだろう扉に近づいた。扉の前に立ち、目に青い光が当てられる。網膜スキャンの扉がゆっくりと開いた。

『さあ、入ってくれ、ここが私の―』

”ガッツツ”

重く、低い音がしたとともに目の前にいた男が一瞬で消えた。

第一三五話 実験体

明らかに不自然な動きだった。真っ直ぐ立っていた人間が当然消えた。もちろんそんな事がある訳もなく、単純に見えなくなっただけなのだが、その動きが異様だったんだ。

何の動作もなく人が真横に動けるものか。

ただ事ではない。それだけはわかった。突然の事で直ぐには動けなかったんだが、姿を消した隣室へ急いだ。急いだ、と言っても扉一つを越えるだけなんだが、そう表現するのが適切な程焦っていた。

部屋に入ってすぐ感じた。血の臭い。感じたとともに左を向いた。さっきの男が壁にもたれかかるように倒れていた。様子がおかしい。俺が見えるはずなのになんの反応も返さない。血の臭いといい、まさか…。

何よりも不思議だったのは倒れている位置だ。この部屋は話しからしても実験体を捕らえておく保管庫なんだろう。地図に記されていた通りなら、長方形形状のかなりの広さがある。この扉はその部屋の四隅のうちの一つに位置している。男は長方形の長辺を移動した位置にいるのだ。距離は百メートルを越えている。

姿を見失い、あの男を再び確認するまでにせいぜい十数秒。人があの位置に移動するのは不可能ではない。ただ、消えた時の様子といい、今の状況からだ、明らかに第三者によるものに違いなかった。そう、考えるべきだった。

まさか、死んでるのか。頭に浮かんだ最初の考えだ。いや、気を失

っているだけかもしれない。折角光明が見えはじめたのに……。とにかく近づかなければ。それ以外頭になかった。入ってすぐ感じたもう一つの臭いの事も忘れて。

完全に動揺していたため、なんの注意も払わず、歩を進めていた。正確には駆け寄っていた。何かあるかど考えずに音を発てて走っていた。近づき、様子が徐々にはつきりと認識できるようになるにつれ、脚を緩め、遅くなっていった。

後十数メートル程まできた時だ。この辺りまでくると、男の様子がある程度把握できた。白衣の右脇腹辺りが紅く染まっていた。傷の大きさははっきりとはわからなかったが、紅く染まっている部分を見ると、深いようだ。

「生きて……るのか？」

独り言なのか、血まみれで倒れている男へ投げかけたのか自分でもわからない。それでも、返事が無いことにさらに焦りを感じ、再び駆け出そうとした。音がした。金属が削られる時のあの甲高い音だ。それも真横から。部屋の端を歩いてきたので、自分から見て左はまだ比較的綺麗な壁で、右は対照的に至る所が歪み、傷の入ったみすばらしい檻が規則的に並んでいた。音がしたのは檻と檻の間、通路用に開けられたような空間からだった。反射的に目を向けると、視界の隅に白い塊が見えた。何故だかはわからないが、逃げろ、そう直感した。

直感とともに身体が動いた。前方へ一今だに動きのない男の横に、飛んだ。着地しながら態勢を変え、ついさっきまで自分のいた場所に目をやった。

口許を真つ赤に染めた白い獣がそこにいた。

第一三六話 化け物対化け物

「…狼？」

狼がここにいる事が不思議だった訳ではない。男の安否を考えてばかりいたが、それでも自分が今どういう場所にいるかぐらいはわかっている。遺伝子操作、生物対象で行っていると言っていたのだから、狼がいたところで何もおかしくはない。疑問に思ったのはもっと別のところだ。

“そこで俺を睨みつけているのは本当に狼なんだろうか？”

足りない言葉を補うなら、これが適切だろう。明らかに大きさが異常だった。狼なんて、今まで数える位しか見たことはないが、一もちろん動物の、だーそのどれよりも巨大で二回りは大きい。いや、もっとか。虎と殆ど差がないだろうか。頭部も比較的大きいから、全体的に拡大したようなところだろうが、筋肉の付き方や骨格も異常なんだろう。胴体、両前脚、ここから見える部位は不自然な程膨れあがっている。

『クハハッ。…自分の作品にやられるとはな。皮肉も、…いいところだ。』

気絶でもしていたらしく、やっと声を出した。ただ、脇腹の出血は止まる訳でもなく、片手で押さえ付けているようだが、全く意味を成せていない。

「死なないだろうな。」

『どうかねえ。痛みを感じない…わ、左半身動かんわ。駄目だな。』

片手のみでしか止血をしていないのを見ると事実のようだ。最悪な事態だ。

『私を…捨てていけ。』

「出来ない。」

今更何を言うかと思えば。化け物一匹位殺せる。

『…何でもいいが、これ、…を持ってろ。』

途切れ途切れに声を出しながら、血まみれの手で何かさし出した。目の前にいる化け物から目を反らさないように受け取る。ディスクだ。

『私の成果、だ。出口は、わか、るんだろ？…さつさと、行け。』

突然、けたたましい音が鳴り響いた。

“実験体ノ脱走ヲ確認。関係者ハタダチニ脱出シテクダサイ。五分後ニ駆除ヲ開始シマス。”

成る程。悠長に睨み合っている場合じゃないのか。五分、時間が無い。ならさつさと行動することにしよう。

すぐに化け物から目を反らし、奴を誘った。急いでいるとはいえ、無謀な事をする訳にはいかない。臨戦態勢にある敵に突っ込むよりも、飛び掛かる敵を迎え撃つ方が適している、と判断した。目を反

らしたとはいえ、この距離まで近づいているのだ。音だけで相手の状況が十分わかる。

“ギイツ”

爪で床を削る音だろう。動き出したか。もう一度、さらにもう一度似た音が鳴る。さらにもう一度音が鳴るが、今までに比べて明らかに長い。飛び掛かかろうと、踏み込んでいる。チャンスだ。飛んでいる間は動きを変えられない。

振り向きながら、目で奴の正確な位置と高さを見積もる。位置は音で測ったとおり、高さは俺の腰よりも少し上を目掛けて跳んだようだ。一瞬の間に考えた、というよりは感じたのと同時に身体が動いた。振り返る動きに合わせて脚を浮かす。身体を捻り、脚に力を入れ、頭部目掛けてたたき付けた。

頭部側面。狙い通りだ。規格外のサイズだからだろうが、随分重く感じたが、なんとか振りきった。左手にある檻に巨大な身体が方向を変えていく。

“タツ”

仕留めたか確認する余裕もなく、物音が聞こえた。左の通路の方だ。今俺と男のいる場所は部屋の隅であり、少し前一調度さっきの化け物を叩きつけた所まで、檻が続いているが、男の倒れている左は他の列への通路になっている。音がしたのはそこからだ。幸い、音はまだ遠く、何とか対処できる距離だ。仕留めきれたか、と不安が残るが、さらに目を通路へと向ける。

突如、視界が急激に動き、背中に強い衝撃を感じた。

第一三七話 不穩の音

景色が落ち着くと、目の前には灰色の顔があった。これも狼なのか？今の状況を他人事のように思考に入ろうとしていた俺を、肩に走った痛みで現実に取り戻された。目の前の顔は白い牙を見せながら、迫ってきた。

「くそっ。」

床に倒れているため、手足が動かしにくく、俺の上に乗っているものを、あまり強く殴れなかった。それでも、さっきのやつよりも小柄だからか、何とか噛み付かれる前に押し飛ばせた。

すぐに立ち上がり、身構える。俺の上に乗っていたものは左手の通路に立っていた。案の定、ピンピンしていたが、様子を見るように、じっとこちらを睨みつけている。全体を見て顔を見たときに感じた違和感が分かった。

青みがかった灰色と白の毛を持つそれは、もう一匹と対照的に細い。顔は一言で言えば鋭い。前後に長く引っ張ったと言えいいのか、身体もその言葉が最適だ。脚も胴体と比べて短いからか、ダックスフントを連想したがコイツの方が醜悪だ。何しろ目さえも切れ長になり、嫌味な笑みを浮かべているように見える。

“ ヲ ヲ ヲ ”

唸り声。檻へ叩き付けたもう一体も威嚇を再開したようだ。あまり効いていなかったようで、傷付いた様子は全くない。頭に直撃したはずなのに、こうも平然としていられると、さすがに焦るな。

何よりも、もう一体増えた事がかなり重大だった。化け物が二体だからただでは済みそうにない、という事ではない。二体では済まないのではないか。部屋の広さ。檻の数。大半が空だとしても、二体でしかないとは考えにくい。こういう状況に役立ちそうな鼻や耳もあまり意味がない。今まで多くの実験体がいたのか、獣の臭いが満ちすぎて判断材料にならない。また、狩人であるものが不用意に音を発てたりはしない。対して、奴らは男の強い血の臭いに誘われてくる。こちらの位置は完全に把握されている。他にいるとすれば時間をかければ集まってくる。

『最後…の…警こ…くだ。』

搾り出すような微かな声。男は焦点の合っていないんだろう、ただ床の方に目をやったままだ。限界か。

『離れ…ろ。』

離れる？こんな状況で離れるとは変ではないか？考えすぎか？

“カチツ”

唐突に聞こえた微かな機械音でやっと分かった。この男の言いたい事が。

すぐに駆け出した。ここには駄目だ。もうこの男も連れていけない。早くここから出なければ。駆け出したのは俊敏な化け物が構える左の通路だ。あの巨体にぶつかり、乗り越えるという危険より、素早い動きで傷を負っても突っ切る方が、成功するだろう。安直な考えかもしれないが、ここから離ればそれでよかった。

切れ目の瞳が俺の動きに合わせ動き、態勢を下げ、飛び掛かる構えをとる。脚を狙っている。まともな根拠のない、ほとんど勘だ。しいて言えば態勢が低すぎる：ように感じたから。とはいえ、こいつの飛び掛かる直前の姿勢なんて、知らないのだから、当てにならない。

狙いが当たろうが外れようが、どちらにしる脚に傷は負いたくはない。脚を第一に守ればそれでいい。

動き出したそれは地を這うような低さで突っ込んできた。予想が当たったが、それ以上に低かった上に、速かった。床に下ろそうとした脚にタイミングを合わせて迫ってくる。なんとか避けようと、無理矢理半歩分後ろに脚をつけた。走るスピードの中で無理に歩幅を変えるなんて、平然としていられる訳がない。案の定態勢を崩してしまった。前のめりに倒れていったが、無理に下げたのが左足だったからか、大きく崩れる前に左手の壁にぶつかった。壁に手を当て、押し返すようにして態勢を立て直す。前にはもう俊敏なものの姿はなかった。上手くかわせたようだ。どこにいるか確認している暇はない。再び走りだそうと脚をつけた。

“ブヴォン”

真後ろで爆発音がした。予感的中した。耳にしたくはなかった、存在を消す音。

第二三八話 待ち合わせて（前書き）

約三か月の間更新せず、申し訳ないです。周辺の状況が落ち着いてきたので、ペースを上げて書いていきたいと思っています。読んでくださってる方、こんな作者ですが、よければこれからもこの小説を読んでいただくとうれしいです。

第一三八話 待ち合わせて

「まだかな。」

私しかないのに言葉がこぼれた。ちよつと待ちくたびれたから。ほんの少しだけ。

あの施設から少し離れたところにある古びたビル。先に出てくれた私が待つてる集合場所。改装の途中だったみたいで、外壁と柱以外なんにもない。ビニールとか何かの板が散乱してるくらい。すごく寂しい場所。トイッシュも自分のすること終わったから、って寝ちゃったみたい。返事を返してくれない。呼び掛けても返事してくれないと、余計に寂しさが増したから、声かけるのすぐに止めちゃった。

元に戻るにはどれくらいかかるんだろう？すぐには治らないよね？元はどんな顔なんだろ？…もう全部うまくいってるように考えてた。たぶん、私はちゃんとできたから、そんな気になったんだと思う。気が早いけど、疑ったりはしなかった。

“カツッ”

考え込んでたせいか、人影が目の前に来るまで足音に気がつかなかった。立ち止まった大きな影を見上げる。狼さん。期待が外れて、うかない顔をしてた。初めて喜ぶ顔が見れるんじゃないかな、って思ってたのに…。

「…失敗、したの？」

恐る恐る聞いてみた。狼さんの返事を聞くのが少し恐かった。ゆっくりと、口を開いた。

『成功したが、ここじゃなかった。』

「そう。…」

目線を落とした。ケガをしてないか気になったし、なぜか、それ以上目を合わせられなかった。

「ケガ：してる。」

右腕の肩より少し下の部分の服が破れてた。少し暗いから、どれくらい傷か、はっきりわからない。治療してあげたくても、ここに道具がないから出来そうにない。

『かすり傷だ。気にしないでいい。』

ちゃんと診たかったけど、道具もなかったし、そう言われると諦めるしかなかった。

狼さんは目の前の壁に寄り掛かり、腰を下ろした。少しの間、沈黙。なんていったらわからなかった。

『ありがとう。』

「え？」

狼さんが呟いた言葉はちゃんと聞こえたよ？ただ、なにに言ってるのかわからなかっただけ。

『お前がいなかったら、侵入なんてできなかった。』

「…でも、失敗だったんでしょ？」

結局はダメだったんだもの。お礼なんて—

『失敗ではない。当てが外れたただけだ。得られたものもあるしな。』

「何？」

そういいながら、服のポケットからなにか取り出した。赤い汚れのついたケースには一枚のディスクが入ってた。

『まず、あの施設は目的のものではなかったが、遺伝子操作をしていたのは事実だ。それも、何年も前から。』

そうだよな。全然関係ない場所だったら、狼さんがしてきた事の報酬にならないもん。外れた時点で報酬にならないとも思ったけど、その考えをやめた。

『成果も出していた。そんな研究所でも、この身体ほどの技術に達していなかった。』

言いたい事が分かった。

「狼さんがその身体にされたのがだいたい五年前。その時にそんな技術があるってことは、かなり前から進めてたってことだね。」

狼さんは小さく頷いた。

『かなりの設備を必要とするだろうから、今だに続いているとしたら、かなりの財力があることになる。もう止めていたとしても、当時の資料を見れば、ある程度には絞れるはずだ。』

私は中に入っていないから、どんな感じかわからないけど、確かにそうだと思う。

『それと、これは研究員から受け取ったものだ。まだ中を見てはいないから何とも言えないが、情報があるかもしれない。』

そうやって、これからの事を話してくれた。筋は通ってた話だったんだけど、どこか違和感を感じた。

第一三九話 収獲

小一時間モニターを見続けているせいか、目が痛い。相棒はあれほど長時間見ているのに、なんともないのだろうか？

帰ってきて、すぐに彼女と分かれ、俺はディスクの中身を確認していた。腕に負った傷は実際ただのかすり傷で、戻ったときにはすでに血が止まっていた。それを見せると安心したようで、部屋に戻っていった。

爆音後はただただ走り続けていた。他に実験体がいたかはわからない。右腕の傷は出口手前で追いついた、あの俊敏な奴から受けたものだ。音と位置の合わない奴の動きを把握し、防ぐのはかなり難しかった。時間もないのに相手にしていられないからな。幸運な事に再び襲われたのは、出口まであと数歩という距離だったこと。

結果から言うと、この傷を見てわかる通り、かすりはしたが、かわせた。床に爪が当たる音が聞こえたのに合わせて、出口に滑りこんだんだ。態勢を下げたためにかわせた訳だ。なんとか非常口に辿り着き、逃げ延びた。

ディスクの中身はやはり実験データだった。数年間と言えど、あくまでそれは本格的な実験を行った期間であり、法に触れるかどうかという小規模な実験はもっと前から行っていたようだ。それを含めると、目を通すだけでこれほど時間がかかるとは…。

あの研究所はシロであるのはもう疑いようがない。違法ではあるがな。他に分かる事と言えば、あの二体以外に成功例はある、という事だ。あと三体、つまりあの場に計五体いたことになる。襲われた

のが二体だけでよかった。

今はあの男が書いたと思われる日誌に目を通す前に一息ついたところだ。冷たいコーヒーを注ぎにキッチンに行ってきたところだ。砂糖を少しだけ入れただけの、甘みのない液体を口に含み、そのまま飲み込む。コーヒーの独特な苦みで眠気が和らいだ、かどうかわからないが、再び目を通し始めた。

日誌は小規模な実験を行っていたころから始っていた。人の目を避け、自分だけで行っていたようだ。違法に近いその実験が見つかる事を恐れていたわけではなく、己の力のみで作り上げたかったようだ。一人で行っていた期間は長かったようだが、スランプに陥ったとき、同じように実験を繰り返している人物がいることを知り、その人物とともに継続していった。そうしていくうちに、小規模なグループになっていったようだ。同じ研究を行っている仲間、と言うよりは自らの技術を誇示する相手でしかなかったようだ。なんとも奴らしいな。

日付は五年前まで読み進めた。俺がこの身体に変えられた時期だ。この時期で本格的な実験すら行っていないのなら、やはり関係ないのは決定的だな。本格的に実験を開始したのはあの研究所に移った数年前だと言っていた。具体的に聞いておけばよかったな。また目が疲れてきた。

少し雑に流し読みしていると、気になる名前を見つけてページを進めていた手を止めた。キース・イヴィアン。俺の…旧友の名。

第一四〇話 舞台裏二

『只今参りました。』

扉を叩く音に応えると、仕事を終えたヤジがいつもと寸分違わぬ表情で入ってきた。

「直接報告しなくても構わないのに。本当に律儀な男だな。」

『いえ。やはり、直接お伝えすべきです。』

それを律儀だというのだ、この言葉は頭の中に抑えておいた。

「では、報告を聞こうか。」

報告と言っても、ほとんど計画通りであるだろうから、ほとんど聞くまでもないだろうな。手を組み、肘を机に乗せ、話を促した。

『はい。ご命令通り、トーマスの殺害、研究所の削除、データの奪取、滞りなく全て完了しました。』

「続けてくれ。」

事前に報告を要求していたのはこの後からだ。さきの内容は報告ですらない。

『作戦中に彼女の姿があったそうです。役目を担っていたと見て間違ありません。』

期待した通りだ。生きてその場にいた。あやつもまだまだ甘い人間と言う訳だ。

『…疑われてはおりませんか？』

ヤジが声のトーンのみを少し変えて聞く。鼻で笑った。

「傍観者たちにか？疑われる事などあるか。我々は彼らのために動いているじゃないか。警戒も怠っていない。問題ないさ。」

ヤジの心配もわからないでもない。少しでも疑いをもたれば、奴らに徹底的に探られる。ボロを出すようなへまはしないが、要である今後動きが取りづらくなる。それは避けたい。ただ、私が言った事は事実だ。今回ヤジにしてもらった事はあくまでも彼らの意向に沿っただけだ。何か裏でした訳ではない。しなかつただけだ。

「心配するなら次だろう。次はあの人だからな。念入りに準備してきたが、万が一ということもありかねない。」

本格的にヤジに動いてもらうのはこの次。あの人には恩を仇で返すことになる訳なのだが、意外と何も感じないものだ。ただの通過点でしかないからだろうか。私自身が手を下す訳ではないからだろうか。本当はそうしたいのだが、この身体だ。本当に憎たらしと思う。

「もう下がってもいいぞ。また明日頼む。」

『わかりました。これで失礼します。』

深く一礼し、部屋を出て行った。ヤジの背がいつもより大きく感じた。普通は父親に感じる事だな。奇妙な気分だ。私もそろそろ部屋

で休もう。

第一四一話 懐かしい記憶

キース。俺の旧友。カードキーのロゴを見てすぐに社名、セイテックだとわかった理由だ。キースとは大学時代に出会ってから、就職しても交流のあった友人だ。あいつがその会社にいたからこそ、ロゴを見ただけでわかった。その名がここに書かれていた。その名に目が少しの間縛られていたが、目を通してただけで、内容が頭に入っていなかったため、少し前から読み直した。

”我々の研究に興味があるという若者が表れた。キース・イヴィアンと名乗った彼は、融資するからもしっかり環境で研究を進めないかと話を持ちかけてきた。しかも、機密性を保証すとも言ってきた。正直なところ、今の研究は息詰っていた。進展するためには金もそうだが、これ以上は法に触れるからであった。全員の意見を聞く必要があるが、私の考えは決まっている。おそらくほとんどは私と同意見だろう。今後が楽しみである。”

あの男を支援していたのはキースだったようだ。厳密にはやはりセイテックが関わっていたのだろうか。偽装していた訳ではなかった事は驚いたが、それ以上にキースが関わっていたことがかなりショックだった。

キースとは大学で知り合ったが、俺は文系、あいつは理系、部活動も異なっていた俺たちが出会ったのは…今思い出しても笑みがこぼれる。妻だ。いや、元妻だと言った方がいいんだろうな。彼女とあいつは中、高どちらからかは忘れたが、それなりに親しかったらしい。彼女は俺と同じ学科で、何人かの友人グループの一人だった。テスト前に図書館で集まって勉強していた時だ。同じように図書館に勉強しに来たあいつが彼女を見つけて声をかけてきた時だ。あい

さつ程度だったんだが、何故か俺の方を一瞬睨んでいた。後で本人に聞いた話だが、彼女にそれなりに恋心があったらしい。それで、隣に座っていた俺に対して、何か理由があったわけではないらしいが、睨んだらしい。大学時代中に彼女と付き合い始めた位からは仲は良くなっていた。初めは少し毛嫌いされていたようだが、話しているところが多く、そういった感情はなくなっていた。就職後もたまに会って酒と一緒に飲んだりするような仲だった。あの頃は楽しかったな。

ここにキースの名が出るということは一体どういうことなのだろうか。機械系のあいつがセンテックに就職していたのは本人から聞いた。もちろん技術者として。なのに、ここであいつの名前が出るのはどうしても腑に落ちない。偽名か？そう考えると、センテック自体が融資している訳でもないのかもしれない。それにしても、いくらセンテックと名乗るためだとしても、技術者の名前など使うだろうか。だとしたら本人か？断定はできないが、その方がまだ信じられるか。

日誌内は移動後の研究について書いているが、あまり情報になりそうなのはなかった。研究にのみ没頭しており、他の記載がほとんど見られない。作られた実験体、その後の経過、さらなる性能の向上などなど。あの場にいた五体までに何十体もの実験体を生み出していたようだ。文字の羅列だけではあまり何も考えてはなかったんだが、改めて思うとかなり残酷な事である。

手掛かりがあったと自信を持って言える事ではないが、やはりキースの事が気になる。セイテックが言うべきなのかもしれないが、身近であったためでもあるだろう。相棒に少しあらってもらおうか。今日はもう休もう。なれない事はするべきじゃないな。電源を落とし、席を立った。

第一四二話 護衛任務

閉じた空間に銃声が響いた。悪くない。むしろしっくりくるな。的を見ても、悪くない。ランタンから受け取ったものを試していたんだが、安心した。

先輩が使っていた二丁のハンドガン。他のものと比べて少し重く、スライドの部分が太くなっている、銀色の銃だ。

素手、というか格闘を主体にしてたが、別に銃を使っていなかった訳じゃないし、実践で使えないようなレベルという訳でもない。実際使ってるしな。ただ、銃撃戦よりも近接戦が得意だったから優先してただけだ。

『ここにいたんスか、先輩。』

切り上げようと、片付けている最中、バンが扉を開けた。そういや、どこにいるか残さずにきたんだと気付いて謝った。

「で、どうかしたのか？」

わざわざ俺を捜してたみたいだし、何かあったのか？情報集めに行くのに捜す必要はないしな。デスクで待っててくれればいいんだしな。

『ボスが呼んでいます。なんでも、仕事だとか。』

「仕事？」

何だ？今俺達がしてることを把握してるはずなのに、何考えてるんだ？仕事を掛け持ちさせるような人間じゃないが、考えてる事はよく分からない。行けば分かるか。

「分かった、すぐ行く。」

エレベータに乗り、ボスの部屋に向かう。バンもこの呼び出しを奇妙に思ってるらしく、持ち掛けてきたが、俺にも分からないのだし、ちゃんとした答えは返せなかった。

「失礼します。」

ノックに返事を受け、扉を開くと、ボス以外に誰かが座っていた。

『遅かったな。人を待たせるもんじゃない、とよく言ってるだろ。……お待たせして申し訳ない。』

『構いませんよ。急に押しかけたのはこちらなんですし。』

誰が座っているかの見当はすぐについた。ここ数日で何度もあった秘書と目が合ったら当然だよな。

「アーサー様……。搜索の進展がでず、申し訳ありません。」

妹の搜索を依頼したアーサー社長、その人だった。搜索どころか、さらに被害を拡げれ事になっていない。本当に奴が憎い。

『貴方のご友人も被害にあったと聞きました。気を落とさないください。私は貴方を信じてますよ。』

『とりあえず二人とも座れ。早速仕事の話に入ろう。』

扉の前に突っ立って俺たちを呼び、俺たちは席に着いた。アーサー社長がいて、仕事の話となると、搜索について、何かプランを変えらるのだろうか？

『それでは、私からお話させて頂きます。』

社長の後方に一人立っている秘書が口を開いた。彼が全て話してくれるようだ。

『今日の夜八時より、元社長の告別式、その後、アーサー様の社長就任会見を行います。その際、お二人にアーサー様の護衛をお願いしたいのです。』

告別式。社長が亡くなったのだから、大々的に行うのだろう。その後で新社長の就任会見。俺たちに依頼する意図がわかったように思う。

「誘拐したまま何の要求もないのは明らかに不自然。大々的な場で奴が何らかの接触をみせる可能性もある。」

秘書は一度頷き、話を続けた。

『その通りです。彼女を人質にアーサー様の命を狙ってくるかもしれません。こういった方法では予想できませんが、接触する可能性は大いに有り得ると判断しました。』

『実は他にも問題があつてね。あまり公にはできないが、私が社長として就任することを好んでいない者たちもいてね。直接的な行動

をとってくるとは言い切れないんだが、ここ最近不穏な動きをとっているものもいるようなんだ。そういうことも含めて護衛を頼みたいんだ。』

社長がそう繋いだ。上に立とうとする人間だ。自分の会社といえど、敵は少なからずいるもんだ。むしろ、いないような人間に会ったことがない。どんなに人柄がよくても、立場や状況で妬むことだってあるんだし。

『そういうことだ。情報収集の方は代りを出しておく。この件はお前たちに頼めるな?』

ボスがわざわざ聞いてくるが、答えは決まってるだろう。

「もちろん。任せてください。」

第一四三話 態度を変えて

護衛を俺達に依頼してきた。普段から護衛を雇ってるだろうが、さらに俺達もつける、となると、何か情報を得ているんだろうか。ほぼ確実に行動があると踏んでいる。そう考えるのが自然だろ？もしかしたら、俺達の腕を確かめるつもりなのかも…。

『最近多いわね。考え込むの。』

包帯を巻き直し終わり、背を手で押された。確かにそうなのかもな。

「いろいろあるんだよ。包帯もういらねんじゃねえか？」

イスを回し、ナーシャの方を向き直ると、溜め息をついて言う。

『今より悪くなられちゃ、私の仕事が増えるでしょうが。つかえがあるくらいで丁度いいのよ。』

人をガキみたいに。つつても、こういう事に関しては頭が上がりないんだ。黙って従う事にするか。でないと、いざ見つかった時がやっかいだ。

『…何考えたの？』

「何も。」

俺の顔を見ながら、目を細め、睨んでいる。顔に出たのか？参ったな。

『ジェイク。』

「ん？」

席を立ち、部屋を出ようとドアに手をかけた時、ナーシャが声をかけてきた。

『明日、少し遅れるけど、パーティに行けそう。』

「：そうか。あいつらも喜ぶよ。」

忘れてた訳ではないが、改めて気がついた。この仕事が今日でよかった。

日ごろ、一緒にいられる時間があまりない俺達にとって、誕生日は重要だ。クリスマスなんかの行事の日はほとんど仕事が入っちゃう。だから、せめて誕生日だけでも家族全員で祝おう。そう、俺が決めた。基本的には家族だけと言ってたんだが、バンやらナーシャやら、たまにウチに顔を出してきた奴が、参加するようになった。まあ、祝う人が多いのはいい事だ。ちゃんとプレゼントも用意してくれるしな。

『行きましょう、先輩。』

部屋の外で待ってくれてたバンとともに下りて行った。

依頼内容での護衛は夜の告別式の前から。それまでは、奴の情報収集。と言う話だったんだが、ターシェの事もあるんだろう、できるだけ長くつくようにした。これから、まず告別式式場、会見先を回って、警備体制や会場の見回りを確認し、その後から護衛につくと

いう話にした。

『つまり、私は何を調べて欲しいと言いたい？』

「アーサー社長が掴んでるだろう情報が欲しいんだ。誰がどんな手で仕掛けるか。わかるなら知っておきたいからな。」

情報を掴んでるのが確実だ、とは言い切れる訳じゃないが、やっぱり、何かしら根拠があるはずだ。雇い主を詮索しているようで気が引けるが、それで防げるなら、しない訳にはいかない。

バンの運転する車でザイレイと連絡を取り、情報を求めたんだが、追加料金をせびられた。前に渡した情報はまだのはずだ、と言いつ返したんだが、別件では適応外だときっぱり答えられた。きっちりしてると言うか、がめついと言うか……。仕方ないから、取りあえずつけておく事で請け合わせれたが、ザイレイの性分だと、忘れないだろな。面倒臭い。

会場までは少し時間がある。レインに遅くなる、と連絡しておこうか。心配させないよう、明日は大丈夫と書いておこう。

第一四四話 星天祭

「ホントに大丈夫なのかな。」

ジェイクからメールが届いた。今日は遅くなるけど、明日は問題ない、だって。ジェイクの事だから、誕生日をすごく大事にしてるのはわかってる。だけど、仕事だって大事なんだから。どうしても入ってしまったら、仕事をするしかない。

『で、レインはどうするの?』

前に座っていた友達が振り返って訊いてきた。メール見てて聞いてなかったや。

「ごめん。何だっけ?」

『星天祭よ。誰と行くのかって話。』

「星天祭って今週だっけ?」

『なに? 忘れてたの?』

ファムの誕生日の事で頭がいっぱいだったから忘れてた。今週末、星天祭があったんだ。十年に一回、月のメンテナンスで一時間明りが消える。その日を星天の日っていう。名前の由来はその日の夜空が星空のように見えるからだから。星空と言っても、建物の光なんだけどね。一つ一つがとても小さい光だけれどもいくつも、いろいろな色の光が集まるのは圧巻だった。一度だけ見たとき、首が痛くなるまで上を見続けたのを覚えている。

十年に一度なんて事だから、お祭りが各地で開かれる。この辺でも開かれるんだろうな。前のは眩しいくらいに飾り付けて、明りが消えていない間でも賑やかだった。消えた瞬間にはカウントダウンと花火が上がってたっけ。

『ユーネは彼氏とだって。あたしとルリは女友達だけで行こって言ってるんだけど、レインもどう?』

四人で話してたんだけど、みんなどうするか決まっているみたいだ。

「私は…。」

考えてなかったからすぐに答えられなかった。友達と一緒に行くのもいいけど、今の家族で見るのも初めてなんだし、そっちを優先したいな。ジェイクは絶対忙しそうだし。

「家族と見る、かな。ごめんね。」

そういうと、わかってました、って感じでみんなお互いに目を合わせてた。

『言うと思った。レインらしいよね。』

『彼氏と、なんて言ったら叫んでたところよ。』

「ちょっと、私だって女なんだから、いうかもしれないじゃない。」

『『『ないない。』』』

三人同時に言われた。冗談でも、さすがにショックだ。

「そこまで断言しなくても…。」

『ごめんごめん。まあ、いつかはそんな日も来るかね。』

「…自分だっていない癖に。」

『そうだ。ユーネならともかく、アンに言われたくないな。』

『ひどっ。今だけじゃない。』

みんなで笑った。後も話してたけど、正直あんまり訊いてなかった。少し思いだしてたんだ。お父さんが生きてた時のこと。

第一四五話 遅めの朝

『そうか。目的の場所ではなかったか。』

「ああ。だが別に文句は言わない。むしろ、情報を渡してくれるのがえらく遅かった事に文句があるがな。相棒が内容にも文句いったが。」

『向こうの隠ぺいも固くてね。渡せた程度しか得られなかったんだ。こちらもやっと尻尾をつかんだところだったんだが……。また情報を得られ次第渡そう。今日は依頼がない。身体を休めてくれ。』

通信の受信音に起こされ、今日の件の報告をした。向こうとしても予想外だったらしく、素直に謝罪してきた。謝罪されたところでなんの意味もないが、そんな憤りをぶつけたところで、それこそ虚しくなるだけだ。出そうとした言葉を飲み込んで、切れるのを待った。

コンピュータ室に来るまでに食堂を覗いたが、彼女の姿がなかった。寝ているのだろうか。無理もないか。あんなことがあったのだし、普通に起きてこられるのも、それはそれでおかしいか。そう考えると、自然と口の端が釣り上った。こんなことが普通になっている俺もおかしいのか。

腹が減っているわけではないが、何か食うことにするか。そう思い、部屋を出ようとした。ドアノブを掴んだ時、後ろでまた受信音が響いた。手を離し、またモニターの前に戻り、席に着いた。

『今連絡来たのお？』

「ああ。ちゃんと言っておいたぞ。もつとちゃんと情報送れとな。今日は仕事はないそうだ。」

『ふーん。それでえ、持ち帰ったので何か情報あったあ?』

投げやりな言い方。期待していない、という考えがあらさまに出ていた。

「目ぼしいものはないな。あの場が関係ないということぐらいだ。」

『やっぱりい。あいつらちゃんと探してんのかねえ。』

少し苛立ちを含んでいるのがわかる。さっきよりはあからさまではない。

「少し探ってほしい人物がいるんだが、キース・イヴィアンという男だ。」

『キース・イヴィアン?…ああ、あの頬のこけたおっさん。』

知っているようだ。テレビでも見たのだろうか。とにかく、わかっているのなら話が早い。

「あの研究所に出入りしていたらしい。他の研究機関と繋がっている可能性があるんだ。手掛かりとしては、せいぜいこれくらいだ。」

『わかったよお。何かわかったら連絡するよお。んじゃ。』

そう言い終わるかどうかの瀬戸際で、通信を切った。今度こそ何か食いに行こう。

部屋を出ると、さっき感じなかった匂いが広がっていた。食堂に向かうと、彼女が食事を作っていたところだった。部屋に入っている間に起きたのか。ちょうどいい時に作ってくれていた。

『おはよう。少し遅いけど朝食作ってる。もう少し待って。』

「ああ、助かるよ。」

席に座り待つことにした。テレビでもつけよう。リモコンをとり、電源を点けた。ちょうど定時のニュースをしていたところだ。内容は、ああ、星天祭があるのか。その話で持ちきりだった。

『星天祭って十年に一度のお祭りだね。狼さんは行った事あるの？』

食事を作り終え、テーブルへと運びながらテレビの話をする。

「まあな。十年生きてたら誰だって一度はあるようなものだ。」

『そうなんだ。』

そうか。彼女はまだ普通ではないんだったな。

「すぐに普通になれるさ。」

スプーンをとり、食事に手をつけることにした。

第一四六話 記憶にない事

遅い朝食の後、狼さんはアトリエに下りていった。今日は仕事がないから、ためてしまったのを描きたいんだって。私はただ、わかつたって返事しただけだった。後片付けがあったし、もうちょつとテレビを見てたかったんだ。星天祭の番組。知らなかったわけじゃない。あの部屋で教えてもらった事の一つだから。映像もホログラムで見てたから、このテレビより、実感があった。

でも、人はいなかった。

お祭りを楽しむ子供やカップルの姿、きらびやかな露店、花火、どれも映ってなくて、ただ、月が真っ黒なのだけ映ってた。お祭りっていうのは楽しいものだ、そう習ったのに、その映像からはただ物寂しさしか感じなかった。楽しいという感情を間違えてるのかと思っただけだった。今は真逆。テレビから聞こえる声は賑やかで、そこにいる人たちの顔はみんなにこやかで、すごく魅力的だ。

ずっと見ていたかったけど、特集の番組が終わって、最近の出来事を読み上げてる。その内容にはあまり興味がなかった。事故があったとか、そういうのは被害にあった人は大変だろうな、って思えるけど、会社の社長が代わる、なんてのは私には関係ないんだしね。

テレビのリモコンをいじってたけど、結局見るのをやめて、電源を切った。見てもよくわからないのばかりで、飽きてしまった。狼さんのところに行こうかな、とも思ったんだけど、あまり気が進まなかった。昨日、描いている横で見ていたけど、すごく話しかけにくい雰囲気なので、途中からいって邪魔したくはないし…ね。

イスから立ち上がって、食堂から出て行った。自分の部屋に戻ろうか、と思って足を進んだんだけど、すぐに足が止まった。そうだ、今なら誰もいないんだ。進む先を変えて、部屋とは逆方向に歩きだした。

コンピュータ室。勝手に使うのは悪いかも、とは思ったけど、気になることがあったんだ。少し使うくらいなら、トーイッシュも怒らないと思うし。キーボードの前に座って電源を入れた。少しすると画面にパスワードの入力待ちになった。パスワードは昨日狼さんが入れてたのを覚えているから、その通りに打ち込んだ。コンピュータはちゃんと動いてくれてる。よかった。

調べたい言葉を打ち込む。インターネットでその言葉を探してみたかったんだ。いくつか項目が見つかって、上から一つ一つ見ていった。関連したないようだったけど、欲しいものじゃない。そのページに表示された項目に目を通し終わって、今度はまた別の言葉を入れてみた。だけど、やっぱり見つからなかった。

仕事の最中、通信機から聞こえたトーイッシュたちの話。私はなんとなく答えられた。だけど、私はその事を教えられた記憶がない。“カレン・サラス”と“亜種生産技術”なんて言葉は、私は知らないはずなのに。

変なことばかりだ。知らないはずなのに、知ってる。あの名前だって。…そうだ。それも調べてみよう。調べていた言葉を消して、違う言葉を叩いた。

”アルセラ・オクスエン”

買い物に行ったときに、思いついた名前。ファミリーネームも思いついてたんだけど、そこまでいらないと思ったから、ファーストネームだけ言ったんだけどね。検索してみると、たくさん出てきた。一番上の項目を選んできると、同じ名前の人が顔写真と一緒に出ていた。年配の女性検事さん。実在する人だった。他の項目も見て行ったけど、ほとんどこの人の事だった。でも、やっぱり、この人の事を私は知らない。どうしてこんな名前をひらめくのかな。入力した名前を消して、別の名前を入力し始めた。ひらめいた名前。まだ一人分ある。その人の名前もいれてみよう。

”キース・イヴィアン”

第一四七話 仕事前

一通り会場を見てきた。今はアーサー社長とともに告別式の会場に着ている。身体の悪い社長の代わりに秘書が手配を管理している。社長自身は俺たちのいる場所より少し離れた部屋にいる。俺たちのいる部屋は粗末なもので、パイプ机とイスがいくつか置かれている程度。ホワイトボードもあるから、簡単な会議室として使われているたんだろう。

彼の護衛は普段連れている連中がしている。ここでもやはりアウェイに変わりはない。とはいっても、別に力を評価してないわけじゃないし、かなり近くにいろのだから文句はない。告別式が始まれば、秘書の代わりを務めるから、もっと近くで護衛にあたれる。秘書は会には出席しないらしい。どうしても離せない仕事を任せられているらしい。秘書がいない間、俺とバンが彼の代わり、という訳だ。それに普段から付いているガードをあわせれば、二桁にはいかないものの、結構な人数になる。十分かどうかは分からないが、悪くない状態だろう。

会場を回ったが、気になる点はいくつかあるものの、決定的なものが見つけれなかった。全部対応するにはさすがに手が回らない。なんとか絞りたいんだがな。そううまくいけば人なんて殺されないか。

『セン。』

「なにかわかったか？」

情報屋ザイレイからの通信。探ってもらってたが、何か得られたろ

うか。

『具体的な動きは得られない。組織内部で情報を得たのか。会場内の人員名簿等、関連のあり得るものを一通り見たが、目につくものをなかった。』

「そうか。」

収獲なしか。

『悪いな。だが、料金なしでいい。』

「そりゃ助かる。」

最後の言い方がずいぶん気落ちした言い方だったから、らしくないなど吹き出しそうななったが、こらえることにした。少し漏れたようにも思えたが。

『はっきりした情報なしッスか。』

内容のわりに声に落胆の色が見えなかった。

「まあ、想定内だろ。」

バンもそう思っているんだろう。むしろ、普段の仕事はそういったものの方が多いしな。情報を得られるような場合もあるが、そういった場合はかなり特別だ。今の仕事（搜索）の方が特別か。紙パツクに注がれていたコーヒーを一口口に含んだ。

『となると、確信があったわけじゃないんですかね？』

「そうなのかもな。だが、内部情報とかの線も消えないけどな。」

当然の疑問。こうして俺たちをつかせた理由。考えてた案はハズレなんだろうか。

「とにかく、俺たちは目の付けている場所に気を配って、来るものだとして待ち構えるしかないさ。考えてもしかたない。これ以上詮索するのも気が引けてくるしな。」

最後のは自分に言い聞かせるように言った。考え続けてるのが少し疲れた。だから止める、と。バンもこれ以上は話さなかった。構造図のデータでホログラムを作り、もう一度、見直し始めた。

第一四八話 旧友の影

“ リリリリリッ ”

長い間なっていた受信音を止めるべく、キーボードのキーを押した。音が止み、代わりに苛立ちをあらわにした声色で相棒が唸ってきた。

『遅いねえ。長いこと寝てたのかあ？』

「構わないだろ。」

訳は全然違うが、そんなことはどうでもいい。

『まあねえ。キースの話なんだけどお。』

「何かわかったか？」

『んー、結論から言うと、よくわからないんだよねえ。』

「ようわからない？」

言うのがめんどくさく、はぐらかしている、という言い方にも聞こえた。詳しく話してもらわないと。

『キース・イヴィアンの名前は技術者としてあってえ、今は開発主任を務めてるんだよお。最近もなんとかって賞とかもらってるんだってえ。そっちは正直どうでもいいじゃん？でえ、研究室にあった映像と比べたら、どう見ても同一人物なんだよね。セイテックの技術者がなんでまた生物学者と関わってんのかねえ？しかも、仕事っ

ばいしねえ。』

「日誌にはセイテック社があの施設を融資していた、と書かれていた。キースはその仲介をしていたようだ。どこからか情報を得て、あの施設にいた科学者たちと接触した。」

『ふんふん。でもお、やっぱりよくわからないねえ。どうして技術者がそんなやつに接触してたのかあ？でも、なにかしてたってのはわかったよお。会社から結構な額の金を適当な名目で受け取ったのもわかった。多分会社から直接じゃなく、キースを介して金を渡してたんだと思う。それで、セイテックに侵入しても見つけ出せなかったんだと、ねえ。』

相棒の話が事実なら、キースが他との唯一の繋がりになりうる人物、と言うことになる。

『かなり探ったのにい、この程度だからあ、後はキースって奴に直接聞くしかない。』

相棒もかなり疑っているようだ。最後は命令口調になっている。手掛かりがこれしかないんだ。当然だろう。

「…わかった。早速今夜向かう。プランは任せる。」

『了解い。』

明るい調子に戻った。わかりやすくしてくれて助かるよ。返事を返した後、俺が切るよりも先に通信を切った。キーを押そうと伸ばした手を、頭に運び、何度かかいた。キースに会う、か。あまり実感が湧かない。なんというか、夢の中のように現実味がない。キース

が関わっている、という事をしっかりと理解できていないのだろうか？聞いたところでお門違いだ、と言われると考えてるのだろうか？…よくわからない。

「何してるんだか。」

独り言が漏れた。どこか異質なそれに何もいдаかず、俺は自分の部屋に戻っていった。

第一四九話 私の存在

「今日は仕事ないんじゃないの？」

早めの夕食を頼んできた狼さん。仕事かどうかわからなかったけど、他に知らないからね。

『仕事じゃない。昨日と同じだ。』

私の顔を見るのをやめて、自分の部屋に向かいながら言った。昨日と同じ、って事は手掛かりを追えてるんだ。良いことだ。なのに、嬉しそうな様子は全然なかった。かといって、落ち込んでる、とか、そんな感じもしない。ホント、ただ事実を言いました、って感じ。ちよっとノアを思い出した。あの部屋で聞いてた無機質な声。

「嬉しくないの？」

『さあな。』

自分の部屋のドアを開けながら、すごく雑な答えを返してきた。内容と言いつつ、両方雑。全くこっちを見ないし。

『真相に近づけるかどうか知らないが、昔の友人に会う。』

「友人……。もしかして、屋上で話してたあの人？」

狼さんの奥さんが再婚したって言ってた相手の事を思い出した。部屋に入って行く狼さんを追いかけて、私も中に入った。少し迷ったけど。

『ああ。そいつだ。』

きちんと整ったベットに腰を下ろしながら、きっぱりと答えた。こ
っちを向いて座ってるから顔は見えてるんだけど、その表情がどん
な感情なのか、さっぱりわからなかった。

「会うのは、嫌？」

『…。』

何も答えずに、側に立てかけていた刀を手にとって、黒く光る鞘か
ら出して、刃を見つめていた。そういう事するって事は、つまり一

「その人を…殺すの？」

だから、そんな顔をするの？

『そうじゃない。必要になるかも知れない、だけだ。』

坦々と答えてたさっきまでと比べて、ほんの少し声が弱くなった気
がする。

『手伝いたい、なんて言うな。』

「うん。」

目だけこっちを見ながら言われた。昨日のような感情がなかった、
なんてことはない。だけど、結局私が出るのは、あんな些細なこ
とだけで、狼さんの手助けと言えるようなものじゃなかった。

『…それならいい。』

少しだけ間を空けて、私の顔から刀に目を戻した。一通り目を通した後、黒い鞆に刃をしまった。

「それじゃあ、料理作っておくね。できたら呼ぶから。」

何を話したらいいか解らなくなって、逃げ出すように出て行った。ドアを少し力をいれて閉めたせいで、閉まる音がうるさかった。

トボトボと廊下を歩きながら考えてた。私は何なんだろう、って。ここにいる必要なんてないんだろうか。狼さんの言うように、外に出て行った方がいいのかな。

いつの間にか、足が止まり、私は傷の入った木の床を見つめていた。

私はここにいないの？

首を振って、また歩き出した。やめよう。こんなこと考えるの。今はできることをすればいいんだ。

第一五〇話 五の舞―表―

『只今より、故ライブイベント前社長の告別式を行います。』

開式の辞を述べ終えた女性が礼をして下がっていった。

告別式が始まるまで、何かされるような動きはなかった。式も予定通りに始められた。多少いざこざがあったものの、もう収まっていた。

俺とバンはアーサー社長を挟んで席についた。本当は親族の場所なのだが、護衛上すぐ手の届く位置にいたかった。そう社長に進言すると、案外すんなりと首を縦にふってくれた。

『父には親族が少ないんだ。だから、きっと私の周りは寂しくなるだろうから、いてくれると嬉しいよ。』

そういうものなのだろうか、と少し不思議に思ったんだが、式が近づいてきてわかった。前社長には息子のアーサー現社長、後は前社長の弟の息子のみだった。その息子はアーサーさんより一回り程上に見える。奥さんと子供が二人。確かに少し寂しいかもしれない。

式の三十分ほど前だろうか、役員と思われる男たちがいざこざを起こした。席の配置に納得がなかったらしい。口で言い合う程度ですんだが、まだ両方とも不満があるように見える。秘書さんがいればなんとかあったのかもしれないな。

遺族代表として、アーサー社長の名が呼ばれた。俺が席を立ち、社長の座る車椅子を押して、位置を下げたマイクの前に運んだ。

代表として述べている間、全体を見渡していた。会場にいる殆どは社長を見ている。幼い子どもは別だが。暗いのもあって、さすがに全てを把握しきれないが、少なくとも変な動きを見せる者はいないようだった。

式は順調に進んでいる。席に戻り、白い菊を添えるために、再び立ち上がる。今度はバンも立ち上がり、俺の分の花を持ってもらう。アーサー社長が自分の持つ花を供えると、俺とバンも後に続いて供えた。背を正し、一礼をする。それを終え、車椅子を再び押し、席に戻る。従兄夫婦と入れ違いに、立ち去って行く。他の人間たちもそれに続き、ゆっくりと列は進み、止まり、なくなっていく。水が流れ、塀にぶつかり、左右に分かれていくような光景を眺めていた。何も感じなかったわけじゃない。胸が痛むような気持ちがあったが、気にして警護の障害になってはいけないんだ。

長い時間をかけて小さな菊を持った集団は無くなった。進行係を務めている女性が前に出て、式を進めていく。式が順調に進んでいくごとに、少しずつ、何か気持ちの悪いものが溜まっていく。この後何か起こるかもしれないという不安は、どうもうまく処理できない。明るくして誤魔化したりしていた事もあったが、そうした時は失敗したから止めた。受け止めるしかないんだが…、嫌になるな。

遺影に目をやると、あの日の室内の光景を思い出した。その光景を消そうと視線をそらした。各人員からの応答も正常だ。このままなら式は静かに終りを迎えそうだ。

第一五一話 空飛ぶ車―表―

結局、式の間に騒ぎが起こる事はなかった。まあ、考えていた事だけだな。

告別式会場は広く、逃走経路も多いが、長時間いるのだから警備もしっかりついてくる。利口な奴が動く状況とはとても言えるものじゃない。…訳わからん奴もいるが。

危険なのはこれからだ。移動は車を使う。そう長くはない距離だが、人数が分散する上、特定の場所にいる以上に相手の位置が特定しにくい。かなり不利だ。

対策としては、三台同じ車を使う攪乱をとっている。こちらの戦力を分散することになるが、襲う側にとっても同じ事だ。向こうがチップを使って位置を特定して来ないかぎり。そんな事が出来る人間は片手ほどこしいらしいが。

この車には社長を入れて五人乗っている。俺とバンが社長を挟んで後ろに、運転席と助手席にガードが二人。他の車も同じような人員だ。それぞれの車がとる経路も予め決めてある。

移動時を狙われた場合、逃げ道が多い。浮いてるんだからそうだな。車の通行可能なエリアは定められてるが、いざとなれば無視すればいい。それに、全方位囲まれるだなんて、そう簡単なことじゃない。

ただ、逃げ道が多いつつつても、その分、逃げ切れやすいか、と言うとそうでもない。浮いているて、決められたエリアがあると言っ

ても光で縁取られているだけ。だから逃げやすいんだが、同時に追いかけてやすい、とも言えるわけだ。要は長期戦になり易いというわけだ。なり易いだけで、なるのとは違うがな。

光と光が交差する場所。交差点のコッチ側が赤に変わった。前の車に続いて、ゆっくりと停車した。まだ距離としては半分も来ていないが、遅れはない。主要道路であるこの幅広い道は、時間の割には少し混雑している。前後左右に車がついている。動きづらいが、今のところ、後をつけられている様子はなから問題ないだろう。

『妹の事、どう思いますか？』

「え？」

不意にかけられた言葉に、情けない声で返事を返してしまった。

『誘拐されたのに、なんの要求もない。もし今日要求が来なければ。。。』

どう答えればいいかわからなかった。彼の表情はうつむいていてわからなかったが、声が少し震えていたように感じた。安心させる言葉を不用意にかける、なんて無責任な事はできない。だから、事実を語ることにした。

「今まで奴の手口で傷つけることはあっても、連れ去るようなことはありませんでした。傷つけるのも、必ずその場で手をかけています。そもそも妹さんは明らかにターゲットではなかった。冷徹な人間とともにいる、という危険な状態には変わりませんが、私は生きていると思います。」

そう考えている。本心だ。多少誤魔化したとも言えなくもないが。

『人間――――』

社長は何かを言っていたようだが、その時に一瞬光りが目の前を縦に切っていったのに、気を取られていた。

第一五二話 不安と敵と―表―

今のはなんだ？目の前を走った蒼い光が、前の車に反射した程度のもんか、と気にするのを止めようとした。

突然、車体が揺れた。小さく、上下に。なんだ？、と声を漏らすよりも先に、揺れが収まり、代わりに車内が赤く点滅した。そんな状態になった事ない。

『反重力システムが停止した！』

なるほど、理由はわかった。だが、解決した訳じゃない。確かに教習所に通ってたときに教わったが、滅多に止まるもんじゃないはず。『お、落ちるんスか？』

ほぼ全員が考えた事をバンが代弁した。すぐに来るかもしれない反動に備えて、俺は椅子にしがみついた。

『予備が稼動し始めた。後十分で下りればいい。』

予備があるのか。そういえば、それも教えられたような気もするな。そんな余裕を見せてる場合じゃない。十分じゃ、会場に着くか怪しい。混み具合じゃ着かない。それに、こんな事態になるのは明らかに不自然だ。

「早くこの場から離れろ。」

『しっかり掴んでいてください！』

対応が早くて助かる。運転している奴は俺と同じ事を考えてたようだ。要人警護を引き受けている最中にこんな事がある、だなんて、整備不良と考えるよりも、人為的なもんだと考えた方がいい。襲撃を受けたか、仕組まれてたものかわからない。どちらにしてもこの後に何も無い、だなんて言い切れない。だから、逃げる。整備不良なら、チェックした奴をぶん殴るだけだ。

前の車が上にとともに、体が宙に浮くような感覚がきた。反射的に椅子を掴む手に力を込める。車体を下げながら、向きを変え、再び発進した。

問題は何処に逃げ込むか、だろうな。会見場に逃げ込むには時間がない。

人のいるような所に逃げ込めば、上手く撒けるかもしれないが、関係ない人間に危害が及ぶ可能性が高い。かといって、近くの廃棄ビルに入るのも危険だ。もしかしたら待ち伏せされてるかもしれない。相手の人数がわからない以上、そんなリスクを負いたくない。

少し離れた位置にある廃墟、それがベストだろう。流石にそこまで待ち伏せしてるなんて非効率な事してないだろ。

何処にするかを考える前に、無線から焦りが混ざった声が聞こえた。

『二号車、こちらでも機能停止した。近くの廃棄ビルに下りる。』

これで決まりだろ。確信した。ほぼ同時に止まったんだからな。

「車を止める場所には注意しろ。待ち伏せされているかもしれない。」

『了解した。』

向こうは問題なさそうだ。目的の人間がいらないんだ、襲撃を受けても、それがわかれば深追いされる事はないしな。さて、それよりどこに行くか。

『幽霊ビル：はどうです？』

以外な所から答えが出た。ろくに考える暇がなかった俺達四人ではなく、守られる社長からの答えだ。幽霊ビルって言ったら、はずれにあるあれか。十分で行ける距離じゃない。ただ、あそこまでは道路が続いてるはずだ。それに乗ればいい。距離的に待ち伏せなど有り得ない。

「それで行きましょう。向かってくれ。ある程度近づいたら、道路に乗るように。」

『了解した！』

最後まで言うと、ルームミラーに写る疑問が晴れ、明るい声が返ってきた。

通路を外れた車は、幽霊ビルに向かって走り出した。このまま通路を離れたままでは、人目を引きすぎる。なにより、敵に把握されやすい。近くの通りの少ない通路に入ったり、外れたりを繰り返しながら目的地に向かっていった。運転手他の三人で周りを見ていたが、付けている車は見つからなかった。うまく隠れているのか、それとも初めからいないのか。とにかく、目的地は変えさせなかった。

もうすぐ十分になる。幽霊ビルは視界に入っているが、飛んだままで行けるような距離ではない。下にあるボロい道路にあわせて高度を下げていく。車体が一度揺れたが、問題なく道路を進んでいく。相変わらず敵の姿は確認できない。

『敵なんていなかったんスカね?』

さすがに、ここまできて敵の姿が見えないと、疑わしいもんだ。

『でしたら、笑い話にさせてもらいますよ。』

鼻で笑いながらいふ。そんなことですんだらいいよ。社内の空気がずいぶん軽くなったな。緊張感が残っているが。

幽霊ビルが目の前に迫ってきた。幽霊ビルっていつでも幾つもあるんだが、一番近いものに入る。どれもこれもかなり以前に見放されたものでボロボロだが、道路を通ったままでも中には入れるようだ。中に入って車の様子を確かめるか。簡単に直るようなもんならいいがな。

『右上のビル。なんか光ったような。』

後ろを見ていたバンが独り言のように言った。右上? バン側の窓から何か見えたのか? 何があるのかと、俺もその窓を見た。

ビルの影から出てくる人工光が見えた。車だ。こちらに向かって来る。

「急げ!」

こんな中心部から離れた場所を通る連中は敵に違いない。考えるよりも早く口から言葉が出た。発振器でも付けられていたのか、奴らは別方向から追ってきたようだ。とにかく、中に入らないと。後の事はなんとかなる。

第一五三話 姉貴 一狭間一

カーテンをほんの少しだけ開けて、外の様子を見た。ここ数日張っていた車はなくなってる。さつきコンビニ行く時に気づいたんだけどね、周りに気になるような奴はいなかった。外出ると、絶対こっちを見る視線感じてたんだけど、そんなの感じなかった。さすがに諦めたのかねえ。ありがたいけど。これでもう向こうに戻る。

ワン公はもうすぐ、潜入するところだろうな。今回の侵入経路は苦労したねえ。デカイビルに入んだけど、力技だと見つかったちゃうしね。聞き出すのが目的なだから、他の奴に見つかったら、それが出来なくなっちゃうしね。殺すより、生け捕りにする方が難しいって、皮肉なもんだね。

俺が提示したプラン、あいつはかなり不満そうだった。つっても、それぐらいしかないんだもんな。それに、あいつ、どんなの出して、すぐに首を縦に振ったことなんてそんなないしなあ。気にもしないけど。

”コンコンコン”

買ったものを閉まってる、ドアから音がした。誰だろうね、こんな時間に？まだ遅い時間じゃないけど、人が来るような時間じゃないけどお。

『私よ。開けて。』

声を聞いて納得した。姉貴かあ。

「はいはい。今開けるよ。」

仕事してきて疲れましたよ、って顔がつたつてた。

「どうかしたのお、こんな時間にい？中入る？」

『いいわ。すぐに帰るから。』

姉貴はいつも俺をそんな目で見る。心配してるというか、同情してるっていうか。すごいウザい。だから、ホントは会いたくない。

昔からそうだ。じいさんが自主した後、もらわれたその時から。おっさんもおばさんも姉貴も、みんなみんなそんな目。だから俺は大丈夫だ、というように笑い続けた。当時はそこにいるしかなかったんだから、その目を少しでも紛らわそうとしたら、そうするしかなかった。

『私のところに警察が来たの。昔のことを聞きに。何があったの？』

何かあるといつも俺のところに来て、心配してますよ、てのをアピールする。止めて欲しい。俺のつく嘘だって信じてもないくせに、信じたフリをする。要するに偽善者なんだ。せつかく人がいなくなっって気が晴れてたのに。また暗くなってきた。

「よくわからないけど、また昔みたいな事件があったんだってえ。それでだと思う。」

納得したように疑問を浮かべていた表情が和らいだ。

『そう。…大丈夫？昔の事思い出して、辛くなったりー』

ウザイ。

「大丈夫だよ。俺ももう大人なんだから。心配しすぎだよ。」

閉まった。語尾を伸ばすのを忘れた。でも、そんなことは気にならなかったらしく、姉貴は続けた。

『わかった。もう帰るわ。セフィリアちゃんによろしく言っ
てね。』

さっと振り返って、スタスタ歩いていった。セフィリア…か。そういえばあいつ、勝手になんか調べてたっけ、ワン公の持ってきたファイルの隠しデータもあるし、向こうのPCでも扱うか。飲みもんとって机のPCの電源を入れた。

第一五四話 強襲 一表一

入り口から離れた位置で車は急停止した。ライトで奥に階段が見えた。

「俺達で食い止める。二人は社長を連れて行ってくれ。」

二人は頷き、後部席に座っている社長をかかえ、奥に見える階段へと向かった。

最初にも言ったが、車は三台用意した。ただし、内一台は告別式会場から会場へ、ではなく、逆の会場から告別式会場のルートを通らせている。囷じゃなく、襲撃時の援軍だな。ちゃんとここにくる前に要請しといた。もうすぐ三階上に着く。俺たちが気を引いてる間に、その車で逃げてもらう、という計画だ。

俺とバン。あの時点で三台見えたから、全員で十人程度といったところか。三台とも来るとは思わないが…。なんか罠でも作れりゃいいが、そんな暇もない。

入ってきた方から明かりが近づいてきた。どうやって対処するか…。

一一一一一

「不用意に近づくな。」

明かりが消えた目的の車を、車半分程の距離を空けて停止した。前後に二台。

部下四人は銃を構えたまま、動きの見せない車を包囲し、少しずつ

その輪を狭めていった。私を含めた残りの四人は後方から周囲を伺っている。

人影のないそれを見るに、逃げたようだ。こんな廃れた建物でも階段ぐらい残っているだろう。大方、応援が来るまで身を潜めておくつもりだろう。車を詮索するのは早々に切り上げて、他の階に移るべきだな。

『開けるぞ。』

身を屈め、部下の一人がドアに手を伸ばした。

突然二発の破裂音が響いた。視界の端にいた部下の一人が崩れ落ちた。隠れていたか。車を盾に姿を探した。同じく後方にいた部下が一人側にやってきたが、もう一人は殺られたらしい。

撃った犯人はすぐに見つかった。だが、銃口を向ける前に別の音に意識を吸い寄せられた。

鈍い音。人を殴った音だ。引き金を引きながら、今度は目線のみ音を追い掛けた。ついさっきまで車を包囲していた部下の一人が膝を折り、崩れかけていた。そして、追い撃ちとばかりに、頭に銃を振り落とされた。

車内から現れた男は無駄な動きを見せず、側にいたもう一人をも餌食にしようと飛び掛かった。反射的に銃口を向けられたかと思うと、その銃の下部に銀色の銃を叩き上げた。部下の持つ銃が手から離れ、二人の手が宙に浮く、かと思った矢先、瞬きをした一瞬の内に、男の銃が頭に振り下ろされていた。有り得ない現象だ。瞬きをする瞬間発せられた爆音を合わせて考えると、一目瞭然だった。振り上げ

た後、引き金を引き、弾丸を放った反動で真逆の動きを見せたのだ。自分の腕の事を考えていないのか？

瞬間、頭の後ろを風が切った。あまりよそ見をするべきじゃなかったな。もう一人に集中しよう。恐らく今ここには二人のみ。他は社長を連れて逃げている。脚の悪い大人を背負いながらだと他の行動はかなりとりづらい。もう一人、バックアップが必要だ。

ならばまず一人。残りがジェイクとはいえ、一人減るだけでかなり楽になる。

向き直り、銃を構えた。崩れかけた柱に見を隠している男の姿はここからは伺い知れない。このまま撃ち合いもいいが、時間がない。隣にいる部下に手で合図し、懷に手をいれ、触れたものを手に取った。試験管程の閃光弾の頭に触れ、投げ付けた。後ろでは何発も銃声が聞こえた。

地面に触れると強烈な光を放った。同時に柱の裏目掛けて走り出した。光が弱くなり始めた時点で男を見つけた。向こう側には部下が銃を構えようとしている。突然の光にひるんでいるはずの男は平然としており、二丁の銃を前後、私と部下めがけてすでに構えていた。

瞬時に前に飛んだ。足が地面を蹴ったのとほぼ同時に引き金が引かれた。数発放たれた銃弾は一つも当たらずに済んだ。態勢を立て直しながら反撃を繰り返す。

二発目が命中し、男は左肩を抑えてよろけ、柱の影に隠れようとしている。今のうちに仕留める。態勢を崩しているうちに銃を構えながら距離を詰める。隠れている男をもう一度確認し、引き金をひこうとした。瞬間、構えた銃を引っ込めた。ほんの一瞬まで手があっ

た場所に鋭い光が通った。男の持っていた刃の広いナイフが、私の指をかすめていた。危うく一本取られるところだった。

改めて銃を構えた。距離をとって引き金に力を込めた。

だが、引き切る前に腹部に感じた痛みと衝撃が襲った。

第一五五話 繋がりの消失 一狭間一

隠しファイルはちょっと面倒臭かった。パスワードかかってたし、不正アクセスすると全データが消却される、なんて手の込んだ事してた。少し時間かかったけど、消えることなんてなく開けた。

「うげえ。」

中身見て出た感想。いや、今時ディスクに焼くなんてするから、かなりデカイデータが入ってんだろうと思ってただけど、せいぜい二百位。それより問題はタイトルだよお。一番最初のファイルが“試験体解剖001”なんて誰がみたいのさ。頼まれたって見ない。

と思ったんだけど、他のも名前だけ見ていっても、嫌なのばかり。ゲノム情報とか、細胞変異過程とか見ても仕方ないし、耐久実験なんて絶対開けない。

「マシなのないなあ。」

思わず独り言がもれるくらいだった。もう見るの止めようかと思つて、せめてファイル形式が文章のがあるか確認した。

これまた多かった。一つのフォルダの中にまとまっていたんだが、全部で百近く……。何をそんだけ書いたんだか。

大体が計画表とか、考察とか、ホント実験好きだったんだなあ、つて感じるようなのばかり。適当に二、三個選んでみた結論。後はタイトルだけ流し見して、気になるのだけ読も。片肘ついて、首もちながらそう考えた。

“追悼”

場違いのタイトルがあった。追悼？誰か死んだのかあ？わざわざ隠すようなものでもないように思ったが、気になったからには見ようと手が勝手に動いてた。

“昨日、恩師であるアイル・ハルワールが亡くなられた。殺害されたそうだ。犯人は警察が捜しているらしい。ご高齢であったのに寿命で亡くならないとは残念な事だ。”

「うーわあ。」

ただの日記じゃん、と思って読んでたらまた独り言。いや、だってワンコが殺した奴の名前だったからなあ。…たぶん。全員の名前なんて覚えてないから、確認しないと言い切れないけど。

っても、やっぱしたただの日記。わざわざ隠してる理由はわからない。続き読も。

“その前日に唐突にきた連絡が当然気になった。久しく連絡をとっていなかった事もあるだろう。ただ、どうしてもその意図することが汲み取れない。たった二行のメール。タイトルもない。ただ、こう書かれていた。”

俺の目は次の行の文から目を離せなかった。

“白い狼に気をつけろ。黒い狼に手を差し延べろ。”

白い狼？黒い狼？黒はワンコとしたら、やっぱし、白は…。明らか

にこいつは何か、いや、全部知ってたのかもしれない。だけど、そいつは殺しちゃった。

「なんだよ、それ。」

勝手に笑ってた。気持ち悪い笑い方で。

第一五六話 尋問 一表一

「ぐっ。」

鋭い痛みが目が覚めた。霞みのかかった視界はすぐに晴れ、目の前には男が一人立っていた。ジェイクだ。身体を動かそうとしたが、思うように動かない。柱に縛られているようだ。痛みの出所が右太股であるのもわかった。ジェイクの持つナイフのせいだということも。

『目え覚めたか。』

怒りを含んだ声をぶつけてきた。当然だろうが。腹部にまだ痛みを感じていた。鈍い痛みだ。殴られた時に内にきたようだ。口の中が鉄の味で広がっている。

改めて考えてみると恐ろしい。私と同時に飛び出した部下はもう一人の男に撃たれたのに間違いないだろう。だが、ジェイクは目を離している間に二人を処理し、なお、窮地にいた男を救うべく、私を殴った。かなり距離があるという訳ではない。それでも、短時間でそれだけできるとはな。

「化け物め。」

ただの感想だ。人間業でない、という程でもないが、この状況でそれだけこなした男への評価だ。

ただし、この評価はお気に召さなかったようだ。表情が若干歪んだ。見た目にはそこまで変わらないが、かなり機嫌を損ねたらしい。

『余計な世話すな。聞いた事だけ答えろ。』

銃口が近づく。仕方なく口を閉ざす事にした。

『誰に命令された？』

当然の質問ならば、答えも至極当然。

「さあな。それより、追っ手は他にもいるが、いいのか？」

『誰に命令された？』

録音した音声を再生するかのように全く同じ音で返す。なるほど、以前とは違うか。

「知らん。」

『そうか。』

今度は随分低い声で冷たく言い放った。私は身構えた。恐らく次に来るであろう衝撃に備えるためだ。相手を脅し、情報を得るには、何らかの恐怖が必要だ。彼なら、痛みを与えてくるという考えだ。

だが、予想していた痛みとは違っていた。

目の前に向けられた銃の引き金をなんの躊躇いも見せずに引いた。それと同時に銃口から強烈な光が広がった。瞼を閉じても痛いほどの光。

「……！」

声にならない悲鳴を上げていた。目が痛い。まともに瞼を開けられない。

畳み掛けるように、声が私を動揺させる。

『お前、ゲイル・クロンズだろ？あんたとは一度同じ仕事に就いたよな。直接会った事はないが。』

「よく…覚えているな。」

『同じ仕事についた奴の顔と名前は全部覚えている。それにしても、今は正反対の職についたなんてのは知らなかったがな。』

強烈な光の後遺症か、全く目がきかない。ただ、ジェイクの声からなんの感情も感じない事が恐ろしかった。

それでも、私は何も言わない。それでいい。

『で、まだ言わないのか？』

「ああ。何も知らない。」

ふと、気になる事があった。あと何分だろうか。

第一五七話 告白 一狭間一

「トーイッシュユ？」

勝手に使ったのが見つかって、その事で話がある、と言われた。片付けとか済んだら連絡してって。そんな怒ってる感じじゃなかった。だけど、トーイッシュユはよくわからない。見えないだけで、すごく怒ってるかも知れない。

『ああ、セフィー。もういいの？』

「うん。」

乾いた声。興味なんてなく、どうでもいいって感じだった。何かあったのかなあ。

『そう。で、何調べてたのお？』

何調べてたのかなんて、きっと全部知ってるはずなんだ。だから、その通りにいった。

「えっと、亜種生産に関することと、キース・イヴィアン、アルセラ・オクスエン、アイル・ハルワールについて。」

アイル・ハルワール。キース・イヴィアンについて調べているうちに、また出てきた名前。すぐ前に似た名前を見たのかと思ったんだけど、そんな名前はなかった。その人について調べてるときにトーイッシュユに見つかったの。

『なんでその三人？』

トーイッシュが気になったのは理由なんだよね。

「わからない。なぜか、その三人の名前が浮かんできたの。」

『なにそれえ？』

私もそう思う。今までそんな事なかったし。

「それだけじゃないの。昨日答えたあの答えだって知らなかったのに出てきたの。」

本当は狼さんに話したかった。屋上で私に昔の事を話してくれたみたいに、今度は私が、って。だけど、あんな思い詰めたような姿を見ると、できなかった。

トーイッシュに言うのをためらう気持ちもあった。よくわからない人にいうのが恐かった。だからって一人で悩んでも仕方ないから、ありのままを伝えた。

『思いついた、ねえ。』

少しの間、トーイッシュは何も答えなかった。ため息をついてから、いつもとかわらない口調で続けた。

『実在する人間の名前なんて、思いつくようなもんじゃないでしょう。学者の言葉なんて尚更じゃん。テレビとかネットで偶然見たの覚えてただけじゃないのお？』

トーイッシュの言う通りだと思う。どこかで聞いた、どこかで見た、それをたまたま思い出した。すごく普通の事だと思う。だけど、私はそんなこと、今までない。思い出す、なんてなくて、なにもかも覚えてる。何日、何週間、何年前。あの部屋には時を刻むものがなかったけど、私は正確に覚えてる。正確に思い描ける。何を習ったか、何を言ったか、どう動いたか。生きている間の全てを覚えてる。忘れてりしない。そんなことができない。だから、思い出すなんてこともなかった。

人は知らないものに触れると恐怖を覚える、と言った人がいる。その通りだと思う。だけど、今私を感じている恐怖を生み出してるのは、人として当然の性質。私が普通の人間じゃない、って言われているように否定したかった。

私は忘れることができないだけの、街でみた女の子と同じ、ただの女の子なんだって、誰かに認めて欲しかった。

第一五八話 二人だけの秘密 一狭間一

意味わかんねえ。何が思いつくだ。そんなんで、なんで三人の名前が出てくんのさ。よりによってその三人。

平静というか、少し突き放すような言い方をしながらも、頭ん中は複雑に考え込んだ。キースはいいでしょう、ワンコが話したのかもしれないし。アイル・ハルワールもワンコから知ったのかもしれない。正直、考えにくかったけど、取りあえず置いとく。問題はアルセラだ。なんで思いつく？

検索した内容なんて、履歴からすぐわかる。わざわざ聞くほどのことなんてないと思ってた。だから、勝手に使ったのは見逃してやろうか、そう考えてた。だって、あのワンコと一緒だと暇だろうか。らなあ。

アルセラについては以前かなり調べた。なにしろ、俺の事件を担当した検事だから。知りもしない奴を勝手に犯人にして、勝手に終わった裁判。あれに関わった奴は全員調べた。結局、たいした情報はなかったんだけどな。

あの事件を担当した検事。何か知ってたらしい研究者。そこで、今回のターゲット。偶然にしちゃあ、出来過ぎてるよな。もしホントに思いついたんだとしたら、他の繋がりも見つけてくれるかもしれない。

「とにかく、そんな訳わかんない事、ワンコに言わない方がいいぜ。というか、俺以外、誰にも。」

『どうして?』

モニターに映る不安そうな顔が尋ねてくる。不自然じゃない程度に明るく返せよ。

「だって、変な話じゃん。知らない事思いつくなんてさあ。ただでさえ、今あいつはダチに会いに行くとかあ、いろいろ大変なんだからあ、心配かけちゃ悪いよお。」

こういうのって、明るく言った方が効く。少しだけ恐怖を与えつつ、俺だけはわかってあげる、ってするのがいい。お前は普通とは違うんだって恐怖を間接的に伝える。そうすれば、俺以外に話しぶりだろ? ワンコになんて教えてやるかよ。

『…うん。わかった。』

少し悩んだみたいで黙ってたが、仕方なく納得したみたいだ。それでいいんだよ。

「じゃあ、この話はおしまい! さあ、寝た寝たあ。」

それだけ言うと、セフィーの顔を確認せずに通信を切った。しんと部屋が静かになった。

『…ザー…相棒、位置に着いたぞ。』

せっかく静かだったのに、嫌な雑音まじりで別の通信が入った。まあ、この音が嫌だと思うのはワンコの方だから、文句は言わないでおいてやろう。

可哀相にな。そう思うと、自然と口が緩んだ。嫌味ったらしい顔だ
と思うよ。自分で。

第一五九話 突然の終わり 一表一

「この作戦はお前らだけか？」

襲撃してくる姿を見たのは車三台。それ以上に追撃がないとは限らない。

『さあな。』

閃光を受けた両目を閉じたまま、唸るように答えた。まあ、首を縦に振られても信用ならないんだがな。

五階上にいる社長を避難させるためにも、外にいる三台目をなんとかして、こっちに目を向けさせたい。潰せればそれでも構わない。その方法を考えかねている。五階上にはこの階と同じく、車両の出入りが可能な通路がある。入る前に確認した。

三台目は今、外で停止している。ビルの外。この階と五階との中間位の高さで、ビル自体からは三十メートル程離れた位置。動きを見せない。

突入班が捕まっているのは検討がついてるんだろう。通信機を見つけたから、返信がなければ察しがつく。

冷静を保っているが、正直、すぐに社長のところに向かおうかとも思った。ここですこし口を割らせようとしても、情報を得られるとは思えなかった。それでも、少しでも繋がればと思っていた。案の定、無駄足だったわけだ。

三台目に注意は払い続けている。上の連中とも通信もし続けている。いざ上に乗り込みに行かれても、五階上とはいえ、すぐに駆けつけられるようにしている。

正直、利口な手段じゃない。というか、こんな状況になるのはかなり奇妙だ。敵側の動きが変だ。一台残して襲撃してくる理由はわからなくもないが、その後の対応が変だ。突入班との通信は行っているはずなのだから、社長の姿が見つからない事をすぐに伝えれば、他の階を探すなり、外の奴らにもできることがあるはずだ。

考え込んでいたが、捕まえた連中からの通信機は奪いにとってあるのだし、さっさと社長たちに合流しようと、階段を目の前にした時だった。

外からの光がより強くなった。即座に身構える。社長たちは階段の側に隠れている。大丈夫。迎え撃つ。

『残念だったな。』

ゲイルがかすれた声で言い捨てた。気にしている場合じゃない。

だが、予想した光景にはならなかった。光は今度は弱くなっていった。遂には無くなった。

どういう事かわからず、警戒しながら入り口に近づいて行く。下を見ると、ガスの一部が黄色く光っている。かと思うと、今度は赤黒い光と爆音が届いた。車の姿はない。

まさか、落ちたのか？なんにもしちゃいないのに。少しでも状況がわかればと、周囲を見渡してた時だ。一瞬視界の隅に光が見えた。

何があるのかと、探したが、なんの姿も見えない。気のせいか。

『先輩！』

バンが呼ぶ。焦りが聞こえた。すぐに振り返ると、意図する事がわかった。

柱にくくりつけたゲイルが口から泡を出していた。全身が痙攣し、目も限界まで見開かれ、血管が浮き出て、顔が真っ赤だ。痙攣はすぐに収まった。ただ、襲撃犯はこれで全滅した。

第一六〇話 騒音 一裏一

けたたましい音が鳴り響く。いや、鳴りつづける。耳を押さえ続けている。ほとんど意味がない。本当にこの身体が憎くて仕方なかった。

確実な侵入経路として、相棒が提案したのは電車だった。目的のビルには電車が止まる駅がある。ビルとビルを繋ぐ電車に乗れば、乗っている間に勝手に運んでくれる。

ただし、どんな駅であろうと、この姿の俺を客として扱う場所はない。普通でないから、普通には乗れない。でなければ、こんなにも苦しむ必要はないだろう。

まさか、電車の上に乗ることになるとは。乗り心地は良くはないが、落ちないよう捕まっているのはそれほど難しいはなしではない。負の要素は音。これに限る。

相棒に反論したかったが、こうして一つ前の駅まで来れてしまっただけは何も言えない。

発車を告げる高い音が消える前に、車体が揺れた。次の駅だ。音から解放感とともに、複雑な気持ちが沸き起こった。いや、後者は元々あったが、嫌悪感で見えなくなっていただけだ。ここまで来てまだ腹を括れていないと思うとなさけない。

ただ会いにいく。それだけなんだ。命を狙いにいく訳でもない。情報を絞り出すだけだ。鈍感なあいつが俺だと気づくはずがない。気づかれたら、奪わなければならない。

何を心配しているんだ、俺は。気づくはずがない。どんなに察しのいい人間だとしても、ここまで原型を留めていないものをどう理解する。わかってもらえるはずがない。

そう考えると、冷やかな笑みが零れているのに気がついた。

電車は徐々に速度を下げていく。もうすぐ着く。ビル内部にある駅の停止位置の真上にダクトがある。大きさは俺が悠々通れる程の大きさだ。そこから侵入する。エレベータの通路まで進み、後は目的の階まで上るそれだけだ。

上り切ってしまったえば、監視を抜けて部屋に侵入する。ただの監視カメラではないらしい。詳しくは行けばわかると言っていた。大体想像がつく。無人機だろう。一定のコースを自動で回る機械、いや、兵器といった方が正しいだろうか。相棒が手を回してくれる。監視カメラより厄介らしいが、何度かした経験だ。問題ない。

それをかい潜ればキースがいる部屋。情報を得て、帰りはただ逃げればいい。これだけだ。手掛かりが掴めればいい。それだけ心配すればいい。

電車が完全に停止した。入り口もすぐそこに確認した。

第一六一話 絵 一 狭間一

今日は珍しく外がにぎやかだった。珍しくっていつても、まだ三日しかここにいないんだけど。

車を通る音はここにいる間一度か二度しか聞こえなかった。車の音自体がそんなに大きくないから、かなり近づかないと聞こえない。静かでいいけど、せつかく外の世界にいるのに、少しさみしいようにも思った。

珍しいな、と思って外を見たとき、隣のビルが一瞬光った。白い光。遠くからみたけど、あんなに光がもれるんだから、部屋にあるような明かりなんかより、すごく強い光だと思う。

あと、なんの音かわからないのも聞こえた。大きな音。爆発したような感じだったけど、なんだろう？ 気になって外を見たけど、どこで何があったのかわからなかった。光った場所を見たけど、もう暗くてわからない。だから、諦めた。

さっさと寝なよお、って言われても、まだ眠れなかった。ベットに横になって、何度か姿勢を変えてみたけどダメ。どうしても寝付けなかった。

今日の事を思い出した。朝も遅かったんだっけ。テレビで星天祭のこととしてた。私知ってたのと全然違ってた。結局、狼さんは今日も出かけてしまった。私が来るまでは毎日いないなんてことはなかったらしいから、私が来た四日前からいつも危ない目にあってるんだ。

四日。もう四日も経つんだ。少しは外の世界に馴染めたのかな。ただ、無理に連れ出してもらったんだから、街に気軽に出ていけないのは少し残念だけど、そんなのはいつか見れる。今、ここにいる方が私はいい。

そういえば、狼さんは絵を描いてたんだっけ。できたのかな？あの歌姫さんの絵。ベットから起き上がり、ドアに近づいていった。見に行こう。狼さんには勝手に入って悪いけど、思い出したら見に行きたくなった。居ても立ってもいられない、って言うのはこういう事なんだと思う。もう外からの音は聞こえなくなった、静かな廊下を進んでいった。エレベータに乗って一つ下の階に降りていく。ホコリとクモの巣だらけの廊下。それでも、上の部屋より暖かく感じた。

アトリエに入った。昨日と一緒にカギは閉まってなかった。油の匂いが鼻に入ってくる。この匂い、好きかもしれない。ここで初めて嗅いだ匂いだけど。

痛んだ机の上にキャンバスが置かれていた。歌姫さんの絵だ。完成してるんだろうか。私にはそういうのはわからないけど、やっぱり笑ってるように思えた。狼さんは絶対にそう言わないと思うけど、私にはやっぱりそう感じた。

少し、この絵を眺めていくことにした。

第一六二話 懐かしい声 一裏一（前書き）

二週毎に一度3話投稿だったんですが、先週は滞ってしまって申し訳ありませんでした。また、今回からこのペースで続けていかせていただきたいと思います。もしよければお付き合い下さい。

第一六二話 懐かしい声 一裏一

エレベーターが行き交う豎穴は電車の上にいるよりはまだマシだった。ただし、今度は別の障害が生じている。とはいってもこちらも想定内なんだが。

鉄の箱が上下に動き続ける中、上へと上っていかなければならない。かすりでもすれば肉をえぐられる。それだけの威力がある。幸い、通過する頻度は多くない上、ここには監視装置の類はない。

音で上がってくる気配がないかを確認し、体を大きくしならせながら上へ上へ飛び移って行く。脳に響く振動を感じれば、上る場所を移動し、また上り続ける。かなり高さがあるが、気が抜けないため、余計な事を考えずにすんだ。ただ、変わらない豎穴の壁を見ていると、自分がどこまで上っているのか、本当に上っているのかさえ危うくなってくる。それだけ先が見えないのだ。

「後何階だ？」

『後八階だよ。』

さらっと言い放つ。息が切れたりはないものの、中々苦勞しているというのに。下から響いてくる振動に合わせて横に移動し、直ぐさま上へと上って行く。

後二階。ここまで来て相棒がやっと監視について言及し始めた。

『だいたいわかってると思うけど、このフロアには自律監視機械が徘徊してるんだあ。しかも面倒な事にい、他と繋がってないネット

ワークなんだよねえ。』

つまり、援護が全くできないという事だろうか。てっきり相棒が全
て済ますと思っていた分、少し動揺した。

『それでねえ、全部任せようかなあ、って思ったんだけどお、いい
もの見つけてね。一分だけ、時間が取れそうなんだあ。』

いいもの？何だ、一体。いや、それよりも完全に放置しようとして
いたのが問題だったんだが。

「重要な侵入なのに、随分行き当たりばったりだな。」

目的の階につき、皮肉を込めて言ったんだが、軽く受け流された。

『当日考えたにしてはマシな方だと思うけどお？それより、いい
？俺が合図したらあ、一分で部屋まで乗り込んでよお？音とか気に
しないでいいからあ。』

「なんだ？何する気なんだ？」

ふふん、と鼻で笑った。慣れたから特に何も思わなかった。

『動かない不良品はさっさと捨てましょう、って事だよ。さあ、も
ういいよお。』

唐突に来るかもしれないと、エレベータの扉に手をかけておいてよ
かった。と、言うより、隙間からもれたけたたましい高音のサイレ
ンがなったから、手をかけたんだが。

扉を直ぐさま開けると、サイレンだけが鳴り響いている。誰も何もいない。考える暇もなく、目的の部屋へと急いだ。全く、今回のプランは今までで最低だ。

重厚な木の扉を蹴り開けると、広い部屋の奥、窓と巨大な机の間にいる、こちらに背を向ける男に刀を向けた。

「ゆっくりこっちを向け。」

振り返ったその顔は、やはり懐かしく思えた。

『遅かったな、シン。』

ゆっくりと口が開かれ、聞こえた声は五年前と変わらなかった。

第一六三話 類似 一狭間一

自律監視機械はどうもあの会社が独自に開発したもんらしかった。ネットワークの構成が全然違うんだ。面倒臭いからもう考えんのかやになった。探したらいいもんあったしねえ。

試作機かなんか知らないけど、もう使わないんならさっさと片付けなとねえ。

冷たいビールを音をたてて飲んだ。いやあ、一仕事の後のビールはいいねえ。

まだ動くみたいだったから、徘徊中のその他大勢が寄って来るようにサイレンを鳴らしてやった。案の定、大半の奴が集まったんだあ。うまくいった、うまくいった。不良品の誤作動程度に片付けられるさ。

後はあいつが話を聞き出せばいい。うまく聞き出してちょうだいよ？ 水差さないよう通信切つとくから。

まだ早いけどそろそろ寝ようかなあ。なんかコロコロ感情変えたせいか、すげー疲れた。後はなんとかなるだろうしねえ。

イスから立ち上がって、数歩先のベットに飛び込んだ。バネの反発で少し体が浮いたのが、得に意味もないけど楽しい。ベット使う人なら絶対賛同してくれるだろ？…誰に聞いてんだか。

寝るつもりだが、テレビを点ける。俺の場合は寝るつもりだから、だけどな。静か過ぎると寝れねんだよお。なんでかねえ。

ニュース番組が映ったみたいだ。かたっ苦しい服着たオッサンが原稿読んでる。字幕には“新社長就任” ってあるのが見えた。会見の映像に移るんだそうだ。

モニタの真ん中にいる奴は随分若かった。俺とそこまで変わらないんじゃないか？若くて社長だなんていい身分だねえ、なんて思いながら、まぶたが重くなるのを感じてた。

“ドサッ”

急いで起き上がろうとしてベットからずり落ちた。腕に感じた痛みを無視しながら画面に近づいた。若い男の胸には見慣れたバッジが光っていた。

ウロボロス。蛇が自分の尾を噛んでわっかになってるダッサイの。あのハッキリしない優男以外つける奴なんていないと思ってた。意味のよくわからない任務を出してくるあの男さ。だけど、モニタの向こうにいる男の胸にはそれが光っていた。

今日はなんていい日なんだろうか。眠気なんて吹っ飛んだ。ああ、分かっている。同一人物だなんて決まってる。付ける奴が優男だけだなんて都合がいい考えだ。だけど、こんなにも繋がりが見えそうになった事はなかった。なぜか怪しい奴の名前を思いつく女なんていなかった。顔を見せない奴と同じバッジを付けた男なんて現れなかった。

若社長の名前は、アーサーか。どこの会社かと思えばなんだ、セフィーがいたとこか。あの会社当たりだったのか。そこまで被ってるだなんて、なんかの罠かねえ。

くくくつ、と思わず笑いがもれた。

罨？いいねえ。もしそうなら当たり近づいてるって事じゃないか？そこから辿ればいいんだからねえ。ヤバイ。楽しくなってきた。口がにやけてしかたない。

それじゃあ、遊ぶとしますかあ。

第一六四話 裏切りの張本人 一裏一

『どうした？久しぶりの再会、俺は心待ちにしてたんだぞ？仮面くらいはずすたらどうだ？』

親しげな声、口調、月日を感じさせるものだったが、嬉しかった。こんな形でも友と会える事がこんなにも嬉しいとは思わなかった。だが、それはあまりにも奇な言葉だった。音は耳にはいつて来るものの、内容は頭に全く入ってこない。一拍おいてやっと名を呼ばれていた事に違和感を覚えた。

「なっ―」

言葉を忘れたかのように、口から出るのはただ息ばかり。頭の中でさえ全く働かない。

『落ち着けよ。俺は全部わかってる。今のお前の姿がどうなっているかだって。』

相手の弱みを握ると、嫌味な笑みを浮かべながら、その弱みをえぐる様はやはり昔のそれだった。冗談でされていた昔ならば軽く受け流せていたが、今は完全に首をつかまれているような状態だ。

『黒い獣だろ？』

「うるさい。」

なんとか頭を動かさなければ。少しでも時間を稼ぎたかった。構え

た刀の刃を喉元へと近づいた。触れる寸前であるにも関わらず、表情一つ変えない。

わかる事を冷静に考えろ。ただそう言いつづけたが、冷静になどなれるはずがなかった。ありえない。つまり、今の状況から言えるのは――

『やっとわかったか？俺は、お前の、人生を、無茶苦茶にした、張本、人、さ。』

一つ一つの言葉を噛み締めるように強く言い放った。あまりに唐突。あまりにも予想外、いや、どこかで考えていたのかもしれない。だが、あまりにも望んでいなかった事だ。

俺があまりの事に呆けてしまっているのを見かねて、仮面越しに俺の表情を読み取るように目を細めながらキースは続けた。

『何だよ？俺にこんなこと言わせるためにここに着たのか？』

得意げな笑いを見せてくる。

「…嘘だ。」

その一言を押し出すので精一杯だった。押し出したその声は、かすれて消えてしまいそうな、弱々しい音でしかなかった。その音をぴしゃりと払い落とされた。

『本当さ。だから俺はここにいて、お前はそんな姿なんだよ。』

どうしてそれが理由になるのか、よくはわからなかったが、キース

の声は自信に満ちていた。キースはゆっくりと俺に近づいてくる。一步、また一步。気づけば目の前にいる。手を鉄の仮面へと伸ばしてきた。俺はどうしたらいいか考えるだけで精一杯だった。だから、仮面が外されるのをただ見ているだけだった。

『昔もカッコよかったけど、今もいい感じじゃないか。自信持っていないぜ。人前に出ればモテモテだろう。』

「どうしてだ？」

やはりキースは俺のこの姿を知っていた。ならば知りたい。なぜお前が知っているのか？張本人とは…どういう事なのか？

『どうして、か。時間もかからないだろうし、全部話してやるよ。楽にしろよ。』

巨大な机の前に置かれていた黒いソファーに腰掛けて、キースは話を始めた

第一六五話 終わっていたこと 一裏一（前書き）

不定期で申し訳ありません。今後もまた不定期になることが多いかも知れません。読んでいただいている方には申し訳ないです。自分としても特に書きたい部分に差し掛かってきましたので、できるだけ早く進めていききたいと思います。

第一六五話 終わっていたこと 一裏一

結局、促されたまま、刀を鞘に戻し、キースの向かいのソファに腰を下ろした。それを見届けてから、あいつは口を開き始めた。

『俺ってさ、昔から何やっても結構出来る奴でさ。しかも人が良かったからいつでも人気があったんだわ。やりたい事やってきて、全部上手くいってて楽しかった。』

「おい。」

思わず呆れた声が漏れた。

『悪い悪い。別に自慢とかじゃねえんだ。ホントの話。』

自慢話をしていたから呆れたわけじゃない。相変わらず変わらないところに呆れたんだ。そして、こ憎たらしい話をしてムカつかないのが昔から不思議だ。

『大学でもそうだった。友人にも恵まれたほうだし、サークルにバイトに忙しかったが上手くいった。充実してた。』

「…。」

そこで、言葉を切った。無言で昔を思い出すように遠い目をしているキースが次の言葉を言うのを待った。短い間だったが、先ほどとは違う雰囲気を持って再開した。

『結局、一番欲しかったものは得られなかった。』

明るさは元々なかったかのように消し飛んでいた。

『お前にも一度話したか。あいつの事が好きだったこと。お前よりも前から好きだった。言葉にすればよかったんだ。一度でも。そうやって伝えればよかった。だが、俺はそれをしなかった。その時の居心地のいい関係を壊すのが怖かった。』

そこから狂っていったのか？声にしようとしたが、すぐにキースが答えをいった。

『お前がどう仕様も無い奴だったら、どれだけ楽だったろうな。俺が追い払うか、あいつが捨てるか、そんなところで終わってたろうに。俺の方がお前を気に入っちゃったからな。余計にたちが悪かった。お前らが仲良くしてる姿を見るたびに、どうしようもないものが溜まっていった。プロポーズした、結婚した、子どもができた。素直に喜んでやりたいのに、底には黒いものが溜まっていくんだ。この世界のようにな。』

何も言えなかった。そばにいた親友がこんな感情を抱いていたことに、まるで気づけなかった。

『“一人渡してくれ。後処理は我々がする。代わりに地位と名誉をやる。” そんな誘いが持ちかけられた。相手がお前さえいなければ、なんて考えがなかったとは言わない。だけど、その言葉を聞いたとき、黒いものが溢れ出てきたんだ。怪しい話に乗った、というより、その言葉が契機だった。』

「それだけか？」

平静を装って、言葉にした。女。それが理由だと語る友。もう自分がどう考えているかわからなくなった。憎んでいるのか、同情しているのか、軽蔑しているのか、何も感じていないのか。

『ああ。sonだけさ。安心しろよ。お前がいなくなっても妻は幸せだし、子どもだってちゃんと愛してる。まあ、代わりにちよつとした手伝いとか続けさせられてるがな。』

立ち上がりざまに鞘に閉まっておいた刀を抜き、喉元に再度突き付けた。

『なんだ？ 斬るか？』

きつと睨みつけ、憎んでいるのだと自分に言い聞かせながら、重々しく言葉をひねり出した。

「肝心な話を話していない。この身体を造った奴は誰だ？ 誰がその技術を持ってる？」

『ああ。悪かった。そういや言ってないな。安心しろよ。お前もう会ってるぞ。』

思わず身体が反応し、少し震えた。既に会っている？

「どういう事だ？」

さっきまでの表情と一変し、口の端を釣り上げ、楽しんでいるかのように続けた。

『彼の持ち物だった女の子は元気かい？』

「まさか。」

息を呑んだ。喉が鳴る音が不自然なくらい大きく聞こえた。

『復讐の半分はもう終わってたわけ。』

第一六六話 決めるべきこと 一裏一（前書き）

改めて見ると二ヶ月も止まっていたようですね。次は一月以内に投稿致します。また読んで頂けると幸いです。

第一六六話 決めるべきこと 一裏一

すでに復讐を遂げていた。キースはそう告げた。彼女とあった四日前、その日に始末したあの年老いた男。あの男が俺の人生を変えた人間の一人だと。衝撃だった。だが、不思議とそれ以上何も感じなかった。不思議でもないのかも知れない。そうも考えた。ここまでのうのうと生きている者の名が挙げられていれば、それこそ憎悪やらなんやらがふつふつと漏れていただろう。すでに死んでいる、その上俺自身が手をかけていた。

「信用していいのか？」

だが、いくら親友の言葉とはいえ、それが真実だと鵜呑みにはできない。確かに、あの男の財力はかなりのものであり、候補の一つとしてはあった。

『安心しろ。本当の事さ。まあ、ちゃんとした証拠はないが、な。』

言葉のみを信じろ、そうしか言わない。言えないのだろうか。しかし、知らなければならぬことがある。それが証拠にもなるはずであるのに。

「：俺の身体をこんな風にした技術はどうなった？」

少し声が上がりがけたが、ごまかしながら言い切った。俺は元に戻る事が目的なのだ。期待した返事はあまりにあっさりとしたものだった。

『なくなった。』

「なくなった？ そんな事ですむわけー」

俺の言葉を遮ってキースは答える。声はずいぶん冷たいものとなっている。口調は変わらず親しげなものだが、少し恐ろしさを受けた。

『表現なんてなんでもいいさ。消えた。返った。戻った。どんな答え方をしたところで、もう手の届かない物になったよ。』

「手の届かないとは、つまり、どこかにはあるんだな？」

キースの言い方がいまいち飲み込めないが、元の持ち主の持っていた技術は奪われてしまったということなのだと思えた。今どこにあるのか、それがわかればどこにだっていく。キースは少し呆れてようにして返した。何度もいつてるだろう、そんな顔だ。声にまで疲れが見られる。

『あるべき場所。』

「いい加減にしてくれ。ハッキリ言ってくれ。誰が持っていたのか。今どこにあるのか？」

ため息を漏らしながら、ソファから立ち上がって部屋を歩き始めた。いつの間にか突き立てていた刀は再び鞘に閉まっていた。

『真面目に答えてるよ。シンだってわかってるんだろ？ そんな身体造れる技術は今の世の中にあるものとは格が違うくらい。人類の進歩の産物、なんてまともなものとは違うんだ。普通じゃない。言いたいことわかるか？ 持ち主がいなくなって放置されていいものじゃない。』

ガラス張りになった壁を背にこちらを向く。後ろの窓には緑がかった黒いキャンバスにいくつもの光の点が輝いている。キースが現実離れた話をしているせい、窓の向こうに見える景色のせいなのか、妙に神秘的に感じた。俺もソファから立ち上がった。

「なんだ？ 未来から持ち込まれたものの、だなんて言わないだろうな？」

皮肉が言いたかったわけではない。だが、要領を得ない会話に少し嫌気がさしたんだ。クククツ、と俺が言った言葉に反応を示したが、別段面白かったわけではないことくらいは分かっている。

『誰かが持つてきたものだ、つてのは正しい。誰か知らないけどな。お前が殺った：おい、そんな顔すんなよ。あの社長はそれを試した。で、死んだから、あの技術はもうない。』

これ以上は情報がないということなのだろうか。これでは結局振り出しではないか。復讐する相手は分かったが…。

『空ってなんだろうな。』

少しうつむいていたためか、キースがいつ窓のほうを向いたのか気がつかなかった。月を眺めているようだ。当の月は薄いエメラルド色の光をまといっている。

「あ？」

間拔けな声が出た。突飛な質問をされれば当然だろう。質問の内容すら忘れたくらいだ。

『空だよ。ドームの中のあの青い天井。』

ドームの天井のことか。だが、それが言いたいどうしたのか。

「話をそらー」

『星は？ドームの夜空に光あれ。太陽もだ。ドームの中を照らして
る光源。』

またしても、俺の返事を遮り、訳の分からない質問をしてくる。一体なんだ。突然脈絡のない話を持ち掛けてきた。かといって気が狂ってしまったようには見えない。むしろ不自然な程力がいっている。無邪気に子どもが尋ねてくるような事を、だ。

『俺が言えるのはそんな所だ。』

月を見ていたキースは、こちらに向き変えると、一歩ずつ近づいていく。

『さっ、後はお前がどうするか、だ。』

手の平をこちらに向け、抵抗する意志がない、と

『見つかった以上、無駄に足掻くのは好きじゃない。さっさと殺つてくれ。』

俺の目を見据えたまま、待っている。俺が引き金を引くか、刃を振り下ろすのを。“早く殺れよ。望んでたんだろ？”そう目から訴えられている。

刀に手を伸ばし、掴む。少し震えているのがわかる。理由は簡単だ。迷っているんだ。ただ、手掛かりが掴めればいい。それだけだった。犯人を見つけ、判決を下す事など、まだ期待していなかった。犯人が親友だと考えた事などない。

刀を抜き、キースを前に構える。少しでも震えを抑えるために、強く握る。

「…俺たちは、元に戻れないのか？」

目からの訴えは消えた。何を伝えようとしているのか、よくわからないが、疑問の色をしている。

『戻れない。』

自然と溜息が漏れた。

第一六七話 自分で決めたこと 一裏一

キースー

シンは動揺していることを必死に隠そうとしていたが、手に取るように分かった。顔はずいぶん変わったが、分かりやすいところは本当に相変わらずだ。気に入ってる点の一つなんだがな。目の前で刀を抜き、構えているものの、その刃を俺に振り下ろしてくれはしないだろう。俺自身中途半端だったのは言うまでもない。人に殺されるような演技なんてした事ない。そもそも、そんなこととしてうまくいった奴がどれだけいるか…。

案の定、力無く刀を下げる。

「殺さないのか？」

殺してくれないのか？

『もうないのなら、お前を斬っても無意味だ。違うか？』

目はふせたまま、そう告げる。そういう考えになるのか、お前は。そんなところだろうとは思ったが。

「憎んできた相手だろ？ 人生を台なしにした。十分な理由だと思うが？」

答えは予想できていた。だからと言って、聞かない訳にもいかない。俺はそんな聞き分けのいい人間じゃない。

『必要のない殺しはしない。』

「なんだよそれ。プロの殺し屋の心意気なんかか？」

『ポリシーさ。』

笑いが漏れる。懐かしい。何度か昔みたいに馬鹿言い合ってる。それが懐かしくて、笑いが漏れる。もう戻れないんだ。あの時から望んでいた事なのに。

『それに、お前を殺したら、二人はまた夫であり父である男を失うことになる。そんなこと、俺が出来るわけないだろ。』

ちゃんと頭は回っているようだ。それならいいさ。それだけで俺は満足だ。下げた刀を鞘に戻し、床に落とした仮面を拾い上げ、面影の残る顔に被せる。きっと俺しか感じないだろうが。

「帰るのか？」

『ああ、もう用は済んだ。』

「そうか。気をつけて帰れよ。外のは止めといてやるから。」

友人が近くに着たから寄り、近況を話し合い、昔話を引っ張り出し、見送る。そんな当然の関係のように錯覚してしまう。別にいいか、今は。

『助かるよ。』

緩んだ声が返ってきた。シンも同じらしい。気持ち少し高まった。

「じゃあな。」

振り返る背に向けて投げた。返事の代わりに片手を上げ、別れの挨拶を返してくれた。

扉が閉まるまで一時も目を反らさず見送った。閉まる音が通り過ぎても何もない扉を見つづけた。溜息を漏らし、区切りを付ける。まだ使い慣れてはいないデスクについた。部屋の隅にあるコーヒーマーカ―が目に止まり、ああ、コーヒ―ぐらい出してやればよかったと、今更ながら後悔した。また溜息が漏れた。やれやれ、俺はいつのまにそんなに老け込んだんだ？自分で言った事であるが、傷ついた。

“コンコンコン”

今度の客は礼儀正しいな。いや、これが普通か。少し疲れたが、察されないように声を張って扉の向こうに呼びかけた。

「入ってくれ。」

すぐに扉の向こうにいる人物は扉を開け、顔を合わせたくはない人物が中に足を進めてきた。とは言え、誰かは大体検討がついていた。表情をほとんど変えず、生氣を感じ無い男。気味が悪くて好きにならない。なる必要もないことが唯一の救いだ。

『感動の再会は楽しめましたか？』

真顔で言う言葉ではない。嫌味な顔でもしてくれたらまだ可愛げがあるのにな。扉から二、三步歩みを進めたところで立ち止まった。背筋がピンと張り、表情からは感情を感じない。

「そういう様に指示されたのか？でなけりゃ、思ってもないこと聞くんじゃねえよ。」

『失礼いたしました。』

謝罪の言葉と共に、腰を折る。その態度もまた、俺の調子を狂わせる。それでも俺はすべきことをするために、デスクの引き出しを開ける。手探りでその中から必要なものを探す。

「お前がここに來たってことは、そこまで來てるのか。案外早かったな。もう少しかかるもんだと思っていたが。」

手に固く冷たい鉄の感触を感じた。鉄の塊を引き寄せ、手に握る。

『はい。もうご理解いただけていると思いますが、主人は――』

「言わなくてもいいさ。お前らの考えどおりにしてやるか。」

今日は何度も言葉を遮ってるな。これでも人の話は最後までよく聞くほうなんだが。あまり気分のいいものじゃないな。右手につかんだ鉄の塊を眉間に構える。レバーを下ろし、引き金に指を添える。

『ご自分で逝かれても同じことです。』

動揺も何も無い。この部屋に入ってから、眉一つ変化ないであろうその顔。最後に見る顔がこれだなんて、俺は不幸だな。いや、自業自得か。

「主人に伝えとけ、ヤジ。死ぬ時くらい自分で決めてやった、と。」

シン。悪いな。俺は先に舞台を下りる。本当はお前の手で下ろしてもらいたかったが、やっぱり無理だったな。でも、安心したよ。お前のままでいてくれて。あの二人なら大丈夫さ。お前が思ってるよりも強い女たちだ。

息を吸い、目を閉じ、そして、引き金に添えた指に力を込めた。

第一六八話 喪失 一裏一

この結果を相棒は許さないだろう。それでもしかたない。だからといって戻せるものではないのだから。電車の轟音に耐えながら、今後について考えた。身近なことから。戻れば何を言われるだろうか。彼女にも聞かれるだろう。どう答えればいいのか。友は敵だった。本当にそう言うのか？

いや、止めよう。考えをそらすのは。今後について考えなければ。どう、生きていくか、だ。キースはもうあの技術—どう呼べばいいかわからず、ずっとそう呼んできたが—は手の届かない所にある、と言っていた。あの言い方からすると、俺のみに当てはまる、というわけではないようだ。誰であろうと、もう触れられない、そういう言い方だった。ならば、もう追う必要はないのではないか？昔の生活に未練がない、という嘘だが、戻りたいわけでもない。もうわかっている。戻れた所で馴染めるはずがないのだ。

電車の勢いが落ちた。乗り込んだ駅に着いたようだ。近くの廃墟にバイクを置いてある。目と鼻の先だ。

一度眠ろう。考えるのは明日でも構わない。

『…お疲れえ〜。』

唐突に無線が入った。気の抜けた声が届く。相棒だ。どうやら寝ていたようだ。

「ああ、よくわかったな。」

もう寝ているだろうと、報告は明日にするつもりだった。だからもう無線を使わないだろうと考えていた。つまり、俺は相棒にまだ終わった事を告げていなかった。

なにか嫌な予感がする。

『ん？だって流れてるよお？』

欠伸を噛み殺しながらなんとか言い切る。何が流れているんだ？自然と歩みが速くなっていく。唾を飲み込む音が妙に大きく聞こえた。

「何の話だ？」

少し声を張り上げてしまった。その声に、こちらが理解していないのを汲み取ったのか、眠気を帯びた声に少し力が入った。

『なんだ、ワンコがやったんじゃないのお？ちよっと関心したのに。』

関心した、だなんて言葉を聞いた状況で、今まで一度として皮肉以外に思えた事はなかった。いつの間にか、走り出していた。少しでも早く帰りたいかった。何が起こったのか。

『だからさあ、お亡くなり的事さあ。』

びたり、と足が進む事を止めた。反動で上半身が前に傾いたが、なんとか立て直した。

「死んだ？どうして？」

キースが死んだ。そういわれて、ただただ聞く事しかできなかった。月明かりという微かな光に浮かび上がる廊下に声が響いた。どうやってここまでできたのか覚えていない。

『あ。なんだ、自殺なのかあ。ホントにワンコじゃないんだあ。』

自殺？キースが？俺と会った後にか？死にたがっていた。確かにそうとしか取れない態度をしていたが……。だが、しかし……。

まともに思考などできなかった。最近こんなことばかりだ。何も考えなくなかった。無線の声はまだ何か聞こえていたが、生返事を返して聞き流した。いつの間にかバイクに跨がり、ハンドルを握っていた。かと思えばもう地下の蒼い光が視界を支配していた。バイクを下り、部屋に着けば、モニターにはキースが死んだという知らせで塞がれていた。

それを見ても、相棒の悪い癖だと、自分をごまかしていた。

飲み込めたのは一度眠りについてからだだった。

第一六九話 舞台裏三

「そうか。自ら命を絶ったか。」

月明かりが差す薄暗い私室にヤジを招き、報告をもらった。キースがどう息を引き取ったのか、どうしても知りたかったのだ。肘掛に乗せた腕で首を支えた。笑いが生まれ、腕が振るえる。小さな波が、事実を飲み込む度に、ついに声に出るまでになった。

「望んだ通りにはいかなかったようだな。」

『彼は本当にあの男に殺されたかったのでしょうか？』

笑いが収まりだした頃、ヤジが私に問いかけてきた。ヤジはキースという男についてあまり認識がないのだから仕方ないだろう。態勢を一度正し、話をする姿勢をとった。

「彼、いや、キースという男は他人を一番に考える男だった。自分を犠牲にしても、家族や友人の為に生きる。自己犠牲の精神を持っていた。そんな人間が、大切な物を守るために親友を裏切ったんだ。自分を許せるはずがない。裏切り者と罵られ、憎まれた人間に幕を引いてもらう。身勝手と思うかも知れないが、彼にはそれ以外に自分を許すことが出来なかったんだろう。結局、不慣れな役回りではそう上手くはいかなかった。失敗する事も考慮していたのだろう。旧式のリボルバーでこめかみを撃ち抜いた。壮大な人生じゃないか。涙を誘うかもしれないね。」

涙、なんて出るはずもない。出てくるのは、乾いた笑いだけだ。大切な物を守るために、別の大切な物を捨てた。結局、自分にとって

どちらが重要なのか、それを選択したのだ。肝心なときに自らを犠牲に出来なかったのだ。そこまでの人間だということではない。

『私にはわかりません。そういうものなのでしょう？』

「そういうものさ。」

ヤジはどういう表情をしているのかわからないらしい。仕方ないか。忘れてしまっているのだから。

『そうなのですか。もう一人、ジェイク・アーベンは条件に当てはまる男でしたか。』

ヤジの言葉で思い出した。そうだった。私の方の話をしていなかった。悪いことをしてしまった。数時間前にあったことが、遠い昔にあったことのように記憶の端にしまい込んでいた。

「期待通りだ。もう少し動揺しているものかと思ったが、彼女を失ったことでいい具合に引き締まっているようだった。まあ、相手は私を本気で狙っていたわけでもないのだから、底を見ることが出来なかったのが残念だったがな。」

とはいえ、次の段階には、やはり計画通りに進める必要がある。失敗する可能性は少しでも小さいほうがいい。

「以降も計画通りに行うとしよう。」

この次も私たちの計画の重要なステップになる。ヤジのみに任せることになるが、期待通りに働いてくれるだろう。

「次も重要な段階だ。頼むぞ、ヤジ。」

感情のない両目を見つめながら声を落としつつ念を押した。

『はい。アーサー様。』

一礼を返し、彼は背を向け、部屋を出て行った。

第一七〇話 穏やかな朝

目覚ましがなる五分前。いつも通り目が覚めた。身を起こして、片手を伸ばすと冷たい箱に触れた。手で掴める位の大きさのそれに指を這わせてスイッチを切った。不思議と目覚ましをかけないと自分では起きられないんだ。変わってるよね。

窓から見える外は綺麗な青空だった。雲一つない快晴。ドームの中は天気が管理されてて次の日の天気は間違はなく住んでるみんなに伝えられる。だから、快晴だったのも知ってたんだけど、ただの映像だけど、見ていて気持ちいい。

私たちがドームに初めて着た日、ドームの中と外は別の世界みたいだ、って思った。外は月が明るい間は、眩しくて向こうの都市が見えない。ビルが林みたいに建ち並んで、冷たい印象を受ける、同じような色しかない。窓から見る風景は少し怖かった。月が暗くなると世界は少し穏やかになる。淡い緑色の光に照らされて、冷たい色が少し和らぐんだ。それでも、内の世界とは全然違う。空は見るだけで暖かく感じる。何度も言うけど、ただの映像でしかないんだけどね。一面青で染まっていたり、灰色で覆われている時、夕方は朱と紺が入り交じり、夜は黒に近い紺に淡い緑の月や星が輝いている。昼夜を照らす月以外、みんなただの映像。それでも私は空が大好きになった。ドームに住む人たちはみんなそうだと思う。

部屋から出ると、静かな廊下が続いてる。窓から光が入り、薄明るく照らされている。今日も私が一番だ。何の気無しに嬉しくなる。突き当たりにある階段を下り、リビングに目をやると、様々な色が飾り立ててある。今日はファムの誕生日だ。昨日みんなで飾りつけたんだ。ジェイク以外。そういえば、ジェイクは帰って着てる

んだろうか、と気になったけど、止めた。テーブルの上に昨日の夜にはなかった包みを見つけた。横長で私の肩幅くらいの長さがある白い包装紙で包まれた箱は片手で持つには少し重かった。何だろうか、と考えたが、箱の下に敷かれていたメモに直感とあまり差のない答えが書いてあった。

“バンからファムへ。”

一度で二つの間に答えが出た。これが何か、ジェイクは戻ってきたか。ちよつとだけ得をした気分だった。たまたま特売品を見つけたような。例えば、完全に主婦だ。

そういえば、ジェイクは今バンさんと仕事してるって言ってた事を思い出した。ということは、ジェイクが戻ってる間、バンさんに負担をかけてしまうんだろうか。

「バンさん、ありがとう。」

自然と言葉が出た。別に誰かに言った訳じゃない。ただ、そう言いたくなっただけなんだ。

朝食を作る前にシャワーを浴びた。今日は何の授業があるか、宿題はしたか、友達が風邪をこじらしてたがもう良くなったか、そんな些細な事を考えながら。おかげで、一つ忘れ物をしそうになっていた事に気がついた。後で入れておこう。

髪を乾かし終え、一度部屋に戻り制服に着替えた。時計を見ると六時半を少し回る所だった。七時を過ぎると少しずつ起きはじめる。朝食を用意するには十分時間がある。先に洗濯機にかけておこう。それから朝食を作ればいいか。

洗濯機は回しておけば、干す係に後を任せておけばいい。

「よし。」

スイッチが入ったのを確認してキッチンに向かった。廊下に出ると、そのキッチンから物音がする。さっき二階の部屋から下りてくる時は何もなかったのに。誰か起きたのか。

『おはよう。』

男性用の紺のエプロン―去年ファムたちと誕生日に買ったものだ―を身に付けたジェイクが立っていた。ついさっき朝食の準備を始めたみたいだ。包丁で切る音がリズムカルに響いてる。

「おはよう。今日はジェイクが作ってくれるんだ。」

指定席のイスに座ってジェイクの様子を見ることにした。黄色に白の水玉模様の入ったテーブルクロスの上に乗っていた包みはまだそこにあった。ファムが起きてくるまでには隠しに行かないと。包みを見ていたのに気づいたみたいで、ジェイクは自分の手元を見たまま少し声を大きくして言った。

『メモ見たか？バンからのだから、夜まで隠しといてくれ。』

「わかった。」

ついでに忘れ物もカバンにいれておこう。包みを抱え、二階へ上がった。

第一七一話 祝い事の前

「昨日の仕事は上手くいったんだね。」

あからさまに昨日までとは違う雰囲気、はっきりと私に教えてくれた。分かりやすい人だと、改めて思った。いいところだけど、せめて私にだけわかるくらいに隠せるようになって欲しい。今更遅いかな。

案の定、今口に入れたものでむせている。ガラスコップ一杯に入ったミルクを一気飲みして、どうにかなったみたい。

『やっぱりわかるか。』

ハハッ、と乾いた笑いが付いてきた。

「みんなわかるよ。」

そうか、とため息をついている。そんなに気を落とす事でもないけど、ジェイクには大きな問題なんだろう。みんなに心配をかけるわけだし、そう思うのは当然なんだけど、私たちにはその方が安心出来る。ジェイクが落ち込んでる時はちゃんと分かってあげられるんだから。

「仕事中じゃないなら、いいじゃない。」

笑ってそう言ったんだけど、そうもいかないらしい。困ったままの表情で首を横に振った。サラダに添えられたミニトマトを口に運んだ。トマト嫌いな人はすごく損してると思う。

『そんなことより、今日は大丈夫か？俺は夜まで戻れないと思うが。』

誤魔化した。顔が少しひきつっている。無理やり話を逸らしたのを気にしてるみたいだけど、それ以上何か言うつもりはなかった。気にしないので、っていてもあまり変わらないんだもの。それに、ファムの誕生日だ、っていう事の方が今は大事だしね。

「心配ないよ。今日はガンとスーエンが部活だけど、エルンとバンツが早く帰ってこれるらしいから。ファムにはカイの迎えに行ってもらって、エルンたちに家の事してもらうから。ケーキは私が取ってくる。ファムが帰ってくるまでに全部済ませる、ってことはできないじゃないけどね。仕方ないよ。」

後は、ジェイクが帰ってくるだけ。そうすれば、みんなでお祝いができる。

『だから、ちゃんと帰ってきてね。』

階段の方からうれしそうな声が届いてきた。いつもより早くファムが起きて着ていた。少し裾の長いピンク色のパジャマを着て、目を擦りながらゆっくり下りてくる。

『ああ、わかってるよ。おはよう、ファム。誕生日おめー』

「『シー！！』」

ジェイクが口を滑らしそうだったのを、私とファムが口到人差し指を添え、大きい声を出した。ジェイクは驚いた様だったが、すぐに

分かったみたいだった。

『悪い。それは、みんな集まった夜に、だったな。』

私たちの約束。お祝いの言葉は、みんな集まって言うこと。フライングはダメ。だから、私も言わない。早く夜になって欲しい。ファムの純粋で温かい笑顔が早く見たい。今日は長い一日になりそうだ、そう心から感じた。

第一七二話 登校と出勤と（前書き）

長い間停滞して申し訳ありません。今後もかなり不規則になってしまいかもしれません。

第一七二話 登校と出勤と

『ちゃんと寝たの？こんなに早くでるなんて。』

「大丈夫。最悪、社内で仮眠取るさ。今日は早く帰るんだし、その分早く行つときたいんだよ。」

犬小屋の中に戻るまっていたフランが、戸が開いた音を聞きつけ、駆け寄ってきた。行ってくる、と頭に手をのせ、一言挨拶をすると尻尾をさらに激しく降る。レインが出てくるのを見つけ、ついさっきまで向けていた瞳をあっさりとレインに向け、駆け寄った。少し切なくなる。

『まあ、それならいいけど。』

両手でフランの頭を撫で回し、同じように一言挨拶をして足早に駆け寄ってきた。

『仕事、大変なんだね。今までで一番忙しそうに思うけど、体壊さないでよ？』

冗談のように言うが、本心から心配してくれているんだろう。確かにこれまでも最も駆け回っているかも知れない。そもそも犯人を追うような行動は、俺達ボディーガードの仕事じゃない。こんな刑事まがいの行為はほとんどしたことがない。誰かをいつまで警護しろ。ざっくり言ってしまうばそれだけだった。だからこそ、ケルベロス、なんて名前も知る必要はなかった。情報部からの報告を受け、それを考慮しプランをたててきた。そこにさらに捜査を加えてるのだから、今まで以上に忙しいのは当たり前だ。

「そんな脆くねえよ。知ってるだろ？今のがいろいろ厄介なだけなんだよ。これさえ片付いたら、マシになるさ。」

明るく返すが、いつ終わるのか、と考えると性に合わないが、少し不安になる。どこにいるのか、いつ現れるのか、まるでわからないのだから。昨日も結局奴らは現れなかった。それどころか、別の人間を殺した、と今朝になって知った。すぐにでも行きたかったが、さすがに身体がもたないし、レインたちにかかる心配も大きくはしなくなかった。

昨日の襲撃犯。結局誰ひとりとして生きて捕まえられなかった。襲撃前に毒を飲んでいたらしく、約二時間後に効果が現れ、死に至る。最初から死ぬつもりだった。それ以上の情報が出ていれば情報部が報告書にまとめてくれていたはずだが、あまり期待ができると思えない。

『早く終わればいいのにね。ジェイクがやつつけばいいんでしょ？正義のヒーローみたいに。』

「それが出来れば苦労しないっての。しかもなんだよ、正義のヒーローって。」

クスクスとレインは笑う。レインにしては随分幼い言い方をするもんだ。

『みんなそう思ってるんだから。悪い奴からみんなを守る、正義のヒーローのジェイク。』

似合わないセリフを言っているせいかな、自分の言っていることに少

し笑っている。が、言い終わると、その笑いをやめ、小さく、それでも真剣な声に変わった。

『だから、無理だけはしないでね。』

「ああ。」

それだけ言って、後はわかれるまで何も話さなかった。レインから唐突に腕を組んで歩いていった。

第一七三話 決まらない方針

「そんなもん…か。」

デスクに置かれた報告書に軽く目を通したが、期待以上の情報は得られなかった。襲撃グループを送った依頼主の情報が最も欲しかったが、どうやら、会社自体が消されてしまっていたらしく、社員名簿などの情報すら、簡単には得られるような状態ではないらしい。またザイレイに頼む必要があるかも知れないな。依頼主がわからなくとも、いろいろと細工した痕跡位は残ってるかもしれないから。難しいところだが。

『おはようございます。昨日の件の報告書ツスか？』

「早いな。ああ。あんまり欲しいもんはなかったけどな。」

バンもあまり休めていないはずなのに、社に顔を出していた。俺の答えにそれほど落胆するでもなく、ただ、そうですか、とだけ口にした。バンも気になって早く来たようだ。あまり期待はしていなかったようだが。

社長を狙うべく移動中を襲わせ、成功しようが失敗しようが毒を飲ませて殺す、だなんて下衆なやり方をするもんだ。そんな命捨てさせて命取らせようだなんて考えてるのに、随分回りくどい方法を取るもんだ。殺そうと思えば会見中のような逃げ場の少ないところを狙ったほうが可能性は高い。特に、自分たちの命を捨てるのであれば、防ぎ様がなかったとも言いかねない。移動中を狙うにしても、全てが終わってからも構わない。いや、ルートが読めないのなら、次の目的地が決まっているあのタイミングで狙うのはある意味

理にかなってるとも言える。けど、あんな方法を取るのも理解出来ない点が多い。

「あー、ダメだ。わからねえ。」

普段使わない頭を使ったからか、無性に体を動かしたくなってきた。少し動かして頭を冷やしてくるのもいいかもしてない。

『先輩、後で昨日の現場に行きませんか？』

「ああ、そのつもりだ。先にザイレイの所に寄ろうと思うけどな。また嫌味言われるだろうけど、欲しい情報見付け出してくれるかもしれないねーしな。なにか残ってればいいけどな。」

『…廃ビル群も少し回ってみませんか？』

廃ビル群？ということとは他のビルもってことだよな？と、バンの顔を覗くと、不安げな顔を示している。何か気になることでもあるのだろうか？

俺の表情を読み取ってか、バンが続きを話してくれた。

『昨日、あいつらの乗る車が来る前に、別のビルが光った気がしたんです。気のせいかも知れないツスけど、どうも気になってしまってます。』

「そうか。…よし、他も回ってみるか。何もなくても肝試しみたいで面白そうじゃねーか！」

冗談交じりに答え、二人してエレベータに乗り込んだ。一汗かこう。

考えるのは疲れるな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4605d/>

Closed World ～閉ざされた世界～

2011年10月4日17時10分発行